

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第125集

平沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書

勤労者屋外体育施設関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

平沢 I 遺跡発掘調査報告書

勤労者屋外体育施設関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,000カ所におよぶ遺跡が確認されております。これら先人が残した文化遺産を保存し、後世に残していくことは県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な施策であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整の基に開発事業によってやむをえず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書の平沢Ⅰ遺跡は、久慈市街地南東の海岸段丘に立地し、発掘調査に伴って貝類や琥珀等の多様な遺物とともに縄文時代の住居跡や落とし穴、奈良・平安時代の住居跡等が発見されました。当地方における集落跡の貴重な資料であります。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまで発掘調査および報告書作成にご援助・ご協力を賜りました久慈市教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表わします。

昭和63年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 中村直

例 言

1. 本報告書は、勤労者屋外体育施設建設に伴う平沢^{ひらさわ} I 遺跡の緊急発掘調査の結果を収録したものである。
2. 遺跡は、岩手県久慈市長内町28-105-1に所在する。
3. 調査は、久慈市と岩手県教育委員会事務局文化課との協議に基づいて、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが調査1・2区を担当した。その後、久慈市教育委員会が調査3区を調査している。
4. 岩手県遺跡台帳に記載されている遺跡番号はJG30-0282、遺跡略号はHSIである。
5. 野外調査の期間と調査面積・担当者は次のとおりである。

(調査1・2区)

期 間：昭和62年4月15日～7月31日

調査面積：3,272㎡

担 当 者：三浦謙一・平井 進・佐藤嘉広

(調査3区)

期 間：昭和62年12月18日～昭和63年1月18日

調査面積：4,200㎡

担 当 者：久慈市教育委員会

6. 室内整理の期間と担当者は次のとおりである。

期 間：昭和62年10月1日～昭和63年3月31日

担 当 者：三浦謙一・佐藤嘉広

7. 下記の項目の分析・鑑定は次の個人・機関に委託した（敬称略）。

(1)火山灰……………三辻 利一（奈良教育大学）

(2)貝 類……………佐藤 正彦（陸前高田市立博物館）

熊谷 賢（東北学院大学学生）

(3)石材鑑定……………佐藤 二郎（地質コンサルタント）

(4)炭種鑑定……………早坂松次郎（財)岩手県木炭協会)

8. 野外調査や整理・報告書の作成には次の機関や個人に協力・指導・助言をいただいた（敬称略）。

久慈市民生部市民課・久慈市教育委員会・久慈市開発公社・面代民義・千葉啓蔵（ともに久慈市教育委員会）・斉藤邦雄（久慈湊小学校）・高橋信雄（岩手県立博物館）・高橋亜貴子（滝沢村教育委員会）・調査に従事いただいた坂下千松氏をはじめとする久慈市の方々。

9. 本書の担当は次のとおりである。

〈執筆〉 昆野 靖 (I)・三浦謙一 (II～IV・V-5・6・VI～VIII)・佐藤嘉広 (V-1～4)

〈編集・校正〉 三浦謙一・佐藤嘉広

〈作図〉 吉田律子・晴山なるみ・瀬川幸子・浅沼幸子・小山田幸子・川原幸子・川村順子・
佐藤由美子・三上幸子・浅沼育子

〈遺物撮影〉 岩渕希士

10. 調査成果はこれまでに現地説明会資料や調査略報に発表してきたが、本書の内容が優先するものである。

11. 調査の記録や遺物は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

12. 挿図凡例はII-3 (9ページ)に記載している。

本文目次

序	
例言	
I. 調査に至る経過	3
II. 調査方法	
1. 野外調査	4
2. 室内の整理	6
3. 凡例	8
III. 遺跡の位置と地形・地質	
1. 位置	10
2. 地形	12
3. 地質	13
IV. 検出遺構と遺構内の出土遺物	
1. 竪穴住居跡	14
2. 住居状遺構	76
3. ビット	76
4. 落とし穴	94
5. 焼土遺構	94
6. 炭窯	114
V. 遺構内外の出土遺物とまとめ(1)	
1. 縄文土器	115
2. 弥生土器	117
3. 銅片石器	129
4. 石斧・鏢石器	146
5. 土製品	178
6. 石製品	180
VI. まとめ(2)―遺構―	
1. 住居跡	181
(1) 縄文時代	181
(2) 古代	182
2. 住居状遺構	189
3. ビット	189
4. 落とし穴	191
VII. まとめ(3)―遺物―	
1. 古代の土器	193
(1) 土師器甕	193
(2) 土師器坏	197
(3) その他の土師器	198
(4) 須恵器	198
(5) 分類群の帰属と時期	198
2. 琥珀	200
3. 金属製品	200
4. 自然遺物	202
(1) 貝類	202
(2) 植物遺体	203
VIII. まとめ(4)―遺跡―	
1. 周辺の遺跡	203
2. 遺跡のまとめ	206
付篇	
平沢 I 遺跡出土火山灰の蛍光 X 線分析 三辻利一	212
平沢 I 遺跡出土貝類の鑑定 佐藤正彦・熊谷 賢	215

挿図・表目次

第1図 遺跡位置図	1	第3図 挿図凡例	9
第2図 調査区範囲とグリッド配置図	5	第4図 地形図	11

第5図	地形断面図	12
第6図	遺構配置図	15
第7図	遺構配置地図と遺構名	17
第8図	CⅢ-1住居跡実測図・出土遺物	18
第9図	CⅢ-2住居跡実測図	19
第10図	CⅢ-2住居跡出土遺物	20
第11図	DⅢ-1住居跡実測図・出土遺物(1)	21
第12図	DⅢ-1住居跡出土遺物(2)	22
第13図	DⅢ-2住居跡実測図	23
第14図	DⅢ-2住居跡出土遺物	24
第15図	DⅢ-3住居跡実測図(1)	25
第16図	DⅢ-3住居跡実測図(2)	26
第17図	DⅢ-3住居跡実測図(3)	27
第18図	DⅢ-3住居跡出土遺物(1)	28
第19図	DⅢ-3住居跡出土遺物(2)	29
第20図	DⅢ-4住居跡実測図(1)	30
第21図	DⅢ-4住居跡実測図(2)	31
第22図	DⅢ-4住居跡出土遺物	31
第23図	DⅢ-5住居跡実測図	32
第24図	DⅢ-5住居跡出土遺物	33
第25図	DⅢ-6住居跡実測図(1)	34
第26図	DⅢ-6住居跡実測図(2)	35
第27図	DⅢ-6住居跡出土遺物	35
第28図	EⅢ-1住居跡実測図・出土遺物	36
第29図	FⅢ-1住居跡実測図・出土遺物	37
第30図	FⅢ-2住居跡実測図	39
第31図	FⅢ-2住居跡出土遺物	40
第32図	FⅢ-3住居跡実測図	42
第33図	FⅢ-3住居跡出土遺物	43
第34図	FⅢ-4住居跡実測図	45
第35図	FⅢ-4住居跡出土遺物	46
第36図	GⅡ-1住居跡実測図(1)	48
第37図	GⅡ-1住居跡実測図(2)	49
第38図	GⅡ-1住居跡実測図(3)	50
第39図	GⅡ-1住居跡出土遺物(1)	51
第40図	GⅡ-1住居跡出土遺物(2)	52
第41図	GⅡ-1住居跡出土遺物(3)	53
第42図	GⅡ-2住居跡実測図	54
第43図	GⅡ-3住居跡実測図	55
第44図	GⅡ-3住居跡出土遺物	56
第45図	GⅢ-1～GⅢ-3住居跡実測図	59

第46図	GⅢ-1住居跡出土遺物	60
第47図	GⅢ-2住居跡出土遺物(1)	61
第48図	GⅢ-2住居跡出土遺物(2)	62
第49図	GⅢ-2住居跡出土遺物(3)	63
第50図	GⅢ-2住居跡出土遺物(4)	64
第51図	GⅢ-2住居跡出土遺物(5)	65
第52図	GⅢ-4住居跡実測図	67
第53図	GⅢ-4住居跡出土遺物	68
第54図	HⅠ-1住居跡実測図・出土遺物	69
第55図	HⅡ-1住居跡実測図	71
第56図	HⅡ-1住居跡出土遺物	72
第57図	HⅡ-1住居跡実測図(1)	73
第58図	HⅡ-1住居跡実測図(2)	74
第59図	HⅡ-2住居跡遺構実測図	76
第60図～第64図	ビット実測図(1)～(5)	85
第65図～第69図	ビット出土遺物(1)～(5)	90
第70図～第78図	落とし穴(1)～(9)	101
第79図	落とし穴00	111
第80図	落とし穴出土遺物(1)	112
第81図	落とし穴出土遺物(2)	113
第82図	溝土遺構実測図	114
第83図	溝土遺構出土遺物	115
第84図	GⅡ-151炭室実測図	116
第85図～第94図	縄文土器(1)～(10)	118
第95図	縄文土器01・弥生土器	128
第96図～第99図	削片石器(1)～(4)	131
第100図	削片石器(5)・礫石器(1)	135
第101図	削片石器(6)・礫石器(2)	136
第102～第110図	削片石器(7)～(15)	137
第111図～第138図	礫石器(3)～(10)	150
第139図	土製品	179
第140図	石製品	180

図1	遺構・遺物の整理	7
図2	石器種類別石材百分比	178
図3	住居跡床面積別分布図	182
図4	古代住居跡床面積別分布の概念図	184
図5	古代住居跡主軸方向分布図	185
図6	カマド位置概念図	187
図7	落とし穴概念図	191
図8	落とし穴長軸長分布図	192

図9	土師器壺口径・器高分布図	194
図10	土師器集成図(1)	195
図11	土師器集成図(2)	196
図12	土師器坏I群口径・器高分布図	198
図13	土師器集成図(3)	199
図14	縄文時代遺構分布図	208
図15	古代遺構分布図	209

表1	遺構種類別分類番号	4
表2	検出遺構数	8
表3	石材・産地一覧表	149
表4	縄文時代住居跡一覧表	181
表5	古代住居跡一覧表	183
表6	所屬時期別ピット一覧表	189
表7	琥珀出土遺構一覧表	201
表8	周辺の遺跡一覧表	204

図版目次

図版1	空中写真(1)	223
図版2	空中写真(2)	224
図版3	C III-1・C III-2住居跡	225
図版4	C III-1・C III-2・D III-1住居跡	226
図版5	D III-1・D III-2住居跡	227
図版6	D III-2・D III-3住居跡	228
図版7	D III-3住居跡	229
図版8	D III-3・D III-4住居跡	230
図版9	D III-4住居跡	231
図版10	D III-5住居跡	232
図版11	D III-6住居跡	233
図版12	D III-6・E III-1・F III-1住居跡	234
図版13	F III-1・F III-2住居跡	235
図版14	F III-2・F III-3住居跡	236
図版15	F III-3住居跡	237
図版16	F III-4・G II-1住居跡	238
図版17	G II-1住居跡	239
図版18	G II-1住居跡	240
図版19	G II-2・G II-3住居跡	241
図版20	G II-3・G III-1~G III-3住居跡	242
図版21	G III-4・H I-1住居跡	243
図版22	H I-1・H II-1住居跡	244
図版23	H II-1住居跡	245
図版24	H VII-1住居跡	246
図版25	H II-2住居跡遺構・ピット(1)	247
図版26~図版33	ピット(2)~(9)	248

図版34	ピット(10・落とし穴(1))	256
図版35~図版42	落とし穴(2)~(9)	257
図版43	落とし穴(10・焼土遺構)	265
図版44	G II-151炭層	266
図版45	遺構分布状況	267
図版46	遺構内出土縄文土器(1)	268
図版47	遺構内出土縄文土器(2)	269
図版48	遺構内出土刺片石器(1)	270
図版49	遺構内出土刺片石器(2)・礫石器(1)	271
図版50~図版52	遺構内出土礫石器(2)~(4)	272
図版53	遺構内出土礫石器(5)・遺構内外出土 土製品(1)	275
図版54	遺構内外出土土製品(2)・石製品(1)	276
図版55~図版59	遺構内出土土師器(1)~(5)	277
図版60	遺構内出土土師器(6)・遺構内外出 土土製品(3)・石製品(2)	282
図版61	遺構内出土琥珀	283
図版62	遺構内出土鉄製品	284
図版63	遺構内出土貝類	285
図版64~図版67	遺構外出土縄文土器(1)~(4)	286
図版68	遺構外出土縄文土器(5)・弥生土器	290
図版69	遺構外出土刺片石器(1)	291
図版70	遺構外出土刺片石器(2)	292
図版71	遺構外出土刺片石器(3)・礫石器(1)	293
図版72~図版77	遺構外出土刺片石器(4)~(9)	294
図版78~図版89	遺構外出土礫石器(2)~(10)	300



第1図 遺跡位置図

〔5万分の1地形図は、久喜・陸中野田・陸中大野・陸中間
を使用。星印が本遺跡。1～17の遺跡名は204ページを参照。〕

I 調査に至る経過

久慈市勤労者屋外体育施設建設事業は、雇用促進事業団が勤労者の福祉増進をはかる目的で第3種公認グラウンドとなる多目的グラウンド・テニスコート・管理棟・芝広場等の施設を建設し、さらに久慈市が関連施設を建設する事業である。建設予定地は平沢工業団地の一部75,758㎡であり、昭和61年に事業計画され、昭和64年に完成の予定である。

平沢工業団地内における埋蔵文化財については、すでに平沢工業団地造成計画が立案された昭和55年から久慈市教育委員会が現地確認調査を行って関係機関と協議を重ね、さらに平沢遺跡として範囲確認調査を実施している。調査の概要は以下のとおりである。

遺跡の所在地 久慈市長内町28-105、35-114、35-123

調査対象面積 市道東側 59,000㎡、西側70,000㎡、計129,000㎡

試掘調査面積 市道東側 14,931㎡、西側17,742㎡、計 32,673㎡

発掘調査期間 昭和57年2月15日～5月31日

調査の結果、市道の東側からは縄文時代および奈良・平安時代の土器・石器等が尾根上に集中して出土し、南側の尾根付近に遺構が存在することが推定された。また、市道西側の調査ではほぼ全域に縄文時代から平安時代の遺物が大量に出土したほか、住居跡と思われる十数カ所の凹地が検出されるなど、複合する大規模な集落が存在することが明らかになった。

昭和61年に至って、久慈市は建設予定地内の遺跡の取り扱いについて県教育委員会文化課の指導を得て、やむをえず破壊される多目的グラウンドのメインスタンド予定地部分に限って発掘調査を実施することとした。発掘調査については、昭和61年1月14日付け「市民第960号」により久慈市長から県教育長あての発掘調査の依頼があり、これをうけて県教育委員会文化課は昭和62年1月19・20日に現地確認調査を実施し、昭和62年1月27日付け「教文第538号」により県教育長から久慈市長あてに発掘調査の承諾について回答した。

これにより、県教育委員会文化課は平沢I遺跡の発掘調査を昭和62年度の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの発掘調査事業に編入し、久慈地区土地開発公社の委託を受けた埋蔵文化財センターが昭和62年4月1日付け契約により着手することとなった。

なお、室内整理および報告書作成については、久慈市の依頼により久慈市教育委員会が発掘調査を実施したテニスコートおよび駐車場予定地内の調査結果を含めることとし、久慈地区土地開発公社および久慈市の委託を受け、昭和63年2月1日付け契約によって報告書を刊行することになったものである。

II 調査方法

1. 野外調査

(1) 座標と区画

おおよその調査範囲は、幅が東西15m、南北180mである。測量座標の原点は久慈市が測量会社に依頼して設定した国土座標を使用した。調査範囲をカバーする30×30mの大区画を設定し、それぞれの大区画は3×3mの小区画(グリッド)100個を小単位としている。グリッドは粗掘りや遺物取り上げのときの最小単位に使用している。

区画の呼称は次のようになる。大区画は北から南へAからのアルファベット、西から東へIからのローマ数字をつけ、A I区・A II区のように組み合わせる呼ぶ。小区画は、北から南へa～jのアルファベット小文字、西から東へ0～9のアラビア数字をつけ、大区画と組み合わせ、A I a 0、A II b 1ほかのようになる。I区の西へVIII区・IX区を設定したのは久慈市教育委員会が調査した分も含めて報告することになったためである。

測量のための座標は、南へはS 1・S 2・・・、東へはE 1・E 2・・・のように基準線を離れるにしたがって1m単位の数字が増えていく。なお、座標軸線は真北に対して12°30'東へ偏している。

(2) 粗掘りと遺構検出

久慈市教育委員会が以前にほぼ全域におよぶ試掘調査を実施し、遺構分布図を作成している。区画の設定のあと、その際のトレンチで遺構の再確認を行った。その結果、トイレ用地である北の狭い区画をのぞいては調査区全体に古代の住居跡をはじめとする遺構の広がりが予想できた。

そこで、まず全体の表土を除去するためにユンボを使用し、その後人力によって検出面までの掘り下げを行っている。

(3) 遺構の名称

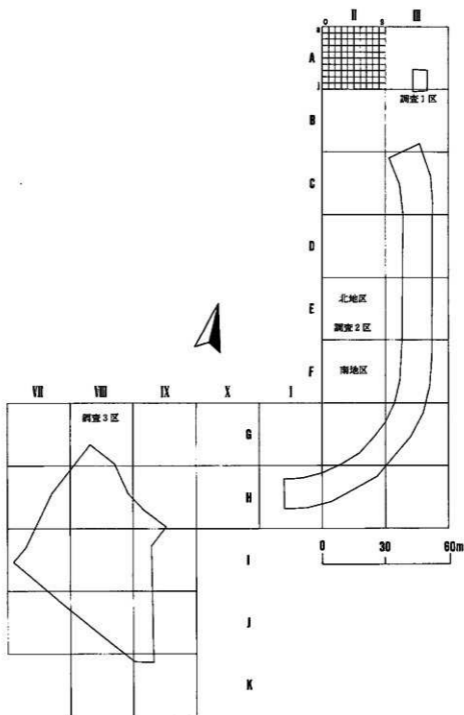
検出した遺構の名称は、大区画名の次に遺構種類別の分類番号・種類名を併用している(表1)。遺構名の具体例は、C III-1住居跡・D III-51ピット・E III-101落とし穴などようになる。遺構が2つ以上の区画にかかるときは北端が含まれる大区画名をつけたが、厳密なものではない。

(4) 精査

精査は、調査員の指示のもとに女性作業員を中心にして進めた。住居跡・住居状遺構は4分

遺構の種類	分類番号
竪穴住居跡 住居状遺構	1～50
ピット	51～100
落とし穴	101～150
炭窯	151～200
焼土遺構	201～250

表1 遺構種類別分類番号



第2図 調査区範囲とグリッド配置図

法、ピット・落とし穴・焼土遺構は2分法を採用している。ここでは平安時代の住居跡を例にあげ、その手順を簡単に説明する。

まず、四分と土層観察のためのベルトを設定する。各分割区は北西を起点にQ1～Q4と時計と逆回りに呼び、遺物取り上げの際の単位にしている。各区ごとに埋土を掘り下げて床面まで検出し、次に土層断面図を作成する。写真撮影用に一本のベルトを残し、撮影後はそれも掘りあげる。次いで、壁溝や柱穴・貯蔵穴・カマドほかの細部を精査する。そして、平面実測や全景写真など必要な記録を終えたあとは、カマドの断ち割り・貼り床の除去・掘り方面まで掘り下げるなどの二次的な細部調査を記録を取りながら進め、終了とした。遺物は各区ごとに、埋土上部・中部・下部、埋土・床面直上・床面・掘り方埋土で取り上げ、付属施設からのものはその部分名と住居埋土と同様の出土層位を記入して取り上げた。

(5) 実測と写真

実測：実測経験をもつ女性協力員が4名いたため、2人一組とし、2組を編成した。簡易の遣り方法を採用し、各遺構とも1/20の縮尺を原則に、一部は小縮尺を使っている。

写真：住居跡を例にあげると、土層断面・第1次全景・細部写真・カマドや炉の断ち割りほか第2次の細部写真、掘り方の土層断面と全景（第2次全景）など、情報の質と量に応じて、できるかぎり写真による記録をしてきた。フィルムとカメラは、モノクロームが35mm判と6cm×7cm判各1台、カラースライドが35mm1台を使用した。調査の最後には空中写真も撮影している。

(6) 文章による記録

図面と写真による記録とともに、当センターで作成しているField Cardを使用した文章による記録を重視した。これは、調査時に観察した事実を記載し、図面や写真からだけでは得ることのできない情報を記録するためである。変形B4判の大きさで、1項目1カード方式をとり、事実記載の多くはその記録をもとにしている。作業の具体的な内容については業務日誌へ人数とともに毎日記録している。

(7) 広報活動

調査が一定程度進み、遺跡のもつ内容が具体的に明らかになった段階で、現地における説明会を開催した。調査の成果をできるかぎり広く公開し、啓蒙活動の一環としておこなうものである。遺跡の所在する市町村の住民への広報活動はもちろん、関係各機関や報道機関へ連絡し、参加を呼びかけている。7月17日に約70名の参加を得、遺構と遺物の公開・展示を行った。

2. 室内の整理

(1) 作業内容

野外の調査時はもちろん、室内での仕事も調査員と臨時職員との1つのチームの上になり立っている。おおよそ次のように分担している。

調査員：全体的計画の立案・作業の指示・判断・遺物観察・原稿執筆など

臨時職員：実測・トレース・拓影・割り付け・写真撮影・作図・作表など

(2) 遺構と遺物はおおよそ図1に示したような手順で整理している。

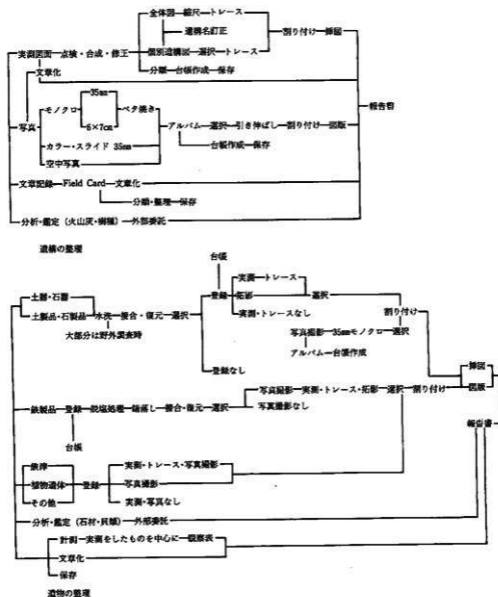


図1 遺構・遺物の整理

3. 凡例

(1) 全体的なこと

a. 本書は表2に掲載した遺構とそれからの出土遺物、遺構外からの出土遺物を収録している。

b. 遺構は、本文・挿図・図版とも種類別に北から順に掲載している。

c. 掲載遺物は、遺構内外や種類に関係なく、掲載順に1からの通し番号をつけている。遺物図版に掲載した遺物番号はそれに対応する。

(2) 遺構・遺物に関すること

a. 住居跡の記載

1棟にみえる住居跡でも、カマドや柱穴配置・ピット・貼り床ほかの状態や在り方から重複関係にある2棟が含まれていることを知る場合がある。時間的な先後関係が認められる場合、新期をHⅧ-1a住居跡、HⅧ-1b住居跡のようにアルファベット小文字によって区別し、集計上は2棟に数えている。

b. 掘り方埋土=床(底)構築土について

古代の住居跡や大型ピットの床や底を観察すると、いわゆる地山そのものではなく、いったん遺構の底を掘り下げたあとに別な土を入れて埋め戻し、床や底を作っていることを知ることができる。本書は、その土を掘り方埋土=床(底)構築土と記載している。性状は、Ⅲ層火山灰の大小塊をマトリックスにし、黒褐色や黒色土ほかの大小塊を混入している。

c. 上記の床(底)は広義には貼り床(底)である。しかし、貼り床といった場合、ある床面の上に別な床面を構築することをさす狭義の意味もある。本書が貼り床と使う場合は後者の意味においてである。

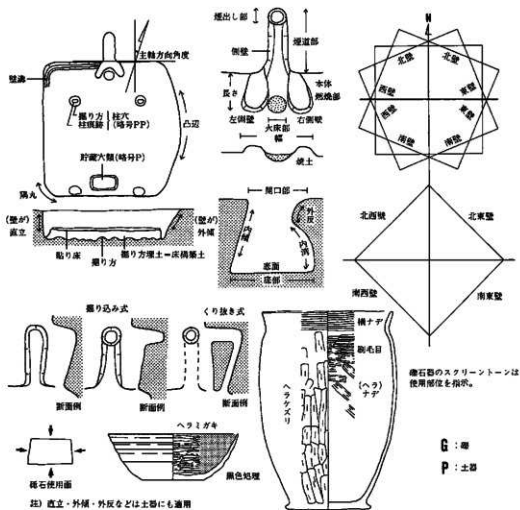
d. 住居跡主軸方向は、カマドが設置された辺に直行する線が北あるいは南から偏する角度を東西へ90°の範囲内で示している。使用方位は真北である。複数のカマドが設置され時間的な前後関係がある場合は、それにあう主軸方向をもつことになる。住居跡主軸方向とは言うものの、カマドの向く方向を強く意識したもので、ほぼカマド方向といってもよい。なお、住居跡の平面形の歪が著しい場合はある程度修正を加えて計測している。

e. 本文や土層記表に記載した火山灰・汚れ火山灰は、断りがないかぎりⅢ層起源である。Ⅲ層は地山である。

f. 遺物の掲載の仕方

遺構の種類	時代など	検出数	合計
竪穴住居跡	縄文	8	24棟
	吉塚～奈良	1	
	奈良	1	
	平安	14	
住居状遺構	平安	1	1棟
ピット	縄文	25	40基
	古代	10	
	不明	5	
落とし穴	縄文	38	38基
炭 窯	現代	1	1基
焼土遺構	不明	12	12基
合 計			116

表2 検出遺構数



第3図 挿図凡例

古代の遺構とともに縄文時代の各種遺構があり、縄文時代の遺物は広範囲にわたって出土している。古代の住居跡から出土した縄文時代や弥生時代の遺物（推定も含める）は個別の遺構出土遺物には含めず、遺構外出土遺物と一緒に掲載しているが、住居跡でも縄文時代のもの・ピット・落とし穴ほかの遺構から出土した場合は個別の出土遺物として掲載している。

g. 遺構のうち、落とし穴は表形式で記載するとともに、形状を記号化している（「まとめ」の項参照）。

h. 土層注記表と住居跡一覧表には、十和田a火山灰をT。-a、白頭山-苫小牧火山灰を

B-Tmと略号で記載している。

- i. 遺物の記載のなかで剥片類としたものは、剥片を主とし、碎片や石核を少数含む。
- j. 土色や遺物の色調は、『新版 標準土色帳』農林水産技術事務局監修による。

(3) 挿図に関すること

a. 縮尺

遺構：1/40と1/60を主に、一部が任意縮尺。挿図右下またはスケールで表示。

遺物：2/3と1/2・1/3・任意縮尺。挿図右下またはスケールで表示。

b. 遺物観察表中の石材の産地は表3に一括して掲載している。

c. 遺構の部位名称や表記方法の一部を第3図に示している。

(4) 図版に関すること

a. 縮尺

遺構：すべて任意縮尺。

遺物：2/3・1/2・1/3・1/4を主に、一部が原寸大と2倍。図版右下に表示。

b. 遺物図版は種類・器種を優先し、個別の遺構とは無関係に組んでいる。

III 遺跡の位置と地形・地質

1. 位置

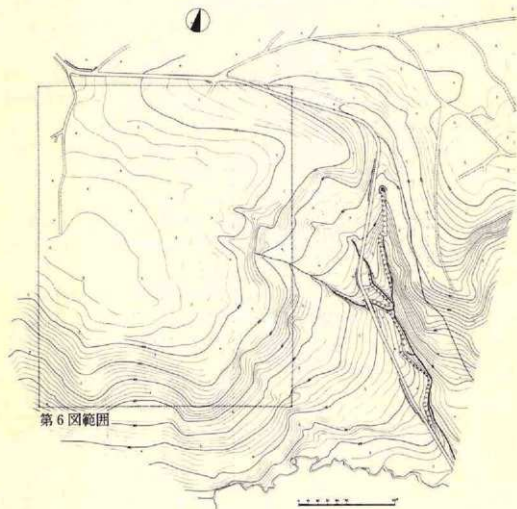
遺跡の所在する岩手県久慈市は北上山地北東縁に位置し、東が太平洋に面する三陸海岸北部の市で、面積が325.66km²、人口が約39,000人である。

県北部にありながら、沿岸という立地条件のために同緯度の岩手県内陸部に比べるとやや温暖な気候であり、1月の平均気温は-1.1°C、8月の平均気温は22.4°C、11月から3月の降水量は70mmである。夏は海から湿った風が吹き、ヤマセとしてしばしば冷害をもたらしている。

三陸海岸はリアス式海岸として知られ、陸中海岸国立公園として指定されている。久慈市はその北玄関である。昭和59年には三陸鉄道が開通し、沿岸部は一本の鉄道で結ばれている。産業面では、久慈港が県内一の水揚げ量を誇り、最近是国家石油地下備蓄基地としての開発が久慈湾北側の半崎地区で始まっているほか、久慈湾総合開発計画にも着手し、沿岸北部の拠点都市として発展しつつある。特産品には古くから知られた琥珀や小久慈焼などがある。

平沢I遺跡への道順は次のようになる。JR久慈線あるいは三陸鉄道の久慈駅で降りて市街地へ向かうと、中央部を走る国道45号に出る。そこを左折し、長内川にかかる長内橋をわたって久慈港の方へ向かう。高台がすぐ右手に現われ、しばらく行くと「東北電力長内中継所」という標識を見ることができる。それを右折し、林の木立のなかの急傾斜の細い坂道を上がって

いくと平坦な面が広がり、小さな集落が現われる。市街地の形成される低地が標高5 mであるから、100mほど上ることになる。その先に広がる原野が平沢Ⅰ遺跡である。もともとは山林であったところであり、昭和59年の大火で一面が焼けたために原野になっている。開析谷を挟んだ遺跡の東側にも同じような面が広がり、平沢Ⅱ遺跡としていられていたが、工業団地として



第4図 地形図

開発されている。遺跡は北緯40°10'37"、東経141°47'40"に位置し、20万分の1地勢図は「八戸」、5万分の1地形図は「久慈」に含まれている。

2. 地形

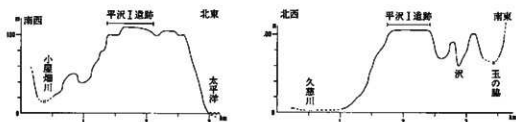
代表的なリアス式海岸として有名な三陸海岸は岩手県沿岸のほぼ中間に位置する宮古市を境にし、北と南とはその様相を異にする。南が沈降性であるのに対し、北は隆起性であり、海岸線の入り組み方はきわめて対角的である。それは沈降あるいは隆起の量の違いとともに形成年代の違いや海岸段丘の発達度の違いである。海岸段丘が発達しているのは北側である。

久慈市周辺の海岸段丘の研究は石田ほか(1969)、照井(1982)などがある。また貝塚(1985)は「宮古・久慈間は、リアスよりも、海食によってできた高さ100mをこえる海食崖」が続き、「段の数は5段以上」あるとしている。

石田ほか(1969)は、高位から順に九戸・白前・種市・玉川の4段に分類している。九戸段丘は80～280m以上で、北上山地北縁部とその東麓にそって分布する。白前段丘は九戸段丘の外縁部に発達し、海岸方向へ傾斜している。いくつかの小規模な段丘の集合と考えられているが、全域的な細分は困難であるとされている。種市段丘は主に久慈の北方の海岸線にそって帯状に発達する15～40m前後のものである。玉川段丘は主に久慈以南に分布し、10～70m程度の谷中扇状地状に似たやや急傾斜の平坦面をもつ。

照井(1982)は、水無段丘(220～280m)、九戸段丘(150～220m)、蒼前平段丘(130～150m)、変生段丘(90～110m)、有家段丘(60～90m)、八木礫層(50m)、種市段丘(15～40m)、平内段丘(10m)、宿戸段丘(3m)の9段に分類している。

久慈付近は久慈川・長内川が久慈湾に注ぎ、段丘を開析している。本遺跡が立地する面は、中川ほかの白前段丘、照井の変生段丘に相当する海成段丘である。同じような面は久慈湾沿いの模式地である変生や半崎に主に見られるほか、二子・小袖に小規模に認められる(第1図)。第5図は2.5万分の1地形図をもとに作成した地形断面図である。



第5図 地形断面図

遺跡の標高は100~108mであり、今回、当センターが調査した区域は標高が105~107m、遺構が検出されなかった調査1区を除いた調査2区は東西幅14m、南北長170mで、遺跡の主体部の一部を調査している。ほぼ中間のE区とF区の間には浅い開折谷が東西に走るが、記述の便宜上、北側を北地区、南を南地区とよぶことがある。久慈市教育委員会が調査した区域は標高78~107mである。そこは調査3区とする。

3. 地質

層位は次のようになる。

I層：暗褐色・黒褐色土（10Y R3/3）。表土。層厚15~30cm。

II層：褐色~黄褐色土（10Y R4/6~5/6）。下位のIII層の風化帯。層厚20~40cm。

III層：明黄褐色土（10Y R6/6）。八戸火山灰上部に相当すると考えられる層。層厚未確認。

以上の層は調査区全域に広がる。I・II層は遺物包含層でもある。とくにII層は縄文時代前期と後期の包含層で、古代の遺物は原則的には包含しない。遺構との切り合いは、縄文時代前期前葉に分類できるEIII-1住居跡や平安時代のDIII-5住居跡ほかに切られていることが観察できる。この層は、上部（黄褐色~褐色）と下部（黄褐色卓越）とに分けることができるが、分布を全域で追求することができないため、一部地域の遺物の取り上げに使っているだけである。

久慈市の北西80kmにある十和田火山起源の火山灰のうち、八戸火山灰・南部浮石・中派浮石・十和田a火山灰が久慈地方で存在を確認されている。本遺跡で観察できる火山灰について次に記載する。

地山になる八戸火山灰は12,700±260 B.P.の放射性炭素年代測定結果がある(大池, 1964)。南部浮石と中派浮石は存在を確認できない。ただ中派浮石に該当する可能性がある資料を採取し、奈良教育大学三辻利一氏に鑑定を依頼したところ、十和田系火山灰という結果がでている(付篇)。この火山灰はDIII-51ピットの最上部とEIII区のII層中に限定した分布を示すものである。

古代の遺構の埋土中に見られる火山灰には色調と性状の異なる2種類がある。ひとつは色調が灰白色(N8/1・7.5Y R8/1~7/2周辺)で極細粒から粗粒まで認められる浮石質のものである。他のひとつは黄褐色(2.5Y5/3周辺)の極細粒の火山灰である。調査時は、目による識別であることを考慮し、色調と性状を記録するとともにできるだけ多くの資料を採取してきた。調査終了後、分析を依頼した結果、観察と分析の結果が矛盾しないことを確かめることができ、本書では前者を十和田a火山灰、後者を白頭山一苫小牧火山灰として記載する。

町田ほか(1984)は十和田a火山灰を東北地方のほぼ全域に分布する広域火山灰としてとらえ、秋田県にみられる大湯浮石と同一のものであるとしている。岩手県北部だけでなく、青森・

秋田の各県の古代の遺構との関連が強い。先の町田ほかは「おそらくA.D915年。考古学的資料からはA.D870年よりも新しく、934年よりも古い」としているが、考古学プロパーの年代観をさらに追求する必要がある。白瀬山—苦小牧火山灰は十和田a火山灰の上位に位置するもので、中国と北朝鮮の国境にある白瀬山を起源とするものである。年代については十和田a火山灰と同様のことがいえるが、泥炭層の観察から十和田a火山灰との時間的間隔をせいぜい100年とする見解がある(町田ほか, 1984)。本遺跡における両者の火山灰の個別の遺構における在り方については後述する。

IV. 検出遺構と遺構内出土の遺物

1. 竪穴住居跡

CⅢ区

CⅢ-1住居跡

遺構(第8図, 図版3・4)

検出状況・重複関係 CⅢ-58ピット(縄文時代)の埋土上部に認められる貼り床と埋壘・一部に残る壁から存在を知ることができる。西側と北側が調査区域外へ出ているため、一部が調査できたにすぎない。

平面形 わずかに残る東壁からは円形基調と推定できる以外は不明である。規模・床面積不明

埋土 貼り床の上位に認められる暗褐色土や黒褐色土が埋土の一部になる。

壁の状態 低いが、東壁がわずかに確認できる。壁高 2cm 壁溝 調査できた範囲には検出されていない。

床面 最大層厚7cmの貼り床である。

柱穴・炉 調査できた範囲には検出されていない。

その他 埋壘が推定される南壁に寄った位置に存在する。深鉢の胴部下部～底部を直立させている。

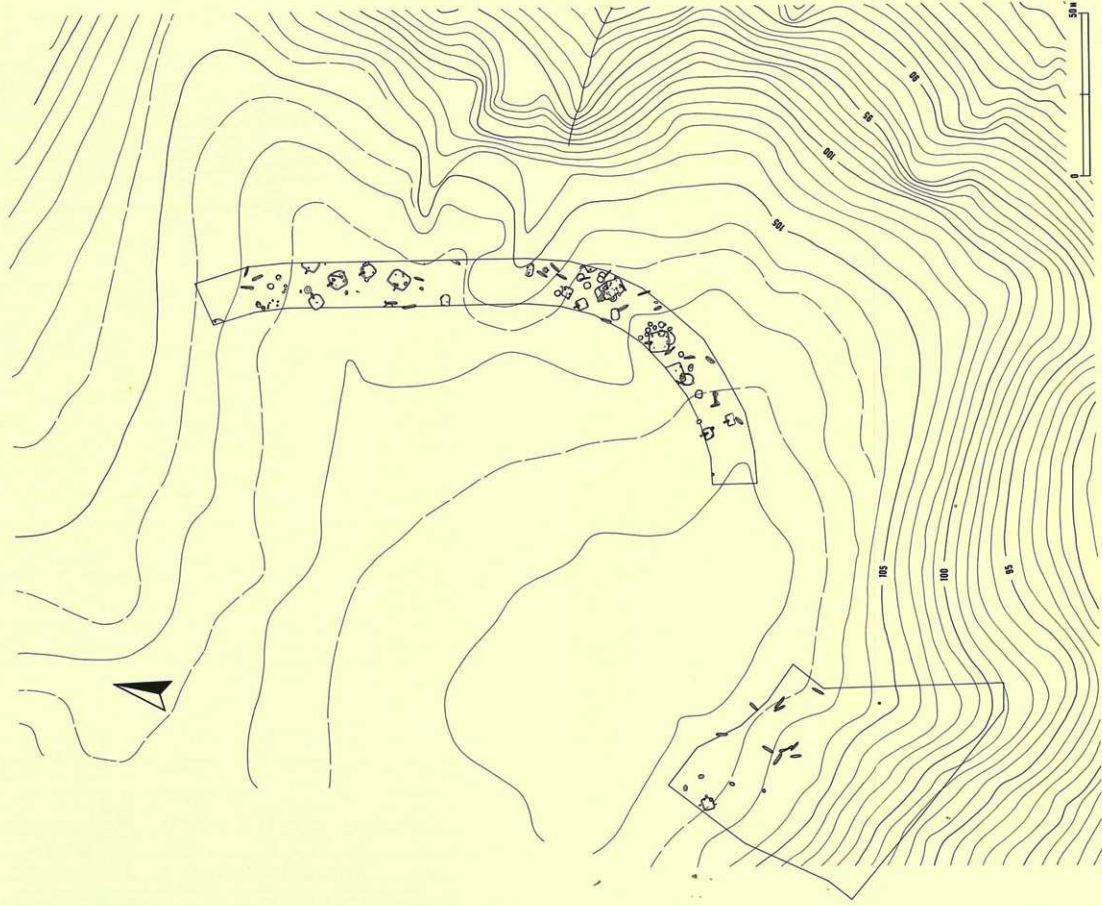
遺物(第8図, 図版47)

出土状況 上述のような検出状況のため、出土量は少ない。土器と剥片類が埋土から出土している。

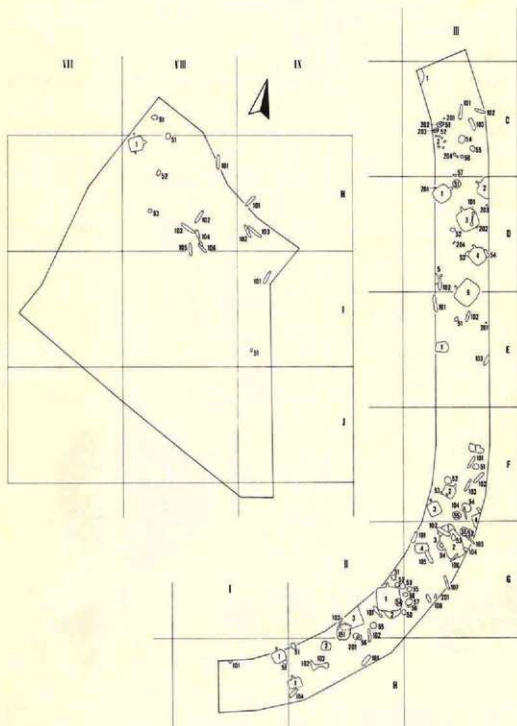
土器 1は埋壘である。2～4をはじめ、すべてⅡ群に分類できる。

剥片類 4点出土している。

まとめ・遺構の時期



第6圖 遺構配置圖



第7図 遺構配置略図と遺構名

出土遺物から、縄文時代後期前葉（縄文土器Ⅱ群期）に分類できる。

CⅢ-1住居跡

遺構（第9図、図版3・4）

検出状況・重複関係 壁を欠くが、炉と柱穴・床面から住居跡と判断した。西側は調査区域外へ伸びている。

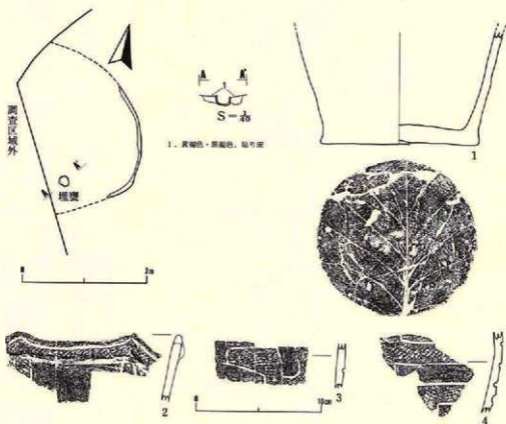
平面形・規模・床面積 不明

埋土 Ⅱ層である褐色土に覆われている。

壁の状態・壁高 壁は検出されていない。壁溝 調査できた範囲には存在しない。

床面 硬い面が柱穴や柱穴状ピットの内側に広がっている。

柱穴 いくつかある柱穴状ピットのなかで、pp 1～pp 3が形態や深度・位置から、柱穴と



No	地点・層位	器種	部位	器形/外観	内面	胎土	分類	備考	図版
1	埋土	深鉢	唇部	ミガキ、木製成	ミガキ		Ⅱ-3		
2	埋土	深鉢	口縁部	波状口縁、口縁部肥厚Lr・沈蝕	ミガキ		Ⅱ-1-(1)		47
3	埋土	深鉢	胴部	Lr・沈蝕	ミガキ		Ⅱ-2-(2)		47
4	埋土	深鉢	胴部	Lr・沈蝕	ミガキ		Ⅱ-2-(3)		47

第8図 CⅢ-1住居跡実測図・出土遺物

して適切であると考えられる。他は形態や深度などからみて柱穴とは考えられない。

炉 pp 3 の北に存在する。細礫混じりの粘土質シルトと細砂礫で作られ、中央が浅くくぼんでいる。焼土の厚さは6cm。

遺物 (第10図、図版46)

出土状況 床面直上・床面・埋土から、土器と剥片類が出土している。

土器 5～7は本遺構に共伴する。他もすべてII群に分類できる縄文土器である。

剥片類 5点出土している。

まとめ・遺構の時期

出土遺物から、縄文時代後期前葉(縄文土器II群期)に分類できる。

DIII区

DIII-1住居跡

遺構 (第11図、図版4・5)

検出状況・重複関係 重複する遺構はない。

平面形 隅丸凸辺正方形 規模 4.2m×

4.3m 床面積 12.9㎡ 主軸方向 N-47-E

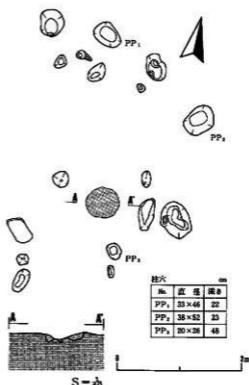
埋土 木根による攪乱が多くみられる。壁際や埋土下部は褐色土～暗褐色土、中部はクロボク、最上部は黒褐色土が占める。北東壁や南東壁寄りの埋土下部は十和田火火山灰の小塊が散在するが、少量である。

壁の状態 直立して立ち上がり、上半はいちじるしく外傾。壁高 37～51cm 壁溝 北西壁際の中央部と南西壁際のわずかに南東壁寄りの部分に存在するが、短い。

床面 全体に軟らかい。掘り方 南西壁寄りをのぞいては三壁からある程度の幅をもって伴うが、中央部には達していない。

柱穴 伴わない。

カマド：位置 北東壁中央 本体 残存状態は不良である。地山を削り出して作った両側壁の一部が壁から連続して認められるほかは崩壊・転落した小型のシルト岩・礫岩・安山岩が火山灰起源の薄い土とともに火床部の上を覆っている。火床部はよく焼けている。煙道部・煙出し部 掘り込み式である。構築材である最大粒径43cmの安山岩・シルト岩5個が落ち込んで



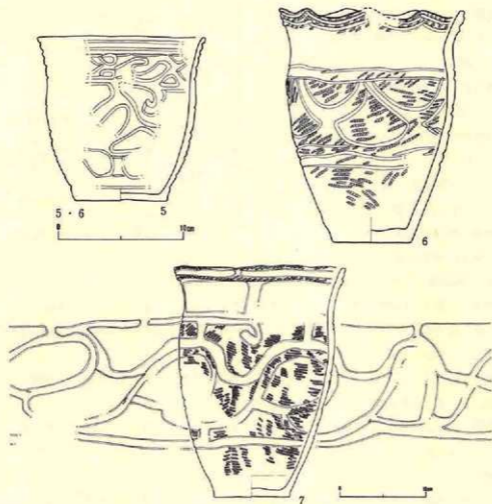
第9図 CIII-2住居跡実測図

いる。底面はいくぶん急傾斜で上がって先端部に達し、煙出し部は施設を伴わない。

付属施設 P1が南隅をえぐり込むように存在する。平面形は楕円形気味で、焼土の小塊や焼土粒が多量に混じった褐色の汚れ火灰が埋土である。P2はカマドの左脇にある。平面形が不整形円形の小ピットで、埋土である汚れ火山灰の上部には焼土を多く含む。

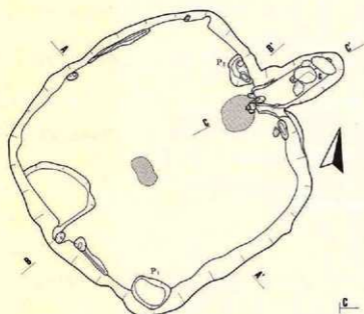
住居中央からわずかに南西壁に寄った床面の27×50cmの範囲が焼けている。炉に類する機能をもつものであろう。

遺物 (第11図・第12図、図版56)



No	地点・層位	器種	部位	形状/外面	内面	胎土	分類	備考	図版
5	床面直上	深鉢	口～底	ミダキ・沈線文。文線部分多く、文線単位等不明	ミダキ		II群		46
6	床面直上	深鉢	口～底	口縁部を波状。L.R→沈線→一部磨光。5単位	ミダキ		II群		46
7	断面	深鉢	口～底	L.R→沈線→磨光。口縁部文様5単位	ミダキ		II群		46

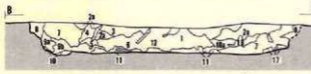
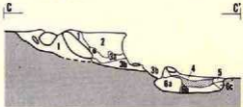
第10図 CⅢ-2住居跡出土遺物



壁高		cm			
壁	北西	南西	南東	北東	
高さ	40	51	43	37	

カマド		cm	
本	長さ	幅	長さ
	139		68
体部	横	深さ	35
	52×53		6

1. 黒色、クロボク
2. 3. 黒褐色
4. 暗褐色
5. 黒褐色、T₁-aを少量含む。
6. におい黄褐色、T₁-aをやや多く含む。
- 7・8. 暗褐色・褐色、T₁-aが点在。
- 9a. におい黄褐色・褐色。
- 9b. 褐色・暗褐色。
10. におい黄褐色、汚れ火山灰、焼土と炭化物を少量含む。
11. におい黄褐色。
12. 黄褐色
13. 褐色、T₁-aの小塊を含む。
14. 暗褐色。
15. 黄褐色。
16. 褐色・黒色。
17. 褐色、カマド基部の焼土が多く混入。
18. 暗褐色。



- 1・2. 暗褐色。
- 3a. 黄褐色、汚れ火山灰
- 3b. 褐色、汚れ火山灰
4. 黄褐色～褐色、火山灰混入、焼土を含む。
5. 黄褐色。
- 6a-6c. 黄褐色、住居張り方の一部

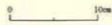
ピット		cm	
No.	P ₁	P ₂	
開口部径	47×60	30×50	
深さ	21	11	



8



9



No.	地点・層位	種類・器種	外			内			計測値:cm		分類	図版	
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高			底径
8	カマド	土師器様	ナデ	ナデ	本家底	ナデ	ナデ	ナデ	11.2	11.6	8.4	S 2	56
9	堀土上部	土師器様	—	ヘラナデ	本家底	—	ヘラナデ	ナデ	—	(10.5)	6.7		

第11図 DIII-1住居跡実測図・出土遺物(1)

出土状況 埋土中・下部を中心に、埋土・カマド本体・煙道部・掘り方埋土から出土している。土器と石器・土製品・琥珀・剥片類がある。

土器 II群に分類できる縄文土器が破片数で土師器を上回っている。土師器壺8はS2である。坏は出土していない。

琥珀 破片3点2.22gが床面と煙道部から出土している。

その他 剥片石器は石鏃、ピエス・エスキュー、使用痕のある剥片がある。燧石器は打製石斧がある。土製品は円盤状土製品が2点である。剥片類は49点と多い。

まとめ・遺構の時期

出土遺物と住居形式から、平安時代に分類できる。

D III-2 住居跡

遺構 (第13図、図版5・6)

検出状況・重複関係 多くの部分が調査区域外にあり、全体の約1/3が調査できたにすぎない。

重複する遺構はない。

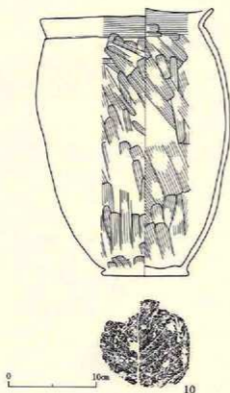
平面形 隅丸方形と推定 規模 西壁で4.7mを測る。床面積 不明 主軸方向 N-73°-W

埋土 黒色土が卓越するが、壁寄りや下部は褐色土や暗褐色土が占める。2種類の火山灰が認められ、白頭山-苦小牧火山灰は最大粒径120mmの大塊ほか黒色土中に含まれ、十和田B火山灰は大塊としてその下位の褐色土~暗褐色土に多く含まれる。

壁の状態 外傾 壁高 59・69cm 壁溝 調査できた範囲では、カマド部分を除いてほぼ存在し、内部には円形の小ピットを数多く伴う。

床面 全体に硬く締っている。掘り方壁寄りの狭い範囲に伴う。

柱穴 調査できた範囲には検出されなかつ



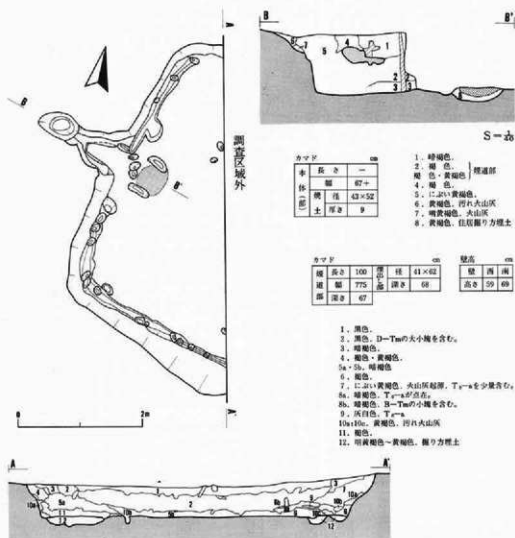
No.	地点・層位	種類・器種	外			内			計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	高さ	底径		
10	カマド	土師器壺	ヨコナデ	ヘラナデ	木葉形	ヨコナデ	ヘラナデ	ナデ	30.7	30.8	10.0	L2b	56

第12図 D III-1 住居跡出土遺物(2)

た。

カマド：位置 西壁中央 本体 残存状態はよくない。火床部と側壁の一部を構成する礫の抜き取り痕が火床部を挟んだ両側に1個ずつ残るだけである。火灰部はよく焼けている。煙道部・煙出し部 煙道部と煙出し部との境はくりぬき式になる。煙道部全体がくりぬき式であった痕跡は埋土には認められず、FIII-3住居跡同様、くりぬき式と掘り込み式との中間形と考えておく。底面はほぼ水平で、煙出し部は円形のピットになっている。

遺物 (第14図、図版56)



第13図 D III-2住居跡実測図

出土状況 埋土を中心に、カマド・煙道部から出土しているが少量である。土器・琥珀・土製品・剥片類がある。

土器 土師器甕とⅡ群に分類できる縄文土器が出土している。

琥珀 1点0.05gの破片が床面から出土している。

その他 土製品は耳栓である。剥片類は2点である。

まとめ・遺構の時期

出土遺物は少ないが、平安時代に分類できる。

DⅢ-3 住居跡

遺構 (第15図～第17図、図版6～8)

検出状況・重複関係 重複するDⅢ-101落とし穴を切っている。

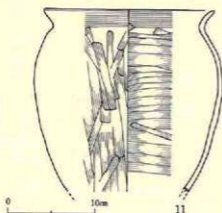
平面形 隅丸正方形 規模 5.3×5.4m 床面積 20.9㎡ 主軸方向 N-41'-W

埋土 にぶい黄褐色土～暗褐色土は壁寄りや埋土中部・床面直上、黒褐色土は埋土上部や下部を主に占める。十和田a火山灰は埋土中部に層状に含まれるが、断続的である。最大層厚は40mmである。

壁の状態 外傾 壁高 52～59cm 壁溝 浅い壁溝が、カマドが設置された北西壁の大部分や南隅付近、北東壁の一部をのぞいて存在し、円形の小ピットを内部のところどころに伴う。幅は9～30cm、深さは2～7cmである。

床面 全体に軟らかい。掘り方 全体規模の掘り方を下位に伴う。

柱穴 pp 1～pp 4の4個である。四隅から1.2m前後内側へ寄った位置に存在する。掘り方の平面形は凸辺隅丸長方形である。



カマド：位置 北西壁中央 本体 残存状態は比較的良好である。地山を削り出した両側壁と側壁や天井部を構成する礎の一部が残存する。天井部を作る礎は粒径が48・75cmと長大な垂円礎である。火床部はよく焼けている。煙道部・煙出し部 掘り込み式である。底面はかなり急傾斜で上がってゆき、煙出し部近くで水平になる。焼けた粘土が煙道部の一部に小規模に認められる。掘り方とは明確

No	地点・層位	種類・群種	外			内			計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底面	口縁部	胴部	底面	口径	高さ	底径		
11	カマド	土師器甕	ヨコナデ	ヘラナデ	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	19.6	(20.8)	—	L2a	56

第14図 DⅢ-2 住居跡出土遺物

に識別できるもので、右側壁を作っていたものであろう。

焼失 大量の炭化材が一部に焼土を伴いながら床面直上から床面にかけて分布する。材は中央部からおおむね放射状にみられ、壁際にあるものは下位に褐色土を伴って高い位置にある。材は径が7～12cm前後のものが主体である。焼土は中央部付近に小規模に広がるだけである。草本類はみられない。

付属施設 P1が南隅に寄った位置にある。平面形は楕円形で、深度は小さい。

遺物 (第18図・第19図、図版55・56・60)

出土状況 埋土上部～下部を中心に、カマド・床面・床面直上・標道部・柱穴から出土している。土器と石器・琥珀・石製品・鉄製品・剥片類がある。

土器 土師器は甕と坏が出土している。12～17の坏はI群B類である。甕はL1b、甕は口縁部の小破片1点がある。縄文土器はII群とともに少量のI群が出土している。

琥珀 破片4点1.71gが埋土から出土している。

鉄製品 23は断面形が円形の棒状のもので、両端は欠けている。器種は明らかでない。

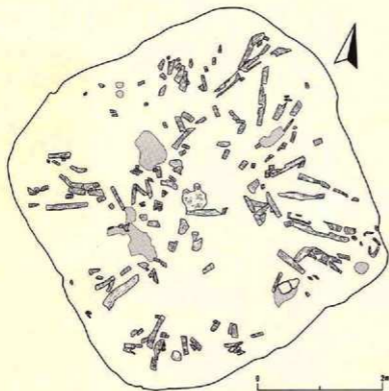
その他 19は砥石である。剥片石器は石鏃と不定形石器があり、剥片類は27点である。

まとめと遺構の時期

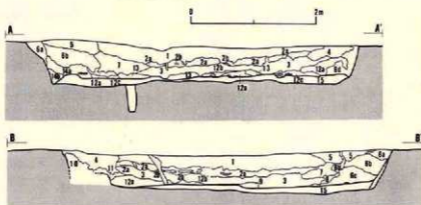
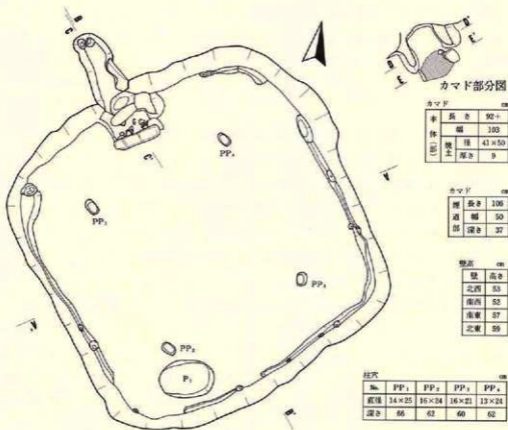
図示した土師器の坏や甕、住居形式から、奈良時代に分類できる。

DⅢ-4住居跡遺構 (第20図・第21図、図版9)

検出状況・重複関係 重複するDⅢ-53・54ピット(ともに時期不明)を切っている。



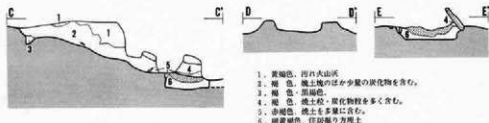
第15図 DⅢ-3住居跡実測図(1)



ピット		cm	
No.	P ₁		
開口部径	62×88		
深さ	11		

1. 黒褐色
- 2a. 暗褐色。To-aの大小坑を全体に含む。
- 2b. 灰白色。To-aが解を形成。
3. 黒褐色。To-aの小塊を少量含む。
4. 黒褐色
- 5-7. 暗褐色
- 6a. 褐色
- 6b-6d. 比較的黄褐色・褐色。汚れ火山灰
- 8-9. 黒褐色
10. 褐色。炭化物を少量含む。
11. 暗褐色
- 12a. 明黄褐色・黄褐色。火山灰・焼土・炭化物を一部に多く含む。
- 12b. 褐色。汚れ火山灰。炭化物が多い。
- 12c. 比較的黄褐色。焼土を多く含む。
13. 暗褐色
- 14a-14b. 比較的黄褐色・褐色。汚れ火山灰。炭化物がやや多い。
15. 明黄褐色-黄褐色。掘り方遺土

第16図 DIII-3住居跡実測図(2)



1. 黄褐色、汚灰火山灰
2. 褐色、焼土地のほか少量の炭化物を含む。
3. 褐色、黒褐色。
4. 褐色、焼土粒・炭化物粒を多く含む。
5. 赤褐色、焼土を多量に含む。
6. 暗黄褐色、圧縮掘り方焼土

S-6

第17図 DⅢ-3住居跡実測図(3)

平面形 凸辺隅丸の台形状。南西壁と南東壁の上半の一部がはっきりしない。規模 3.1~3.7×3.8~4.3m 床面積 10.6㎡ 主軸方向 N-41°-W

埋土 黒色土や黒褐色土が上半、暗褐色土~黒褐色土が下半を主に占めるほか、壁寄りの部分は火山灰起源のいぶい黄褐色土や褐色土が主に堆積する。十和田a火山灰は中部に断続的ながら最大層厚5cm土の層状に観察できるほか、下部の4層に小塊として散在する。白頭山一苦小牧火山灰の大塊は1a層に含まれるが、量は少なく、分布も限定される。

壁の状態 下部は直立気味に立ち上がるが、その上位は外傾がいちじるしい。とくに北西壁は上半が外方へ大きく張り出し、テラス状になる。内部に分布する炭化材が少量ではあるがその部分に分布することから、本来の形状を保つものと推定できる。しかし南西壁や南東壁の一部の張り出しについては不明な点が多く、崩壊等の理由によることも考えられる。壁高 上述のような理由のためはっきりしない点があるが、検出面からは35~52cm。壁溝 カマドが設置された北西壁をのぞいて存在するが、断続的である。

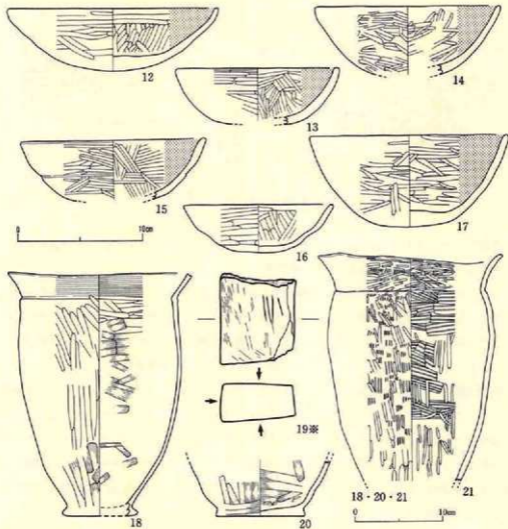
床面 全体に硬い。掘り方 全体規模の掘り方を下位に伴う。

柱穴 伴わない。

カマド：位置 北西壁中央からわずかに北東壁寄り。本体 竈を芯材にし、粘土で被覆している。しかし残存状態は良くなく、両側壁の5個が原位置にあるにすぎない。火床部に載る粒径38cmの長大な礫は天井部を構成するものの一部である。側壁を構成する礫は粒径25cmほかの垂円礫・垂円礫で、地上部の高さは25cmである。火床部は良く焼けている。煙道部・煙出し部 掘り込み式である。底面はわずかに傾斜して下がるが、半ば付近からは逆にゆるやかに上がってゆく。煙出し部には施設を伴わない。

焼失 少量の炭化材が中央部から南隅にかけての範囲に分布する。南隅付近では小規模な焼土を伴う。壁際のものが高い位置にあり、中央部のものが床面直上にあるという検出状況は焼失住居に一般にみられるもので、材の量は少ないものの、焼失に伴うものと推定しておく。

遺物 (第22図、図版60)



No	地点・層位	種類	外 面			内 面			計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	底部	黒色処理	口径	器高	底径		
12	カマド内部	土師器杯	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	17.0	5.0	—	Ⅰ群B類	55
13	カマド内壁	土師器杯	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	12.2	44.5	—	Ⅰ群B類	55
14	埋土層埋土	土師器杯	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	14.8	45.0	—	Ⅰ群B類	55
15	埋土層埋土	土師器杯	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	14.8	44.8	—	Ⅰ群B類	55
16	カマド内壁	土師器杯	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	12.0	3.9	—	Ⅰ群B類	55
17	埋土下部→灰面	土師器杯	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒色処理 ヘラミガキ	○	16.0	7.3	—	Ⅰ群B類	55

No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
18	埋土上部	土師器壺	ヨコナゲ	ヘラミガキ	木葉面	ヨコナゲ	ヘラミガキ ヘラミガキ	—	30.9	37.9	8.5	L1b	56
20	埋土上部	土師器壺	—	ヘラミガキ ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	ヘラミガキ ナゲ	—	—	(6.4)	10.2	—	—
21	カマド	埋土層埋土	ヘラミガキ	網目目 ヘラミガキ	—	ヘラミガキ	網目目 ヘラミガキ	—	(20.6)	(25.4)	—	L1a	—

No	地点・層位	器 種	計測値:cm			重量: g	石 材 名	特 徴・備 考	図 版
			長 寸	幅	厚 寸				
19	灰面	磁石	45	29	22	62	埋土層埋土磁石	Ⅰ群使用	60

S-1(※)

第18図 DⅢ-3住居跡出土遺物(1)

出土状況 埋土を中心に、煙道部・カマド・掘り方埋土から出土している。土器と石器・琥珀・鉄製品・石製品・土製品・剥片類がある。

土器 II群を主体とする縄文土器が破片数で土師器を若干上回っている。土師器はほとんどが甕の破片で、坏の破片は8点があるにすぎない。はS1である。

琥珀 破片3点2.85gが埋土中部から出土している。

鉄製品・土製品 焼けた柄を残した刀子がカマド前面の床面直上から出土したが、破損がいちじるしく、図示していない。土製品は小破片のため、穂の羽口か土製支脚か識別できない。

その他 石器は石錐やピエス・エスキュー・打製石斧ほかがあり、剥片類は7点である。石錐は両端に抉りを伴う。そのほか縄文土器片を素材にした円盤状土製品や円盤状石製品がある。

まとめ・遺構の時期

出土遺物や住居形式から、平安時代に分類する。

D III-5 住居跡

遺構 (第23図、図版10)

検出状況・重複関係 北東壁を含む一部を調査できたが、大部分は調査区域外に出ている。

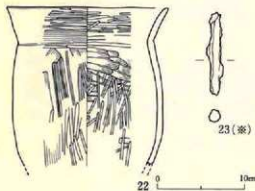
D III-102落とし穴と重複し、それを切っている。

平面形 隅丸方形であるが、詳細は不明。規模 北西～南東方向が3.0m。床面積 不明
主軸方向 N-57°-E

埋土 黒褐色土や黒色土・暗褐色土・褐色土が埋土を構成する。白頭山一苦小牧火山灰は少量の小塊が3層に点在する。粒径は10mm±である。

南東壁際上部から床面中央方向へ傾斜して下がっている貝層は最大層厚が20cmで、北側約二分の一はほぼ床面に接している。

壁の状態 外傾 壁高 II層を切って構築されていることが断面で観察できる。その部分での壁高は60cmを測る 壁溝 北隅から北西壁、また南東壁の一部に認められるものの、詳細は不明である。



No	地点・部位	種類・器種	外			内			計測値:cm	分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部			
22	埋土下部	土師器類	ヘラミダギ	ヘラミダギ	—	ヘラミダギ	ヘラミダギ	—	18.6 (18.4)	—	S1b 56

No	地点・部位	器種	計測値:mm			重量:g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
23	埋土	不明	44	5	7	3.1	陶磁欠片、断面円形の様相。	

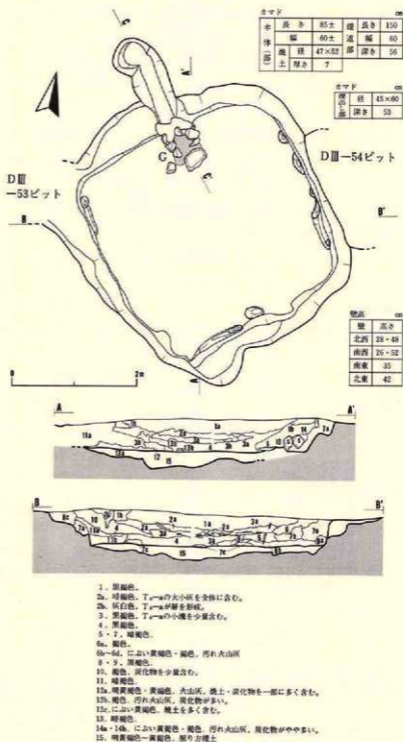
第19図 D III-3 住居跡出土遺物(2)

S-1(※)

床面 やや硬い。掘り方北西壁寄りに一部認められるが、詳細は不明である。

柱穴 調査できた範囲には検出されていない。

カマド：位置北東壁ほぼ中央
本体 シルト岩を芯材にし、粘土質シルトで被覆している。煙道部寄りでは竈の一部が原位置を保っているが、粒径25cm±ほかの扁平な亜角礫や亜円礫を直立させて埋設して側壁とし、そのうえに礫を渡して天井部を構築している。天井部に用いられる礫は粒径35cm±・28cm±の巨礫のほか、補強用のための小礫が多い。煙道部・煙出し部 掘り込み式である。底面は緩やかに傾斜して



第20図 D III-4 住居跡実測図(1)



第21図 D III-4 住居跡実測図(2)

S-4b

下がつてゆく。埋出し部には施設を伴わない。

付属施設 カマドの左脇にP1が存在する。平面形が円形の小型のビットで、深度は小さい。埋土は褐色～黒褐色の土で、カマドの構築材である礫3個を含んでいる。

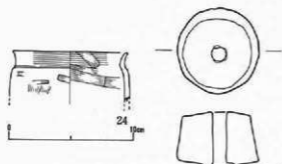
遺物 (第24図、図版63)

出土状況 上述のような検出状況のため、出土量は少ない。土器と琥珀・自然遺物・剥片類がある。

土器 土師器宴とII群を主体とする縄文土器があるが、すべて破片である。破片数は後者が上回る。

琥珀 破片8点17.76gが床面と床面直上・埋土・P1から出土した。

貝類 ムラサキインコガイが全体の約87%を占め、次いでイガイ・エゾイガイなどがあり、種数は27を数える(付篇参照)。



25(※)

その他 石器は石匙やビエス・エスキューホカがあり、剥片類は14点である。

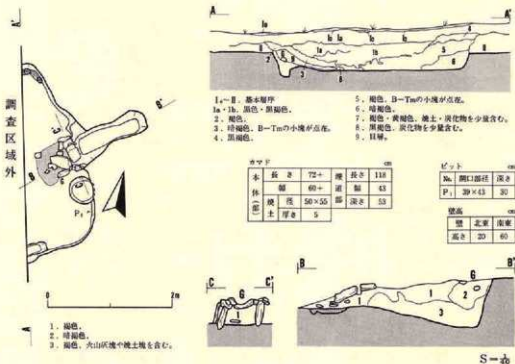
まとめ・遺構の時期

貝層は食用に供されたものが廃棄された結果形成されたものであろう。出土土器や住居形式・埋土から、平安時代に分類する。

No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口 径	器 高	底 径		
34	埋出し部上部	土師器鉢	ココナデ	ナデ	—	ココナデ	ナデ	—	9.2	(4.0)	—	S1	
No	地点・層位	器 種	計測値:mm			重量:g	特 徴・備 考	図版					
25	埋出し部直上	土製砂椀	上面径	下面径	厚 さ								
			36	45	27	53.7	ていおい・なとがき	60					

第22図 D III-4 住居跡出土遺物

S-4(※)



第23図 D III-5 住居跡実測図

D III-6 住居跡

遺構 (第25図・第26図、図版11・12)

検出状況・重複関係 久慈市教育委員会による試掘調査の際に埋土中央部が掘り下げられている。重複する遺構はない。

平面形 隅丸長方形 規模 5.2×6.3m 床面積 24.4m² 主軸方向 N-65°-W

埋土 黒色土(クロボク)が中央部付近の広い範囲に分布し、一部は床面を直接覆っている。そのほか褐色土や暗褐色土が埋土を構成する。2種類の火山灰を含む。白頭山-苦小牧火山灰は南壁寄りの部分に分布が限定される。一部は塊状に集合した状態で見られるものの、8b層や9層はマトリクスであるにぶい黄色土や褐色土に塊状に含まれる。塊の最大粒径は110mmと大きい。十和田a火山灰は東壁寄りの埋土最下部や床面直上・北壁際の壁溝中に認められる。20mm土の小塊が主で、量は少ない。なお南壁際に厚く堆積する3b層褐色土には少量の貝類が投棄されていた。

壁の状態 外傾。東西壁は上半がとくに緩やかな外傾を示す。壁高 48~57cm 壁溝 カマド部分を除いて存在するが、東壁の南側約二分の一の範囲でとぎれる部分が多い。内部に見

られる円形の小ピットは断続的である。

床面 南壁中央の壁際が非常に硬く締まっているほかは全体に軟らかい。掘り方 北壁を除いた三方の壁寄りに伴うが、最大幅が140cm±と狭い。

柱穴 柱穴状のピットが東隅付近から東壁半ば付近にかけて多く存在する。位置や形態・大きさ・深度の点から、共存する柱穴とは考えられない。

カマド：位置 西壁中央からわずかに南壁寄り 本体 残存状態は良くない。黄褐色土が火床部の上に薄く堆積していたほか右側壁の下底部が残存している。側壁は地山の火山灰を構築材にしている。左脇に散在するシルト岩も構築材の一部であろう。火床部はよく焼けている。煙道部・煙出し部 くりぬき式である。本体寄りの一部が掘り込まれ、壁外に出ているのは崩壊によるものであろう。底面は緩やかに傾斜して下がり、煙出し部である円形ピットに移行する。

付属施設 P1は西壁中央寄りの部分に存在する。平面形が楕円形あるいは凸辺隅丸方形のピットであり、貯蔵穴と推定される。埋土中部からは少量の貝類が出土している。P2はカマドの右脇に隣接して存在する。浅い円形のピットで、底面は凹凸がある。

遺物 (第27図、図版62・63)

出土状況 埋土・床面・煙道部・掘り方埋土から出土しているが、量は少ない。土器と石器・琥珀・自然遺物・鉄製品・剥片類がある。

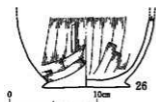
土器 破片数ではほぼ同数になる土師器壺とII群を主体とする縄文土器がある。土師器坏は出土していない。

琥珀 破片10点5.92gが床面や埋土・カマド・煙道部ほかから出土している。

鉄製品 27は埋土下部から出土した。下部を欠失しているため茎の有無は不明であるが、形態は34・133に類似する。鏃ではなく銚の一種と考えた。他に小破片1点が床面直上から出土しているが、器種は不明である。

自然遺物 貝類が埋土下部とP1の埋土中の2カ所から出土しているが、量的にはあまり多くない。ムラサキインコガイが大部分を占め、P1では全体の約90%を占める。種数は14種である(付属参照)。そのほかクルミ1点が埋土下部から出土している。

その他 剥片石器は不定形石器やピエス・エスキューがあり、剥片類は41点である。

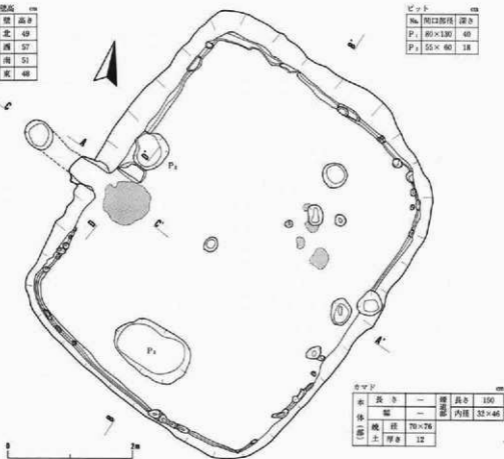


No	地点・階位	種類・器種	外			西			計測値: cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径		
26	埋土下部	土師器壺	—	ヘラナダ	未確認	—	ヘラナダ	ナダ	—	(8.0)	10.0		

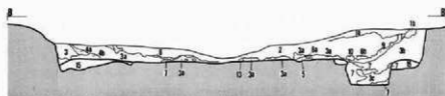
第24図 DⅢ-5住居跡出土遺物

壁高 cm	
壁高	49
北	57
南	51
東	48

ピット cm		
№	開口部径	深さ
P ₁	89×130	40
P ₂	55×60	18

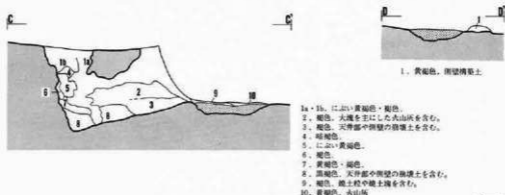


キワダ cm		
幅	径	40×50
厚さ	径	50



- 1a・1b. 埴間色。
 2. 黒色。アロギナ
 3a-3c. 褐色。汚れた火山灰。焼土や炭化物を少量含む。
 4a・4b. 褐色。4aは焼土を多く含む。
 5. 褐色。汚れた火山灰
 6. 埴間色。
 7. 粘黄褐色。火山灰
 8a. 黄褐色。B-Tm
 8b. 黄褐色・黒色。黒色土にB-Tmを含む。
 9. 褐色。B-Tmを含む。
 10. 黒色。
 11. 褐色。火山灰塊を多数に含む。
 12. 褐色。キワダ起跡の焼土を多量に含む。
 13. 黒褐色。
 14. 褐色。
 15. 黄褐色。掘り方埋土

第25図 DⅢ-6住居跡実測図(1)



第26図 DⅢ-6住居跡実測図(2)

S-4b

まとめ・遺構の時期

貝類は食用に供されたものが廃棄されたものであろう。出土遺物や住居形式・埋土から、平安時代に分類する。

EⅢ区

EⅢ-1住居跡

遺構(第28図、図版12)

検出状況・重複関係 西壁は調査区域外にあり、II層を切っていることが観察できる。重複する遺構はない。

平面形 隅丸の長方形気味であるが、形は崩れている。規模 2.4~2.8m×3.1~3.4m 床面積 7.4㎡

埋土 褐色土が卓越し、壁際や東壁寄りに汚れ火山灰が堆積する。埋土は全体に硬く締まっている。

壁の状態 検出が困難であったため、西壁をのぞいては壁の下部が残存する。その部分では直立~外傾。壁高 7~35cm 壁溝 伴わない。

床面 全体が硬く締まっている。

柱穴・炉 伴わない。

遺物(第28図、図版49)

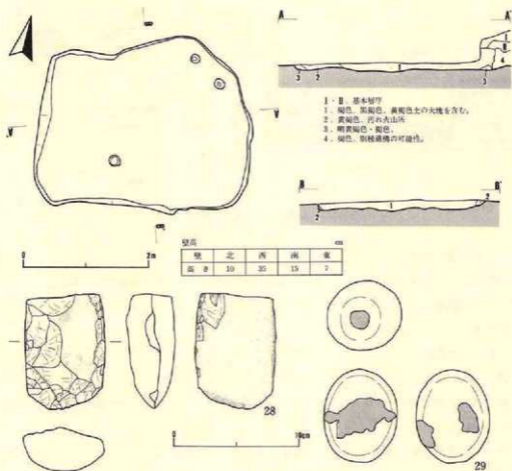
出土状況 埋土から出土しているが、量は少ない。



No	地点・層位	図 種	計測値: mm			重量: g	特 徴・備 考	図 版
			長 さ	幅	厚 さ			
27	埋土下部	金銭形鉄製品	41	27	4	4.7	表面を欠く。右側縁が鉄のため肥厚。	62

第27図 DⅢ-6住居跡出土遺物

S-4c



第28図 E III-1 住居跡実測図・出土遺物

土器と石器・剥片類がある。

土器 I群に分類した縄文土器片が7点あるだけである。

石器類 打製石斧と敲石が出土している(28・29)。剥片類は3点である。

まとめ・遺構の時期

出土遺物と住居形式から、縄文時代前期前葉(縄文土器I群期)に分類する。

F III区

F III-1 住居跡

No	地点・層位	器 類	計測値: cm			重量: g	石 材 名	特 徴・備 考	国 歌
			長さ	幅	厚さ				
28	埋土	打製石斧	90	64	37	350	輝石岩	刃部残存。裏面は自然面	28
29	床面	敲石	75	59	34	335	輝石安山岩	敲打痕は両面と上面	29

遺構 (第29図、図版13)

検出状況・重複関係 調査区中央に存在する浅い開析谷の北斜面に構築されている。そのため斜面下方の北壁は推定線でしか把握できなかった。

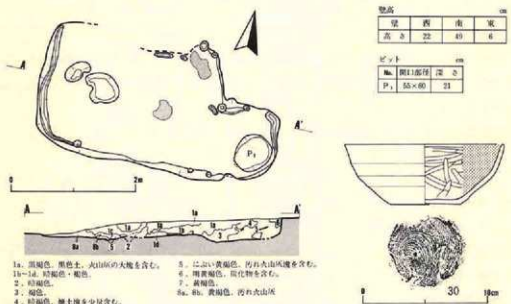
平面形 東西に長いややびつな隅丸長方形の東側に隅丸の張り出し部を伴う。規模 2.1×3.1m (ともに推定) 0.8×1.2m (張り出し部)。最大長3.9m 床面積 5.9m² (張り出し部を含む)

埋土 黒褐色土と暗褐色土が卓越する。壁寄りや床面直上の一部は明黄褐色～暗褐色の火山灰や汚れ火山灰・火山灰起源の土が構成する。白頭山一苦小牧火山灰は埋土下部の2層に小塊としてごく少量含まれているだけである。

壁の状況 残存状態の良い西壁や南壁はほぼ直立。張り出し部を含む東壁は検出が困難なこともあって低い。北壁は消失しているが、北西隅と北東隅が把握でき、推定が可能である。

壁高 6～49cm **壁溝** 部分的に存在する。西壁から南西隅を経た南壁の一部、張り出し部の東壁、張り出し部が本体部と接する北壁にも一部確認できる。南西隅を中心にした部分が深いものの、一般には浅い。

床面 炉付近から張り出し部へ移行する部分までの床面は非常に硬く締まっているが、範囲



No.	地点・層位	種類	外 面			内 面		計 画 積 (cm)			分類	図版
			口縁部	型 形	底 部	口一底	黒色処理	口 縁 高	底 径			
30	埋土上部	土器厨形	口タロ飯	口タロ飯	刻輪あ切り飯	ヘウミゴキ	○	12.2	4.8	5.8	豆群	56

第29図 FⅢ-1 住居跡実測図・出土遺物

は狭い。なお、図には表現されていないが、本体部と張り出し部との境は若干の段差を伴っている。掘り方 伴わない。

柱穴 北壁から東回りに行つて北東隅までの壁際に、柱穴状の円形小ピットが7個存在する。直径は7～15cm、深さは6～9cmである。その一部が柱穴を構成する可能性もあるが、規則的な在り方は示さず、確実な点は不明である。

炉・焼土 張り出し部まで含めたほぼ中央の床面が焼け、円形になっている。直径28×30cm、厚さ2cmである。形状や位置からは炉の機能をもつことが考えられ、地床炉と推定した。また北東隅に寄った位置の20×48cmの範囲の床面が所どころ焼けている。3カ所が確認できるが、それぞれは小規模である。

付属施設 P1が張り出し部に存在する。平面形が円形の浅いピットで、壁や底面は凹凸が著しい。住居跡と埋土が似ていること、後述する炭化材が埋土上に載っていること、土師器が出土していることから、共伴するピットと考えられる。

その他 炭化材が埋土中部から下部の層準に散在している。一般に壁際にあるものは床面からより高い位置にあり、中央に近くなると床面直上に分布する。南壁際から炉上に分布する材（長さ75cm・幅24cm・厚さ11cm）はその上に接するように少量の焼土をともなっている。材の形状や共伴する焼土の状態からは本遺構が焼失したことに起源を求めるのは難しく、廃棄物と考えておく。

遺物（第29図、図版55）

出土状況 埋土を中心に、床面から出土しているが、量は少ない。土器と石斧・剃片類がある。

土器 II群の坏30をのぞいてはすべて破片で、土師器壺と坏・II群が主体を占める縄文土器がある。

その他 磨製石斧の小破片がある。剃片類は3点である。

まとめ・遺構の時期

張り出し部をもつこととカマドが設置されていないことが古代の他の住居跡と異なる点である。時期を決定する資料に乏しいが、出土遺物からは中世まで時期が下ることは考え難く、平安時代の遺構として分類しておく。

FⅢ-2 住居跡

遺構（第30図・第31図、図版13・14）

検出状況・重複関係 重複するFⅢ-53ピット（時期不明）を切っている。またFⅢ-201焼土（時期不明）は南西壁寄りの埋土上部に形成されていた。

平面形 隅丸正方形。煙道部がある北東壁の上端が張り出す。規模 3.1×2.9～3.2m 主軸方向 N-18°-E

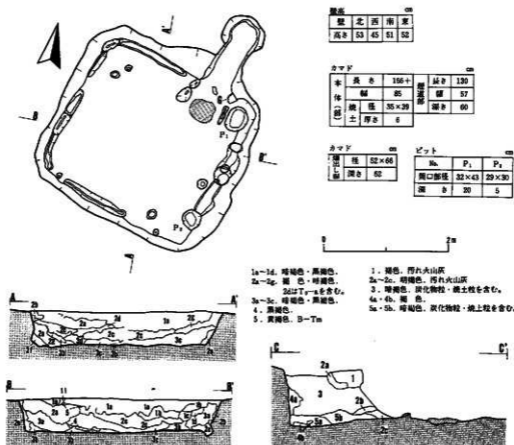
埋土 黒褐色土が上部、褐色土や暗褐色土が中・下部や壁際を主に構成する。粒径10~50mmの十和田a火山灰の大小塊は主に埋土中・下部に含まれ、白頭山一苦小牧火山灰は1a層の一部に粒状に観察できるにすぎない。

壁の状態 外傾 壁高 45~53cm 壁溝 南東隅付近と北東隅付近では伴わない。東壁に沿うところでは不整形な小ピットを多数伴う。

床面 全体に硬く締まっている。とくにカマド本体と西壁との中間から東側の部分は北壁と南壁寄りの一部を除いては非常に硬く締まっている。掘り方 伴わない。

柱穴 東壁際の南東隅に寄った位置にあるP₂は深度が小さいとともに対になるものがなく、柱穴の一部とは考え難い。

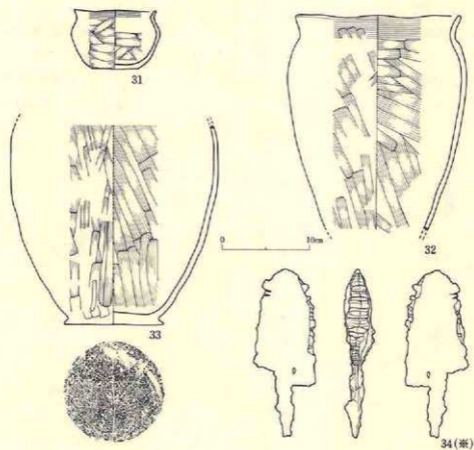
カマド：位置 北壁中央と北東隅の間 本体 ほぼ完全に崩壊している。側壁は礫を芯材にしているが、1個が右側壁の付け根に原位置を保っているほか、右側壁に2個、左側壁に1



第30図 FⅢ-2住居跡実測図

S-6b

個の抜き取り痕があり、構成礫の一部である2個が火床部上とその近くに散在している。火床部はよく焼けている。煙道部・煙出し部 くりぬき式と判断して精査を進めていったところ、天井部と推定した火山灰が埋土の一部であることが判明し、掘り込み式であることを確認している。底面はゆるやかに傾斜して下がっている。煙出し部は煙道部に比べるとやや幅広く、ピット状になっている。



No	地点・層位	種類・器種	外 面				内 面				計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	底縁部	口縁部	胴部	底部	底縁部	口径	高さ	底径		
31	埋土下部	土師器壺	コナナダ	ヘラナダ	ヘラナダ	コナナダ	ヘラナダ	ナダ	9.3	6.7	5.2	S.1	56		
32	埋土下部	土師器壺	コナナダ	ヘラナダ	—	コナナダ	ヘラナダ	—	18.9	(24.7)	—	L.2 m			
32	埋土下部	土師器壺	—	ヘラナダ・ヘラナダ	木葉状	—	ヘラナダ	ナダ	—	(23.0)	11.3	L			

No	地点・層位	器 種	計測値:cm			重量: g	特 徴・備 考	図版
			長さ	幅	厚さ			
34	埋土	鉄鍔形鉄製品	90	30	13	16.9	基部欠失。両側縁肥厚。とくに右側縁。小孔1個。	62

第31図 FⅢ-2住居跡出土遺物

S-1(※)

付属施設 ビットP1がカマドの右脇、北東隅に存在する。平面形が楕円形の浅いビットである。埋土からは灰白色粘土塊が少量出土している。位置と上述のP2の位置関係からは柱穴であるよりも貯蔵穴に類するものであることが考えられる。

遺物 (第31図、図版56・62)

出土状況 埋土上部～下部を中心に、床面・煙道部から出土している。土器と石器・鉄製品・鉄滓・琥珀・剥片類があるが、量的には少ない。

土器 土師器壺と坏・縄文土器がある。土師器壺はS1・L2aがある。坏はII群の破片が1点あるだけである。縄文土器片はII群が主体を占める。

琥珀 破片1点0.29gが埋土中部から出土している。

鉄製品・鉄滓 34は有茎の鐮形をした鉄製品である。形態は27や133に類似する。両側縁は銹のため著しく肥厚している。また基部近くには1.5×3.0mmの楕円形の小孔があく。鐮ではなく銚の一種と考えておく。鉄滓は10点235.52gが床面や埋土中・下部から出土している。個別の重量は7.1～100gとバラツキがある。

その他 石器は石鎌やピエス・エスキュー・打製石斧ほかがあり、剥片類は15点である。

まとめ・遺構の時期

31～33ほかの出土土器や住居形式から、平安時代に分類する。

F III-3 住居跡

遺構 (第32図、図版14・15)

検出状況・重複関係 重複する遺構はない。

平面形 隅丸正方形 規模 3.2×3.3m 床面積 8.7㎡ 主軸方向 N-38°-W

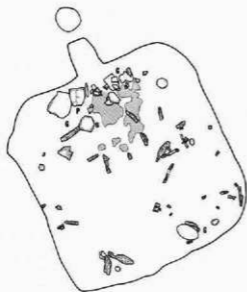
埋土 埋土上・中部は黒色土と黒褐色土が壁寄りの範囲をのぞいて主体を占める。それ以外は褐色土や暗褐色土が卓越する。2種類の火山灰が観察でき、白頭山―苫小牧火山灰はQ3埋土最上部、十和田a火山灰は埋土下部に塊状に含まれる。前者は少量の上に分布は限定され、後者は広範囲に認められる

壁の状態 直立～いくぶん外傾 壁高 39～59cm 壁溝 北西壁の西半分をのぞいた部分に存在する。

床面 全体に硬く、壁際をのぞいた部分などくに硬く締っている。掘り方 伴わない。

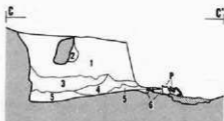
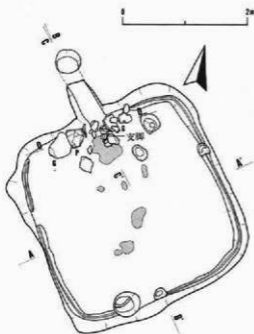
柱穴 伴わない。柱穴状ビット pp 1・pp 2 は該当しない。

カマド：位置 北西壁中央 本体 側壁は礫を芯材にしてシルトで被覆する。全体に崩壊がいちじるしく、数個が原位置を保つほかは周辺に散乱している。礫はシルト岩で、厚さ1～3cmの薄い板状の亜角礫と角礫の側面を上下にして埋設している。火床部はよく焼け、北端には土製支脚を埋設している。煙道部・煙出し部 煙道部と煙出し部との境はくりぬき式である。



カマド

本 住 跡 部	長さ	70+	横 溝 部	長さ	131	溝 幅	深さ	30×40
	幅	55		幅	65		深さ	74
焼 土	径	43×50	深さ	66				
	厚さ	8						



S-a

1. 黄褐色、巧れのない火山灰
2. 明褐色、浅く深れた新焼土
3. 明赤褐色、天井部積層土
4. 黄褐色、曲壁や天井部積層土の一部を含む。
5. 黄褐色・緑褐色・黒色・白色、多量の腐植土が混じる。
6. 褐色、焼土・炭化物を含む。



S-b

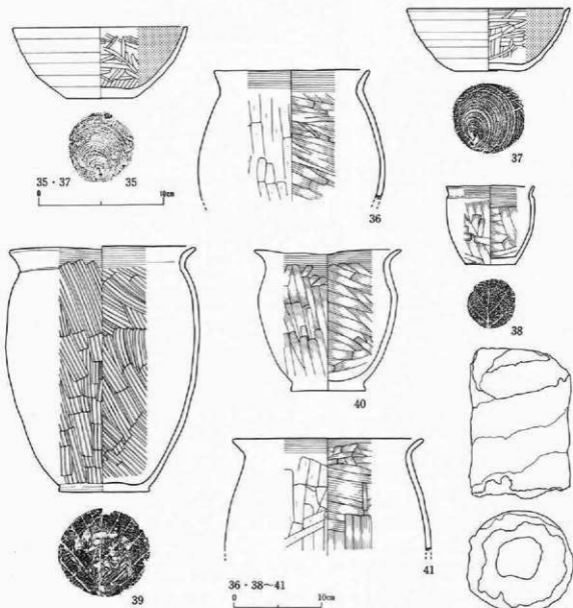
1. 褐色、焼土・炭化物を含む。
2. 暗褐色。
3. 黄褐色・暗褐色、炭化物と焼土粒を含む。

壁高		cm				
壁	北	西	南	西	東	北
高さ	50	39	44	50		



1. 黒色、クロゴア
2. 褐色
3. 褐色
4. 暗褐色・黒褐色
- 5a・5b. 褐色・暗褐色、火山灰混層、焼土を多く含む。T₁₀-a塊を含む。
6. 黄褐色、巧れ火山灰
- 7a. 黄褐色、B-T₁₀
- 7b. 褐色、B-T₁₀を多く含む。
8. 暗褐色・白色、焼土厚層
9. 褐色
10. 黄褐色
11. 暗褐色
- 12a・12b. 暗褐色、12aは火山灰混層や焼土塊・炭化物を含むが少量、12bは焼土の大塊を含む。
13. 不明。

第32図 FⅢ-3住居跡実測図



No	地点・層位	種類	外 面			内 面			計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口徑	高さ	底徑		
35	カマド	土師器坪	ロクロ肌	ロクロ肌	回転糸切り肌	ヘラミダキ	○	14.6	5.7	5.4	II群	55	
37	埋土上部	土師器坪	ロクロ肌	ロクロ肌	回転糸切り肌	ヘラミダキ	○	13.0	3.9	5.6	II群		

No	地点・層位	種類・層様	外 面			内 面			計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口徑	高さ	底徑		
36	埋土	土師器甕	ココナデ	ヘラツクリ	—	ココナデ	ヘラナデ	—	17.7	(15.0)	—	L2 a	
38	埋土	土師器甕	ココナデ	ナデ	木葉底	ココナデ	ナデ	ナデ	10.0	9.1	5.4	S1	56
39	No 1	土師器甕	ココナデ	刷毛目	木葉底・刷毛目	ココナデ	刷毛目	ナデ	21.2	28.3	10.4	L2 b	57
40	埋土下部	土師器甕	ココナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ココナデ	ヘラナデ	ナデ	16.5	16.1	8.5	M1	57
41	埋土	土師器甕	ココナデ	ヘラツクリ	—	ココナデ	ヘラナデ	—	21.6	12.7	—	L2 a	

No	地点・層位	器種	計測値:cm			重量:kg	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
42	カマド	土師支脚	119	80	24	510	海堀成坑。臺上げ供焼物。中室	60

第33図 FⅢ-3 住居跡出土遺物

しかし、煙道部全体がくりぬき式であったことは埋土から推測できず、くりぬき式と掘り込み式との中間形と考えておく。底面はゆるやかに傾斜して下がり、煙出し部は円形のピットになっている。

焼失 炭化材が床面あるいは床面直上の層準に分布している。住居内のほぼ全域に分布するが、量はそれほど多いものではない。材は6cm土の太さのものが主で、板材は含まれていない。焼土はカマドの右脇から前面にかけて小規模に分布する。また草本類は南西壁寄りに少量が存在する。壁面は全体が加熱を受けて赤色に変化していたが、床面の敷カ所も同様の変化を示している。

遺物 (第33図、図版55～57・60)

出土状況 埋土下部を中心に、埋土上部・床面・床面直上・煙道部・カマドから出土している。土器と石器・琥珀・鉄製品・鉄滓・土製品がある。

土器 やや多い量の土師器が出土している。坏35・37はⅡ群である。甕はS1・M1・L2a・L2bがある。38・39は木葉底である。縄文土器片はⅠ群とⅡ群が出土しているが、少量である。

琥珀 破片1点0.1gが埋土上部から出土している。

鉄製品・鉄滓 小破片のため器種不明の鉄製品1点が埋土から出土している。鉄滓は1点360gが埋土下部から出土している。

土製品 42はカマドの土製の支脚である。両端を失っている。巻き上げ痕が明瞭にみられ、非常に粗雑な作りである。穂の羽口の転用ではなく、本来的に支脚として作られたものであろう。

その他 石器は敲石や礫器Ⅰ類があり、剥片類は25点である。

まとめ・遺構の時期

35～41の土師器甕や坏ほかの出土遺物や住居形式から、平安時代に分類する。

FⅢ-4 住居跡

遺構 (第34図、図版16)

検出状況・重複関係 大部分が調査区域外にあり、北西隅を含む一部と煙道部が調査できたにすぎない。しかし、全形を検出しており、規模や床面積・カマドの位置などは知ることができる。

平面形 隅丸正方形 **規模** 3.7×4.0m **床面積** 12.8㎡(推定される下端での計測) **主軸方向** N-37°-W

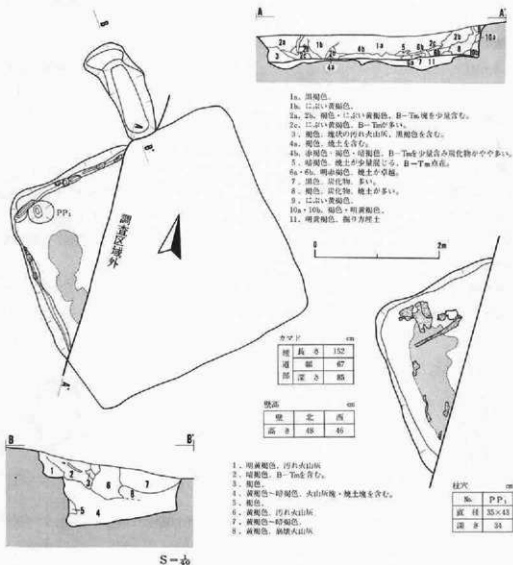
埋土 におい黄褐色土や黄褐色土が壁寄りの部分、黒褐色土が中央部を中心にした範囲で卓越する。焼土が卓越する明赤褐色土ほか床面直上に堆積する。壁際2b・2c、埋土下部の

5、床面直上の4の各層は白頭山—苦小牧火山灰を含むが、2c層を除いては量が少ない。いずれも塊状で、粒径10mm±のものが主体である。

床面 調査できた部分は硬く締っている。掘り方 調査できた部分には伴う。

柱穴 北西隅に pp 1 を伴うが、柱穴になるかどうかは明らかではない。

カマド：位置 北西壁中央からわずかに北東壁寄り 本体 調査できた部分には検出されて



第34図 F III-4 住居跡実測図

いない。煙道部・煙出し部 掘り込み式である。底面はゆるやかに傾斜して下がってゆく。煙出し部には施設はみられない。

焼失 明赤褐色焼土が壁際をのぞいた床面直上の層準に検出された。焼土は壁寄りでは汚れ火山灰の上に載り、傾斜して中央方向へ急激に下がっている。2～4cmの塊が集合して層状になる例が主であり、最大層厚は5cmである。炭化材は焼土の下位に検出されるとともに一部は焼土上に載るが、量は多くない。幅25cm±の板材と推定されるものが北西隅近くにみられ、少量の草本類も出土している。それらを取りのぞくと、西壁寄りの部分の床面が焼けているのがみられ、調査区域外へ伸びてゆく。

遺物 (第35図、図版62)

出土状況 上述のような検出状況のため、出土量は少ない。土器と石器・琥珀・鉄製品がある。

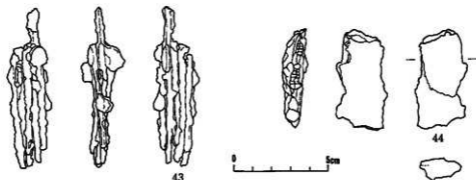
土器 すべて破片である。土師器甕34点・坏Ⅱ群1点・縄文土器17点である。

琥珀 破片1点0.12gが床面から出土している。

鉄製品 43と44がある。43は断面形が正方形である棒状のもの5本が錆のため互にくっついている。径は3×3mm、5本ともほぼ完形品とみられ、現存長61～80mmである。一端が細くなるようにも見受けられ、刺突具の一種と推定した。44は基部を欠く。刃部は断面がかまぼこ形になる。刃先から33mmのところから裏側に折れ曲がっているが、現存長は86mmになる。両刃である可能性があるが、錆のためにはっきりせず、器種は不明である。

その他 石器はピエス・エスキーユと磨石Ⅰ類がある。

まとめ・遺構の時期



No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
43	灰層	不明	86	17	18	10.7		62
44	焼土	不明	53	22	8	10.4		62

第35図 FⅢ-4住居跡出土遺物

S-10

出土遺物や住居形式・埋土などから、平安時代に分類できる。

G II 区

G II-1 住居跡

遺構 (第36図～第38図、図版17・18)

検出状況・重複関係 完全には埋まりきらず、凹レンズ状にくぼんでいる。重複するG II-2 住居跡(縄文時代)を切っている。またG II-54ピット(縄文時代)も切って大部分に貼り床を施し、同ピットの埋土をそのまま壁面している。

平面形 隅丸正方形 規模 6.4×6.4m 床面積 33.8㎡ 主軸方向 N-16°-W

埋土 暗褐色土や黒褐色土が卓越する。中部を占める2層は暗褐色土をマトリックスにして十和田a火山灰を多く含む。同火山灰は塊状のもので、集合して層状になる。塊は最大粒径が40mmで、10～20mmが主体を占める。北半をのぞいた壁際は褐色の汚れ火山灰が埋土上部から床面にかけての広い範囲に分布し、南西隅を含む西壁と南壁とくに顕著である。

壁の状態 直立～いくぶん外傾 壁高 35～53cm 壁溝 カマド部分を除くと一周し、一部は円形の小ピットを伴う。

床面 全体に硬く締っている。掘り方 全体規模の掘り方を下位に伴う。

柱穴 pp.1～pp.4の4本柱である。四隅から1.5m±中央へ寄った位置にある。掘り方の平面形は楕円形で、柱痕跡は確認できなかった。深度は65～75cmと大きい。柱穴状ピット pp.5～pp.7の3個は南壁際に存在する。先の4個と比べると直径が大きい、pp.6以外は深度が小さい。pp.5は白色粘土を含む黄褐色土が卓越し、同じ土はpp.7に単層として認められる。3個の位置づけは不明である。

カマド：位置 北壁中央 本体 残存状態は良好である。多数の礫を構築材にし、シルトで被覆する。側壁は扁平な亜角礫の側面を上下にして平行に埋設し、1側壁に3個以上の礫が使用されている。天井部は最大粒径65cmほかの長大な礫を使用している。そのほかには補強用として、土器器壁のいくぶん大型の破片多数や粒径の小さな礫が用いられている。燃焼部の下位には円形の浅い掘り込みを伴う。火床部はよく焼けている。煙道部・煙出し部 掘り込み式である。底面はほぼ水平に伸び、煙出し部になる円形のピットを先端に伴う。

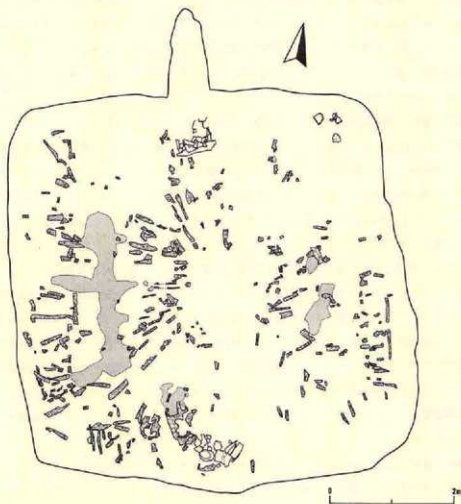
付属施設 P1がカマドの左脇にある。平面形が円形の浅いピットで、カマド崩壊土がその上の一部を覆う。

焼失 粗密はあるものの、多量の炭化材が全体に分布し、一部は焼土を伴っている。材は埋土下部から床面直上の層準に分布し、床面に密着して存在する例は少ない。壁際ではより上位にあり、床面に対して斜めに傾くという焼失住居に一般的にみられる在り方を示している。西半では中央からおおむね放射状に分布する状態がよく観察できる。材は最大径10cmの丸材ある

いは角材と推定できるものが大部分であるが、南壁際の床面直上に分布するものの一部は幅が25cmと13cmの板材と考えられる。焼土は、西壁からやや内側に入った位置にあって壁面に平行するように幅広くみられるほか、東壁寄りの位置に小規模に分布する。いずれの場合も、焼土塊や焼土粒が集合した状態で層を形成している。検出される層準は埋土下部から床面直上である。なお草本類は検出されていない。また壁面は焼けて赤色に変化しているが、著しいものではない。

遺物 (第39図～第41図、図版55・57～60)

出土状況 埋土下部～床面を中心に、埋土上・中部、カマド・煙道部から多くの遺物が出土



第36図 G II-1 住居跡実測図(1)

柱穴			柱穴		
No.	直径	深さ	No.	直径	深さ
PP ₁	20×22	73	PP ₅	26×26	29
PP ₂	12×18	75	PP ₆	27×26	75
PP ₃	16×23	65	PP ₇	28×30	8
PP ₄	18×19	71			

ピット	
No.	P ₁
開口部径	20×66
深さ	24

カマド部分図

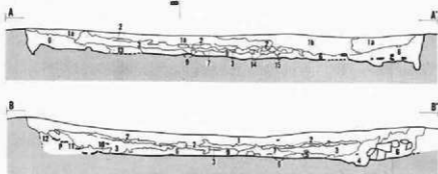
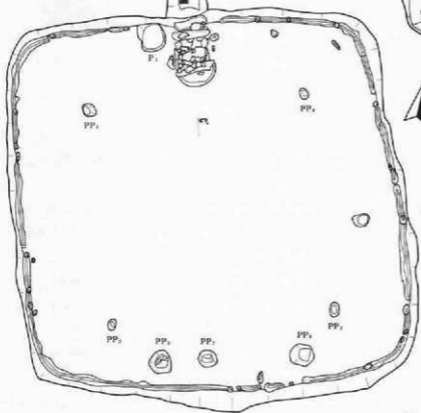


カマド		
種別	長さ	幅
木	110	70
土	40×43	7

カマド		
種別	長さ	幅
土	145	65
土	36	36

カマド		
種別	長さ	幅
土	33×37	36

壁高		
壁	高さ	
北	50	
西	25	
南	53	
東	47	



- 1a. 粘褐色。
- 1b. 黒褐色。To-aの小塊が点在する。
2. 粘褐色。To-aの小塊が層状になる。
3. 黒褐色・粘褐色。To-aの小塊が点在する。
4. 褐色。カマド基礎の硬土塊が多い。
5. 褐色。炭化物を少量含む。
6. 褐色。内側火山灰層・火山灰層・炭化物を少量含む。
7. 黒褐色。
8. 黒褐色。火山灰・硬土・炭化物が全体に多い。To-aが点在する。
9. 黒褐色。竹片火山灰。
- 10・11. 褐色。
12. 黒褐色。To-aの小塊が点在する。
13. 褐色。硬土が多い。
14. 黒褐色。To-aが全体に多い。
15. 褐色。

第37図 GII-1住居跡実測図(2)



1. 暗褐色、塊状の焼土・火山灰が全体に散在。
 2. 黒褐色、塊状の焼土・火山灰が全体に多い。
 3. 塊状褐色、火山灰
 4. 黄褐色、円れ火山灰
 5. 褐色、焼土・炭化物がやや多い。
 6. 赤褐色、焼土卓越。
 7. 褐色、焼土を多量に含む。

S-10

第38図 G II-1 住居跡実測図(3)

している。出土量は古代の住居跡中では最大である。土器と石器・琥珀・鉄滓・土製品・石製品・自然遺物がある。

土器 土器は壺・坏 I 群 B 類・壺・甕・鉢がある。壺は M2・L1a・L2a がある。52 は S に分類できるが、口唇部なのかどうか不明の点があるため細分はしていない。鉢は 53 がある。甕 59 と壺 57・58・60 は南壁中央部付近の壁際の底面直上～床面の層準に一括して出土したもので、廃棄されたものと推定される。坏 47 と壺 55 は北東隅付近の壁際の埋土下部の層準から出土している。坏 46・壺 50・51 はカマド、小型の鉢 53 は南東隅付近の床面からの出土である。縄文土器片は 81 点で、I 群が主体を占める。

土製品 土製紡錘車は 5 点が出土し、完形の 4 点を図示した (61～64)。61・62 はカマド左脇前面、63 は南東隅に寄った南壁際、64 は東壁中央部壁際のいずれも埋土下部から出土している。

琥珀 破片 18 点 24.48g が埋土上部を中心に、埋土中・下部、床面直上から出土している。個別の重量は最小 0.02g から最大 13.5g である。

鉄滓・鞆の羽口 鉄滓は 6 点 99.55g が埋土上部と下部から出土している。鞆の羽口の破片 1 点は埋土下部からの出土である。

石製品 65 は自然礫の 2 面を使用。磨るあるいは敲くといった機能が考えられる。

自然遺物 クルミ 1 個が埋土上部から出ている。

その他 石器は石鏃・ピエス・エスキーユ・不定形石器・凹石ほかがあり、剥片類は 72 点である。

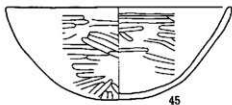
まとめ・遺構の時期

豊富な出土土器や住居形式・埋土から、古墳時代～奈良時代にかけての住居跡と考えられる。

G II-2 住居跡

遺構 (第42図、図版19)

検出状況・重複関係 北側は G II-1 住居跡 (古墳～奈良時代) に切られ、全体の 2 分の 1



45



46



47

45~47

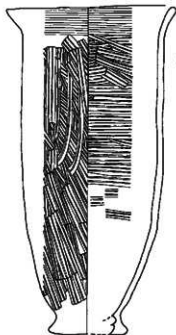
10cm

48~51

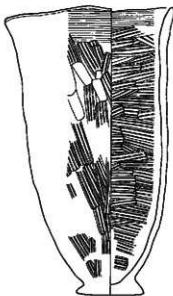


48

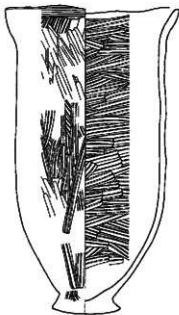
10cm



49



50

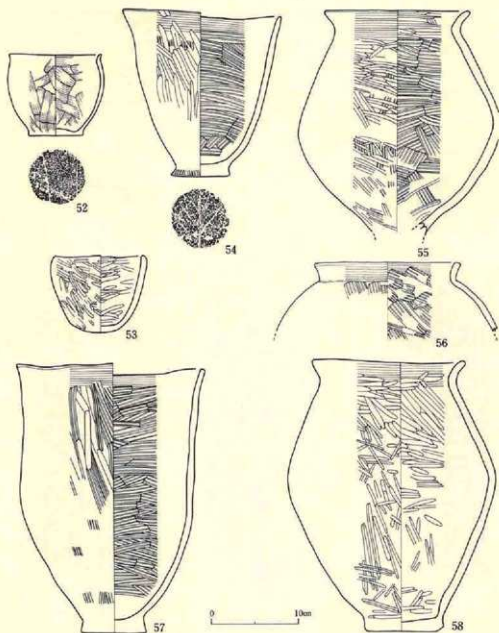


51

No.	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値:cm		分類	図版		
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口徑	器高			底径	
45	埋土下部	土師器杯	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	×	18.2	7.4	—	I群A類	55
46	カマド	土師器杯	刷毛目 ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	刷毛目 ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	×	18.4	7.1	—	I群A類	55
47	No.5	土師器杯	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	18.3	5.9	—	I群A類	55

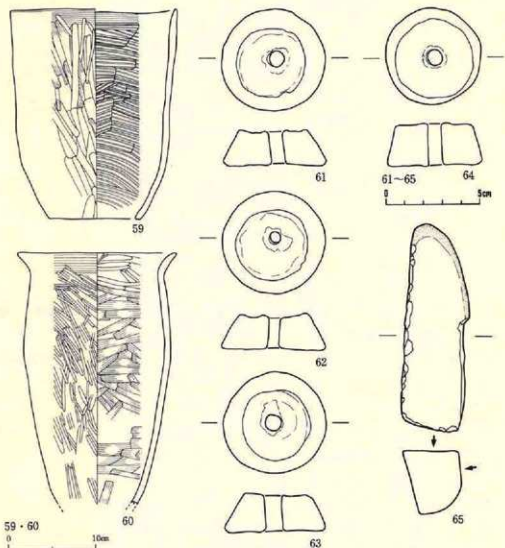
No.	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計測値:cm		分類	図版		
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口徑	器高			底径	
48	埋土上部	土師器壺	—	ヘラミガキ	本漆塗	—	ヘラナデ	ヘラナデ	—	(12.0)	10.0	—	—	—
49	埋土下部	土師器壺	ヨコナデ	刷毛目 ヘラミガキ	本漆塗	ヨコナデ	刷毛目	ナデ	ナデ	19.2	37.5	8.8	L1*	57
50	カマド	土師器壺	ヨコナデ	刷毛目 ヘラミガキ	小凹凸	ヨコナデ	刷毛目	ナデ	ナデ	19.6	33.0	7.8	L1*	57
51	カマド	土師器壺	ヨコナデ	刷毛目 ヘラミガキ	—	刷毛目	刷毛目	ナデ	ナデ	19.8	35.0	7.8	L1*	58

第39図 GⅡ-1住居跡出土遺物(1)



No.	地点・層位	種類・母体	外			内			計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	体高	口径		
52	埋土上部	土師製(ナデ)	ナデ	木葉紙	(ナデ)	ナデ	ナデ	10.6	9.3	6.2	S		
53	床面	土師製	ヘラミダキ	ヘラミダキ	ヘラミダキ	ヘラミダキ	ヘラミダキ	10.2	8.6	—		57	
54	床面	土師製	ヨコナデ	ヘラミダキ・刺毛目	木葉紙	ヨコナデ	刺毛目	ナデ	17.9	19.0	6.6	M2	58
55	No.4	土師製	ヨコナデ	ヘラミダキ・刺毛目	—	ヘラミダキ	ヘラミダキ	—	16.8	(26.0)	—		58
56	埋土中部	土師製	ヨコナデ	刺毛目	—	ヨコナデ	刺毛目	ナデ	16.7	(8.3)	—		
57	床面	土師製	ヨコナデ	刺毛目	木葉紙	ヨコナデ	刺毛目	ナデ	21.7	20.8	7.5	L1*	58
58	床面	土師製	ヨコナデ	ヘラミダキ	ナデ	ヨコナデ	ヘラミダキ	ヘラミダキ	17.6	21.5	8.0	L2*	59

第40図 GII-1住居跡出土遺物(2)

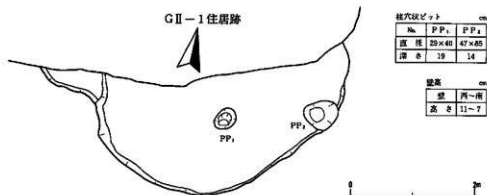


No	地点・層位	種類・部類	外 面			内 面			計 測 値 : cm			分 類	図版
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口径	器 高	底 径		
59	床面直上	土製貯蔵	ヨコナデ	ヘラミガキ	無庄	ヨコナデ	刷毛目	—	19.2	24.2	—	59	
60	床面	土製貯蔵	ヨコナデ	ヘラミガキ	—	ヘラミガキ	ミダキに似ている文字	—	18.2	(29.0)	—	L 1 a	

No	地点・層位	器 種	計 測 値 : cm			重量 : g	特 徴 ・ 備 考	図版
			上面径	下面径	厚 さ			
61	埋土上部	土製貯蔵車	27	55	19	54.9	ていねいなミガキ。上面がわずかにくぼむ。	60
62	埋土上部	土製貯蔵車	28	35	20	54.6	ていねいなミガキ。上面がわずかにくぼむ。	60
63	埋土上部	土製貯蔵車	27	55	20	53.9	ていねいなミガキ。上面がわずかにくぼむ。	60
64	埋土下部	土製貯蔵車	41	51	23	56.4	ていねいなミガキ。上面がわずかにくぼむ。	60

No	地点・層位	器 種	計 測 値 : cm			重量 : g	石 材 名	特 徴 ・ 備 考	図版
			長 さ	幅	厚 さ				
65	埋土下部	不明	110	33	34	190	チャート	2面を磨りあるいは磨きで使用。	60

第41図 GⅡ-1住居跡出土遺物(3)



第42図 G II-2 住居跡実測図

以上を失っている。

平面形 残存部からは円形基調と推定できる。規模 東西は4.1mが残存 床面積 不明
埋土 火山灰起源の褐色土が卓越し、汚れ火山灰が一部を占める。

壁の状態 外傾。東壁のG II-1 住居跡寄りの部分は消滅。壁高 7~11cm 壁溝 残存部には認められない。

床面 軟らかい。

柱穴 柱穴ピットはpp 1 と pp 2 がある。本遺構が部分的にしか残っていないこともあり、本遺構との具体的な関係は不明である。

炉 残存部には検出されていない。

遺物

出土状況 上述のような検出状況であり、出土量は少ない。土器と剥片類がある。

土器 I 群に分類できる縄文土器の胴部破片9点が埋土から出土しているだけである。

剥片類 1点だけである。

まとめ・遺構の時期

出土遺物が少なく、時期は推定になるが、周辺に分布する縄文時代の遺構や縄文土器の在り方からは縄文時代前期前葉（縄文土器 I 群期）に分類できる。

G II-3 住居跡

遺構（第43図、図版19・20）

検出状況・重複関係 北側約3分の1は調査区域外にある。重複するG II-103落とし穴は掘り方面に検出された。G II-151炭窯は本遺構の埋土に載る状態で構築されている。

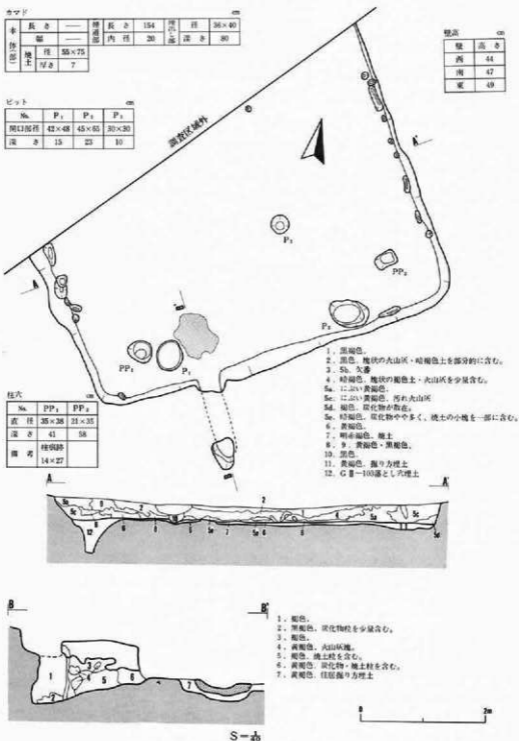
平面形 隅丸方形 規模 6.0m×不明 床面積 精査部分は20.4㎡ 主軸方向 S-31°-1

カマド				cm				
本体部	長さ	—	幅	—	壁高	194	内径	36×40
	内径	—	壁高	—	内径	20	深さ	80
柱土	径	50×75	深さ	7				

ピット				cm			
No.	P ₁	P ₂	P ₃				
開口径径	42×48	45×55	30×30				
深さ	15	23	10				

壁高		cm	
壁	高さ	西	44
		南	47
		東	49

柱穴			cm		
No.	PP ₁	PP ₂			
直径	35×38	21×35			
深さ	41	58			
備考	柱穴跡				
	14×27				



第43図 G II-3 住居跡実測図

E

埋土 暗褐色～黒色の土が卓越し、壁際や最下部は汚れ火山灰が主に占める。2層は白頭山一苦小牧火山灰の大小塊を少量含む。

壁の状態 外傾 壁高 44～49cm 壁溝 明瞭な壁溝は認められない。ただ、主に東壁と西壁の壁際には深度の小さな小ピットが多数存在し、壁溝と同様の役割を果たすものであろう。

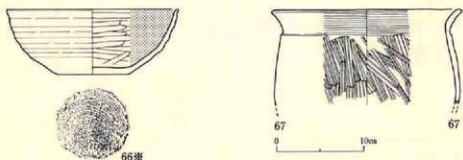
床面 硬く締まっているが、壁寄りの部分はやや軟らかい。掘り方 全体規模の掘り方を下位に伴う。

柱穴 二つの隅からいくぶん入った位置に、pp 1 と pp 2 が検出された。pp 1 は柱痕跡と掘り方が識別でき、柱底跡の平面形は楕円形である。pp 2 は長方形の掘り方である。対になる2個は調査区域外に存在することが予想される。

カマド：位置 南壁中央と南西隅の中間 本体 崩壊し、粘土質シルトの薄層が火床部の上を覆うにすぎない。火床部はよく焼けている。煙道部・煙出し部 くりぬき式である。底面は緩やかに傾斜して下がり、煙出し部に移行する。側壁や天井部は焼けて赤褐色に変化している。

付属施設 P 1 がカマド火床部の右隣りに存在する。平面形が円形の浅いピットで、埋土は炭化物粒や焼土粒を多く含む暗褐色土である。P 2 は南壁中央からわずかに東側に寄った位置にある。平面形は楕円形で、深度は小さい。P 3 は床面中央からわずかに東壁に寄った位置にある。深度は小さいが、ロート状になる。壁面は良く焼け、下底部は還元状態になって青黒色に変化している。

以上の3基のピットのうち、P 2・P 3 は共伴する。しかし、P 1 は床面を除去する際に検



No	地点・層位	種類	外				内				計 測 値 : cm	分類	図説
			口縁部	胴部	底部	取っ手部	口縁部	胴部	底部	取っ手部			
66	埋土	土層面片	ロクロ製	ロクロ製	回転車切り肌	ヘラミガキ	○	13.9	5.2	5.8	II 群		
67	P 2 埋土	土層器壁	ココナテ	網毛目子 ヘラミガキ	—	ココナテ	網毛目子 ヘラミガキ	—	22.9	(11.0)	—	L 1 b	

第44図 G II - 3 住居跡出土遺物

S - 3 (※)

出されたことと位置的には右側壁の下位に存在したことが考えられ、本遺構の廃絶時の共伴は考え難い。P3はなんらかの工作用の施設であることが推定される。

その他 炭化材と焼土が埋土下部から床面直上の層準に分布する。分布密度が濃いのはカマド火床部上から西壁の間の狭い範囲で、その北側の調査区域と接する部分やP2の周辺にも分布するが少量である。材は5～7cm角の角材と推定されるものなどを含む。焼土は炭化材の下位に主に認められ、層厚は3～4cmである。壁際では床面よりも高い位置にあり、床面中央に向かうにつれて床面直上あるいは床面に密着する在り方は焼失住居跡によくみられるものである。材と焼土の絶対量が少ない点に疑問も残るが、焼失に起源するものと推定される。

遺物 (第44図)

出土状況 埋土上～下部を中心に、掘り方埋土・P2埋土から出土している。土器と石器・鉄滓・土製品がある。

土器 土器はほとんどが破片で、壺L I b67と坏II群66を図示できたにすぎない。坏は66以外に破片で1点である。縄文土器片はI群とII群が14点である。

鉄滓・土製品 鉄滓は11点133.24gが出土している。土製品は小破片のため韃の羽口か土製支脚か識別できない。

その他 石器は石鏃やピエス・エスキーユ・磨石I類、剥片類は5点がある。

まとめ・遺構の時期

66・67ほかの出土土器や住居形式・埋土から、平安時代に分類できる。

G III区

G III-1 住居跡

遺構 (第45図、図版20)

検出状況・重複関係 東壁を含む部分をG III-2住居跡(縄文時代)に切られているほか、G III-102落とし穴にも大きく切られている。

平面形 北東隅も残存することから、隅丸凸辺長方形を推定できる。南西壁が歪むのは一部を掘りすぎているためかもしれない。規模 2.8(推定)×4.4m 床面積 8.7㎡(推定)

埋土 わずかに汚れ、微量の炭化物を含む火山灰の単層である。

壁の状態 外傾 壁高 8～19cm 壁溝 残存部には認められない。

床面 硬く締まっている。

柱穴・炉 残存部には認められない。

遺物 (第46図、図版47・49)

出土状況 埋土から出土しているが、量は少ない。土器と石器・剥片類がある。

土器 縄文土器があるが、すべて破片である。全部I群に分類でき、図示例68～72以外は11

点である。

石器類 礫石器は磨石Ⅰ類73・74、凹石と礫器Ⅰ類の複合76、凹石と敲石の複合75がある。剥片類は7点である。

まとめ・遺構の時期

出土土器や占地・住居形式・重複関係から、縄文時代前期前葉（縄文土器Ⅰ群期）に分類できる。

GⅢ-2 住居跡

遺構（第45図、図版20）

検出状況・重複関係 多くの遺構と重複している。GⅢ-1・GⅢ-3の住居跡（ともに縄文時代）を切っている。GⅢ-102・104・106の3基の落とし穴には埋土上面から切られている。

またGⅢ-55ピット（平安時代）は本遺構の埋土を掘り込んで作られている。

平面形 隅丸長方形。北西壁がGⅢ-102落とし穴を挟んでズレているが、壁の把握が難しかったため、掘り足りないことが考えられる。規模 4.9×7.2m 床面積 29.4㎡

埋土 暗褐色土が大部分を占めるほかは、黒褐色土や褐色土・黄褐色土が上位や壁際の一部を構成する。全体に非常に硬く締まっている。

壁の状態 外傾 壁高 24～29cm 壁溝 伴わない。

床面 壁寄りの周辺部を除いては硬く締まっている。

柱穴 数多くの柱穴状ピットが検出されている。しかし図に示した pp 1～pp 7以外は深度が20cm以下の小さいもの、形態的に不適当なものである。また pp 1～pp 7のなかでも、pp 3や pp 6を除いては配置の面では適切であることも考えられるが、全体としての配置が明らかではないため、個々の位置づけは不明である。

炉 一部が落とし穴に切られているものの、伴わないものと推定される。

遺物（第47図～第51図、図版47～51）

出土状況 埋土を中心に、床面・床面直上・柱穴状ピットから出土している。土器と石器・剥片類があり、石器と剥片類の多いことが特徴である。

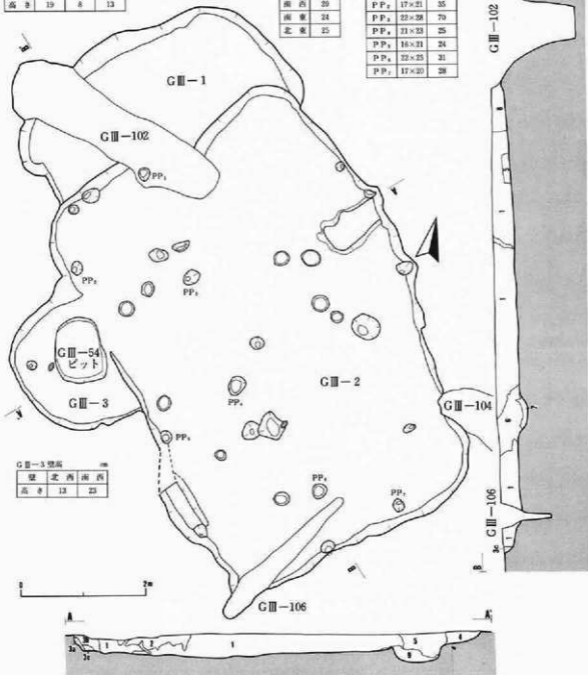
土器 Ⅰ群に分類できる縄文土器が出土しているが、すべて破片である。図示例77～85以外には67点である。85は胴部下部の破片である。図示していないなかに、丸底になるものとみられる破片が1点ある。

石器類 剥片石器はピエス・エスキューが13点ともっとも多いほか、不定形石器が4点、使用痕のある剥片が3点、石鏃が2点ある。石鏃は無茎平基と無茎円基で、長さが17mmと21mmと小型である。礫石器は礫器Ⅰ類が6点と多いほか、凹石が5点、磨石Ⅰ類が4点、凹石と敲石の複合石器が2点、円盤状打製石器と礫器Ⅱ類が各1点である。磨石Ⅰ類の1点は凹石と複合

GⅢ-1壁高				
壁	北	西	南	東
高さ	19	8	8	13

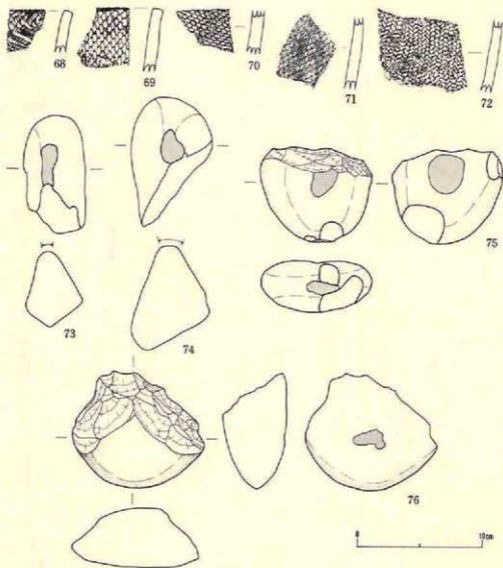
GⅢ-2壁高	
壁	高さ
北西 (11)	25
南西	29
南東	24
北東	25

GⅢ-2柱穴		
No.	直径	深さ
PP ₁	19×20	30
PP ₂	17×21	35
PP ₃	23×28	70
PP ₄	21×23	25
PP ₅	16×21	24
PP ₆	22×25	31
PP ₇	17×20	28



1. 暗褐色、火山灰の灰層を全体に、炭化物を少量含む。
2. 黒色。
- 3a-3c. 黄褐色、火山灰、3aは炭化物をわずかに含む。
4. 黄褐色、汚れ火山灰、炭化物を少量含む。
5. 黒色、GⅢ-54ピット埋土。
6. 黄褐色、火山灰層をわずかに含む。
7. 黄褐色、暗褐色。
8. 黄褐色、褐色、汚れ火山灰。
9. 黄褐色、汚れ火山灰、GⅢ-54ピット埋土。

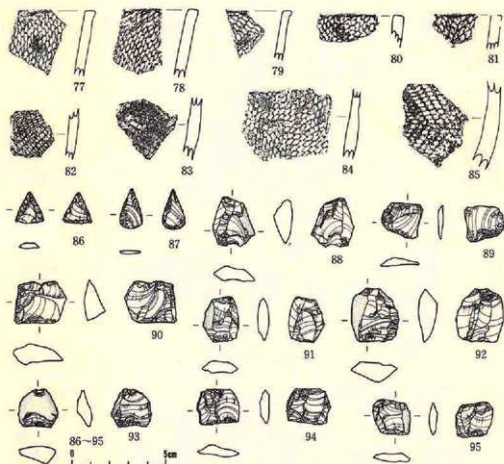
第45図 GⅢ-1～GⅢ-3住居跡実測図(1)



No.	地点・層位	部 種	部 位	器 形 / 外 面	内 面	胎 土	分 類	備 考	図説
68	埋土	深鉢	口縁部	波状線文、口縁部角磨る		織物多	1-1(1)		
69	埋土中部	深鉢	口縁部	波状線文、口縁部角磨る	ナデ	織物多	1-1(1)		47
70	埋土中部	深鉢	胴部	L形L		織物多	1-2(1)		
71	埋土中部	深鉢	胴部	波状線文、口縁部角磨る	ミガキ	織物多	1-2(1)		
72	埋土中部	深鉢	胴部	波状線文		織物多	1-2		47

No.	地点・層位	部 種	計 測 値 : mm			重量 : g	石 材 名	特 徴 ・ 備 考	図説
			長 さ	幅	厚 さ				
73	床面	磨石I型	93	48	60	320	アルコース砂岩	背根、横断面幅3mm	
74	床面直上	磨石I型	98	65	78	455	緑閃岩	背根、横断面幅12mm	
75	床面	磨石I型・磨石	75	90	42	400	波紋岩	磨石I型、凹は両面、磨きは下面	49
76	埋土	磨石I型・磨石	92	103	47	490	長石砂岩	磨石I型、凹は両面	49

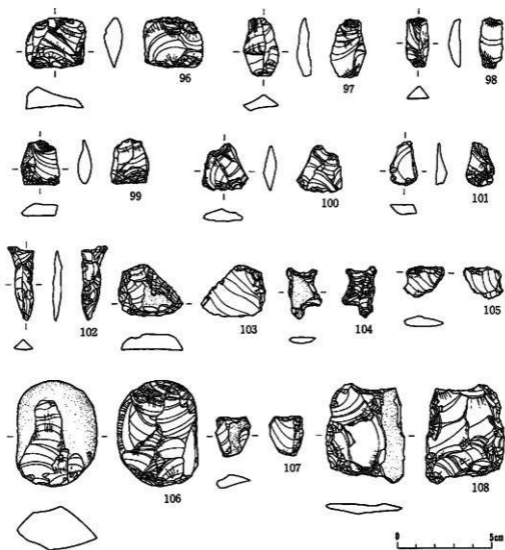
第46図 GⅢ-1住居跡出土遺物



No	地点・層位	器種	部位	彫形 / 外面	内面	出土	分類	備考	図版
77	埋土	深鉢	口縁部	粗彫。口縁部角張る	ナシ	織物多	I-1		47
78	埋土	深鉢	口縁部	粗彫。最終段際り戻し。口縁部角張る	織物多	織物多	I-1~(1)		47
79	埋土	深鉢	口縁部	LR。口縁部肥厚	平滑	織物多	I-1~(1)		
80	埋土	深鉢	器体不明	口縁部角張る	織物多	織物多	I-1		
81	埋土	深鉢	口縁部	粗彫。最終段際り戻し。口縁部角張る	織物多	織物多	I-1~(1)		
82	埋土	深鉢	口縁部	最終段有状彫文	織物多	織物多	I-2~(1)		
83	埋土	深鉢	口縁部	LR・RL	織物多	織物多	I-2~(1)		
84	埋土	深鉢	器体不明		織物多	織物多	I-2		47
85	埋土	深鉢	器体不明		織物多	織物多	I-2~(1)	頭台が上	

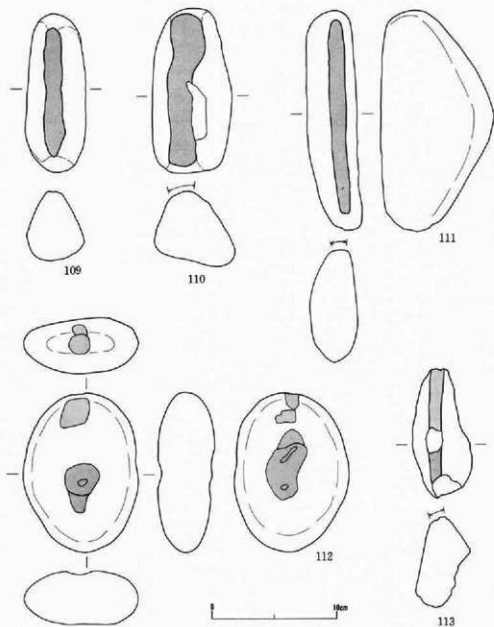
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
86	埋土	石鏃	17	15	2	0.6	珪質凝灰岩	平基無式	48
87	柱穴	石鏃	21	12	2	0.5	珪質凝灰岩	円基無式	48
88	埋土上部	ビエス・エスカーユ	25	22	11	4.5	チャート質粘板岩	自然面。刃部2個1対	48
89	埋土	ビエス・エスカーユ	18	20	4	1.5	珪質凝灰岩	刃部2個1対	48
90	埋土	ビエス・エスカーユ	22	27	11	5.9	珪質凝灰岩	刃部2個1対	48
91	埋土	ビエス・エスカーユ	23	19	7	3.0	珪質凝灰岩	自然面。刃部2個1対	48
92	横土時	ビエス・エスカーユ	28	25	10	7.3	珪質凝灰岩	自然面。刃部2個1対	48
93	埋土上部	ビエス・エスカーユ	20	21	9	3.5	凝灰質珪質粘岩	自然面。刃部2個1対	48
94	埋土上部	ビエス・エスカーユ	19	23	5	2.4	珪質凝灰岩	刃部2個1対	48
95	埋土	ビエス・エスカーユ	17	20	4	1.9	珪質凝灰岩	自然面。刃部2個1対	48

第47図 GⅢ-2住居跡出土遺物(1)



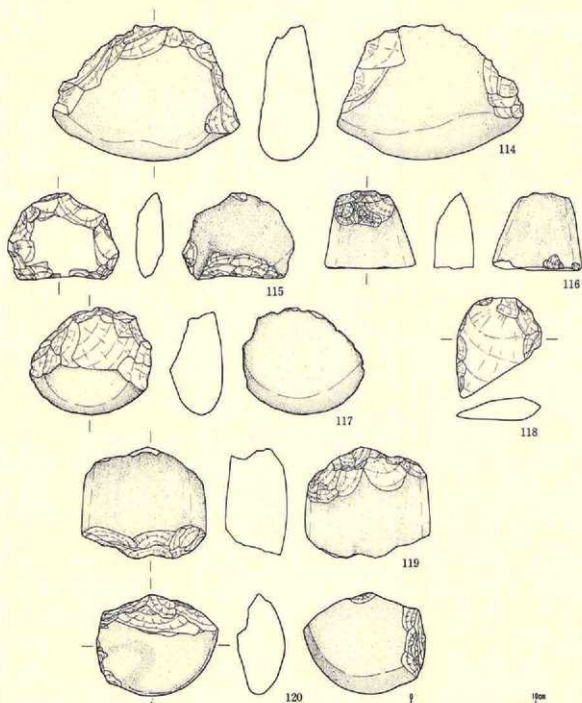
No	地点・層位	器 種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
96	塚土	ビス・エスキュー	26	31	11	8.9	雑質凝灰岩	刃部2層1吋	48
97	塚土一様面	ビス・エスキュー	31	18	7	3.2	緻密質地質凝岩	刃部2層1吋	48
98	塚土	ビス・エスキュー	26	12	7	1.8	地質凝灰岩	刃部2層1吋	48
99	塚土	ビス・エスキュー	23	19	6	3.5	緻密質地質凝岩	自然面。刃部2層1吋	48
100	塚土	ビス・エスキュー	24	23	6	3.1	雑質凝灰岩	刃部2層1吋	48
101	塚土	削片	22	15	5	1.3	雑質凝灰岩	下辺に割痕	48
102	序南塚上	不定形石鏟	37	13	6	1.9	凝灰質地質凝岩	破片。右辺は断面から断面調整	48
103	塚土	不定形石鏟	27	33	9	9.1	雑質凝灰岩	新製。折れ處以外断面調整	48
104	塚土	不定形石鏟	27	18	3	1.6	緻密質地質凝岩	自然面。3層の跡入部	48
105	塚土	不定形石鏟	18	20	6	1.2	雑質凝灰岩	右辺に小割痕1層	48
106	塚面	ビス・エスキュー	56	42	23	52.9	地質凝灰岩	自然面。刃部2層1吋。	48
107	塚土	ビス・エスキュー	21	18	6	2.4	緻密凝灰岩	自然面。上下段に小割痕	48
108	塚土	ビス・エスキュー	51	42	5	14.7	緻密凝灰岩	自然面。刃部は左右2段	48

第48図 GⅢ-2住居跡出土遺物(2)



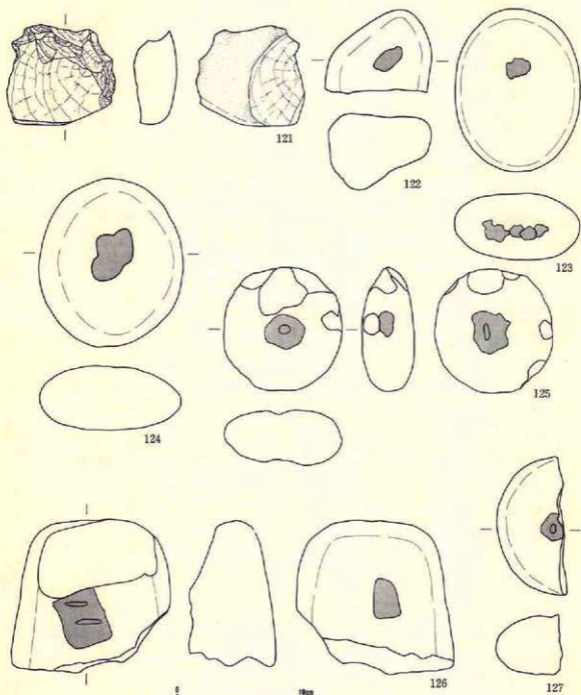
No	地点・層位	器 類	計 測 値 : mm			重量 : g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
109	床面	磨石 I 類	108	48	37	528	花崗閃綠岩	機能面幅15mm	49
110	埋土中部	磨石 I 類 + 凹石	81	88	35	285	頁岩質岩	磨石 I - 1, 凹石側面之裏面	49
111	埋土	磨石 I 類 + 凹石	176	90	46	820	硬砂岩	磨石 I - 1, 凹石側面, 機能面幅12mm	49
112	埋土	凹石 + 磨石	126	92	45	770	硬砂岩	凹石 - 1, 凹石裏面	49
113	埋土	磨石 I 類	102	45	48	295	花崗閃綠岩	折損, 小型, 機能面幅10mm	49

第49図 GⅢ-2住居跡出土遺物(3)



No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	出土
			長さ	幅	厚さ				
114	床面	碗器口縁	147	108	46	1019	磯砂岩		50
115	壇土上部	碗器口縁	89	67	20	165	ホルンフェルス	縁部部全体に剥離	50
116	壇土	碗器口縁	62	73	32	255	磯砂岩	碗器口縁	50
117	壇土	碗器口縁	85	56	42	450	長石和岩	碗器口縁	50
118	壇土	碗器	68	70	17	120	磯砂岩	片損	50
119	壇土上部	碗器口縁	87	101	47	650	磯砂岩	碗器口縁	50
120	壇土	碗器口縁	81	50	39	430	輝石和岩	碗器口縁	50

第50図 GⅢ-2住居跡出土遺物(4)



No	地点・層位	形 類	計 測 値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長 寸	幅	厚 寸				
121	埋土上部	磨石I類	86	76	34	390	輝石安山岩	磨石I-0	51
122	埋土	磨石	65	82	62	440	花崗閃綠岩	磨石-0	
123	床面直上	磨石+磨石	130	99	52	1390	花崗閃綠岩	磨石-1。磨打痕は下層	50
124	埋土	磨石	134	116	51	1130	アルコーヌ砂岩	磨石-0	50
125	埋土上部	磨石+磨石	99	95	41	590	花崗閃綠岩	磨石-1。磨打痕は両側縁	51
126	埋土	磨石	122	120	71	1550	緑砂岩	磨石-0。阿以直造	51
127		磨石	110	83	49	420	輝石安山岩	磨石。磨打痕**	

第51図 GⅢ-2住居跡出土遺物(5)

している。剝片類は451点と多い。剝片石器から得られるものが228点、礫石器から得られたものが223点とほぼ半々である。総重量は約2.5kgになる。

まとめ・遺構の時期

出土遺物や住居形式・占地・重複関係から、縄文時代前期前葉（縄文土器Ⅰ群期）に分類できる。

GⅢ-3 住居跡

遺構（第45図、図版20）

検出状況・重複関係 重複するGⅢ-2住居跡・GⅢ-54ピット（ともに縄文時代）に切られているため、詳細が不明な点が多い。

平面形 残存部からは円形あるいは楕円形などの円形基調であることが考えられる。規模 東西長2.3mが確認できる。床面積 不明

埋土 褐色土が残存しているものの詳細は不明である。

壁の状態 外傾 壁高 13～23cm 壁溝 残存部には認められない。

床面 軟弱である。

柱穴 南壁際にあるpp 1（径14×15cm・深さ6cm）以外に柱穴状ピットは認められない。

炉 残存部には伴わない。

遺物

出土状況 上述のような検出状況のため、出土量は非常に少ない。土器と剝片類がある。

土器 Ⅰ群に分類できる縄文土器片が3点出土しているにすぎない。

剝片類 14点が出土している。

まとめ・遺構の時期

出土遺物や重複関係・占地から、縄文時代前期前葉（縄文土器Ⅰ群期）に分類できる。

GⅢ-4 住居跡

遺構（第52図、図版21）

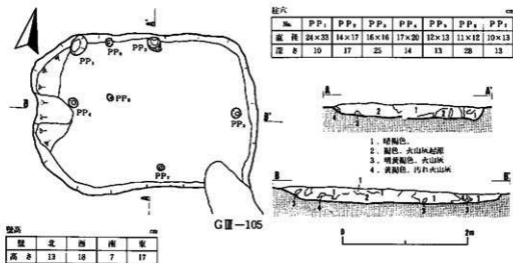
検出状況・重複関係 重複するGⅢ-105落とし穴との新旧関係は把握していない。ただ落とし穴を検出して精査を進めた段階では住居跡の存在を把握できなかった点からは落とし穴が新しい可能性が高い。

平面形 凸辺隅丸長方形 規模 2.5×3.6m 床面積 7.1㎡

埋土 暗褐色土や褐色土が卓越し、火山灰起源の明黄褐色土・黄褐色土が塊状に含まれる。全体に硬く締まっている。

壁の状態 外傾 壁高 7～18cm 壁溝 伴わない。

床面 全体に硬く締まっている。



第52図 G III-4 住居跡実測図

柱穴 柱穴状ビットは pp 1～pp 7 の 7 個が検出されている。pp 5～pp 7 は直径が小さく、深度は10～28cmと小さい。位置的には pp 1～pp 4・pp 7 が柱穴である可能性が強いものの、それらだけで柱穴の全部とは考えられず、全体の配置については不明である。

炉 伴わない。

その他 西壁は一般に緩やかに傾斜している。とくに中央部は床面中央にむかって傾斜面が張り出すとともに非常に硬く締まり、色調は黒色に変化している。「出入口」に類する施設と推定できる。

遺物 (第53図、図版48・51)

出土状況 埋土から出土しているが、少量である。土器と石器・剥片類がある。

土器 I群に分類できる縄文土器の胴部破片が30点あるにすぎない。

石器類 剥片石器は石鏃、礫石器は磨石I類と磨石II類がある。剥片類は10点である。

まとめ・遺構の時期

出土遺物や住居形式・占地から、縄文時代前期前葉(縄文土器I群期)に分類できる。

H I 区

H I-1 住居跡

遺構 (第54図、図版22)

検出状況・重複関係 H I-51ピット(平安時代)と重複し、切っている。

平面形 隅丸凸辺長方形 規模 3.1×3.6m 床面積 7.7㎡ 主軸方向 N-40°-W

埋土 上半は黒褐色土、下半は褐色土や暗褐色土が占める。黒褐色土は白頭山一苦小牧火山

灰の大塊、下半で卓越する3b層は十和田a火山灰の小塊を少量含む。

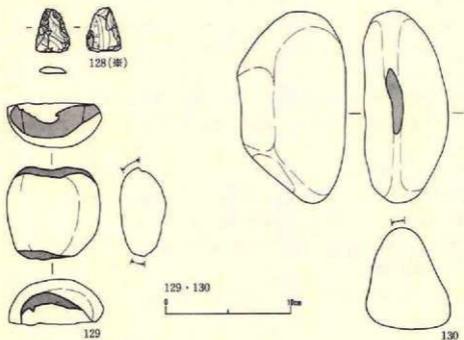
壁の状態 外傾 壁高 32~46cm 壁溝 伴わない。

床面 中央を中心にした範囲が硬く締まっている。掘り方 東側約2分の1に伴い、南壁際が深い。

柱穴 伴わない。

カマド：位置 北西壁中央からわずかに北東壁寄り 本体 残存状態は良くないが、シルトで構築された右側壁が一部確認できる。火床部のうえや本体周辺部には垂円や垂角の巨礫が散在するが、本体の構築礫が崩壊・移動したことが考えられる。火床部はよく焼けている。煙道部・煙出し部 くりぬき式である。煙道部底面は緩やかに傾斜して下がりてゆき、煙出し部に続く。天井部や煙出し部の側壁はよく焼け、橙色や赤褐色に変化している。

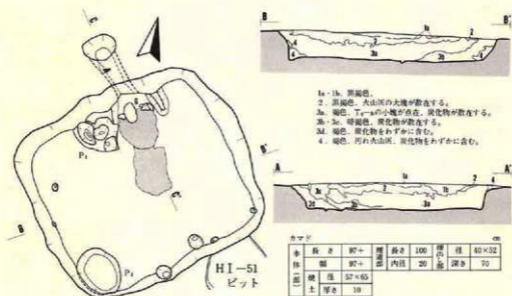
付属施設 P1がカマドの左脇に存在する。平面形が不整形の小型のピットである。南西



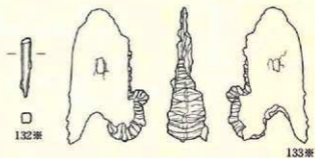
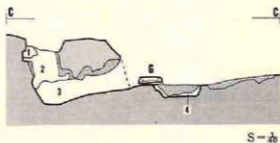
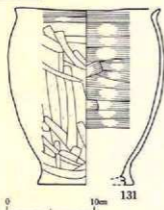
No	地点・層位	器 種	計測値：cm			重量：g	石 材 名	特 徴・備 考	図版
			長 さ	幅	厚 さ				
128	埋土	石礫	23	18	3	1.4	輝緑凝灰岩	身部所産。平基無蓋式	48
129	床面直上	磨石	73	74	35	365.0	粘板岩	磨打痕は両端	51
130	床面	磨石I類+凸石	183	87	87	1145.0	花崗閃緑岩	磨石I-1。西は左側面	53

第53図 GⅢ-4 住居跡出土遺物

S-1 (添)



壁高	cm	ピット	No.	P ₁	P ₂
北西	39	開口部径	55×70	62×78	
南西	45	深さ	23	26	
南東	32				
北東	35				



No.	地点・層位	種類・首種	外			内			計測値:cm			分類	図版
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	器径		
131	カマド上部	土器器蓋	ココナダ	ヘラナダ	不明	ココナダ	ヘラナダ	—	16.5	29.0	11.0	M1	59
計測値:cm													
No.	地点・層位	種類	長さ	幅	厚さ	重量:g	特徴・備考			図版			
132	カマド	不明	31	5	5	1.1	一端欠失。断面は方形で、一端が鋭く尖る。釘か。						
133	埋土	彫形鉄製品	71	31	29	16.3	解系。右側縁肥厚。中央部の目釘は両端で折り返す。			62			

第54図 HI-1 住居跡実測図・出土遺物

S-1(※)

隅にあるP2は平面形が楕円形で、深度はやや小さい。ともに共伴するピットである。

その他 カマド前面の床面が焼け、北側は火床部と接している。径50×74cmの不整楕円形で、層厚は小さい。また埋土下部～床面の層には炭化材が散在していたが、少量である。それらは住居の焼失に関連したものではない。前者については炉のような機能が考えられる。

遺物 (第54図、図版59・62)

出土状況 埋土を中心に、カマド・床面直上・床面・煙道部から出土しているが、量は多くない。土器と石器・琥珀・鉄製品・剥片類があり、琥珀が62点と多いのが特徴である。

土器 土師器は図示した埴MI131以外はすべて破片である。坏は認められない。縄文土器はII群の破片が1点である。

琥珀 破片62点38.98gが埋土中・下部を中心に、埋土上部・P1埋土・床面から出土している。個別の重量は最小0.01gから最大3.48gとバラツキがあるが、約73%が1g以下の極小細片である。

鉄製品 132は一端を失っている。一端が細く尖り、釘かもしれない。133は無茎の鐵に形状が似ている。右側縁の基部側約1/3が20mmほど錆のため肥厚する。中央部に目釘がみられ、両面に折り返されている。類例は27・34にもあり、銛の類と推定しておいた。

その他 石器は打製石斧の破片があり、剥片類は1点である。

まとめ・遺構の時期

出土遺物と住居形式から、平安時代に分類する。

HII区

HII-1住居跡

遺構 (第55図、図版23)

検出状況・重複関係 南東隅を含む南壁の東側約2分の1は縄文時代前期前葉の不整形落ち込みを埋土から掘り込んで壁にしていたために把握できなかった。

平面形 隅丸方形 規模 2.5×3.5m 床面積 6.8㎡ 主軸方向 N-31°-W

埋土 褐色土が壁際から床面の大部分、黒色土がその上位を占める。褐色土は白頭山一苦小牧火山灰の大小塊を含み、一部では量が多い。また同火山灰は薄層として断続的に観察できる部分がある。

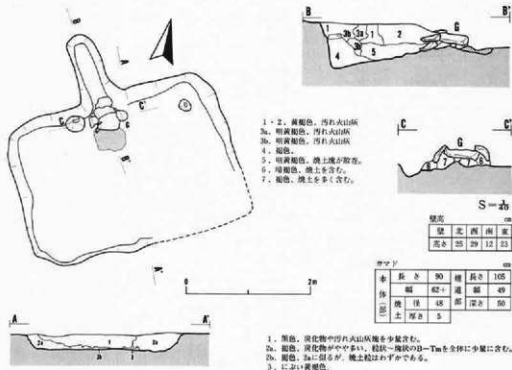
壁の状態 直立～外傾 壁高 12～29cm 壁溝 伴わない。

柱穴 伴わない。

床面 全体に軟らかい。掘り方 南半約2分の1に伴い、壁際が深くなる。

柱穴 伴わない。

カマド：位置 北壁中央 本体 煙道部寄り天井部と側壁を構成する礫の残存状態が良好



第55図 H II-1 住居跡実測図

である。粒径18cmの垂円礫を側壁として立て、最大粒径37cmの垂円礫を渡して天井部を作る。石材は砂岩である。火床部はよく焼けている。煙道部・煙出し部 掘り込み式である。底面は緩やかに傾斜して下がっている。煙出し部には施設を伴わない。

遺物 (第56図、図版60)

出土状況 カマドと埋土・掘り方埋土から出土しているが、少量である。土器と石器・琥珀・鉄製品がある。

土器 土器器はすべて瓦であり、図示例134 (L 2 b) 以外は破片である。縄文土器片はII群が2点である。

琥珀 破片6点4.88gが埋土上部から出土している。

鉄製品 破片1点が埋土中部から出土しているが、残存状態が悪く、器種は不明である。

その他 剥片石器は不定形石器1点がある。

H VII区

H VII-1 住居跡

遺構 (第57・58図、図版24)

検出状況・重複関係 カマドが3基あることや共伴するピットからみて、少なくとも2棟が重複していることを推定できる。新期を1 a 住居跡、古期を1 b 住居跡として記載し、ピットとカマドについては後述する。他の遺構との重複はない。

HⅧ-1 a 住居跡

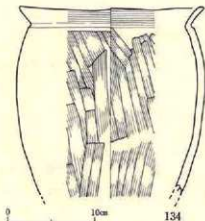
平面形 ややいびつな隅丸方形 **規模** 3.6×4.0m **床面積** 10.0㎡ **主軸方向** 1号カマド：N-62°-E 2号カマド：N-31°-W

埋土 黒色土・暗褐色土・にぶい黄褐色土で構成され、下部を占める2 b層は多量の白頭山一苦小牧火山灰を含む。

壁の状態 外傾 壁高 40~65cm 壁溝 伴わない。

床面 不明 **掘り方** 全体規模の掘り方を下位に伴う。

柱穴 柱穴状ピット pp 1と pp 2が検出されているが、位置や数からは柱穴とは考えられない。



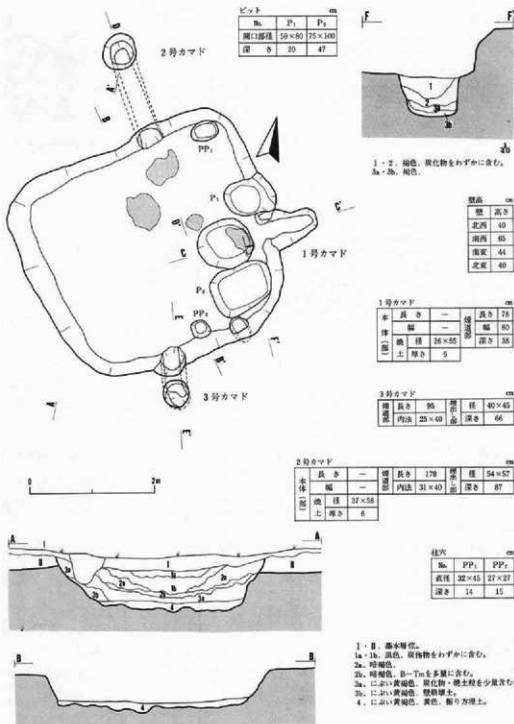
HⅧ-1 b 住居跡

煙道部だけを残す3号カマドを共伴する住居跡と推定した。カマド主軸方向がS-17°-Eであることを知る事ができるものの、平面形をはじめとする属性の具体的なことは不明である。

付属施設 床面の2カ所が焼け、明赤褐色に変化している。1カ所は1号カマドの西に形成され、26×29cm、他の1カ所は2号カマドの南に形成され、47×60cmを測る。

No	地点・層位	種類・部様	外 面			内 面			計 測 値 : cm		分 類	図 版	
			口縁部	胴部	底 部	口縁部	胴部	底 部	口 径	高 度			
134	カマド	土版煙突	ヨコナデ	ヘラナデ	—	ヨコナデ	ヘラナデ	—	21.0	(21.3)	-	L2b	60

第56図 HⅡ-1 住居跡出土遺物



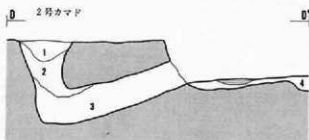
第57図 HⅤ-1住居跡実測図(1)



1. 褐色、火山灰渣が多い。
2. 褐色、炭化物をわずかに含む。
- 3・4. 暗褐色、炭化物をわずかに含む。
5. 褐色、天舟部焼土。
6. 黄褐色、住居掘り方焼土。



1. 褐色。
2. 暗褐色、粒状～塊状の焼土を多く含むほか、炭化物を少量含む。
3. 褐色、炭化物をわずかに含む。
5. 黄褐色。



1. 暗褐色、炭化物をわずかに含む。
2. 暗褐色。
3. 褐色。
4. 黄褐色、住居掘り方焼土。

S-10

第58図 HⅤ-1住居跡実測図(2)

次に3基のカマドについて記載する。

1号カマド：位置 東壁中央からわずかに南壁寄り 本体 崩壊がいちじるしい。燃焼部には78×88cmの円形のピットが掘り込まれ、火床部の焼土はその北東端に形成されている。また焼土が火床部の全面の広い範囲に広がっている。煙道部・煙出し部 掘り込み式である。底面はやや急傾斜で上ってゆく。煙出し部には施設はみられない。

2号カマド：位置 北壁中央からわずかに東壁寄り 本体 よく焼けた火床部が床面上に検出されただけである。煙道部・煙出し部 くりぬき式である。底面は急傾斜で下がり、煙出し部には円形のピットが掘り込まれている。

3号カマド：位置 南壁中央からわずかに西壁寄り 本体 残存していない。煙道部・煙出し部 煙道部と煙出し部の境はくりぬき式になっている。底面はいくぶん傾斜して下がり、煙出し部には円形のピットが掘り込まれている。煙道部が非常に短いが、帰属すると考えられる1b住居跡の平面形と規模が不明のため、本来の形状なのか削削によるものかは不明である。

3基のカマドの帰属：残存状態から推定して、1号カマドは1a住居跡に帰属する。3号カマドは1b住居跡に帰属する。2号カマドは1a住居跡の床面に火床部を残しており、1a住

居跡に帰属して1号カマドよりも古期のものと考えられる。ただその場合、後述するピットP2との関係を明らかにする必要がある。

ついで2基のピットについて記載する。

P1：1号カマドの左脇にあり、一部は壁を掘り込んでいる。平面形は円形で、深度はやや小さい。

P2：北隅に存在する。平面形は隅丸長方形で、深度は大きい。南西半は貼り床に覆われている。

2基のピットの帰属：P1は、位置的にみて、1号カマドとの共伴が考えられ、1a住居跡に帰属するものと推定する。P2は、貼り床されていることと位置を考慮に入れると、1号カマドに共伴する可能性は小さい。しかし、2号カマドとの関係はある程度は推測できるものの、3号カマドとの関係はまったく不明である。

遺物

出土状況 床面直上や埋土・P1・2号カマド煙道部から土器が出土しているが、少量である。

土器 すべて土師器甕の破片であり、坏はみられない。一部接合ができた床面直上出土のものは口縁部が非常に短く、胴部外面がヘラケズリを施されており、分類ではL2aになる。

まとめ・遺構の時期

少なくとも2棟の住居跡の重複と推定した。1a住居跡は1号カマドとP1を共伴する新期のものである。1b住居跡は3号カマドを共伴する古期のものと推定した。しかし、3号カマドの主軸方向は1a住居跡の北東壁とは直交せず、しかも煙道部が本来の形状を保っているかどうか不明ではなく、平面形や規模を推定することができない。2号カマドは1号カマドに時間的に先行し、カマドの作り替えがあった可能性もあるが、確実ではない。P2は1号カマドとは共伴しない。北隅という位置からは1a住居跡の平面形にもとづいて作られた可能性が強く、貼り床されていることを考慮に入れると、2号カマドとの共伴を推測することができるのかもしれない。その場合、1a住居跡は、平面形・規模・壁・床面をほぼ共有し、カマドとピットを作り替える2棟に細分できるであろうが、1a住居跡内の動きと推測しておく。

図示はしていないが土師器甕の形態や住居形式・埋土から、平安時代に分類する。

2. 住居状遺構

HⅡ-2 住居跡

遺構 (第59図、図版25)

検出状況・重複関係 重複する遺構はない。

平面形 隅丸凸辺台形 規模 1.8~2.3×2.4m 床面積 3.6㎡

埋土 褐色・暗褐色系の土が卓越する。上半を占める2層は微量の十和田a火山灰を含む。

壁の状態 外傾 壁高 14~24cm 壁溝 伴わない。

床面 全体に軟らかい。掘り方 全体規模の掘り方を下位に伴う。

遺物 (図版62)

出土状況 埋土から出土している。量の多い鉄滓のほかは石器と剥片類がわずかにあるにすぎない。

土器 土師器壺の破片10点と縄文土器片1点だけである。

鉄滓 76点3,547gが埋土上部から一括して出土している。個別には最小1.15gから最大420gとバラツキがある。

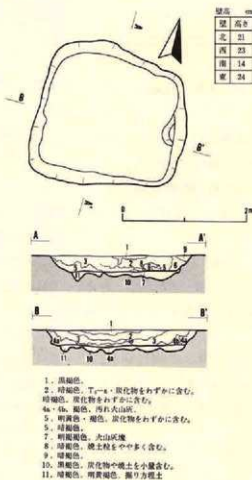
その他 剥片石器は石鎌があり、剥片類は1点である。

まとめ・遺構の時期

カマドを伴わないことから住居跡とは区別をして住居状遺構とした。量は少ないものの出土土器と遺構の形態から、平安時代に分類する。

3. ピット

表中に、一補足とあるものは次に一括して説明を加えている。重複する遺構との関係は、新一・旧一・不明一のように、当該ピットを基準にして表わしている。



第59図 HⅡ-2 住居跡状遺構実測図

埋土

DⅢ-51ピット：浮石の分析を依頼したところ、十和田系火山灰という結果がでている（付
属参照）。同種の浮石を含む遺構はほかにはない。なお、遺構外ではⅡ層中に観察できるもの、
EⅢ区の限定された範囲に分布するにすぎない。

所属時期

DⅢ-51ピット：出土遺物を欠くが、埋土の層相が縄文時代前期前葉の他のピットに類似す
ることから推定した。

GⅡ-51ピットほか：GⅡ-51～GⅡ-54・GⅢ-52・GⅢ-54～GⅢ-59の11基のピット
は調査2区南地区のGⅡ区・GⅢ区に集中して分布する。形態や規模はバラツキがあるものの、
検出層位や埋土の層相・出土遺物に類似性が認められる。GⅢ-56ピットのように出土遺物を
欠く場合でも、それらの点から時期を推定した。

GⅧ-51ピットほか：調査3区に検出されたGⅧ-51ピット・HⅧ-51・HⅧ-52の3基の
うち、出土遺物があるのはHⅧ-52ピットであり、平安時代に分類した。他の2基は、埋土の
層相がHⅧ-52ピットに類似することから時期を推定した。

HⅧ-53ピットほか：調査3区に検出されたHⅧ-53・IⅨ-51の2基は出土遺物を欠く。
埋土の層相は周辺に検出された落とし穴に類似することから縄文時代と推定しておいた。

備考

CⅢ-53ピット：出土遺物があることからピットとして分類したが、人工のものとは必ずし
もいえないかもしれない。

CⅢ-58ピット：規模や深度が異なる複数のピットが重複しているようにもみられる。人工
のものかどうかははっきりしない。ただ風倒木である可能性は小さい。

DⅢ-51ピット：埋土の層相は縄文時代前期前葉に分類できるピットに類似するが、形態や
出土遺物をまったく伴わない点が異なる。形態が円筒形の落とし穴とされているものに似るが、
単独の検出でもあり、単にピットとしておく。

DⅢ-53ピット：DⅢ-4住居跡（平安時代）の西隅と重複して検出された。形態が不安定
であること、DⅢ-4住居跡の北西壁上部の張り出しと連続することなど、単独のピットとし
てよいか疑問が残る。

DⅢ-54ピット：DⅢ-4住居跡（平安時代）の北東壁と重複して検出された。同住居跡の
北西壁上部にみられる張り出しとは異なるものであることは埋土断面に観察できる新旧関係か
ら明らかである。DⅢ-53ピットと同様、単独のピットとしてよいかどうか疑問が残る。

遺構名	C III-51 ビット	C III-52 ビット	C III-53 ビット
挿 回	遺構：第60図 a 遺物：第65図	遺構：第60図 b 遺物：第65図	遺構：第60図 g 遺物：第65図
図 版	遺構：25cd 遺物：47・51・53	遺構：26ab 遺物：46	遺物：48
検出状況 重複関係	旧-C III-202焼土遺構	旧-C III-203焼土	不明→C III-103墓とし穴
平面形	不整形	若干ゆがんだ楕円形	不整形
開口部径	140×205cm	111×115～152cm	51×73cm
深 さ	22cm	10～58cm	36cm
埋 土	暗褐色土や褐色土が構成。	褐色土や黄褐色土が卓越。	火山灰の大塊を含む黒褐色土の層。
壁	ゆるやかな外傾	外傾—一部西気味	外形
底 面	凹凸がいちじるしい。	わずかに湾曲	緩やかに波打つ。
出土遺物	出土遺物多い。図示例136・137・139・141のほか、縄文土器Ⅱ群の破片37点と琥珀1点0.6g。	図示例142のほか、縄文土器Ⅱ群の破片6点と刺片2点。142は切所蓋付土器。	図示例140のほか、縄文土器Ⅱ群の破片8点と刺片3点。
所属時期	縄文時代後期	縄文時代後期	縄文時代後期
備 考		西壁上部が張り出す。その部分を含んだ計測値。	形體的な安定感を欠く。 →補足

遺構名	C III-54 ビット	C III-55 ビット	C III-56 ビット
挿 回	遺構：第60図 d 遺物：第65・66図	遺構：第60図 f 遺物：第67図	遺構：第60図 c 遺物：第67図
図 版	遺構：26cd 遺物：46・47・51・53	遺構：26ef 遺物：46・47・52・53	遺構：26gh 遺物：47
検出状況 重複関係			
平面形	円形	円形	ほぼ円形
開口部径	172×187cm	115×145cm。一部張りすぎ。	72×80cm
深 さ	207cm	156cm	56cm
埋 土	上半の壁際は火山灰が卓越。下半を占める黒褐色土は多量の木炭粒を含む。	褐色～黒褐色の土が卓越。火山灰は下部と壁際に多く含まれる。	褐色土と暗褐色土で構成。炭化物は上部に多い。
壁	円筒形であるが、平ばがやや膨れる。	フラスコ形。上半は直立→わずかに外傾。	直立→内傾
底 面	水平	水平	水平
出土遺物	出土遺物多い。図示例のほか、磨製石斧破片1点、刺片類18点。	図示例のほか、縄文土器Ⅱ群の破片30点と琥珀1点0.21gが埋土下部から出土。	図示例169のほか、縄文土器Ⅱ群の破片3点と刺片2点。
所属時期	縄文時代後期	縄文時代後期	縄文時代後期
備 考	火山灰が最上部を閉塞（層厚30cm）。	フラスコ形ビット。	

遺構名	CⅢ-57 ビット	CⅢ-58 ビット	DⅢ-51 ビット
棟 囲	遺構：第60囲 e	遺構：第61囲 a 遺物：第65囲	遺構：第61囲 b
囲 版	遺構：27ab	遺構：27cd 遺物：47-51	遺構：27ef
検出状況 重複関係		旧-CⅢ-1住居跡。西側は調査区域外。	
平面形	不整形円形	不整形	不整形円形
開口部径	51×94cm	最長部分で3.3m	208×208cm
深 さ	19cm	最深部134cm	123cm
埋 土	褐色土が卓越するほか、汚れ火山灰が認められる。	多くの層がみられるが、褐色土や黄褐色土が卓越。	褐色土や暗褐色土・黒褐色土などが構成。壁際や下部は汚れ火山灰が卓越。最上部の中央に黄色の浮石の薄層を伴う。→補足
壁	外傾	外傾	下部を除いては外傾がいちじるしい。
底 面	ほぼ水平	湾曲	東側へ緩やかに傾斜して下がっている。
出土遺物	縄文土器の破片Ⅰ群1点とⅡ群15点。	図示例135・138のほか、縄文土器Ⅱ群の破片30点。	なし
所属時期	縄文時代後期	縄文時代後期	縄文時代前期 →補足
備 考		形態的な安定感を欠く。 →補足	おとし穴の可能性 →補足

遺構名	DⅢ-52 ビット	DⅢ-53 ビット	DⅢ-54 ビット
棟 囲	遺構：第61囲 d	遺物：第67・68囲	
囲 版	遺構：27gh	遺構：28a 遺物：48	
検出状況 重複関係		不明→DⅢ-4住居跡	旧-DⅢ-4住居跡
平面形	不整形円形	不整形	不整形
開口部径	93×130cm	110×130cm	76×220cm
深 さ	31m ²	22cm	4～27cm
埋 土	明黄褐色の汚れ火山灰～暗褐色土。	暗褐色土のほぼ単層。	暗褐色土や黄褐色土で構成。黄褐色土には多くの焼土が混入。
壁	外傾。とくに東壁がいちじるしい。	外傾	外傾
底 面	緩やかに波打つ。	凹凸がある。	凹凸がある。
出土遺物	縄文土器Ⅱ群の破片3点。	図示例のほか、縄文土器Ⅱ群の破片21点と打製石斧・剥片2点。	縄文土器Ⅱ群の破片3点。
所属時期	縄文時代後期	不明	不明
備 考		南西隅に凸辺方形の小ビット（径47×52cm・深き11cm） →補足	北西隅に円形の小ビット（径40×47cm） →補足

遺構名	EⅢ-51 ビット	FⅢ-51 ビット	FⅢ-52 ビット
採 取	遺構：第61図 c	遺構：第61図 e 遺物：第68図	遺構：第61図 f
図 版	遺構：28b	遺構：28cd 遺物：52	遺構：28e
検出状況 重複関係			
平面形	不整形	いびつな円形	不整形
開口部径	80×113cm	155×167cm	170×174cm
深 さ	37cm	63cm	55cm
埋 土	褐色土と黒褐色土が混じり合った土と汚れ火山灰が構成。	黄褐色系の土が卓越。褐色土や黒褐色土の塊を含む。	火山灰がほぼ全体を占める。
壁	外傾がいらじるしい。	外傾	内側に立ち上がる。
底 面	ゆるやかな凹凸	湾曲気味	緩やかな凹凸
出土遺物	縄文土器Ⅰ群の破片4点。	図示例173は磨石と敷石の複合。	土師器製の破片1点。
所属時期	縄文時代前期	不明	不明
備 考	形態が不安定。	形態が不安定。	埋土の状況からは人工のものでない可能性が高い。

遺構名	FⅢ-53 ビット	FⅢ-54 ビット	FⅢ-55 ビット
採 取	遺構：第62図 c	遺構：第62図 a	遺構：第62図 b
図 版	遺構：28f	遺構28gh	遺構：29ab
検出状況 重複関係	旧→FⅢ-2 住居跡	新→FⅢ-104跡とし穴	
平面形	不整な楕円形	わずかにいびつな円形	隅丸正方形。一部凸辺。
開口部径	43×74cm	232×250cm	200×206cm
深 さ	7cm	70cm	40cm
埋 土	褐色土の単層。	褐色土や暗褐色土・黒褐色土などで構成される。壁際の3a層は十和田a火山灰、3b層は白頭山火山灰を少量含む。	褐色土と暗褐色土が卓越。白頭山火山灰が上部に認められ、断面では非連続的な薄層として観察できる(3層)。
壁	ほぼ直立	直立→わずかに外傾	わずかに外傾
底 面	水平	ほぼ水平	ほぼ水平
出土遺物	なし	土師器製破片4点。縄文土器はⅠ群・Ⅱ群の破片18点。	土師器製破片29点。縄文土器はⅠ群・Ⅱ群の破片6点。
所属時期	不明	平安時代	平安時代
備 考	底面の33×35cmの範囲が円形に残っている。層厚5cm。焼土ビット		

遺構名	GII-51 ビット	GII-52 ビット	GII-53 ビット
挿 入	遺構：第62図 e	遺構：第63図 a	遺構：第63図 a
区 画	遺構：29cd	遺構：29ef	遺構：29gh
検出状況 重複関係			
平面形	ほぼ円形（一部掘りすぎ）	円形	円形
開口部径	120×124cm	110×116cm	151×160cm
深 さ	34cm	34cm	43cm
埋 土	黒褐色土や黄褐色土の大塊を含む 暗褐色土が卓越。壁際や下部は汚 れ火山灰が占める。	暗褐色土が卓越し、壁際は汚れ火 山灰が堆積する。	黒褐色土が卓越し、壁際は汚れ火 山灰が堆積する。
壁	直立～わずかに外傾	わずかに外傾	わずかに外傾
底 面	水平	緩やかに波打つほか凹凸。	ほぼ水平
出土遺物	縄文土器 1群の破片 4点と刺片 1 点。	縄文土器 1群の破片 2点。	なし
所 属 時	縄文時代前期 一補足	縄文時代前期 一補足	縄文時代前期 一補
備 考			

遺構名	GII-54 ビット	GII-55 ビット	GII-56 ビット
挿 入	遺構：第62図 d	遺構：第62図 f	遺構：第63図 b 遺物：第68図
区 画	遺構：30ab	遺構：30cd	遺構：30e～g 遺物：60
検出状況 重複関係	大部分がGII-1住居跡（古墳～ 奈良時代）の床面下に検出。		
平面形	円形	凸辺隅丸正方形	わずかにいびつな楕円形
開口部径	190×200cm	152×168cm	140×232cm
深 さ	（検出面から77cm）	33cm	36cm
埋 土	暗褐色土や黒褐色土・黄褐色土な どが観察できる。重複する部分は GII-1住居跡の掘り方埋土が上 半を占める。	黄褐色土や褐色・暗褐色土が構成。 十和田 a 火山灰は 3 a・3 b 層に 含まれる。粒径10mmの小塊であり、 量も少ない。	暗褐色土や黒褐色土・黒色土ほか が構成。十和田 a 火山灰は埋土上 部に大小塊として認められるが量 は多くない。
壁	残存状態の良い部分では内傾。	外傾。とくに西壁～南西壁が外傾。	外傾
底 面	ほぼ水平	凹凸があり、緩やかに波打っている。	ほぼ水平
出土遺物	縄文時代 1群の破片 3点と刺片 1 点。	なし	図示例174の土師器壺のほか、鉄片 1点。
所 属 遺 物	縄文時代前期 一補足	平安時代	奈良時代
備 考	フラスコ形ビットと推定。		

遺構名	GⅢ-51 ビット	GⅢ-52 ビット	GⅢ-53 ビット
挿 図	遺構：第63図 c 遺物：第68図	遺構：第63図 c 遺物：第68図	遺構：第63図 d
図 版	遺構：31ab 遺物：48・52	遺構：30h 遺物：48	遺構：31cd
検出状況 重複関係	新→GⅢ-52ビット	旧→GⅢ-51ビット・GⅢ-103高 とし穴	新→GⅢ-2住居跡。埋土を掘り 込んで構築。
平面形	隅丸台形（一部が凸辺）	長方形状と推定	洋梨形
開口部径	154～204×195cm	145×210±cm	110×174cm
深 さ	50cm	24cm	16cm
埋 土	壁際や下部を汚れ火山灰が占める ほかは黒褐色土～暗褐色土が構 成。	火山灰起源の褐色土の単層。	褐色土と暗褐色土が構成。4層は 粒径10mm±の十和田a火山灰の 小塊が点在する。
壁	外傾。植生による凹凸がある。	外傾	5cm±の立ち上がり
底 面	いくぶん波打つ。	いくぶん波打つ。	凹凸があり波打つ。
出土遺物	図示例175～177の石器のほか、縄 文土器Ⅱ群の破片・剥片類12点。	図示例179の石器のほか、縄文土器 Ⅰ群の破片4点、剥片類92点。	土器器蓋の破片2点のほか、クル ミ1点・剥片類6点。
所属時期	縄文時代後期	縄文時代前期	一補足 平安時代
備 考			南壁等りの底面が円形に開いている。径55×57cm・壁厚7cm。焼土 ビット

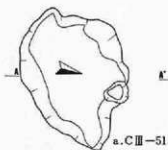
遺構名	GⅢ-54 ビット	GⅢ-55 ビット	GⅢ-56 ビット
挿 図	遺構：第45図 遺物：第68図	遺構：第63図 f	遺構：第63図 e
図 版	遺構：31ef 遺物：48	遺構：31gh	遺構：32ab
検出状況 重複関係	新→GⅢ-3住居跡	Ⅱ層下位に検出	
平面形	凸辺隅丸長方形	ややいびつな円形	不整円形
開口部径	82×106cm	132×136cm	105×130cm
深 さ	29cm（GⅢ-3住居跡床面から）	34cm	19cm
埋 土	上半は黒褐色土、下半は汚れ火山 灰が構成。	褐色～黒褐色系の土が構成。	汚れ火山灰が卓越するほか、暗褐 色土・黒褐色土が構成する。
壁	直立～外傾	直立～わずかに外傾	外傾
底 面	やるやかな湾曲	ほぼ水平	凹凸がある。
出土遺物	図示例180の石器のほか、剥片類 129点。	なし	なし
所属時期	縄文時代前期	一補足 縄文時代前期	一補足 縄文時代前期
備 考			

遺構名	GIII-57 ビット	GIII-58 ビット	GIII-59 ビット
挿 図	遺構：第64図 a 遺物：第68図	遺構：第64図 a 遺物：第69図	遺構：第64図 b 遺物：第69図
図 版	遺構：32bc 遺物：48	遺構：32bc 遺物：47	遺構：32de 遺物：47
検出状況 重複関係	不明→GIII-58ビット	不明→GIII-57ビット	
平面形	円形	円形	不整形円形
開口部径	170×180cm	74cm×不明（重複のため）	107×145cm
深 さ	77cm	17cm	27cm
埋 土	黄褐色～暗褐色の土が卓越。下半は汚れ火山灰が層状的。上半は粒径10mm土の火山灰塊が層状に含まれる。	GIII-57ビットから連続する暗褐色土と汚れ火山灰が構成。	壁際や下部は火山灰や汚れた火山灰が堆積。他は暗褐色土と黒褐色土が占める。
壁	ほぼ直立	わずかに外傾	外傾がいちじるしい。
底 面	ほぼ水平	ほぼ水平	緩やかに波打つ。
出土遺物	図示例178・181の石製のほか、縄文土器Ⅰ群の破片1点。	図示例182は縄文土器Ⅰ群。	図示例183・185の土器片のほか、縄文土器Ⅰ群の破片・剥片類2点。
所属時期	縄文時代前期 一補足	縄文時代前期	縄文時代前期 一補足
備 考			

遺構名	H I-51 ビット	H II-51 ビット	GVI-51 ビット
挿 図	遺構：第64図 c	遺構：第64図 d 遺物：第69図	遺構：第64図 e
図 版	遺構：32fg	遺構：33ab	遺構：34a
検出状況 重複関係	不明→H I-1住居跡(平安時代)		
平面形	不整形円形	隅丸長方形	不整形
開口部径	105×(116) cm	105×150cm	130×150cm
深 さ	5 cm	35cm	26cm
埋 土	褐色土の単層。	暗褐色土と黄褐色土が構成。十和田 a 火山灰は1層に少量が点在する。粒径は10mm土。	黒褐色土・にぶい黄褐色土・褐色土で構成。
壁	直立	わずかに外傾	ゆるやかな外傾
底 面	ほぼ水平	ほぼ水平	若干湾曲
出土遺物	土師器製の破片3点と琥珀1点0.5g。	土師器製の破片2点と琥珀1点0.05g。図示例184。	なし
所属時期	平安時代	平安時代	平安時代 一補足
備 考	底面が不整形円形に焼けている。径52×72cm・壁厚6cm。築土ビット		

遺構名	HⅤ-51 ビット	CⅤ-52 ビット	HⅤ-53 ビット
挿 入	遺構：第64回 f	遺構：第64回 g	遺構：第64回 h
図 版	遺構：33cd	遺構：33ef	遺構：33gh
検出状況 重複関係			
平面形	ほぼ円形	凸辺長方形	隅丸方形
開口部径	122×142cm	94×150cm	85×97cm
深 さ	28cm	20cm	48cm
埋 土	暗褐色土・褐色土・黄褐色土で構成。	埋土中部に焼土層を挟む。焼土の層厚は10cm。	暗褐色土と黄褐色土で構成。
壁	ゆるやかな外傾	外傾	外傾
底 面	若干傾斜があり、南へ下がる。	わずかに波打つ。	ほぼ水平
出土遺物	なし	土師器類	なし
所 属 時 期	平安時代 →補足	平安時代 →補足	縄文時代 →補足
備 考			

遺構名	HⅨ-51ビット
挿 入	遺構：第64回 i
図 版	遺構：34b
検出状況 重複関係	
平面形	円形
開口部径	64×71cm
深 さ	22cm
埋 土	褐色土の単層
壁	外傾
底 面	若干傾斜し、南へ下がっている。
出土遺物	なし
所 属 時 期	縄文時代 →補足
備 考	



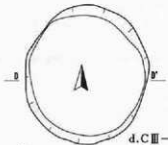
- 1a・1b. 赤褐色。C III-51 焼土遺積。
 2. 暗赤褐色。焼土卓越。
 3. 褐色。
 4. 暗褐色。炭化物を多く含む。
 5. 暗褐色。炭化物を少量含む。



- 1a. 褐色。焼土を少量含む(焼土はC III-132)。
 1b. 褐色。炭化物をわずかに含む。
 2. 褐色。炭化物をわずかに含む。
 3. 暗褐色。
 4. に近い黄褐色。
 5a・5b. 暗赤褐色。汚れ火山灰。5aは炭化物が点在。
 6. 褐色。



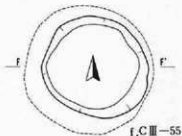
1. 暗褐色。炭化物が散在。
 2. 褐色。
 3. 暗褐色。



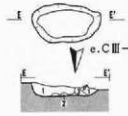
1. 明黄褐色。関東大山区。
 2. 黒褐色。大山区の大塊が散在する。
 3a. 暗褐色。炭化物が全体に散在する。
 3b. 暗褐色。炭化物が全体に散在する。大山区混入。
 4. 明黄褐色～褐色。大山区卓越。焼土が一部に含まれる。
 5a-5d. 黄褐色・暗黄褐色。火山灰。
 6. 黄褐色・褐色。炭化物が散在する。
 7. 暗褐色。火山灰を含む。炭化物が点在する。
 8. 黒褐色。炭化物を多量に含む。薄層みられるが細分子散。
 9. 褐色。汚れ火山灰



g. C III-53

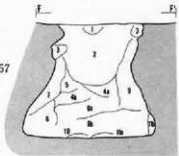


f. C III-55



e. C III-57

1. 褐色。に近い黄褐色。炭化物を少量含む。
 2. 黄褐色。汚れ火山灰。
 3. 褐色・黄褐色。



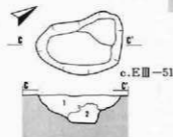
1. 黒褐色。炭化物が散在。
 2. 褐色・暗褐色。炭化物が多い。
 3. 黄褐色。汚れ火山灰
 4a-4b. 黒褐色。炭化物多い。
 5. 暗褐色。炭化物が点在。
 6a. 黒褐色。炭化物が点在。
 6b. 黒褐色。大山区が多く混入。
 7. 黄褐色・暗褐色。
 8. 黒褐色。火山灰塊を全体に含み炭化物が散在する。
 9. 黒褐色。
 10. 黄褐色・暗褐色・黒褐色。
 11a. 黒褐色。
 11b. 黄褐色・褐色。



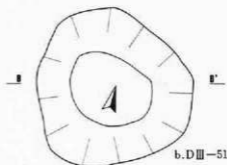
第60図 ピット実測図(1)



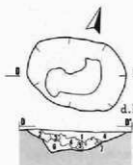
- 1a-1b. 埴面色・褐色。
2. 黒褐色。炭化物点在。
- 3a. 明黄褐色。c) C層-1住居跡地。
- 3b. 褐色。
4. 褐色。
- 5a-5b. 黄褐色。
6. 褐色・埴面色・黒褐色。
- 7a-7c. 褐色・埴面色。
- 8a-8c. 黄褐色。汚れ大山河。
9. 褐色。
10. 明黄褐色。大山河。
11. 黒褐色・褐色。
12. 褐色。
13. 埴面色。
14. 褐色。
15. 褐色。炭化物を少量含む。
16. 黄褐色。



1. 褐色。黒褐色土の大塊が混入。
2. 黄褐色。汚れ大山河。



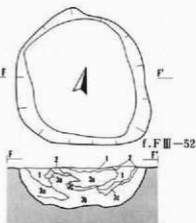
- 1a. 黄色・明黄褐色。細粒浮石
- 1b-1c. にじみ黄褐色。1aの浮石の小塊を含む。
2. 黒褐色。
- 3a-3d. 埴面色・黄褐色・褐色。
4. 黄褐色。黒褐色が混じる。
- 5a-5b. 褐色。大山河。汚れ大山河が混じる。
6. 黄褐色。汚れ大山河。
7. 黄褐色。大山河。



1. 埴面色。
2. 褐色。
- 3-4. 黄褐色。
5. 褐色。
6. 明黄褐色。汚れ大山河。
7. 埴面色。



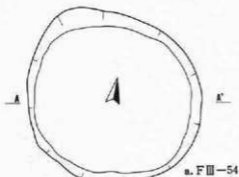
1. にじみ黄褐色。
2. 黄褐色・褐色。
- 3-4. 明黄褐色・大山河。



1. にじみ黄褐色。
2. 黒褐色。
- 3a-3c. 明黄褐色・黄褐色。ルース。



第61図 ビット実測図(2)



a. F III-54



- 1a. 黒色。
- 1b. 黒褐色、T₁-aを少量含む。
- 1c. 黒褐色、炭化物を少量含む。
- 2a・2b. 暗褐色。
- 2c. 褐色。
- 3a. 褐色、T₁-aをわずかに含む。
- 3b. 褐色。
- 4a・4b. 暗褐色、炭化物を少量含む、4aは焼土を全体に含む。
- 5a. 黒褐色。
- 5b. 褐色。
6. 褐色。
- 7a・7b. 暗褐色、炭化物を含む。



b. F III-55



F III-4 住居跡

1. 黒褐色、炭化物を少量含む。
2. 褐色、B-T₁mを少量含む。
3. 黄褐色、B-T₁m
- 4a・4b. 暗褐色、炭化物をわずかに含む。
5. 褐色、黄褐色。
6. 暗褐色。



c. F III-53

1. 明赤褐色、焼土。
2. 褐色。



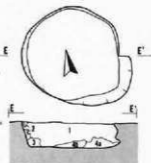
d. G II-54



- 1a. 暗褐色。
- 1b. 暗褐色、塊状の火山灰・黒褐色土を含む。
2. 黄褐色、褐色。
3. 明黄褐色、汚れ火山灰。
4. 褐色。
5. 褐色、大小の火山灰塊を含む。
6. 黄褐色、火山灰層跡、炭化物を少量含む。
7. 暗褐色。
8. 黒褐色。
- 9・10. 明黄褐色、火山灰、10は褐色土が混入。

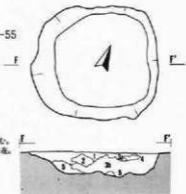
e. G II-51

1. 暗褐色、塊状の黒褐色土・黄褐色土や炭化物を全体に含む。
2. 黄褐色、汚れ火山灰。
3. 明黄褐色、火山灰。
- 4a. 褐色。
- 4b. 濃い黄褐色、汚れ火山灰

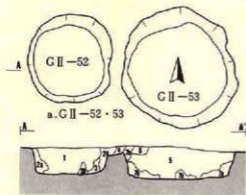


f. G II-55

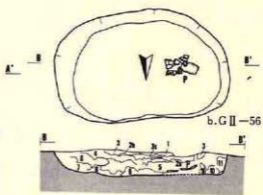
1. 暗褐色、炭化物散在
2. 褐色、黄褐色、炭化物散在
- 3a. 暗褐色、T₁-aをわずかに含む。
- 3b. 褐色、火山灰塊と炭化物が点在。
4. 黄褐色、褐色。
5. 黄褐色、汚れ火山灰



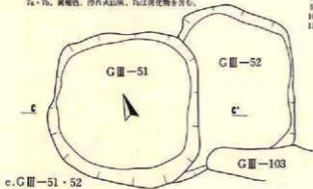
第62図 ビット実測図(3)



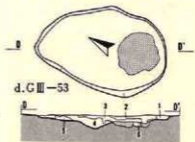
- 1. 暗褐色。火山灰の大小塊や炭化物が散在。
- 2a. 黄褐色。汚れ火山灰。炭化物を少量含む。
- 2b. 黄褐色。汚れ火山灰。火山灰塊を含む。
- 3. 褐色。
- 4. 褐色。炭化物をわずかに含む。
- 5. 黒褐色。炭化物を多く含む。
- 6. 暗褐色。炭化物を少量含む。
- 7a・7b. 黄褐色。汚れ火山灰。7aは炭化物を含む。



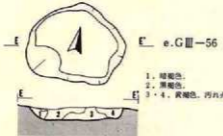
- 1. 黄褐色。焼土粒が多い。
- 2a. 灰白色。T₁-a。
- 2b・2c. 暗褐色。T₁-aを含む。2bに多い。
- 3. 黒褐色。
- 4. 黒色。T₁-aを少量含む。
- 5. 黒褐色。
- 6・7. 暗褐色。7は炭化物を少量含む。
- 8. 明黄褐色。火山灰卓越。
- 9. 暗褐色。
- 10. 明黄褐色。火山灰塊。
- 11. 黄褐色。汚れ火山灰。炭化物をわずかに含む。



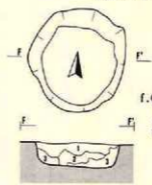
- 1. 黒褐色～暗褐色。炭化物を少量含む。
- 2a・2b. 黄褐色。汚れ火山灰
- 3. 明黄褐色。火山灰



- 1. 褐色。焼土の少塊を少量含む。
- 2. 暗褐色。炭化物を少量含む。
- 3. 暗褐色。焼土が散在。
- 4. 暗褐色。少量のT₁-a少塊を含む。
- 5. 褐色。汚れ火山灰
- 6. 暗褐色。炭化物を少量含む。



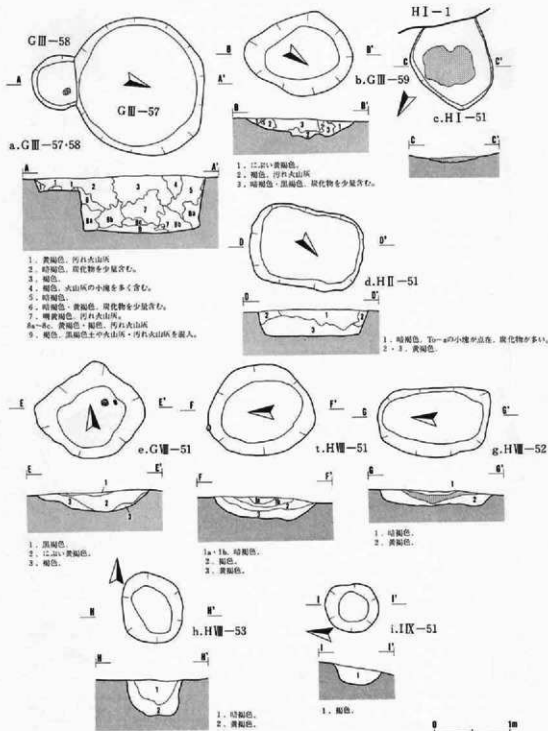
- 1. 暗褐色。
- 2. 黒褐色。
- 3・4. 黄褐色。汚れ火山灰



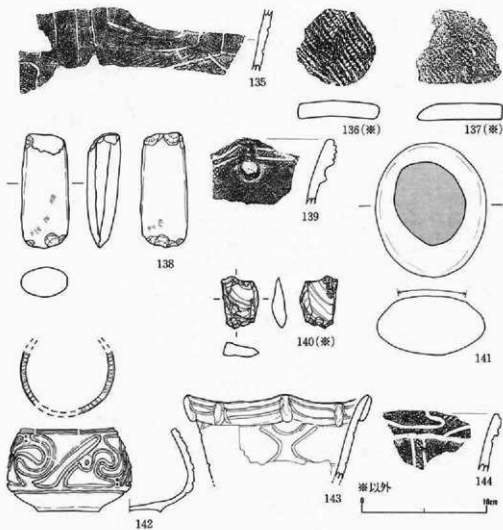
- 1. 黒褐色。
- 2・3. 黄褐色。汚れ火山灰



第63図 ビット実測図(4)



第64図 ビット実測図(5)



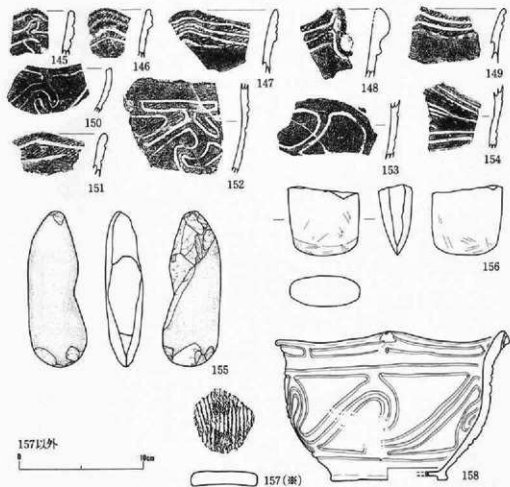
No	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
135	C III-58 埋土	深鉢	胴部	沈線→Lr	ミヅキ		B-2-②(1)		47
136	C III-51 埋土	深鉢	口縁部	波状口縁。凹みと網突文もつ貼付文	ミヅキ		B-1-(1)		47
142	C III-52 埋土	写楽酒付土器	口→底	13特部割目。支様華紋4。周沈線	ミヅキ			外面朱塗り	46
143	C III-54 埋土	深鉢	口→胴	波状口縁。貼付文・沈線	ミヅキ		B-1-(1)		46
144	C III-54 埋土	深鉢	口縁部	沈線・LR	ミヅキ		B-1-(1)		47

No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
138	C III-58 埋土	磨製石斧	92	37	24	150.0	硬砂岩	基部割損。刃部両面から割断	51
140	C III-53 埋土	ヒュス・エヌキース	27	19	7	3.8	凝灰質地質泥岩	刃部2個1対	48
141	C III-51 埋土	磨石目皿	108	89	48	835.0	花崗閃緑岩	一面を使用	51

No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
136	C III-51 埋土	円筒状土製品	42	43	8	19.7	黄粘土製素材。縁部打欠キ→研削	53
137	C III-51 埋土状部	円筒状土製品	390	43	8	23.1	硬砂岩。目野土器素材。縁部を打欠キ	53

第65図 ビット出土遺物(1)

S-1



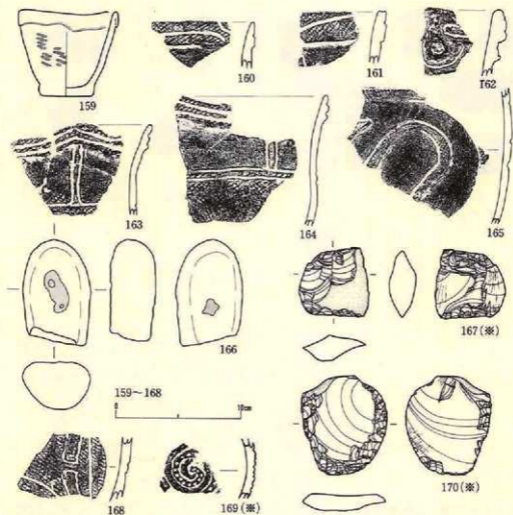
No.	地点・層位	器種	部位	胎影 / 外面	内面	粘土	分類	備考	図版
145	CⅡ-54 埋土	深鉢	口縁部	流状口縁, 沈線文・Lr	シボキ	Ⅱ-1-11)			47
146	CⅡ-54 埋土下部	深鉢	口縁部	流状口縁, 横文帯形衝面圧痕・沈線文	シボキ	Ⅱ-1-11)			47
147	CⅡ-54 埋土	深鉢	口縁部	流状口縁, 沈線文・Lr	シボキ	Ⅱ-1-11)			47
148	CⅡ-54 埋土	深鉢	口縁部	流状口縁, 沈線文・Lr	シボキ	Ⅱ-1-11)			47
149	CⅡ-54 埋土下部	深鉢	口縁部	流状口縁, 沈線文・Lr	シボキ	Ⅱ-1-11)			47
150	CⅡ-54 埋土	深鉢	口縁部	無文・沈線文・外面車塗り	シボキ	Ⅱ-1	新編53		47
151	CⅡ-54 埋土	深鉢	口縁部	流状口縁, 沈線文・Lr	シボキ	Ⅱ-1-11)			47
152	CⅡ-54 埋土	深鉢	口縁部	流状口縁, 沈線文・Lr	シボキ	Ⅱ-2-12)			47
153	CⅡ-54 埋土下部	深鉢	口縁部	無文・沈線文・外面車塗り	シボキ	Ⅱ-2-11)			47
154	CⅡ-54 埋土	深鉢	口縁部	沈線文・Lr	シボキ	Ⅱ-2-12)			47
158	CⅡ-55 埋土	深鉢	口→底	流状口縁, 文様単位9. 低い高台	シボキ	Ⅱ			48

No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
155	CⅡ-54 埋土	打製石杵	125	45	33	240	硬砂岩	刃部と基部に割傷	51
156	CⅡ-54 埋土下部	磨製石杵	52	57	24	135	輝石安山岩	刃部残存. 両凸刃門刃	51

No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ			
157	CⅡ-54 埋土下部	内製土製品	35	32	7	10.3	Ⅱ群土器素材. 縁道を打欠く	53

S-1(※)

第66図 ビット出土遺物(2)



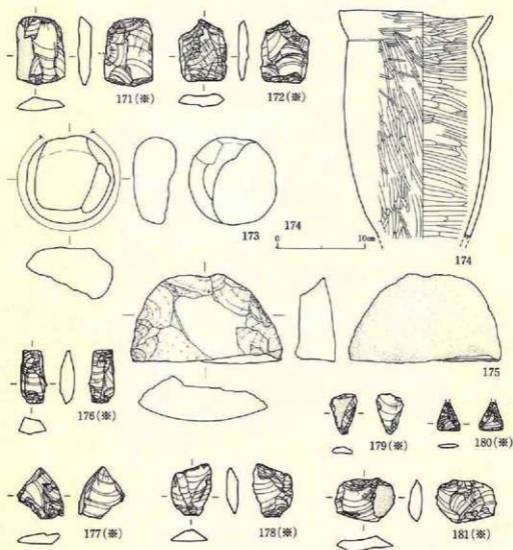
No.	地点・層位	器種	部位	器形／外面	内面	胎土	特徴	備考	図版
159	C田-55 瓶土	甕	口～底	折り返し口縁。LR・キズリ	ミガキ		■		46
160	C田-55 瓶土中・下部	甕	口縁部	口縁部肥厚。LR・沈線文	ミガキ		■-1-(1)		47
161	C田-55 瓶土中・下部	甕	口縁部	口縁部肥厚。LR・沈線文	ミガキ		■-1-(1)		47
162	C田-55 瓶土	甕	口縁部	波状口縁。刺突文と円形の器の継付文	ミガキ		■-1-(1)		47
163	C田-55 瓶土	甕	口縁部	波状口縁。LR・沈線文	ミガキ		■-1-(1)	同一個体	47
164	C田-55 瓶土	甕	口～底	波状口縁。LR・沈線文	ミガキ		■-1-(1)		47
165	C田-55 瓶土	甕	胴部	沈線文・LR・ミガキ	ミガキ		■-2-(2)		47
166	C田-56 瓶土	甕	胴部	沈線文・LR・ミガキ	ミガキ		■-2-(2)		47

No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
166	C田-55 瓶土	甕	83	54	37	260.0	硬砂岩	割損。裏面に泥	52
167	C田-55 瓶土	ビネス・ユスカーユ	37	37	15	16.9	粘質凝灰岩	自然面。刃部2箇1対	58
170	D田-53 瓶土	不定形石器	53	45	9	26.5	粘質凝灰岩	打面付いた縁部を細部調整	

No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	特徴・備考	図版
			上面径	下面径	厚さ			
169	C田-55	甕形土製品	—	—	5	—	破片。沈線文・円形刺突文	53

S-1(準)

第67図 ビット出土遺物(3)

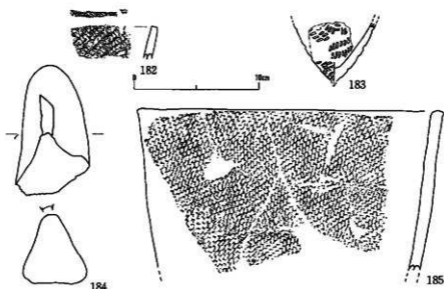


No	地点・層位	種類・器種	外 面			内 面			計 測 値 : cm		分類	図版	
			口縁部	側部	底部	口縁部	側部	底部	口径	最大径			
174	GⅡ-16 埋土下部	土製器種	ヘラミダキ	ヘラミダキ	—	ヘラミダキ	ヘラミダキ	—	17.3	26.0	—	L1b	60

No	地点・層位	器 種	計 測 値 : mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
171	DⅡ-53 埋土	ビュス・ユスキース	36	26	7	7.4	埋蔵層底	自然面。刃部2個1対	48
172	DⅡ-53 埋土	ビュス・ユスキース	32	25	7	6.0	埋蔵層底	刃部2個1対	48
173	FⅡ-81 埋土最上部	磨石+燧石	70	70	30	300.0	ホルンフェルス	欠損。縁部に磨痕。	52
175	GⅡ-51 埋土上部	燧石1個	72	122	36	340.6	石英安山岩	—	52
176	GⅡ-51 埋土上部	ビュス・ユスキース	28	14	8	3.4	埋蔵層底	刃部2個1対	48
177	GⅡ-51 埋土上部	不定形石器	27	23	5	3.3	埋蔵層底	自然面。刃部数個	48
178	GⅡ-57 埋土	ビュス・ユスキース	27	20	6	3.3	埋蔵層底	刃部2個1対	48
179	GⅡ-52 埋土上部	不定形石器	21	14	3	0.8	埋蔵層底	自然面。右面に断面調整	48
180	GⅡ-54 埋土	石鏃	15	12	3	0.3	埋蔵層底	断面片状。平基無蓋式	48
181	GⅡ-57 埋土	ビュス・ユスキース	23	31	6	8.7	チャート質燧石	自然面。刃部2個1対	48

S-1/1(※)・1/1

第68図 ビット出土遺物(4)



No.	地点・層位	種類	部位	器形／外面	内面	出土	分類	図号	図版
182	G III-58 埋土	跡跡	口縁部	L.R. 口縁部にも施文	平滑	織物多	I-1-11)		47
183	G III-59 埋土中部	跡跡	底部	尖形。放射状の羽織竹葉文	平滑	織物多	I-3		
185	G III-59 埋土上部	跡跡	口～側	RL	平滑	織物多	I-1-11)		47

No.	地点・層位	種類	計測値:cm			重量:g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
184	H II-51 埋土上部	跡石1層	103	56	34	330	硬砂岩	折損。焼結痕跡9mm	

第69図 ビット出土遺物(5)

4. 落とし穴

落とし穴は形状を記号化している。溝状の開口部の平面形をI型とII型、縦断面形をA～D、横断面形を1～3に模式的に分類し、その組み合わせから溝IA1のように表わしたものである(「まとめ」の項を参照)。重複する遺構との関係は、新→旧→不明→のように、当該遺構を基準にして表わしている。

5. 焼土遺構

下に踏施設を伴わず、II層やIII層・遺構の埋土中に単独で形成された焼土12基を分類した。したがって明確な掘り込みを伴う3基は焼土ビットとして分類している(F III-53・G III-55・H I-51の各ビット)。

分布は調査2区北地区に9基と多く、なかでも8基(67%)がC III区・D III区に集中する。平面形は、不整形がもっとも多いほか、楕円形や不整形円形がある。規模は、最小が27×38cm、最大が95×110cmである。焼土の厚さは2～17cmである。

遺構名	CⅢ-101 落とし穴	CⅢ-102 落とし穴	CⅢ-103 落とし穴
挿 図	遺構：第70図 a 遺物：第80図	遺構：第70図 b 遺物：第80図	遺構：第70図 c 遺物：第80図
図 版	遺構：34c-f 遺物：47	遺構：34d-g 遺物：47	遺構：34e-h 遺物：47
検出状況 重複関係			不明→CⅢ-53ピット
形 状	溝ⅠA1	溝ⅠA1	溝ⅠA2
規 口部	52~77×390cm	34~69×306cm	66~97×343cm
横 底 部	11~19×375cm	10×357cm	21~35×330cm
深 さ	111cm	128cm	140cm
埋 土	上半は暗褐色土と黄褐色土、下半は汚れ火山灰が構成。	上部は黒色土と暗褐色土、中・下部は汚れ火山灰、最下部は黒褐色土が構成。	汚れ火山灰や火山灰が卓越。
底 面	北端から南端へ向って傾斜して上がっている。	両端が高く、両曲。	北西端から南東端へ向って、緩やかに傾斜して上がっている。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	図示例188-192のほか、縄文土器Ⅰ群とⅡ群の破片19点。	図示例194・196・199・200のほか、縄文土器Ⅰ群・Ⅱ群の破片46点。	図示例198のほか、縄文土器Ⅱ群の破片12点と刺片1点。
分 類	L	L	M
備 考			

遺構名	DⅢ-101 落とし穴	DⅢ-102 落とし穴	EⅢ-101 落とし穴
挿 図	遺構：第70図 d	遺構：第71図 a 遺物：第80-81図	遺構：第71図 b 遺物：第81図
図 版	遺構：35a	遺構：35bc 図版：47・48・52	遺構：35de 遺物：53
検出状況 重複関係	旧-DⅢ-3住居跡(奈良時代)。床構築土に覆われている。	旧-DⅢ-5住居跡(平安時代)	
形 状	溝Ⅱ。残存部では長軸はB。	溝ⅠD2。北端は内湾気味に立ち上がる。	溝ⅠD1。北端上部の崩壊著しい。
規 口部	9~25×374cm、両端幅：64~74cm	83×(推定)323cm	67~86×402cm
横 底 部	11~24×374cm、両端幅：50~55cm	19~22×292cm	7~10×356cm
深 さ	(地山面から) 125cm	112cm	130cm
埋 土	下部の埋土が観察できる。汚れ火山灰と暗褐色土が構成。	上半は黒褐色土や黄褐色土、下半は汚れ火山灰と黒褐色土が構成。	上部は褐色土と暗褐色土、中段と中部・最下部は汚れ火山灰、下部は黒褐色土が構成。
底 面	南半は北半に比べるとわずかに低い。	両端がわずかに高いほかほぼ水平。	中央部付近から両端へ向ってわずかに傾斜して下がっている。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	なし	図示例190・193・202・205のほか、縄文土器Ⅰ群・Ⅱ群の破片11点と刺片23点。	図示例209のほか、縄文土器Ⅰ群とⅡ群の破片5点・刺片3点。
分 類	L	M	L
備 考			

遺構名	EⅢ-102 落とし穴	EⅢ-103 落とし穴	FⅢ-101 落とし穴
挿 図	遺構：第71図 c	遺構：第71図 d 遺物：第80図	遺構：第72図 a
図 版	遺構：35fg	遺構：35h・36a 遺物：47	遺構：36bc
検出状況 重複関係		調査できたのは南西側約1/2で、残りの部分は調査区域外。	
形 状	溝 I A 1	溝 I 2	溝 I A 1
規 開口部	53×69×284cm	幅：83cm、長さ：275cmまで確認	56×82×357cm
模 底 部	13×21×320cm	幅：15×21cm、長さ：225cmまで確認	8×15×362cm
深 さ	135cm	164cm	115cm
埋 土	上半は褐色土と暗褐色土、下半は汚れ火山灰が卓越する。	上半は主に暗褐色土と黒色土、下半は汚れ火山灰が卓越。	上半は暗褐色土と明黄褐色土、下半は汚れ火山灰と黒褐色土が構成。
底 面	両端が高く、湾曲。	南西端から中央へ向い傾斜して下がっている。	両端がわずかに高くなる。ゆるやかに放打つ。
副 穴	なし	調査できた範囲にはない。	なし
出土遺物	刺片 1点。	縄文土器 1群の破片 1点。	縄文土器 1群の破片 1点と刺片 3点。
分 類	M	—	L
備 考		II層に覆われている。	

遺構名	FⅢ-102 落とし穴	FⅢ-103 落とし穴	FⅢ-104 落とし穴
挿 図	遺構：第72図 b 遺物：第80・81図	遺構：第72図 c 遺物：第81図	遺構：第72図 d
図 版	遺構：36de 遺物：48・52	遺構：36fg 遺物：52・53	遺構：36h・37a
検出状況 重複関係			旧→FⅢ-54ピット。貼り床を敷かれている。
形 状	溝 I C 1	溝 I B 2	溝 I B 1
規 開口部	67×80×364cm	45×75×353cm	27×46×341cm
模 底 部	7×15×318cm	7×12×329cm	10×15×339cm
深 さ	135cm	119cm	103cm
埋 土	上部は暗褐色と汚れ火山灰、中部は火山灰、下部は褐色土が構成。	上部は暗褐色土と褐色土、中・下部は明黄褐色土、最下部は褐色土が構成。	最上部と最下部は黒褐色土が占めるほかは汚れ火山灰が構成。
底 面	北東端から南西端へ向いわずかに傾斜して上がっている。	ほぼ水平	わずかに放打っている。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	図示例204凝形石匙と207石器 I類。	図示例211打製石斧と208石器 I類。	縄文土器 1群の破片 4点。
分 類	M	M	M
備 考			

遺構名	GII-101 落とし穴	GII-102 落とし穴	GII-103 落とし穴
挿 図	遺構：第73図 a	遺構：第73図 b 遺物：第80図	遺構：第73図 c
図 版	遺構：37b	遺構：37c・e 遺物：47	遺構：37f
検出状況 重複関係	旧→GII-1住居跡(古墳-奈良時代)。壁の一端が重複する。		旧→GII-3住居跡(平安時代)・GII-151炭窯
形 状	溝 I A 1。北西側約1/2の開口部の幅が広い。長軸は緩やかに両曲。	溝 I B 1	溝 I B 1
規 開 口 部	32~100×365cm	45~72×341cm	45×328cm
横 底 部	13~18×412cm	7~17×290cm	7~20×320cm
深 さ	106cm	142cm	114cm
埋 土	下半しか観察できなかったが、火山灰に黒褐色土が凝っている。	上部は黒褐色土と汚れ火山灰、中・下部は褐色土が構成。	既有的埋土は下半にだけ残存。汚れ火山灰や火山灰が構成。
底 面	北西端から南東端へ向ってわずかに傾斜して下がっている。	ほぼ水平に移行し、南側約4/1がわずかに低い。	南端から北端へ向ってわずかに傾斜して下がっている。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	縄文土器 I 群の破片 4 点。	図示例195縄文土器 II 群の破片 1 点。	なし
分 類	L	M	M
備 考			

遺構名	GIII-101 落とし穴	GIII-102 落とし穴	GIII-103 落とし穴
挿 図	遺構：第73図 d 遺物：第80図	遺構：第74図 a 遺物：第80・81図	遺構：第74図 b
図 版	遺構：37d・g 遺物：47・48	遺構：38a・c 遺物：51・53	遺構：38b・d
検出状況 重複関係		新→GIII-1・2の各住居跡(縄文時代)、埋土から切っている。	新→GIII-52ピット
形 状	溝 I A 1	溝 I A 1	溝 I A 1
規 開 口 部	80~103×301cm	100~112×369cm	30~48×302cm
横 底 部	12~21×342cm	20~30×384cm	10~13×311cm
深 さ	137cm	150cm	93cm
埋 土	上部は黒褐色土、壁際や中・下部は褐色土や暗褐色土が構成。	上半の壁際は汚れ火山灰や火山灰が占める。	暗褐色土が最上部を占めるほかは3層の褐色土が構成。
底 面	南端から北端へ向ってわずかに傾斜して下がっている。	北西端から南東端へ向ってわずかに傾斜して下がっている。	中央部に比べると両端がわずかに高い。
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	図示例191・203のほか、縄文土器 I 群破片 3 点と刺片 2 点。	図示例197・210のほか、縄文土器 I 群破片 6 点と刺片 10 点。	縄文土器 I 群の破片 5 点と刺片 32 点。
分 類	M	L	M
備 考			

遺構名	GⅢ-104 落とし穴	GⅢ-105 落とし穴	GⅢ-106 落とし穴
挿 図	遺構：第74図 c	遺構：第74図 d 遺物：第80-81図	遺構：第75図 a
図 版	遺構：38e-g	遺構：38f-h 遺物：52	遺構：39a-c
検出状況 重複関係	1/2以上は調査区域外。新-GⅢ-2住居跡(縄文時代)。埋土から切っている。	新-GⅢ-4住居跡(縄文時代)。埋土から切っているものと推定。	新-GⅢ-2住居跡(縄文時代)。埋土から切っている。
形 状	溝 I 1。西端の壁はほぼ直立。	溝 I A 1	溝 I A 1
規 開 口 部	幅64cm。現存長138cm	80~100×366cm	28~39×283cm
模 底 部	幅6~10cm。現存長135cm	12~25×396cm	6~9×262cm
深 さ	145cm	147cm	80cm
埋 土	上部と最下部は主に黒褐色土、壁際と中・下部は褐色土が占める。	黒褐色土が最上部を占める以外は黄褐色ほかの汚れ火山灰が構成。	暗褐色土と褐色土が構成。
底 面	わずかに波打つ。	両端がわずかに高く、弧状。	南西端寄り約1/4の部分がわずかに傾斜しているほかはほぼ水平。
副 穴	調査できた部分にはない。	なし	なし
出土遺物	剥片 1点	図示例201・206のほか、縄文土器 I 群の破片 1点	なし
分 類	—	L	S 2
備 考			

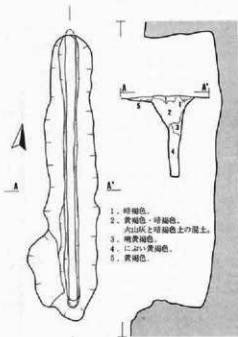
遺構名	GⅢ-107 落とし穴	GⅢ-108 落とし穴	H I-101 落とし穴
挿 図	遺構：第75図 b 遺物：第80図	遺構：第75図 c 遺物：第80図	遺構：第75図 d
図 版	遺構：39b・d	遺物：47	遺構：39g
検出状況 重複関係			南端の一部が調査できただけで他は区域外。II層を切っている。
形 状	溝 I D 1	溝 I C 1	溝 I 1。南端の壁はほぼ直立
規 開 口 部	50~57×385cm	62~85×248cm	幅95cm
模 底 部	10~20×381cm	10~12×198cm	幅8~20cm
深 さ	103cm	149cm	132cm
埋 土	上部と最下部が黒褐色土、中・下部は火山灰が構成。	最上部を黒褐色土が占めるほかは暗褐色土が構成。	上半は暗褐色土と褐色土、下半は汚れの少ない火山灰が構成。
底 面	中央から北端へ向ってわずかに下がっている。	南東端へ向ってわずかに上がっている。	不明
副 穴	なし	なし	不明
出土遺物	図示例189のほか、縄文土器 I 群の破片 4点と剥片 1点。	図示例187のほか、縄文土器 I 群の破片 1点と剥片 2点。	なし
分 類	L	S 1	—
備 考		小凹凸が壁面に顕著	

遺構名	H II-101 落とし穴	H II-102 落とし穴	H II-103 落とし穴
押 固	遺構：第76図 a	遺構：第76図 c	遺構：第76図 c
図 版	遺構：39e-h	遺構：39f-40cd	遺構：40a-c+e
検出状況 重複関係		新-H II-103落とし穴	旧-H II-102落とし穴
形 状	溝 I B 1。両端の壁がやや波打ち、 南西端の上部は崩壊。	溝 I B 1	溝 I 1。両端の上部は崩壊が著しい。
規 則 口 部	85~96×325cm	62×285cm	60~68×415cm、両端幅130~145cm
横 底 部	12~15×294cm	10~16×255cm	9~13×422cm。両端幅48~60cm
深 さ	133cm	137cm	95cm
埋 土	上部は暗褐色土、中・下部は明黄 褐色~褐色の汚れ火山灰。	暗褐色土が構成。4層に細分でき る。	褐色土・暗褐色土・黒褐色土が構 成。
底 面	わずかに波打ち、南西側約1/4が くぼみ高くなる。	ごくわずかに漸次へ下がる。	ほぼ水平
崩 穴	なし	なし	なし
出土遺物	縄文土器 I 群・II 群の破片各1点	刺片1点	なし
分 類	M	S 2	L
備 考			

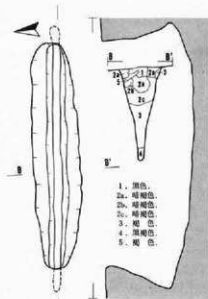
遺構名	H II-104 落とし穴	H VII-101 落とし穴	H VII-102 落とし穴
押 固	遺構：第76図 b	遺構：第77図 a	遺構：第78図 a
図 版	遺構：40b-f	遺構：40g・41a	遺構：41bc
検出状況 重複関係			
形 状	溝 I B 1	溝 I A 1	溝 I D 1
規 則 口 部	70~88×304cm	48~62×356cm	59~77×350cm
横 底 部	15~20×280cm	13~20×382cm	11~15×333cm
深 さ	123cm	133cm	116cm
埋 土	上部は暗褐色土、中部は汚れ火山 灰、下部は褐色土が主に構成。	にぶい黄褐色土が上・中、褐色土 が下部を占める。	暗褐色土が卓越。
底 面	ほぼ水平	北側がわずかに高くなる。	北へ向い漸次高くなる。
崩 穴	なし	なし	なし
出土遺物	縄文土器 I 群の破片2点。	なし	なし
分 類	M	L	M
備 考			

遺構名	HⅧ-103 落とし穴	HⅧ-104 落とし穴	HⅧ-105 落とし穴
挿 図	遺構：第78図 b	遺構：第78図 c	遺構：第78図 d
図 版	遺構：41de	遺構：41f~h	遺構：42a~c
検出状況 重複関係			
形 状	溝 I A 1	溝 II D 2	溝 I C 2
規 模			
開口部	50~72×395cm	17~24×407cm, 両端幅62~85cm	34~59×413cm
横 底 部	10~20×405cm	10×412cm, 両端幅35~42cm	6~25×384cm
深 さ	80cm	70cm	57cm
埋 土	にぶい黄褐色土・黄褐色土・褐色土で構成。	黒褐色土が卓越。	褐色土と黄褐色土で構成。
底 面	ほぼ水平	ほぼ水平	ほぼ水平
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	L	L	L
備 考			

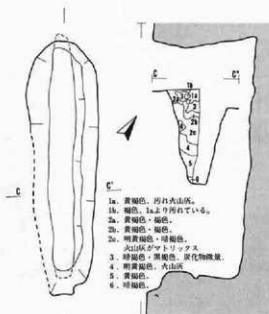
遺構名	HⅧ-106 落とし穴	HIX-101 落とし穴	HIX-102 落とし穴
挿 図		遺構：第77図 b	遺構：第77図 c
図 版	遺構：42b~d	遺構：42e~g	遺構：42f~h・43c
検出状況 重複関係			
形 状	溝 I A 2	溝 I D 1	溝 I A 2
規 模			
開口部	48~57×325cm	55~65×300cm	26~43×326cm
横 底 部	15~28×355cm	12~24×292cm	10×335cm
深 さ	75cm	92cm	55cm
埋 土	褐色土が卓越。	黒褐色土・にぶい黄褐色土が上半、暗褐色土が下半を占める。	3層の褐色土で構成。
底 面	中央部付近が若干高い。	中央部から北半が若干高くなる。	ほぼ水平
副 穴	なし	なし	なし
出土遺物	なし	なし	なし
分 類	L	M	M
備 考			



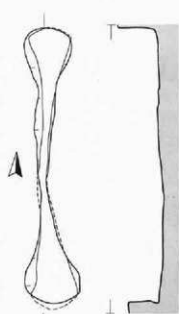
a.C III-101



b.C III-102

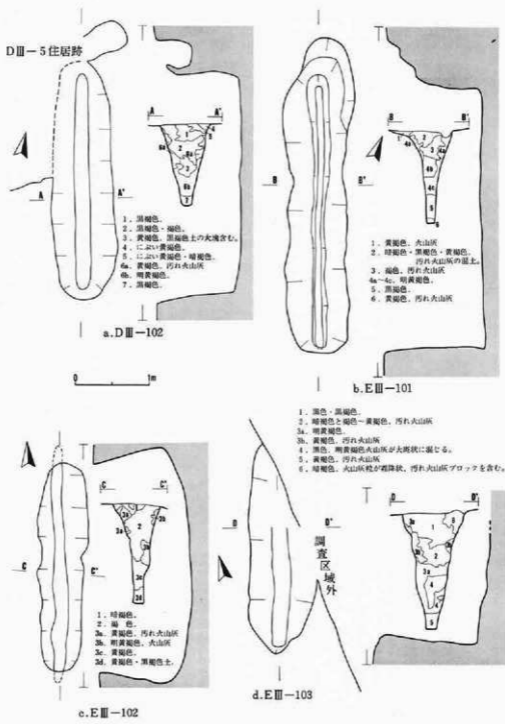


c.C III-103

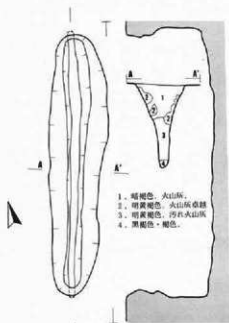


d.D III-101

第70図 落とし穴実測図(1)

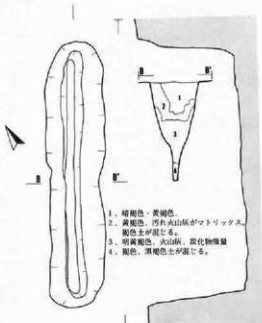


第71図 落とし穴実測図(2)



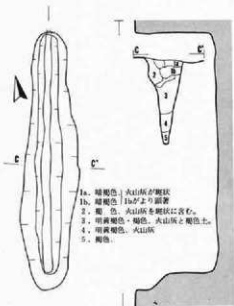
a.F III-101

1. 暗褐色、火山灰。
2. 暗黄褐色、火山灰赤鉄。
3. 明黄褐色、汚れ火山灰。
4. 黒褐色、褐色。



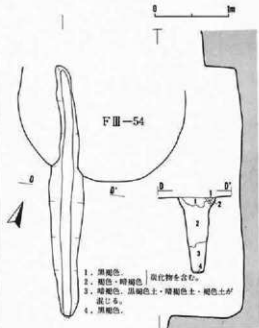
b.F III-102

1. 暗褐色・黄褐色。
2. 黄褐色、汚れ火山灰がマトリックス、褐色土が混じる。
3. 明黄褐色、火山灰、炭化物痕跡。
4. 褐色、黒褐色土が混じる。



c.F III-103

- 1a. 暗褐色、火山灰が塊状。
- 1b. 暗褐色、1aより細密。
2. 褐色、火山灰を塊状に含む。
3. 明黄褐色・褐色、火山灰と褐色土。
4. 明黄褐色、火山灰。
5. 褐色。

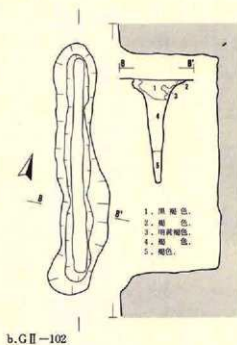
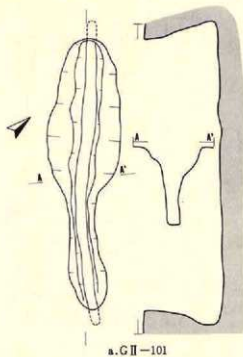


F III-54

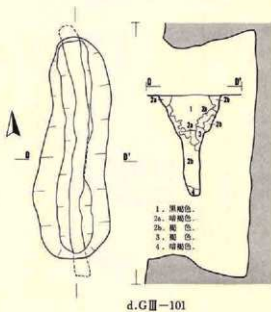
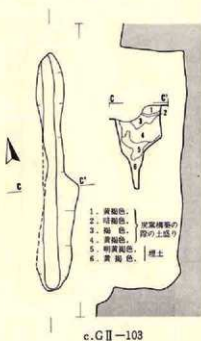
1. 黒褐色。
 2. 褐色・暗褐色。
 3. 暗褐色、炭褐色土・暗褐色土・褐色土が混じる。
 4. 黒褐色。
- 炭化物を含む。

d.F III-104

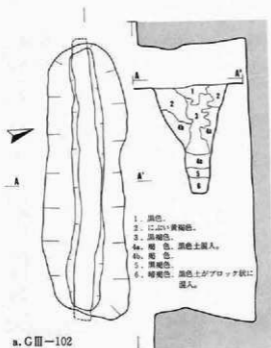
第72図 落とし穴実測図(3)



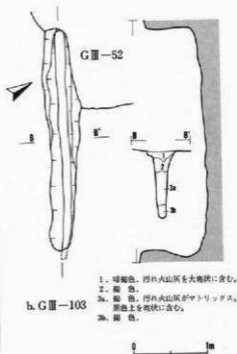
0 1m



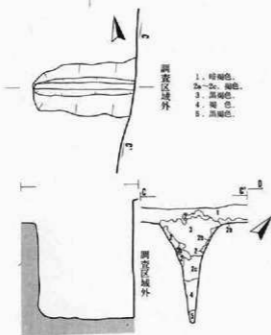
第73図 落とし穴実測図(4)



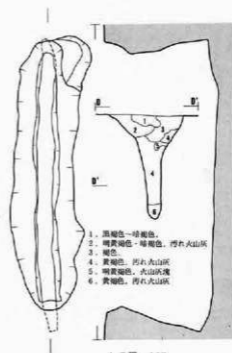
a. G III-102



b. G III-103

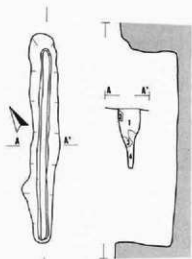


c. G III-104



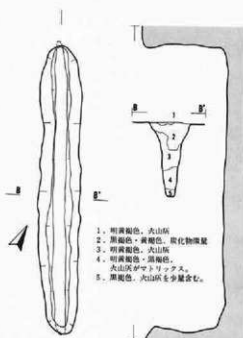
d. G III-105

第74図 落とし穴実測図(5)



a. G III-106

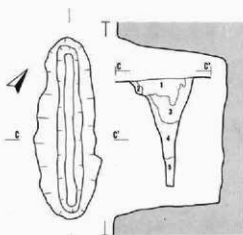
1. 暗褐色、黒褐色が経状に、火山灰が霜降状に含まれる。
2. 褐色。
3. 褐色、火山灰塊を霜降状に含む。
4. 褐色・黒褐色。



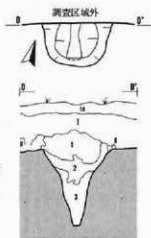
b. G III-107

1. 明黄褐色、火山灰
2. 黒褐色・黄褐色、炭化物塊
3. 明黄褐色、火山灰
4. 明黄褐色・黒褐色、火山灰がマトリックス。
5. 黒褐色、火山灰を少量含む。

1. 黒褐色、火山灰が少量。
2. 黄褐色、朽れ火山灰の塊がマトリックス。
3. 暗褐色、粒状～小塊の火山灰を含む。
4. 暗褐色、火山灰塊を全体に含む。
5. 暗褐色、火山灰塊を少量含む。



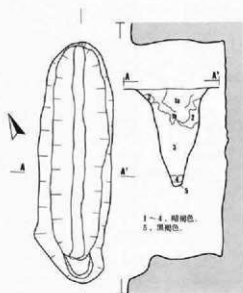
c. G III-108



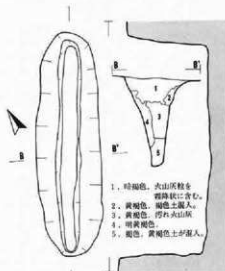
d. H I-101

- 1a. 盛り土
- 1・目、基本層位
1. 暗褐色。
2. 褐色・黄褐色、黄褐色、薄皮に混じる。
3. 明黄褐色、火山灰

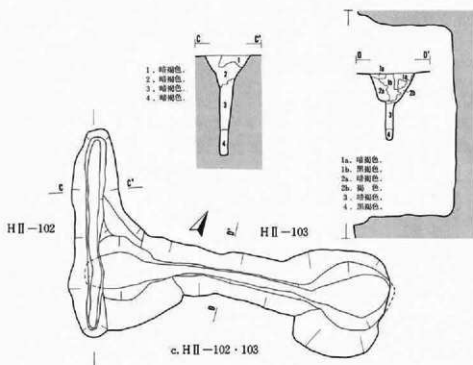
第75図 落とし穴実測図(6)



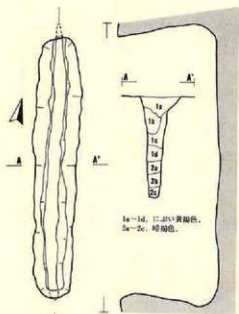
a. H II - 101



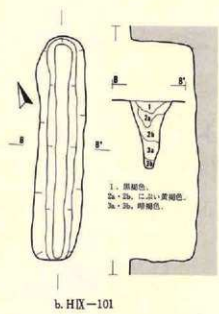
b. H II - 104



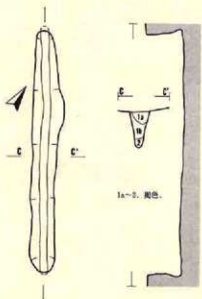
第76图 落とし穴実測図(7)



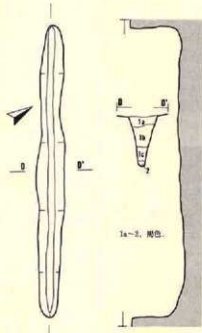
a. HIX-101



b. HIX-101

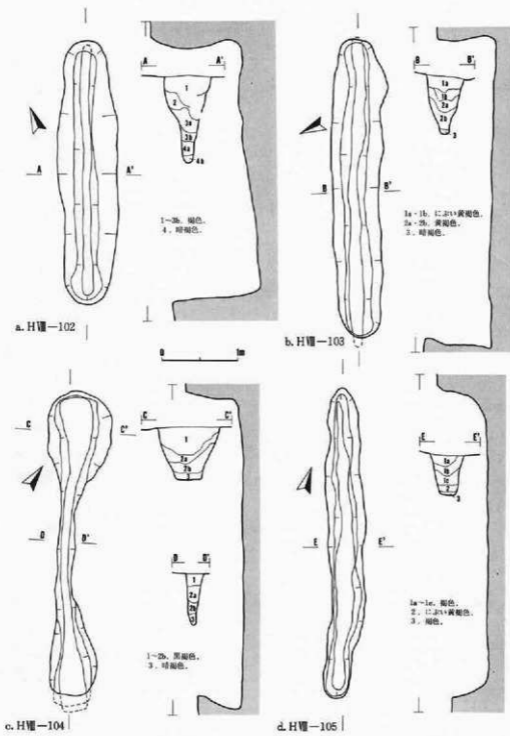


c. HIX-102



d. HIX-103

第77図 落とし穴実測図(8)



第78図 落とし穴実測図(9)

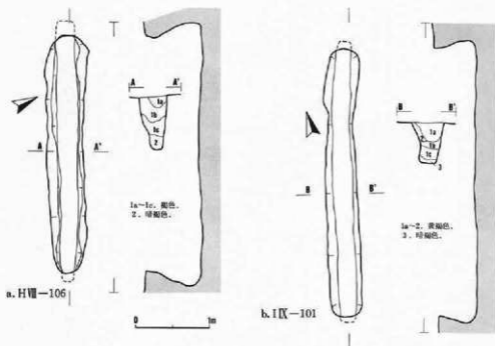
遺構名	HIX-103 落とし穴	IX-101 落とし穴
挿 図	遺構：第77図 d	遺構：第125図 b
図 版	遺構：43a・c・d	遺構：43b・e
検出状況 重複関係		
形 状	溝 I D 2	溝 I A 1
規 則 口 部	25×39×398cm	43×365cm
模 底 部	9×387cm	28×370cm
深 さ	74cm	54cm
埋 土	4層の褐色土で構成。	黄褐色土が卓越。
底 面	ゆるやかに波打つ。	ほぼ水平
副 穴	なし	なし
出土遺物	なし	なし
分 類	L	L
備 考		

所属時期を決定する資料を欠く例が大部分である。III層＝地山が焼けているD III-201やE III-201は上を覆うII層の形成年代から縄文時代に属することが推定できる。また、II層中に形成されているC III-201ほか2基も古代以前と推定できる。平安時代のF III-2住居跡の埋土上部に形成されたF III-201はそれ以降の時期のものであることがわかる。なおD III-203は縄文時代の住居跡の炉の可能性をもつものである。

以下、表形式で記載する。遺構の図と写真は第82図・図版43に、出土遺物は第83図・図版49・53に一部を掲載した。個別の位置は遺構配置図に示している。

No	遺構名	グリッド	層 位	平面形	規模cm	厚さcm	備 考
1	C III-201	C III e 3	II層下部	不整形	27×38	5	
2	C III-202	C III f 3	C III-51 P埋土上	不整形	95×116	17	
3	C III-203	C III f 2・3	C III-52 P埋土上	不整形	52×55	9	
4	C III-204	C III h 4	II層下部	不整形	60×90 38×41	16 不明	2基が北西-南東方向に並ぶ。
5	D III-201	D III a 2・3	III層	不整形	22×40 35×67	不明 6	2基がほぼ接して存在。石楯(212)はほぼ埋土上から出土しているが、共存関係は不明。

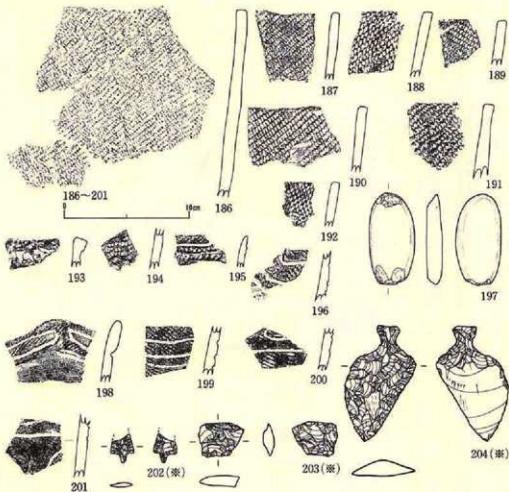
※続きは次ページ



第79図 落とし穴実測図10

※前ページからの続き

6	D III-202	D III c 7	柱状状ビット上部	不整形	43×45	6	壤土が焼土混じりの黄褐色土を主にする柱状状ビット(径41cm, 深さ64cm)の上部に検出。ビットとの関係は不明。また不定形石器(214)はビットから出土したもので、共存関係は不明。
7	D III-203	D III e 6	H層	不整形円形	38×50	2	壁角～円の小礫が多く混じった黄褐色粘土を敷いた面が残っている。周辺には床面と推定される硬い面が一部にみられる。住居跡の跡の可能性が強いが、平面形や柱穴が把握できず、ここに含めた。石皿(213)はほぼ接して出土しているが、共存関係は不明。
8	D III-204	D III f 4	風倒木上	不整形	25×45	10	大型の木炭が南西に分布。その下位から土師器製の破片が出土。
9	E III-201	E III c 7	H層	不整形円形	30×37	6	
10	F III-201	F III b 3	F III-2住居跡南壁埋土上部	不整形円形	62×68	5	
11	G III-201	G III a 2	I層直下	楕円形	55×123	10	
12	H II-201	G II d 6 H II a 6	G II-56P上位	不整形円形	55×75	9	

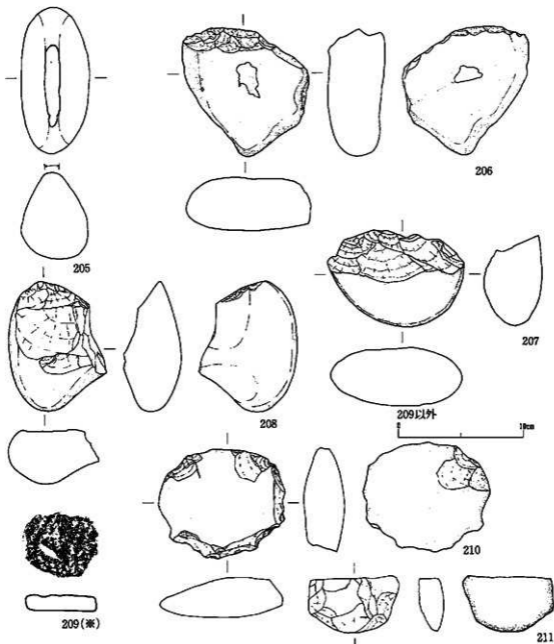


No	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分壘	備考	図版
186	E田-103 埋土上部	深鉢	口~胴	口唇部角ばる。L.R	織網状	織網多	I-1-11		47
187	G田-102 埋土上部	深鉢	口縁部	口唇部角ばる。L.R	織網状	織網多	I-1-11		47
188	C田-101 埋土上部	深鉢	口縁部	口唇部角ばる。L.R	織網状	織網多	I-1-11		47
189	G田-107 埋土上部	深鉢	口縁部	口唇部角ばる。R.L	織網状	織網多	I-1-11		47
190	D田-102 埋土	深鉢	口縁部	口唇部角ばる。L.R	織網状	織網多	I-1-11		47
191	G田-101 埋土内層	深鉢	口縁部	口唇部角ばる。L.R	織網状	織網多	I-1-11		47
192	C田-101 埋土上部	深鉢	口縁部	口唇部角ばる。埋土際り直し	織網状	織網多	I-1-11		47
193	D田-102 埋土	深鉢	口縁部	口唇部角ばる。L.Rループ文	織網状	織網多	I-1-11		47
194	C田-102 埋土	深鉢	口縁部	L.R	織網状	織網多	I-2		
195	G田-102 埋土上部	深鉢	口縁部	口唇部肥厚し、斜交文と波線・隅文	シガキ		II-1-11		47
196	C田-102 埋土上部	深鉢	胴部	沈線・R.L	シガキ		II-2-2		47
198	C田-103 埋土上部	深鉢	口縁部	波状沈線、沈線・L.R・シガキ	シガキ		II-1-11		47
199	C田-102 埋土	深鉢	胴部	沈線、R・シガキ	シガキ		II-2-2		47
200	C田-102 埋土上部	深鉢	胴部	沈線・L.R・シガキ	シガキ		II-2-2		47
201	G田-105 埋土上部	深鉢	胴部	無文・沈線	シガキ		II-2-11		47

No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
197	G田-102 埋土中層	磨石形	73	36	12	57.5	硬砂岩	小型。上下辺に割傷	51
202	D田-102 埋土	石鏃	13	12	2	0.3	チャート	砂部作偽。平部有至式	48
203	G田-101 埋土上部	ヒュース・エスキュー	18	23	5	2.7	埋土層状岩	刃部2箇1対	48
204	F田-102 埋土上部	石鏃	62	34	9	10.4	凝灰岩質頁岩	横形石鏃。刃打正	48

S=1/2(※)

第80図 落とし穴出土遺物(1)

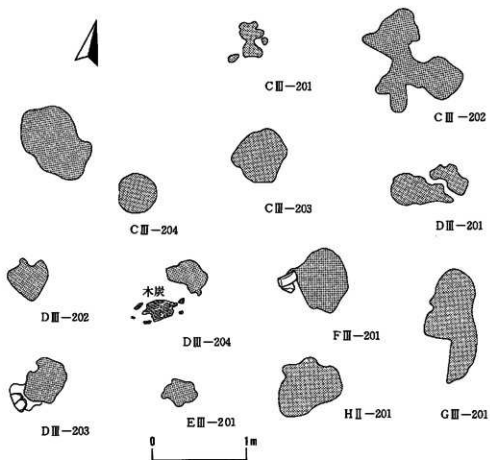


No	地点・層位	群 属	計 測 値 : mm			重量 : g	石材名	特 徴 ・ 備 考	図版
			長さ	幅	厚さ				
205	D層-102 礫土上部	燧石I類	118	54	78	635	燧砂岩	縁部厚さ15mm	52
206	G層-105 礫土上部	燧石I類+凹石	101	98	43	730	燧砂岩	礫石I-1。両面に凹	52
207	F層-102 礫土上部	燧石I類	72	109	46	465	アルコーズ砂岩		52
208	F層-103 礫土上部	燧石I類	104	79	47	400	燧砂岩		52
210	G層-102 礫土上部	燧石I類	92	103	31	380	燧石砂岩		53
211	F層-103 礫土上部	打礫石片	43	74	28	90	燧砂岩	刃部破片。裏面は自然面	53

No	地点・層位	群 属	計 測 値 : mm			重量 : g	特 徴 ・ 備 考	図版
			長さ	幅	厚さ			
209	E層-101 礫土	円盤状土製品	36	48	8	9.6	I群土器使用。両端を打欠	53

第81図 落とし穴出土遺物(2)

S-1(米)



第82図 焼土遺構実測図

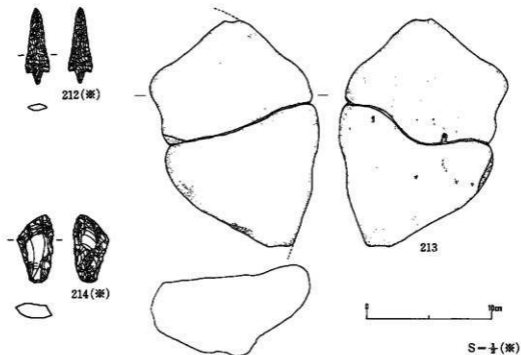
6. 炭窯

G II-151炭窯 (第84図、図版44)

G II-3 住居跡 (平安時代) と G II-103 落とし穴と重複し、それらを切っている。現代の炭窯であることが出土品から明らかである。挿図と写真で示し、個別の記載は省略する。

V 遺構内外の出土遺物とまとめ (1)

この章で取り上げるのは、1. 古代の住居跡と住居状遺構から出土した該期以外の遺物、2. 遺構外から出土した遺物、である。図示や記載は1と2を区別しないで種類別・器種別におこ



No.	地点・層位	器 種	計 測 尺:cm			重量:g	石 材 名	特 徴・備 考	図版
			長 さ	幅	厚 さ				
212	DⅡ-201	石鏃	40	13	3	1.2	特殊燧石	平部有爪式	49
213	DⅡ-203	砂皿	167	128	65	1520.0	アルプス砂岩	破片、同群の部1個	53
214	DⅡ-202	不定形石器	35	18	8	0.4	燧石	3面に解部調整	49

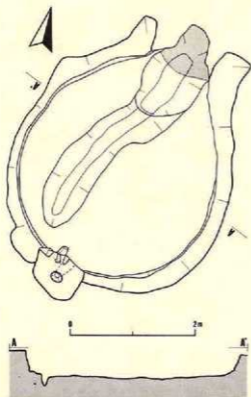
第83図 焼土遺構出土遺物

なう。縄文土器・弥生土器・剥片石器・石斧・礫石器・土製品・石製品があるが、土製品・石製品については、古代のものもまとめて扱う。

1. 縄文土器

遺構内外出土縄文土器のうち、完形またはそれに近い形で復元されるものはほとんどない。大部分は破片資料であり、しかも同一個体の同定は容易ではない。したがって土器個体の全体的把握が困難であることから、破片は部位別に分け、部位毎の施文特徴を観察する。

分類は、次ページのようにおこなう。



第84図 G II-151炭窯実測図

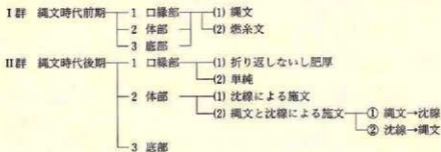
I群：縄文時代前期の土器（第85図・第86図、図版64）

〈分布など〉調査2区のCIII区からHII区にかけて広く分布する。特に、DIII区・EIII区・GIII区に多い。I層・II層・遺構内のいずれからも出土する。分布域による土器の諸特徴に差異は認められずこれらを一括して分類・記述する。

〈器種・器形〉すべて深鉢である。口縁はすべて平縁であり、しかも口唇に刺突・押圧等の加えられるものもない。口唇形状は、著しく内傾または外傾せず、ほぼ水平となるものが多い。口唇上端はおもにナデ調整される。体部は連続的に彎曲し、中途に屈曲等は認められない。底部は尖底か、丸底状でわずかに乳房状の突起がつく。

〈施文〉口縁部・体部・底部とも縄文を基調とする。地文となる縄文原形は、L₁、R₁、R₁、L₁、L₁、L₁、右巻L左巻

L組紐、最終段Lの複節である。L₁とR₁によって、非結束の羽状縄文が描かれる。L₁、R₁、R₁、L₁には、原体の末端にループの付されたものがある。ループは、外面最上段の原体にのみ付される場合と以下の段にも及ぶ場合がある。しかし、概して口縁部に多用される傾向にある。口縁部外面にR₁の燃糸圧痕をもつ例があるほかは、すべて原体の回転によって施文される。なお、口唇に沿って3mm～5mmの幅で縄文をナデ消しているものが数例ある。



縄文土器の分類

〈色調・胎土など〉暗褐色・暗黄褐色を呈し、胎土には必ず植物繊維を含んでいるが、その量には多寡がある。内面はナデもしくはミガキが加えられるものが多い。

〈相当する型式名〉現在、以上の特徴をもつ土器群に対する型式名は与えられていない。底部形状は、早稲田6類に近い。全体の様相は二戸市沢内B遺跡I群B類とほぼ一致する。口唇の形状、器内外面の調整、地文の変異は、柱島式ないし大木1式と類似する。

II群：縄文時代後期の土器（第87図～第95図、図版64～68）

〈分布など〉調査2区のCⅢ区からHⅡ区にかけて広く分布する。その大半はCⅢ区からEⅢ区に集中している。I層・II層に偏りなく包含されている。DⅢ-1住居跡埋土からの出土も多い。これらを1括して分類・記述する。

〈器種・器形〉深鉢が多い。口縁が波状をなすものが多い。突起状を呈するものもある。頸部でゆるやかに内彎する器形が見られる。底部は平底となる。ほかに、壺・浅鉢等が少数存在している。脚状の台を有するものがある。詳細は不明の点が多い。

〈施文〉口縁部・体部・底部とも縄文と沈線による文様描出が主である。縄文か沈線かいずれか一方のみで文様が施文される場合もある。口縁部は、波状口縁に従って連弧状のモチーフが描かれるものが多い。しばしば、縦に棒状あるいは楕円状の隆帯が付き、細く鋭い工具によって刺突が加えられる。体部に縄文と沈線が施文されるものは、沈線のみ施文されるものに比して一般に厚手で、器表面のミガキが不充分である。縄文と沈線の施文の前後は、概して縄文→沈線であるが、稀に沈線→縄文のものが認められる。最終的に磨消縄文効果を出しているものが多い。沈線のみで文様が描かれるものは、稀に朱彩される。

〈色調・胎土など〉黄褐色・暗黄褐色を呈するものが多い。胎土には径3～4mm程度の砂粒が混じる。器内面はミガキ調整される。外面は一部ミガキが加えられるものがあり、壺・浅鉢に多い。

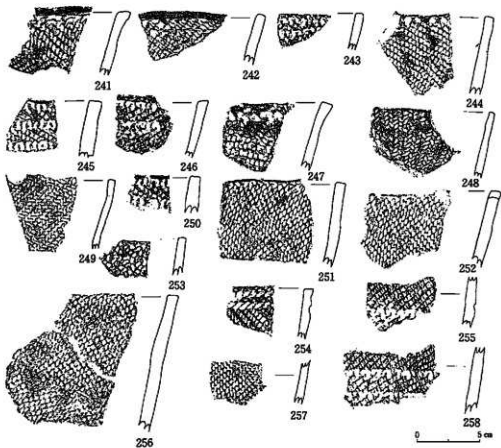
〈相当する型式名〉以上の特徴をもつ土器群に対して十腰内I式が与えられている。十腰内I式は細分が試みられているが、成田（1981）の説明に従えば前十腰内I式・十腰内I a式・十腰内I b式に相当する。

2. 弥生土器

弥生土器は、すべて小破片であり全形を知りえない。出土量もごく少量である（第95図、図版68）。

〈分布など〉DⅢ区・IⅢ区に限定される。II層中に多い。

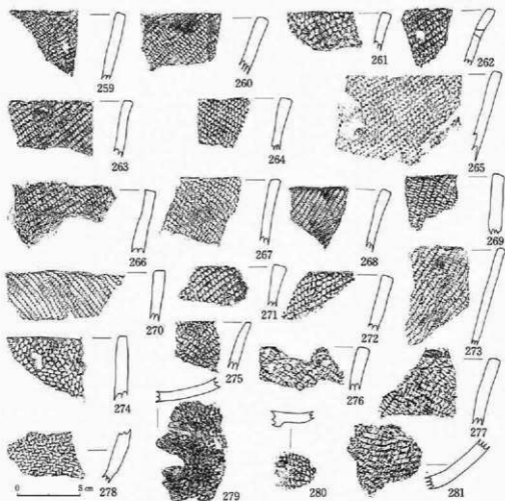
〈器種・器形〉平坦口縁の壺以外は、明確に識別できない。口縁はほとんど肥厚しない。頸部がやや内彎する。やや長胴となろうか。底部は不明である。



No	地点・層位	器種	部位	形状 / 外面	内面	胎土	分類	品号	図説
241	DⅡa ₁ ・I層	罎	口縁部	縄文(RL&Rループ, 口縁ナデ)	ナデ	縄織(少)	1-1-(1)	口縁部	64
242	DⅡa ₁ ・II層	罎	口縁部	*(L&L・RL, 口縁ミガキ)	ミガキ	*	*	*	*
243	DⅡa ₁ ・I, II層	罎	口縁部	*(RLループ, 口唇ナデ)	ナデ	縄織	*	*	64
244	DⅡb ₁ ・II層	罎	口縁部	*(RL&L, 口唇ナデ)	ナデ	縄織	*	*	*
245	GⅡc ₁ ・I層	罎	口縁部	*(RL&Rループ, 口唇ナデ)	ナデ	*(少)	*	*	*
246	DⅡb ₁ ・II層	罎	口縁部	*(L&L&Rループ, 口縁ミガキ)	ミガキ	*	*	*	*
247	FⅡa ₁ ・II層	罎	口縁部	*(L&Lループ, 口唇ナデ)	ナデ・ミガキ	縄織	*	*	*
248	GⅡ-1 灰 椀底部	罎	底面	*(右巻L・左巻L)	ナデ	*	*	*	*
249	GⅡf ₁ ・II層	罎	口縁部	*(縄織?)	*	*	*	*	*
250	FⅡ-2 灰 椀底	罎	底面	*(?, 口唇ナデ)	*	*	*	*	*
251	FⅡb ₁ ・I層	罎	口縁部	*(縄織)	ナデ	縄織	*	*	64
252	DⅡa ₁ ・I層	罎	口縁部	*(*)	ミガキ	*	*	*	*
253	DⅡd ₁ ・II層	罎	口縁部	*(RLループ)	ナデ	縄織	1-1-(2)	*	64
254	DⅡa ₁ ・II層	罎	口縁部	*(RL, 正底, 口唇ナデ)	ナデ	縄織	*	*	*
255	CⅡc ₁ ・II層	罎	口縁部	*(L&L&Rループ)	ミガキ	*(少)	1-2-(1)	*	*
256	DⅡa ₁ ・II層	罎	口縁部	*(最終段Lの痕跡)	ナデ	*	1-1-(1)	*	*
257	DⅡa ₁ ・II層	罎	口縁部	*(最終段L)	*	*(少)	1-2-(1)	*	*
258	FⅡa ₁ ・II層	罎	口縁部	*(L&L&Rループ)	ミガキ	*	*	*	64

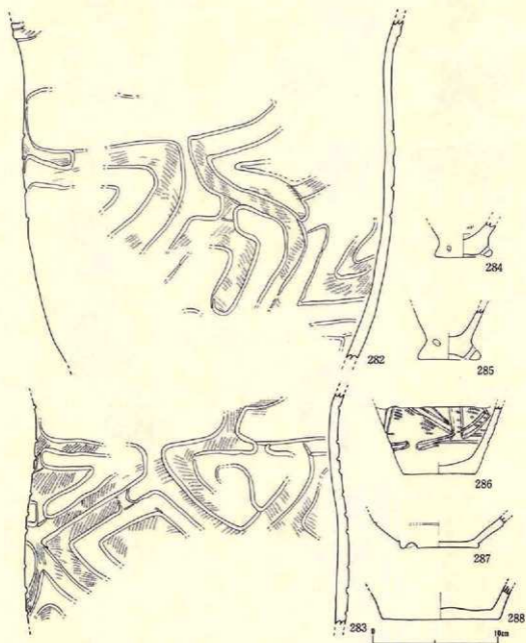
※215-240は第130図・第140図

第85図 縄文土器(1)



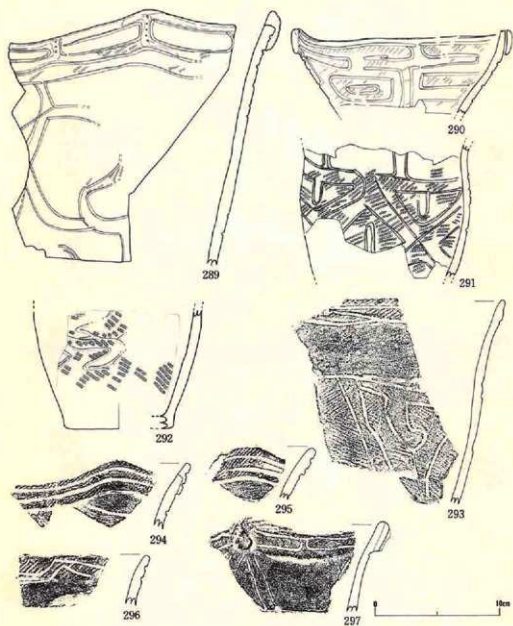
No	地点・層位	器種	部位	形状 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
259	DⅡj₁・Ⅰ層	深鉢	口縁部	縄文(長L, 口唇ナデ)	ナデ	織織	1-1-(1)		
260	FⅡj₁・Ⅰ層	〃	〃	〃(長L, 口唇ナデ)	〃	〃	〃		
261	CⅡd₁・Ⅰ層	〃	〃	〃(最終段しの残部)	ミゴキ	〃	〃		64
262	DⅡh₁・Ⅰ層	〃	〃	〃(長L, 口唇ナデ)	〃	織織(少)	〃		
263	CⅡj₁・Ⅰ層	〃	〃	〃(長L, 口唇ナデ)	〃	織織	〃		
264	DⅡe₁・Ⅰ層	〃	〃	〃(長L, 口唇ナデ)	〃	〃	〃		
265	EⅡa₁・Ⅰ層	〃	〃	〃(最終段しの残部)	ミゴキ・ナデ	〃	〃		
266	GⅡf₁・Ⅰ層	〃	〃	〃(長L)	〃	〃	〃		
267	DⅡe-6住埋土	〃	〃	〃(長L, 口唇ナデ)	ナデ	〃	〃		
268	EⅡc₁・Ⅰ層	〃	〃	〃(長L, 口唇ナデ)	〃	〃	〃		
269	GⅡh₁・Ⅰ層	〃	〃	〃(長L)	ミゴキ	〃	〃		
270	EⅡa₁・Ⅰ層	〃	〃	〃(長L・R)	〃	〃	〃		
271	DⅡh₁・Ⅰ層	〃	〃	〃(長L, 口唇ナデ)	ナデ	織織	〃		
272	DⅡh₂・Ⅰ層	〃	〃	〃(長L, 口唇ナデ)	〃	〃	〃		
273	DⅡh₁・Ⅰ層	〃	〃	〃(長L・R)	〃	〃	〃		口縁部
274	GⅡa₁・Ⅰ層	〃	〃	〃(?)	〃	〃	〃		
275	DⅡj₁・Ⅰ層	〃	〃	〃(長L・長L, 口唇ナデ)	〃	〃	〃		
276	DⅡj₁・Ⅰ層	〃	〃	〃(長L・長L, 口唇ナデ)	〃	〃	〃		
277	DⅡj₁・Ⅰ層	〃	〃	〃(長L)	ナデ	織織	〃		64
278	HⅡb₁・Ⅰ層	〃	胴部	〃(右巻L・左巻L)	〃	〃	1-2-(1)		
279	DⅡe-3住Q, 表面	〃	底面	〃(?)	〃	〃(少)	1-3-(1)		
280	GⅡj₁・Ⅰ層	〃	〃	〃(長L)	〃	〃	1-3-(1)		
281	EⅡa₁・Ⅰ層	〃	〃	〃(長L)	〃	〃	1-3-(1)		

第86図 縄文土器(2)



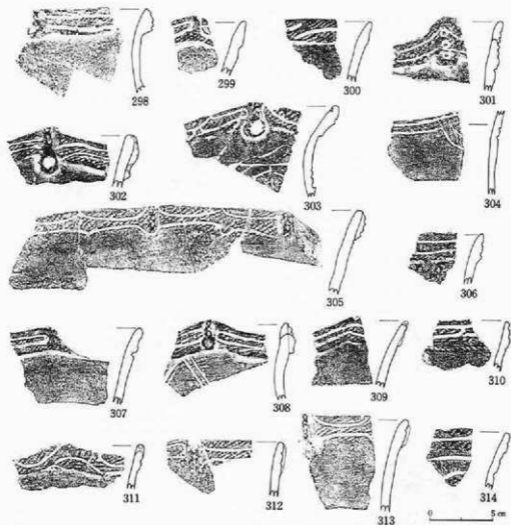
No	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図説
282	D田-1位埋土	深鉢	胴部	沈線→縄文(L.F)→ナデ	ナデ→ミダキ		II-2	②-④	60
283	D田-1位埋土	〃	〃	沈線→縄文(L.F)	ミダキ		〃		〃
284	D田-1位Q埋土	鉢	肩部	コップ状、縄文?			II-3		
285	D田f、目層	〃	〃	コップ状	ミダキ		II-3	②-④	
286	C田h、I層	深鉢	〃	縄文(L.F)→沈線→ミダキ	ミダキ		II-3		64
287	F田a、I層	浅鉢	〃	沈線					
288	C田d、目層	深鉢	〃	縄文表					64

第87図 縄文土器(3)



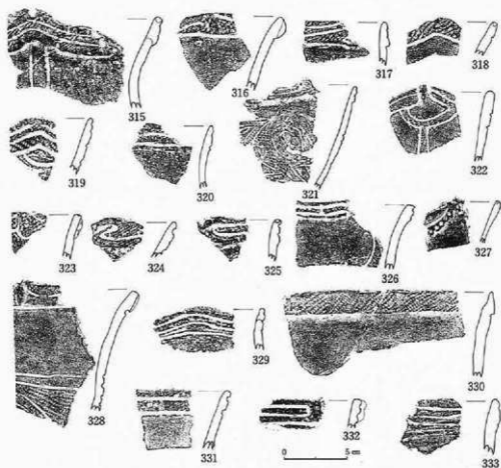
No	地点・層位	器種・部位	器形 / 外面	内面	胎土	地帯	備考	図版
289	C III b, 1・目層	深鉢 口縁部	放射口縁, 縄文(L R)→沈線	ミガキ		II		65
290	F III d,	浅鉢	縄文(L R)→沈線	〃		II		64
291	C III b, 1 層	深鉢 胴部	〃 (L R)→沈線	〃		II-2-(D-Q)		65
292	C III b, 1 層	〃 底面	〃 (R L)→沈線	〃		II-3		
293	D III-1 在Q, 埋土	〃 口縁部	放射口縁, 縄文(L R)→沈線→ミガキ	ナデ→ミガキ		II-1-(D)		65
294	D III-1 在Q, 埋土	〃	〃	〃 (L R)→沈線→ミガキ	〃			〃
295	D III-1 在Q, 埋土	〃	〃	〃 (L R)→沈線→ミガキ	ミガキ			〃
296	D III-1 在Q, 埋土	〃	縄文(L R)→沈線→ミガキ	〃				〃
297	D III-6 在Q, 掘り方	〃	放射口縁, 沈線→ナデ	ミガキ→ナデ				〃

第88図 縄文土器(4)



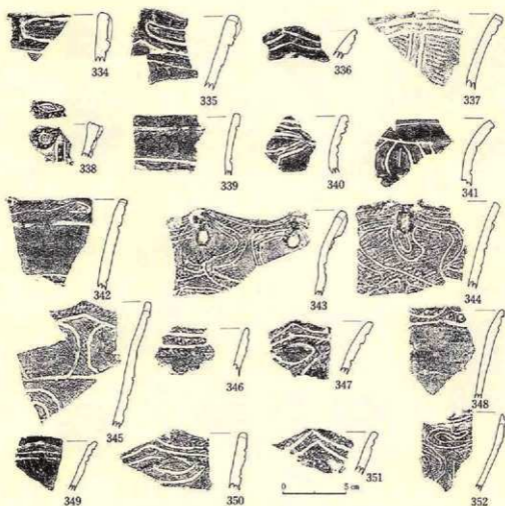
№	地点・層位	器種・部位	器形／外面	内面	胎土	分類	備考	図版
298	D層c ₂ ・I層	深鉢 口縁部	縄文(L,R?)→沈線→ミダキ	ミダキ		II-1(1)		65
299	C層h ₁ ・I層	〃	〃 (L,R)→沈線→ナデ→ミダキ	ナデ→ミダキ				
300	C層h ₂ ・I層	〃	〃 (L,R)→沈線→ナデ	ミダキ→ナデ				66
301	HII d ₁ ・I層	〃	波状口縁。縄文(L,R)→沈線→ナデ					
302	C層h ₁ ・I層	〃	〃 (L,R)→沈線→ナデ→ミダキ	ナデ→ミダキ				
303	C層h ₂ ・I層	〃	〃 (L,R)→沈線→ナデ	ミダキ→ナデ				66
304	F層h ₂ ・I層	〃	〃 (L,R)→沈線→ミダキ	ミダキ				
305	C層h ₂ ・I層	〃	縄文(L,R)→沈線→ミダキ					
306	C層f ₂ ・I層	〃	〃 (L,R)→沈線→ミダキ					
307	E層c ₁ ・I層	〃	波状口縁。縄文(L,R)→沈線→ミダキ					
308	D層c ₁ ・I層	〃	〃 (L,R)→沈線→ナデ	ナデ→ミダキ				66
309	E層d ₁ ・I層	〃	〃 (L,R)→沈線→ナデ	ミダキ→ナデ				
310	E層h ₁ ・I層	〃	縄文(L,R)。庄底→沈線→ナデ→ミダキ	ナデ→ミダキ				
311	C層h ₂ ・I層	〃	波状口縁。縄文(L,R)→沈線→ミダキ	ミダキ				
312	C層j ₁ ・I層	〃	縄文(L,R)→沈線					
313	C層j ₁ ・I層	〃	〃 (L,R)→沈線→ミダキ					66
314	D層c ₁ ・I層	〃	〃 (L,R)→沈線					

第89図 縄文土器(5)



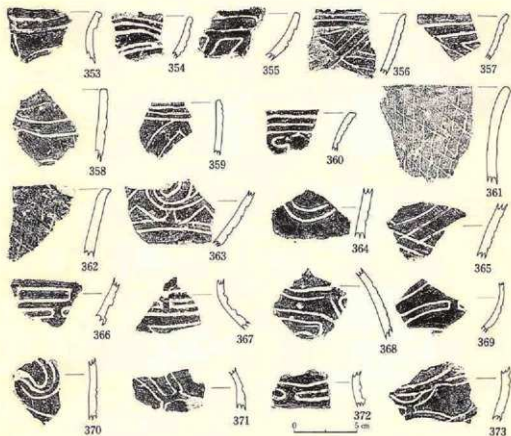
No	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
315	CⅡd ₁ ・Ⅱ層	深鉢	口縁部	波状口縁。縄文(R.L)→沈線→ミガキ	ミガキ		II-1-(I)		66
316	CⅡf ₁ ・Ⅰ層			縄文(L.R?)→沈線→ミガキ					
317	CⅡe ₁ ・Ⅱ層			* (L.R)→沈線→ミガキ	*				66
318	CⅡf ₁ ・Ⅰ層			波状口縁。縄文(L.R)→沈線→ミガキ					
319	DⅡa ₁ ・Ⅱ層			* (R.L)→沈線					66
320	DⅡf ₁ ・Ⅱ層			縄文(?)→沈線→ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ				
321	EⅡa ₁ ・Ⅰ層			波状口縁。縄文(L.R)→沈線	ミガキ				66
322	FⅡb ₁ ・Ⅰ層			縄文(R.L)→沈線					
323	CⅡg ₁ ・Ⅱ層			* (L.R)→沈線					
324	CⅡf ₁ ・Ⅱ層			波状口縁。縄文(L.R)→沈線					66
325	DⅡe ₁ ・Ⅱ層			* (L.R)→沈線→ミガキ					
326	DⅡa ₁ ・Ⅰ層			縄文					
327	DⅡb ₁ →Ⅰ位埋土			沈線→ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ				
328	DⅡb ₁ →Ⅰ位Q ₁ 埋土			波状口縁。縄文(L.R)→沈線→ミガキ	ミガキ				
329	DⅡb ₁ ・Ⅱ層			* (L.R)→沈線→ナデ	ナデ				
330	CⅡd ₁ ・Ⅱ層			縄文(L.R)→ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ				
331	CⅡf ₁ ・Ⅰ層			* (L.R)→沈線→ミガキ	ミガキ				
332	CⅡh ₁ ・Ⅰ層			沈線→ミガキ					
333	CⅡc ₁ ・Ⅱ層			* →ナデ	ナデ→ミガキ				

第90図 縄文土器(6)



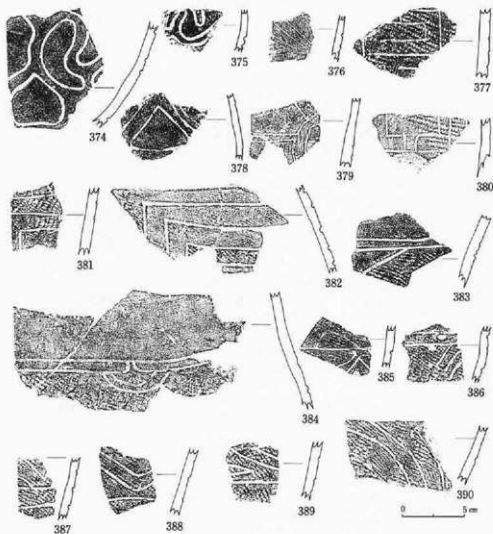
No.	地点・層位	器種・部位	器形・外面	内面・胎土	分類	備考	図版
334	CⅡb ₂	深鉢 口縁部	ヒガキ	ナデ→ヒガキ	II-1-(1)		66
335	CⅡd ₁ ・Ⅱ層	〃 〃	沈線→ヒガキ	ヒガキ	〃		〃
336	CⅡd ₁ ・Ⅱ層	〃 〃	波状口縁, 沈線→ヒガキ	〃	〃		〃
337	CⅡf ₁ ・Ⅱ層	〃 〃	〃 〃 〃 縄文(L R)→沈線	〃	〃		66
338	DⅡ-4住層遺跡	〃 〃	縄文(L R)→沈線→ナデ→ヒガキ	〃	〃		〃
339	CⅡe ₁ ・Ⅰ層	〃 〃	沈線→ヒガキ	〃	〃		〃
340	CⅡe ₁ ・Ⅰ層	〃 〃	〃	ナデ	〃		〃
341	FⅡe ₁ ・Ⅰ層	〃 〃	沈線	ナデ→ヒガキ	〃		〃
342	EⅡc ₁ ・Ⅱ層	〃 〃	縄文(L R)→沈線→ナデ	ヒガキ・ナデ	II-1-(19)-(2)		〃
343	EⅡc ₁ ・Ⅱ層	〃 〃	波状口縁, 縄文(L R ?)→沈線	ヒガキ	II-1-(2)		〃
344	EⅡc ₁ ・Ⅱ層	〃 〃	〃 〃 〃 (L R)→沈線	〃	〃		〃
345	EⅡd ₁ ・Ⅰ層	〃 〃	〃 〃 〃 (L R)→沈線→ヒガキ	〃	〃		〃
346	DⅡf ₁ ・Ⅱ層	〃 〃	縄文(L R)→沈線→ナデ→ヒガキ	ナデ→ヒガキ	〃		〃
347	DⅡ-1住Q ₁ 埋土	〃 〃	縄文(L R)→沈線→ヒガキ	ヒガキ	〃		66
348	CⅡd ₁ ・Ⅱ層	〃 〃	縄文(L R)→沈線→ナデ→ヒガキ	ナデ→ヒガキ	〃		〃
349	DⅡ-1住Q ₁ 埋土	〃 〃	沈線→ヒガキ	ヒガキ	〃		〃
350	CⅡd ₁ ・Ⅱ層	〃 〃	波状口縁, 縄文(?)→沈線	〃	〃		66
351	DⅡc ₁ ・Ⅰ層	〃 〃	〃 〃 〃 (L R)→沈線	ヒガキ	〃		〃
352	EⅡd ₁ ・Ⅰ層	〃 〃	〃 〃 〃 (R 1 ?)→沈線	〃	II-2-(17)-(1)		67

第91図 縄文土器(7)



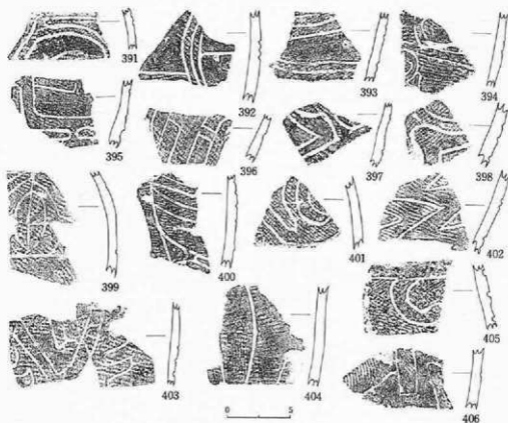
No.	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
353	CⅡe・I層	深鉢	口縁部	沈線・ミダキ			Ⅱ-1(2)		
354	CⅡi・I層	浅鉢	#	#	ミダキ		#		67
355	DⅡ-1(ⅡQ)埋土	#	#	#	#		#		朱砂
356	EⅡc・I層	#	#	#	#		#		#
357	DⅡe・I層	#	#	#	#		#		朱砂
358	DⅡf・I層	深鉢	#	沈線	#		#		#
359	DⅡf・I層	#	#	#	#		#		67
360	CⅡh・I層	浅鉢	#	沈線→ミダキ	#		#		#
361	EⅡb・I層	深鉢	#	断片文→ナダ	#		#		
362	EⅡa・I層	#	#	#	#		#		
363	GⅡ区・I層	浅鉢	胴部	沈線	ナダ		Ⅱ-2(1)		67
364	CⅡe・I層	深鉢	#	沈線→ミダキ	#		#		
365	EⅡc・I層	#	#	#	ミダキ		#		67
366	CⅡc・I層	壺	#	#	#		#		#
367	DⅡ-1(Ⅱ埋土)	#	#	#	#		#		#
368	EⅡc・I層	#	#	#	#		#		#
369	CⅡh・I層	#	#	#	#		#		朱砂
370	EⅡc・I層	深鉢	#	沈線→ナダ→ミダキ	#		#		#
371	CⅡc・I層	壺	#	沈線→ミダキ	#		#		#
372	CⅡh・I層	#	#	#	#		#		朱砂
373	DⅡf・I層	深鉢	#	#	ナダ→ミダキ		#		67

第91図 縄文土器(8)



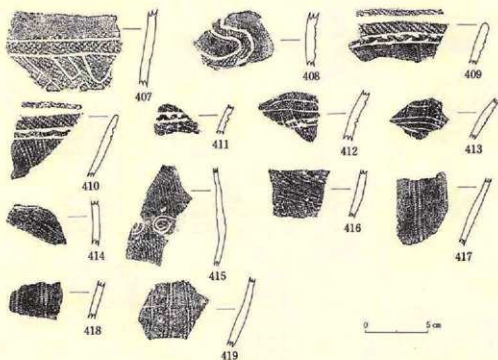
No	地点・層位	器種・部位	図形 / 外面	内面	胎土	分類	備考	図版
374	D層→1位Q層土	壺 胴部	沈線→L字	L字		II-2-11	未彩	67
375	C層h ₁ ・1層	洗鉢	〃	〃	〃	〃		
376	C層i ₁ ・1層	洗鉢	〃	〃	〃	〃		67
377	C層d ₁ ・1層	深鉢	縄文(LR)→沈線	〃	〃	II-2-12①		〃
378	C層h ₁ ・1層	〃	〃	L字	〃	〃		〃
379	C層d ₁ ・1層	〃	〃	〃	〃	II-2-11		〃
380	C層h ₁ ・1層	〃	縄文(LR)→沈線	〃	〃	II-2-12①		〃
381	C層h ₁ ・1層	〃	〃	〃	〃	〃		〃
382	C層h ₁ ・1層	〃	縄文(LR)→沈線→十字	L字	〃	〃		67
383	C層f ₁ ・1層	〃	縄文(RL)→沈線→L字	〃	〃	〃		〃
384	C層j ₁ ・1層	〃	〃	〃	〃	〃		〃
385	D層→4位埋土	〃	縄文(RL)→沈線→十字	十字・L字	〃	〃		〃
386	D層d ₁ ・1層	〃	縄文(LR)→沈線	L字	〃	〃		〃
387	C層e ₁ ・1層	〃	〃	〃	〃	〃		〃
388	C層f ₁ ・1層	〃	〃	L字	〃	〃		〃
389	C層d ₁ ・1層	〃	〃	〃	〃	〃		〃
390	D層h ₁ ・1層	〃	沈線→縄文(Lf)	〃	〃	〃		67

第93図 縄文土器(9)



No	地点・層位	器種部位	器形／外面	内面	胎土	分類	備考	図版
391	DⅢ f ₂ ・II層	深鉢 胴部	縄文(L系)→沈線→ミダキ	ミダキ		Ⅱ-2-(20-1)		67
392	DⅢ h ₂ ・II層	〃	縄文(L系)→沈線→ミダキ	ミダキ		〃		〃
393	EⅢ b ₂ ・II層	〃	縄文(L系)→沈線→ナデ→ミダキ	ナデ→ミダキ		〃		〃
394	EⅢ c ₂ ・II層	〃	縄文(L系)→沈線	〃		〃		〃
395	DⅢ h ₂ ・II層	〃	〃	ミダキ		〃		〃
396	EⅢ d ₂ ・I層	〃	〃	〃		〃		〃
397	DⅢ f ₂ ・I層	〃	縄文(R系)→沈線→ミダキ	ミダキ		〃		〃
398	EⅢ d ₂ ・I層	〃	縄文(L系)→沈線	〃		〃		〃
399	CⅢ h ₂ ・I層	〃	縄文(R系)→沈線	〃		〃		67
400	EⅢ h ₂ ・II層	〃	縄文(L系)→沈線	〃		〃		〃
401	EⅢ d ₂ ・I層	〃	〃	〃		〃		〃
402	CⅢ d ₂ ・I層	〃	縄文(L系)→沈線→ナデ	〃		〃		67
403	CⅢ j ₂ ・I層	〃	縄文(R系)→沈線	〃		〃		〃
404	CⅢ j ₂ ・I層	〃	縄文(L系)→沈線→ナデ	〃		〃		66
405	CⅢ h ₂ ・I層	〃	縄文(L系)→沈線	〃		〃		〃
406	CⅢ i ₂ ・I層	〃	縄文(L系)→沈線→ミダキ	〃		〃		〃

第94図 縄文土器(10)



№	地点・層位	器種	部位	器形 / 外面	内面	出土・分期	備考	図収
407	石田e ₁ ・I層	深鉢	胴部	沈線→縄文(LR)→ミダキ	ミダキ	Ⅱ-2(Ⅱ)-⑤		68
408	DⅡI ₁ ・I ₁ 層	#	#	沈線→縄文(RL)→ミダキ	ナデ→ミダキ	#		
409	IⅡI ₁ ・I層	罎	口縁部	沈線→縄文(RRL)→網文		弥生土器		68
410	IⅡI ₁ ・I層	#	#	#	ナデ	#		#
411	IⅡI ₁ ・II層	#	胴部	#	#	#		#
412	IⅡI ₁ ・II層	#	#	沈線→縄文(?)→刺突	ミダキ	#		#
413	IⅡI ₁ ・II層	#	#	沈線→縄文(RRL?)	#	#		#
414	DⅡI ₁ ・I層	#	#	沈線→縄文(RRL)	ナデ	#		#
415	IⅡI ₁ ・II層	#	#	#	#	#		68
416	DⅡI ₁ ・II層	#	#	縄文(附加綫?)	#	#		#
417	IⅡI ₁ ・II層	#	#	縄文(RRL)	ナデ・ミダキ	#		#
418	DⅡI ₁ →I佐埋土	#	#	#	#	#		#
419	IⅡI ₁ ・II層	#	#	#	ナデ	#		68

第95図 縄文土器(11)・弥生土器

〈施文〉口縁部では横位回転、頸部から体部下半では斜位回転の縄文を地文とする。体部では縦縞状を呈する。口縁部と頸部は、浅い沈線2本を平行にひいた後、向かって右斜め上・下方向から交互に刺突し区画される。縄文施文はその後である。体部に渦状のモチーフの描かれるものがある。口唇にも縄文が施文される。

〈色調・胎土など〉明黄褐色を呈する。胎土に特に特徴的な混入物は認められない。内面調整はほとんどが不明瞭なナデである。

〈相当する型式名〉以上の特徴をもつ土器群は広義の天王山式に相当する。天王山式は岩手県内では常盤式・赤穴式に細分されている。交互刺突の手法、縄文の施文方法は後者の特徴により近似する。

3. 剥片石器

剥片を素材とした石器を一括する。従来の定義・名称どおり、石鏃・石錐・石匙・石筥・スクレイパーに分類する。また、使用痕のある剥片とピエス=エスキューについてもこの項で記述する。なお、打製石斧の中で剥片素材のものがある可能性もあるが、ここではそれを含めない。

(1) 石鏃 (第96図～第98図、図版69)

34点出土している。分布はDⅢ区・EⅢ区・GⅡ区・GⅢ区に集中する。

有茎・無茎とも存在する。第97図第448・449、第98図453といった比較的大形の石器もこの項に含めている。

ほとんどが剥片を素材としていると考えられる。片面にやや広い剝離面を残すものも多く見られるが、主要剝離面であるかどうか判断することが困難である。従って、素材となった剥片の形状は不明である。稀に小礫を素材としている。

34点中、先端の欠損するもの11点、基部の欠損するもの5点で、前者は後者の2倍強である。一部に加熱の痕跡を有するものがあるが、アスファルト等の付着が認められるものは存在しない。

(2) 石錐 (第98図、図版69)

6点出土している。調査1区・調査2区北地区からの出土である。

素材は剥片であると考えられる。一部に自然面を有している第98図455・457・458は、小礫をバイポーラーテクニックによって作出したピエス=エスキューを素材としていると考えられる。

刃部は、表裏から2次調整が行われた場合その断面形は四辺形となり、一方の面からのみもしくは裏面からの調整が浅い場合、断面形は三角形を呈している。

3点は刃部先端が欠失しているが、使用によるものであるか、廃棄後の自然作用によるもの

であるか判断できない。いずれも欠失後の再調整は認められない。

(3) 石匙 (第98図・第99図、図版70)

16点出土している。DⅢ区6点、EⅢ区3点、FⅢ区3点、GⅢ区2点、HⅠ区2点の出土である。

縦形、横形ともに出土している。つまみ部の作出について、明瞭なノッチの入られるものと、不明瞭なものが存在する。大部分が縁辺の1辺以上に2次調整が施され刃部が形成されるが、それが顕著でないものも存在している(第98図462、第99図469)。素材は剥片が用いられるものが多く、2次調整は剥片背面を中心に行われ、主要剥離面が広く残される場合が多い。稀に扁平な礫、ピエス・エスキューを素材とするものが存在する。つまみ部を中心に、熱作用による変化が見られるものがある。

欠損しているものは、この項に含めた第99図479の1点のみである。刃部のみの残存の場合、スクレイパーに分類した石器との識別が困難になる。

(4) 石篋 (第100図、図版71)

3点出土している。DⅢ区・EⅢ区・FⅢ区に1点ずつ見られる。

扁平な礫を素材としているもの(第100図476)が1点見られるほかは、素材について不明である。ほかに、片面に自然面を有しているものがある。刃部は剥離によって形成され、研磨等は施されない。第100図478は、表裏とも長軸に沿って連続的な加撃が加えられ、素材の形態をとどめていない。

大きさの点から打製石斧とは区別されると考えられるが、両者の中間的なものについて技術形態学的観点から区別することは困難である。

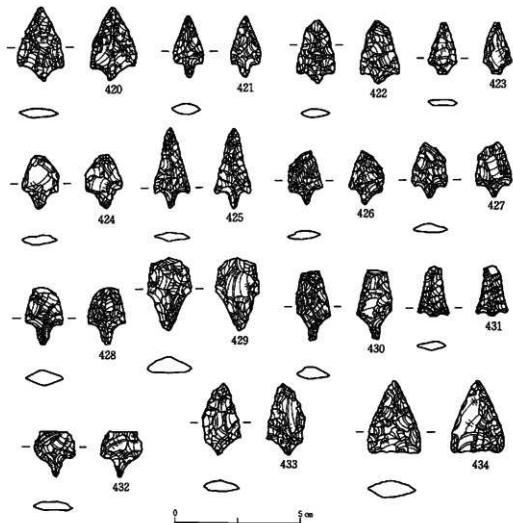
(5) 石槍 (第100図、図版71)

DⅢ区から1点出土している。剥片を素材とし、先端部が両面から加工されるほかは、裏面に広い剥離面を残している。重量が10gを超えるため、石鏃から区別し石槍として分類した。先端部がわずかに欠失する。

(6) スクレイパー (第100図～第105図、図版71～74)

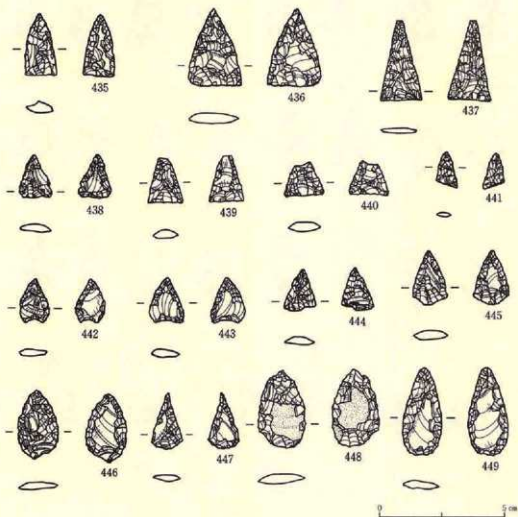
剥片を素材とし、スクレイパーエッジを有している石器を一括した。大形の礫を打割した剥片を素材としたもののうち、片面に自然面を広く有しているものは、後述すると礫器Ⅰ類と刃部形態が類似するが、刃部作出の加撃がより連続的に加えられている。分布はCⅢ区・DⅢ区に集中する傾向が見られる。43点出土している。

素材の剥片のうち、ピエス・エスキューを用いているものが多く認められる。しかし、その場合でも表面もしくは裏面に自然面を有しているものは少ない。多くの場合2次加工は縁辺部の刃部形成に限られ、素材が大きく変形されることはない。一部折損しているものも多いが、



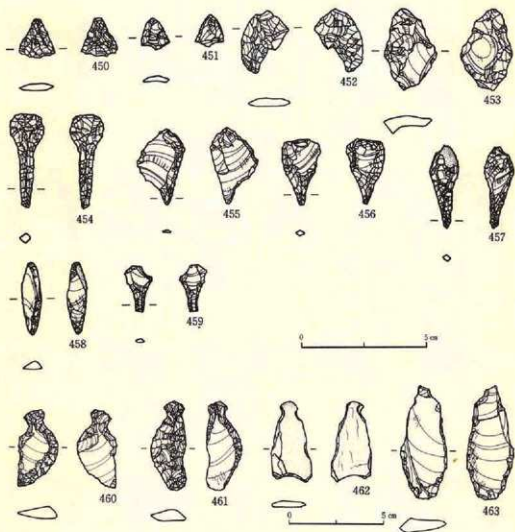
No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
420	D層-1住 燧土	石 鏃	29	18	5.0	1.75	燧岩質緑色燧岩	#	69
421	D層e, 1層	"	24	12	3.5	0.72	チャート	"	
422	E層a, 1層	"	25	15	4.0	1.2	燧岩質燧岩	"	
423	E層d, 1層	"	20	11	2.5	0.6	燧岩質燧岩	"	
424	E層d, 1層	"	21	15	4.0	1.06	チャート	"	
425	D層e, 1層	"	32	14	4.0	1.0	"	"	
426	D層f, 1層	"	21	14	3.0	0.83	チャート質緑色燧岩	"	
427	D層e, 1層	"	22	14	5.0	1.23	燧岩質燧岩燧岩	"	
428	E層d, 1層	"	23	15	6.0	1.5	燧岩	"	
429	E層d, 1層	"	29	17	6.0	2.8	チャート	"	
430	D層f, 1層	"	27	14	5.0	1.67	チャート質緑色燧岩	"	
431	D層f, 1層	"	19.5	13	3.5	0.57	燧岩質燧岩	"	
432	E層a, 1層	"	13	16	4.0	0.9	"	"	
433	D層c, 1層	"	28	14	5.0	1.72	チャート	"	
434	G層a, 1層	"	28	21	6.5	2.97	燧岩質燧岩燧岩	"	

第96図 剝片石器(1)



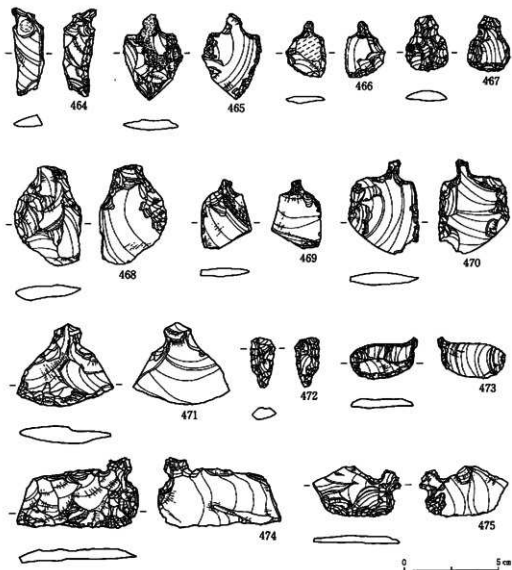
No.	地点・層位	器種	計測値・mm		重量：g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅				
435	I層F, II層	石 鏃	25	13	4.5	流紋岩質燧石凝灰岩		69
436	C層I, II層	"	31	21	4.8	チャート		"
437	GII-3住 埋土	"	32	17	4.0	燧石凝灰岩		"
438	D層I, II層	"	17	13	3.0	珩質燧石		"
439	GII-1住 埋土	"	18	14	4.0	チャート質燧石		"
440	GII, III層	"	13	16	4.0	流紋岩質燧石凝灰岩		"
441	D層C, I層	"	13	9	2.5	"		"
442	E層C, II層	"	17	12	3.0	燧石凝灰岩		"
443	III-2住 埋土下部	"	17	14	3.0	チャート質燧石		"
444	D層I, II層	"	16	12	3.0	珩質燧石		"
445	E層E, III層下部	"	22	13	3.5	流紋岩質燧石凝灰岩		"
446	D層I, II層	"	27	16	4.0	燧石		"
447	GII-1住 常道部埋土	"	22	12	3.0	チャート質燧石		"
448	D層I, I層	"	34	19	5.0	燧石凝灰岩	自然出	"
449	DIII-3住 埋土上部	"	35	16	3.0	チャート質燧石		"

第97図 剝片石器(2)



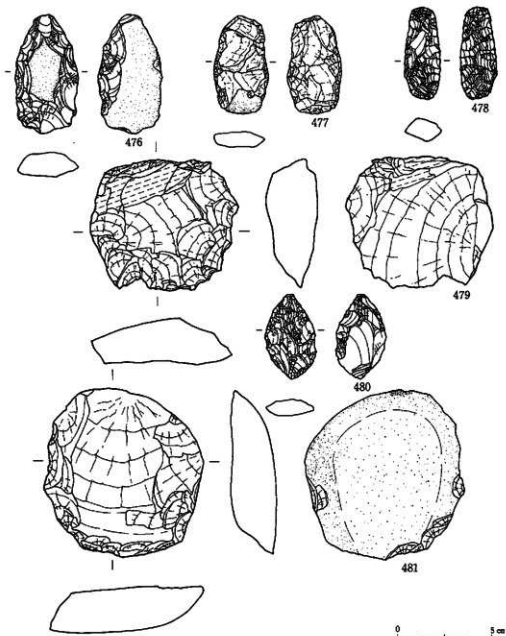
No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
450	F層-2位 カマツ	石 鏃	15	14	3.0	0.55	チャート質粘板岩		69
451	D層 e ₁ 1層	石 鏃	12	11	3.5	0.26	流紋岩質粘板岩		70
452	C層 h ₁ 目層	石 鏃	24	18	4.0	1.25	砂岩		71
453	E層 e ₁ 目層	石 鏃	21	32	6.0	3.14	輝綠凝灰岩		72
454	C層 h ₁ 1層	石 鏃	38	14	6.0	1.93	海質粘板岩		73
455	D層 d ₁ 1層	石 鏃	30	17	3.0	1.5	輝綠凝灰岩		74
456	D層 f ₁ 目層	石 鏃	26	15	4.0	1.55	武蔵台質粘板岩		75
457	A層区 1層	石 鏃	33	12	7.0	1.66	海質粘板岩		76
458	E層区 目層	石 鏃	29	13	4.0	0.9	粘板岩	ビュス・エスケーニユ素材	77
459	D層-4位 埋土上部	石 鏃	19	10	3.0	0.48	輝綠凝灰岩		78
460	F層区 1層	石 鏃	41	21	7.0	5.2	粘板岩		79
461	H I e ₁ 1層	石 鏃	48	18	6.0	4.65	地質調査隊粘板岩		80
462	H I c ₁ 目層	石 鏃	40	21	3.0	3.75	粘板岩		81
463	F層 d ₁ 目層	石 鏃	60	24	8.0	11.35	流紋岩質粘板岩		82

第98図 剥片石器(3)



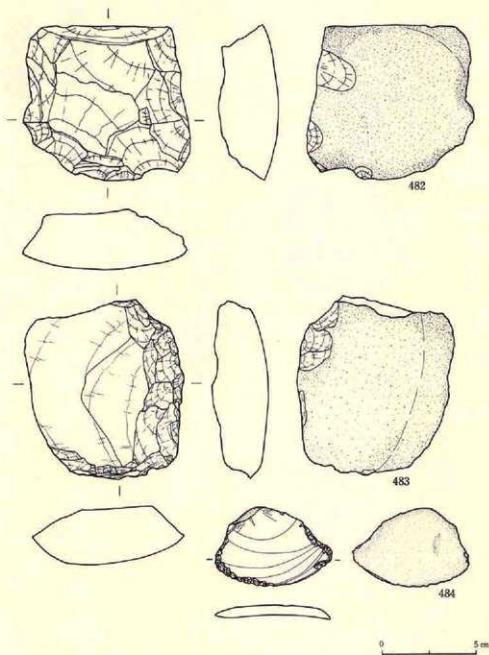
No.	地点・層位	種類	計測値: cm			重量: g	石材名	特徴・備考	図録
			長さ	幅	厚さ				
464	DⅢb, I層	石 匙	46	16	6.0	4.3	珸質粘板岩		20
465	GⅢe, II層	"	46	31	6.0	7.0	珸質粘板岩		"
466	GⅢe, II層	"	30	21	3.0	2.25	珸質粘板岩		"
467	EⅢd, I層	"	29	22	5.0	3.2	チャート		"
468	DⅢa, I層	"	52	35	8.0	15.3	流紋岩質珸質粘板岩		"
469	DⅢ-5位 掘り方埋土	"	35	27	6.0	5.0	チャート		"
470	DⅢf, II層	"	50	37	6.0	12.4	流紋岩質珸質粘板岩		"
471	FⅢb, II層下部	"	43	51	9.0	17.7	粘板岩		"
472	EⅢd, I層	"	26	13	7.0	2.2	珸質粘板岩		"
473	FⅢf, I層	"	19	34	5.0	3.67	流紋岩質珸質粘板岩		"
474	DⅢj, I層	"	36	63	7.0	17.43	粘板岩		"
475	DⅢh, II層	"	26	47	4.0	6.3	流紋岩質珸質粘板岩		"

第99図 剥片石器(4)



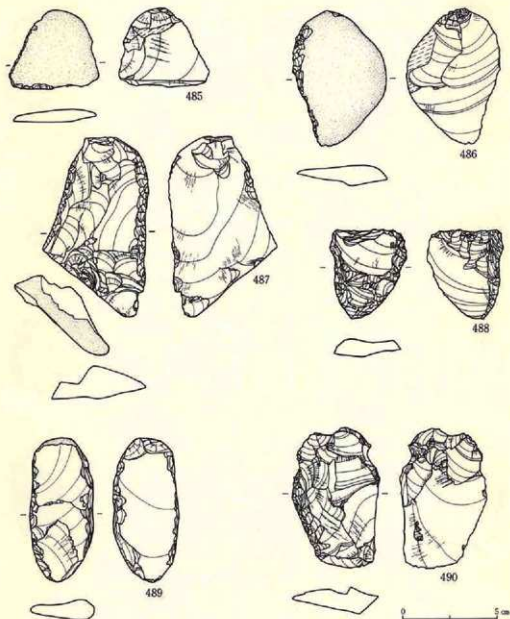
No.	地点・層位	器種	計測値:cm			重量:g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
476	FⅡ-2 後 埋土上部	石 片	63	34	12.0	33.42	ホルンフェルス		71
477	DⅡi, 埋土下部	石 片	32	29	8.0	14.00	埋土燧石		71
478	EⅡd, 1層	石 片	48	19	11.0	11.73	燧石		71
479	CⅡh, 埋土	ステレイベー	69	75	22.0	183.0	石		71
480	DⅡc, 1層	石 片	45	26	9.0	19.96	チャート		71
481	GⅡc, 埋土	ステレイベー	88	82	24.0	230.0	ホルンフェルス		71

第100図 剥片石器(5)・礫石器(1)



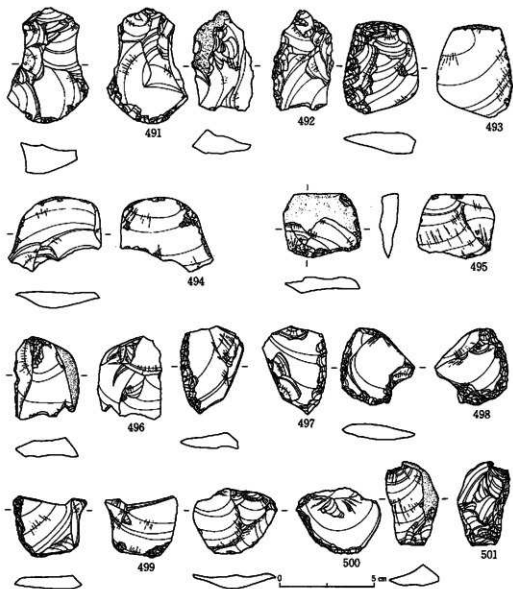
No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
482	GⅢ a. II層	スクレイパー	87	88	32.0	340.0	流紋岩		21
483	DⅢ b. I層	?	94	81	24.0	300.0	?		?
484	DⅢ c. II層下部	?	42	62	9.0	21.83	流紋岩質緑泥岩凝灰岩		?

第101図 剥片石器(6)・礫石器(2)



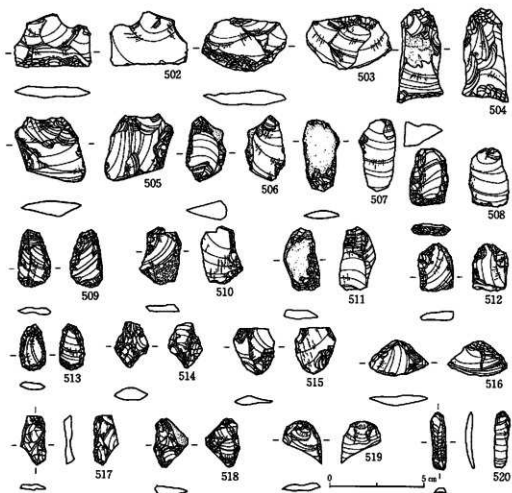
No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
485	DIII * _a 1層	スクレイパー	42	48	8.0	36.85	チャート		71
486	DIII * _{aa} 1層	〃	72	50	12.0	13.15	凝灰岩質燧石		〃
487	DIII * _c Ⅱ層	〃	94	55	18.0	80.0	粘板岩		72
488	CIII * _a Ⅱ層	〃	47	40	9.0	36.9	凝灰岩質燧石		71
489	CIII * _c 1層	〃	77	34	11.0	33.45	地質調査所		72
490	DIII * _c 1層	〃	74	46	13.0	86.9	粘板岩		〃

第102図 剝片石器(7)



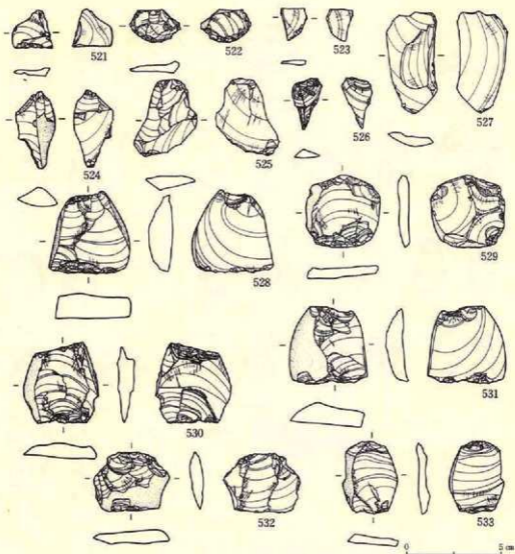
No	地点・層位	器種	計測値: cm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
491	D田J. I層	スクレイパー	61	42	17.0	36.23	凝灰質燧石		72
492	D田-1住 埋土	〃	54	31	14.0	17.26	チャート		
493	D田-3住 埋土	〃	48	40	11.0	25.88	燧石		72
494	C田G. II層	〃	34	46	9.0	14.46	燧石		
495	C田I. II層	〃	34	40	9.0	12.45	凝灰質燧石		72
496	C田J. I層	〃	42	34	10.0	15.7	〃		〃
497	C田h. II層	〃	44	33	8.0	14.8	〃		〃
498	D田-6住 埋土	〃	49	39	8.8	12.7	チャート		73
499	B田h. I層	〃	30	39	7.0	9.46	凝灰質燧石		〃
500	D田-4住 埋土~床面	〃	35	45	7.0	10.06	チャート燧石		〃
501	E田a. I層	〃	44	26	12.0	11.76	凝灰質燧石	自然面。ピレス・エスカーユ層	〃

第103図 剥片石器(8)



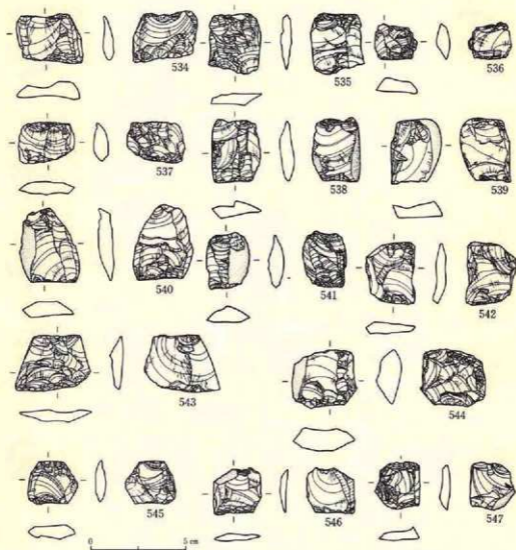
No	地点・層位	層位	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	別表
			長さ	幅	厚さ				
502	I 回 h. 1層	スタインバー	28	40	7.0	7.8	粘板岩		73
503	E 回 a. 1層	#	28	44	7.0	19.38	#		#
504	D 回 a. 1層下部	#	47	22	13.0	14.55	チャート		#
505	D 回 -4 住 塚土	#	33	32	9.0	8.86	珪質凝灰岩		#
506	D 回 e. 1層	#	34	21	10.0	3.09	チャート	自然割	#
507	C 回 e. 1層	#	38	19	5.0	3.2	流紋岩質凝結凝灰岩		#
508	C 回 a. 1層	#	30	28	4.8	3.28	#		#
509	F 回 e. 1層	#	30	17	5.0	2.35	#		#
510	D 回 f. 1層	#	31	22	4.8	2.1	#		#
511	D 回 f. 1層	#	33	18	5.0	3.8	チャート	自然割	#
512	E 回 f. 1層	#	24	18	4.0	3.84	粘板岩	#, G 回 f. -3 層土	#
513	I 回 f. 1層	#	24	13	4.0	1.64	流紋岩質凝結凝灰岩		#
514	D 回 f. 1層	#	25	18	7.8	3.25	#		#
515	C 回 a. 1層下部	#	25	22	4.8	2.45	#		#
516	D 回 f. 1層	#	19	31	6.8	2.65	#		#
517	D 回 e. 1層	#	26	13	9.8	1.62	凝結凝灰岩		74
518	G 回 a. 1層	#	26	17	4.8	1.95	流紋岩質凝結凝灰岩		#
519	D 回 a. 1層	#	17	20	3.8	1.25	珪質粘板岩		#
520	G 回 -1 住 塚土上部	#	30	8.8	3.8	0.8	珪質凝灰岩		#

第104図 剥片石器(9)



No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
521	DⅢ-5位 埋土	スクレイパー	29	29	5.0	1.2	凝灰岩質燧石		74
522	DⅢc, I層	片	17	27	6.0	2.6	埋藏粉砂岩	自然面	片
523	CⅢe, I層	埋藏層のあふ片	17	14	2.6	0.6	片		
524	GⅢc, II層	片	41	21	11.0	5.42	凝灰岩質粗粒燧石	自然面	
525	EⅢc, II層	片	41	33	8.0	8.3	埋藏粉砂岩		
526	CⅢi, I層	片	25	16	4.0	1.13	埋藏粉砂岩		74
527	DⅢR, I層	片	54	26	5.0	8.15	凝灰岩質粗粒燧石		
528	DⅢ-4位 埋土~灰面	ピレス・スクリュー	43	42	14.0	32.05	埋藏燧石	自然面, P-1	74
529	DⅢ-6位 埋土	片	39	39	6.0	14.12	埋藏燧石	片, 片, 片	片
530	DⅢc, II層下部	片	43	39	10.0	16.94	凝灰岩質粗粒燧石	片, 片, 片	片
531	DⅢ-4位 埋土~灰面	片	41	41	11.0	22.6	埋藏燧石	片, 片, 片	片
532	EⅢc, I層	片	31	40	8.0	10.55	チャート	片, 片, 片	片
533	DⅢi, II層	片	38	29	8.0	7.9	凝灰岩質粗粒燧石	片, 片, 片	片

第105図 剥片石器(10)



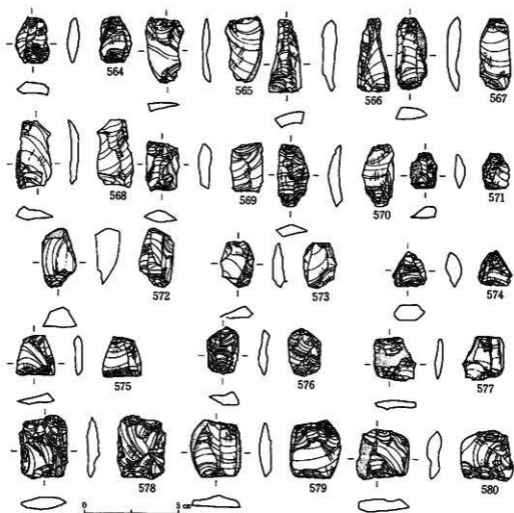
No.	地点・層位	器種	計測値: mm		重量: g	石材名	特徴・備考	図版	
			長さ	厚さ					
534	D層Ⅰ。I層	刮削片	26	33	10.0	8.89	流紋岩質粉砂岩質灰岩	自然面。P-1	74
535	C層d。II層	刮削片	22	28	6.0	6.6	流紋岩質粉砂岩質灰岩	自然面。	74
536	D層Ⅰ。I層	刮削片	19	22	8.0	3.26	流紋岩質粉砂岩質灰岩	自然面。	74
537	G層c。II層	刮削片	21	29	7.0	5.5	流紋岩質粉砂岩質灰岩	自然面。	74
538	D層-1位 埋土	刮削片	34	25	8.0	7.53	流紋岩質粉砂岩質灰岩	自然面。	74
539	D層-6位 埋土下部-灰土	刮削片	33	26	9.0	10.5	輝綠岩質粉砂岩質灰岩	自然面。	74
540	C層a。I層	刮削片	39	30	8.0	10.76	流紋岩質粉砂岩質灰岩	自然面。	75
541	G層c。II層	刮削片	28	23	8.0	5.7	粘板岩	自然面。	74
542	D層-1位 カマド下	刮削片	32	26	7.0	6.4	凝灰岩質粉砂岩質灰岩	自然面。	74
543	D層a。II層下部	刮削片	30	37	7.0	8.0	流紋岩質粉砂岩質灰岩	自然面。	74
544	F層-4位 埋土上部	刮削片	34	29	13.0	16.5	チャート質粘板岩	自然面。	74
545	G層-1位 埋土上部	刮削片	23	26	7.0	3.75	流紋岩質粉砂岩質灰岩	自然面。	74
546	C層Ⅰ。I層	刮削片	23	25	4.0	2.95	粘板岩	自然面。	74
547	D層Ⅰ。II層	刮削片	25	24	6.0	4.3	流紋岩質粉砂岩質灰岩	自然面。	74

第106図 剥片石器(11)



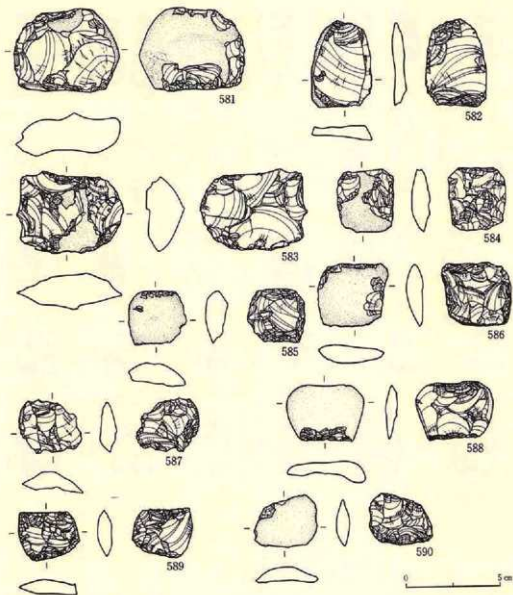
No.	地点・层位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
548	I Ⅲ a, II 層	石片	34	27	11.0	9.1	炭酸鈣質燧石	P-1	75
549	D Ⅲ c, I 層	石片	22	23	5.0	2.9	瑤青粘板岩	〃	〃
550	D Ⅲ a, II 層下部	石片	38	24	8.0	8.23	炭酸鈣質燧石	〃	〃
551	I Ⅲ a, II 層	石片	35	22	14.0	10.04	瑤青粘板岩	〃	〃
552	D Ⅲ j, II 層	石片	30	22	7.0	4.66	炭酸鈣質燧石	自然質	〃
553	G Ⅲ b, II 層	石片	26	21	9.0	4.76	〃	〃	〃
554	I Ⅲ e, II 層	石片	35	28	13.0	9.1	瑤青粘板岩	〃	〃
555	F Ⅲ-4 層 礫土上部	石片	34	28	13.0	16.5	チャート質粘板岩	〃	〃
556	G Ⅲ a, II 層	石片	24	17	6.0	2.3	炭酸鈣質燧石	〃	〃
557	D Ⅲ-3 層 礫土	石片	29	20	4.0	2.84	燧石質粘板岩	〃	〃
558	D Ⅲ j, II 層	石片	29	21	7.0	4.45	炭酸鈣質燧石	〃	〃
559	I Ⅲ b, II 層	石片	33	22	8.0	5.75	瑤青粘板岩	〃	〃
560	G Ⅲ-1 層 礫土上部	石片	21	18	6.0	2.1	チャート質粘板岩	〃	〃
561	E Ⅲ f, II 層下部	石片	29	14	9.0	3.45	瑤青粘板岩	自然質	〃
562	D Ⅲ-4 層 礫土	石片	29	14	9.0	3.46	瑤青粘板岩	〃	〃
563	D Ⅲ j, I 層	石片	23	17	7.0	2.24	瑤青粘板岩	自然質	〃

第107図 剥片石器(12)



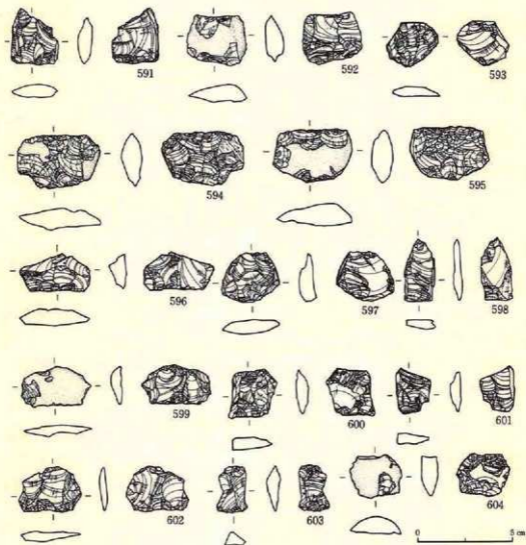
No.	地点・附記	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
564	DⅡi. 1層	▽ 王 ₁ 天 ₂ 山 ₃ → ₄ △	24	17	5.0	2.95	凝灰岩質極細粒凝灰岩	P-1	76
565	DⅡe. 1層	※	34	20	4.0	3.25	※	自然産。	※
566	DⅡi. 日層下部	※	39	16	7.0	5.5	輝綠岩質	※	※
567	DⅡi. 日層	※	38	26	7.0	5.0	凝灰岩質極細粒凝灰岩	自然産。	※
568	FⅡ-2位 凝土	※	35	19	6.0	3.95	チャート質凝灰岩	※	※
569	DⅡe. 日層	※	26	17	6.0	2.85	凝灰岩質極細粒凝灰岩	※	※
570	IⅡe. 日層	※	32	17	5.0	2.75	珪質粘板岩	※	※
571	DⅡe. 1層	※	18	14	6.0	1.54	※	※	※
572	EⅡd. 1層	※	31	18	13.0	7.55	凝灰岩質極細粒凝灰岩	自然産。	※
573	DⅡi. 日層	※	34	17	6.8	2.47	珪質粘板岩	※	※
574	DⅡj. 1層	※	18	17	9.0	2.78	輝綠岩質	※	※
575	DⅡ-4位 凝土~灰面	※	21	31	5.0	2.1	凝灰岩質粘板岩	※	※
576	FⅡh. 日層	※	25	17	6.0	2.2	凝灰岩質極細粒凝灰岩	※	※
577	DⅡi. 1層	※	23	22	4.5	2.16	※	自然産。	※
578	DⅡ-1位 c.v.f上	※	33	25	8.0	5.9	珪質凝灰岩	※	※
579	DⅡh~c.付設 1層	※	30	27	6.0	6.87	凝灰岩質極細粒凝灰岩	自然産。	※
580	DⅡe. 日層	※	25	27	7.0	5.8	自然産。	※	※

第108図 剥片石器(13)



No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
581	DⅢ-1 住 埋土	空ノ文・ 五ノ字一五	44	56	24.0	54.75	珉質燧石	自然面。P-2	76
582	EⅢ a, I 層	〃	46	32	7.0	14.05	斑紋岩質極細粒燧石	〃	〃
583	IⅢ b, II 層	〃	42	57	21.0	47.4	〃	〃	〃
584	DⅢ 1, II 層下部	〃	34	29	10.0	11.3	燧石	〃	〃
585	EⅢ a, II 層	〃	28	31	11.0	12.06	斑紋岩質極細粒燧石	〃	〃
586	CⅢ c, II 層	〃	34	36	10.0	15.2	輝綠岩質	〃	77
587	EⅢ d, I 層	〃	28	33	8.0	7.5	斑紋岩質極細粒燧石	〃	〃
588	DⅢ-4 住 埋土	〃	30	41	11.0	14.9	珉質燧石	自然面。	〃
589	DⅢ b, I 層	〃	25	31	7.0	7.1	斑紋岩質極細粒燧石	〃	〃
590	FⅢ h, II 層下部	〃	26	33	7.0	7.6	斑質粘板岩	自然面。	〃

第109図 剥片石器(14)



No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
591	C III j, 1層	刮片	29	25	8.0	5.62	瑤質粉砂岩	自然面。P-2	77
592	C III c, 耳簪	刮片	26	31	10.0	8.26	流紋岩質燧石層状灰岩	" "	"
593	F III c, 耳簪	刮片	22	34	5.0	3.5	瑤質粉砂岩	" "	"
594	D III j, 耳簪	刮片	38	44	10.5	13.84	粘板岩	自然面。	"
595	C III i, 耳簪	刮片	41	38	11.0	16.35	チャート質褐色層状岩	" "	"
596	D III-6位 埋土~灰面	刮片	37	19	10.0	6.15	チャート質粘板岩	" "	"
597	I III f, 耳簪	刮片	26	30	7.0	6.45	流紋岩質燧石層状灰岩	自然面。	"
598	D III-5位 埋土	刮片	32	16	6.0	2.8	燧石層状灰岩	" "	"
599	C III k, 1層	刮片	30	36	7.0	4.68	流紋岩質燧石層状灰岩	自然面。	"
600	D III k, 1層	刮片	24	23	7.0	4.6	瑤質粉砂岩	" "	"
601	I III k, 耳簪	刮片	34	18	6.0	2.54	流紋岩質燧石層状灰岩	自然面。	"
602	D III h i, 耳簪	刮片	34	31	5.0	3.6	燧石層状灰岩	" "	"
603	G III-1位 埋土下部	刮片	34	16	7.0	2.2	瑤質燧石岩	" "	"
604	F III-4位 埋土下部	刮片	22	27	10.0	6.55	チャート質粘板岩	自然面。	"

第110図 剝片石器 (15)

刃部作出との先後関係が明らかなものでは、刃部形成後の折りとりもしくは折れである。刃角は45度～60度に集中する。

(7) 使用痕のある剥片 (第105図、図版74)

剥片の中で、切截などの使用の際に生じたと考えられる微細剥離痕を有しているものを一括し、その一部を掲載した。ただし、微細剥離痕の生成要因については使用によるものであるかどうか判別し難いものが多く、また微細剥離痕以外の使用痕については識別が困難であるため、本分類は便宜的なものである。

(8) ビース・エスキュー (第105図～第110図、図版74～77)

バイポーラーテクニックによって作出されたと考えられる剥片のうち、岡村 (1983) の显示する特徴を有しているものを一括する。これらのうち、表面もしくは裏面に先行剥離面または主要剥離面以外の剥離が認められるものをP-2とし、先行剥離面と主要剥離面のみ認められるものをP-1と分類する。ただし、これは最終形態の観察にもとづくもので、接合等の技術的な復元を行った結果にもとづいたものではない。

77点出土している。その50%以上がDIII区に集中する。CIII、EIII、FIII、GII、III区等でもそれぞれ少量出土している。

これらのうち、50%以上にあたる39点には表面または裏面に自然面を残しており、ビース・エスキューの剥離された石核が概して小さいものであったことを示している。また、上下両辺にはつおれ痕を有しているものが多いが、剥片剥離の際のものか使用によるものであるか明らかでない場合がほとんどである。側面に、微細剥離痕の観察されるものがある。剪断面も必ずしも明瞭でない例が存在する。一部折損している例が少数見られるが、大部分についてはそのような現象は認められない。

5. 石斧・礫石器

打製石斧・磨製石斧・礫器I類・礫器II類・磨石・凹石・敲石・砥石等を本項で扱う。礫器III類として特に分類したものと、磨石+凹石というような複合石器も本項で扱うこととする。

(1) 打製石斧 (第111図～第115図、図版78・79)

石斧のうち、(1)研磨による刃部整形を伴わないもの、(2)研磨による調整の後加撃によって刃部の作出がなされるものおよび(3)最終的に刃部付近の一部が研磨されているものの3者を含めた。(2)・(3)の識別は困難である場合も多い。また、後述する磨製石斧のうち、使用によって生じたと考えられる剥離痕を有するものとの識別も容易ではない。

31点出土している。CIII区からHI区まで広く分布しているが、特に偏在する傾向はない。

片面に自然面ないし研磨面を有し、刃部が片刃となるものが多い。素材にはやや扁平で細長

い礫が用いられている。第112図617のように剥片素材と考えられるものもあるが、研磨面を有していることと先後関係から磨製石斧の再加工と考えられる。

なお、刃部が弧状となり連続的な剥離が施されるいわゆる円盤状打製石器第111図610、第113図627の存在は注意される必要がある。

(2) 磨製石斧 (第115図・第116図、図版79・80)

18点出土している。CⅢ区7点、DⅢ区2点、EⅢ区5点、FⅢ区1点、GⅢ区1点、HⅡ区2点である。調査2区北地区にやや多く分布する。

基部の欠損するものと刃部の欠損するものがある。後者については打製石斧の項の分類規準に従って、打製石斧に分類されるべきものが含まれている可能性がある。刃部は片刃状のものと両刃のものとの両者が存在する。擦り切り等によって作出されたものは存在しない。

(3) 礫器Ⅰ類 (第117図～第123図、図版80～83)

円礫または楕円形状の礫の一端に、片側から連続的な剥離を加えることによって刃部を形成しているものを一括した。特に、チョッパー状の形態のものを礫器Ⅰ-0、凹石と複合されているものを礫器Ⅰ-1、敲石と複合されているものと礫器Ⅰ-2、凹石・敲石の両者と複合されているものを礫器Ⅰ-3として細分する。

30点出土している。FⅢおよびGⅡ・GⅢの各区から約70%が出土している。

礫の一端に刃部を形成しただけのものが多く、分割した礫を素材としていると考えられるもの(第117図658・第119図665・第121図673・675)や、周縁部を多少連続的に調整していると考えられるもの(第121図676など)も存在する。刃角は概して大きい。複合した石器の場合、その先後関係は不明である。

(2) 礫器Ⅱ類 (第124図、図版83)

礫の一端に両側から加撃を加え刃部を作出したものである。ただし刃部作出は交互剥離には依っていない。従って、礫器Ⅰ-0と同様刃部断面形は片刃状を呈する。第124図687のみは分割礫を素材としている。凹石等との複合例はない。

4点出土し、調査2区全域に点在している。

(3) 礫器Ⅲ類 (第124図～第126図、図版83・84)

礫器Ⅰ類に類似するが、刃部の形成がきわめて非連続的な剥離により、しばしばつぶれ痕を有しているものを一括した。従って刃角は80度以上の大きなものとなる。このうち、単独のものを礫器Ⅲ-0、凹石と複合されるものを礫器Ⅲ-1、敲石と複合されるものを礫器Ⅲ-2として分類する。

8点出土している。EⅢ区～GⅢ区からそのほとんどが出土している。

一部分割した礫を使用していると考えられるものがある(第125図690・692)。複合した石器

の場合、その先後関係は明らかではない。

(4) 磨石 (第126図～第131図, 図版84～86)

礫の一部もしくは全面を研磨した石器を一括する。その形態から、断面が三角形状を呈しその側面が研磨されているものを磨石Ⅰ類、それ以外のものを磨石Ⅱ類と分類する。さらに、それらと凹石・敲石・凹石+敲石と複合されているものをそれぞれ1、2、3として細分する。

磨石Ⅰ類は26点出土している。DⅢ区からIⅢ区まで幅広く分布している。FⅢ区に10点とやや集中する。

これらのうち、ほぼ原形をとどめていて考えられるものはわずか7点であり、他の19点は一部またはその大部分を欠失している。しかも、相互に接合する例はない。複合した石器の場合、その先後関係は明らかでない。

磨石Ⅱ類は4点出土している。調査2区に散在する。

扁平な円礫を素材としている。敲石として使用される場合、作業面が研磨され作出された後に使用痕が認められる。凹石との複合の場合も、研磨が先行していると考えられる。

(5) 凹石 (第131図～第136図, 図版86～88)

礫の片面もしくは両面に凹痕を有する石器を一括した。ただし、礫石器Ⅰ～Ⅲ、および磨石Ⅰ～Ⅱ類と複合されているものは除外している。それらの中に最終的に凹痕が残されたものが一部存在していることは既述のとおりである。凹石のうち、単独のものを凹石-0、敲石と複合されるものを凹石-1として分類している。

29点出土している。CⅢ区～IⅢ区にかけて広く分布し、特に偏在する傾向は認められない。

両面に凹痕を有するものが多い。凹痕が一面に複数存在する例もある。(第133図734・735など)。第132図729は、一方に剝離面を有している。一部を欠損するものは12点である。敲痕は縁辺に認められる。

(6) 敲石 (第136図～第138図, 図版88・89)

礫の一部に敲痕を有する石器を一括した。ただし、礫器Ⅰ類～Ⅲ類・磨石Ⅰ～Ⅱ類・凹石と複合されているものは除外している。

敲痕はやや扁平な礫の側縁に形成され、多くの場合表面が粗くなりつおれ痕状を呈するが、凹石のように明瞭に凹状をなすことはない。第138図764は、円礫に対して加撃を加え多少の調整が施されるものであるが、敲痕は側縁に認められる。

(7) 砥石 (第138図, 図版89)

1点出土している。礫の一面に2条の溝が認められる。

以上、遺構内外出土の石器について概略を記した。次にいくつかの点を付記する。

①凹石と敲石について：複合石器のそれぞれの形態を単位としてその個数を重複算出した場合、凹石は49点、敲石は18点となる。

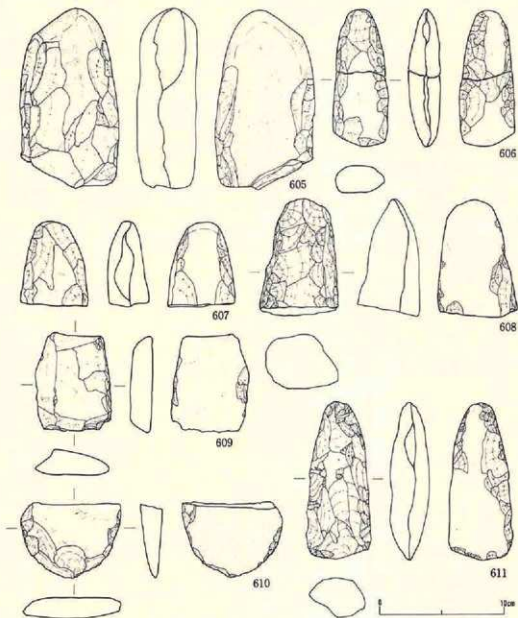
②個々の石器の時期について：個々の石器の時期を時定することは困難である。ただ、礫器Ⅰ類～Ⅲ類として分類した石器は、前期前葉の住居跡からの出土例や分布を考慮に入れると、跡の例器Ⅰ群に共伴することが考えられる。また磨石Ⅰ類としたものも、岩手県飛鳥台地Ⅰ遺跡の例などから、縄文土器Ⅰ群に共伴するものであろう。

③切片石器の分類について：Ⅳ章とⅤ章では石器の分類を異にしている。Ⅳ章では不定形石器の用語を用い、スクレーパーとはしていない。

④石材と産地は表3に、器種別石材百分比は図2にまとめている。

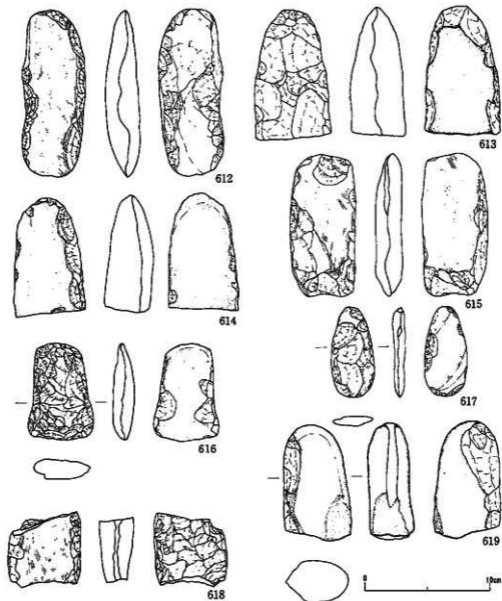
石 材 名		産 地	
凝 灰 岩	凝灰岩	北 上 山 地	中 世 界
	チャート質凝灰岩		
	チャート質淡緑凝灰岩		
	流紋岩質極細粒凝灰岩		
	珪質凝灰岩		
輝緑凝灰岩			
安 山 岩	安山岩	北 上 山 地	中 世 界
	輝石安山岩		
	石英安山岩		
流 紋 岩	流紋岩	北 上 山 地	中 世 界
	玻璃質流紋岩		
泥 岩	凝灰質珪質泥岩	北 上 山 地	中 世 界
	凝灰質珪質泥岩	奥 羽 山 地	新第三系・中新統
砂 岩	硬砂岩	北 上 山 地	中 世 界
	アルコース砂岩		
チャート			
粘 板 岩	粘板岩	北 上 山 地	中 世 界
	チャート質粘板岩		
	珪質粘板岩		
粉 岩	粉岩	北 上 山 地	中 世 界
	長石母岩		
	輝石粉岩		
ホルンフェルス	粘板岩ホルンフェルス	北 上 山 地	中 世 界
閃 緑 岩	閃緑岩	北 上 山 地	中 世 界
	花崗閃緑岩		
半 花 崗 岩		北 上 山 地	中 世 界
斑 礫 岩		北 上 山 地	中 世 界
石 英 斑 岩		北 上 山 地	中 世 界
水 晶		北 上 山 地	中 世 界

表3 石材・産地一覧表



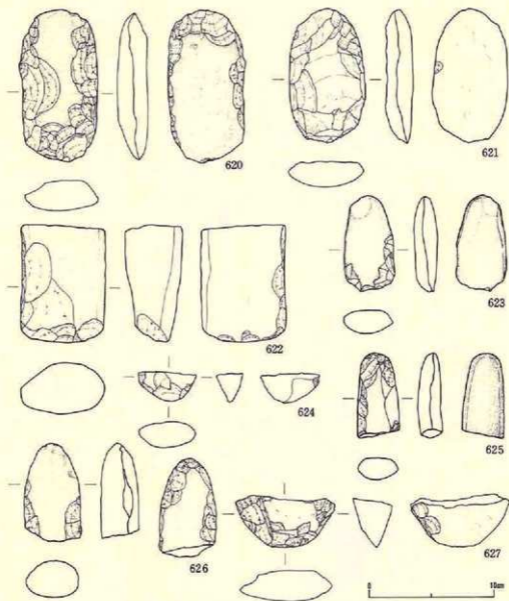
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図説
			長さ	幅	厚さ				
605	FIII a. 1層	打製石片	144	79	46	925	礫石安山岩		78
606	CIII c. II層	〃	109	44	23	170	礫石砂岩	〃	〃
607	FIII b. 1層	〃	68	53	23	156	硬砂岩	〃	〃
608	GIII f. II層	〃	93	63	49	360	〃	〃	78
609	GIII-1位 埋土	〃	78	62	20	130	熟砂岩	〃	〃
610	DIII i. 1層	〃	78	96	14	116	ホルンフェルス	〃	〃
611	FIII-2位 埋土	〃	126	52	31	260	焼燐質斑紋岩	〃	〃

第111図 礫石器(3)



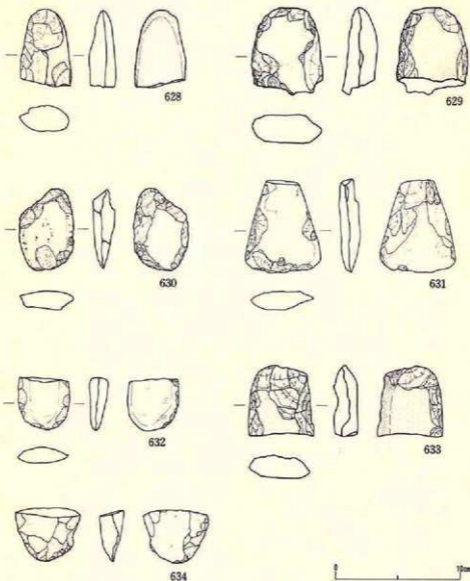
No	地点・層位	種類	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
612	EⅢa, I層下層	打製石片	133	51	27	285	燧石(灰山岩)		78
613	CⅢd, I層	"	103	61	43	263	"		78
614	CⅢh, II層	"	90	57	36	200	燧石		79
615	FⅢf, II層	"	111	52	22	220	"		"
616	IⅢf, I層	"	77	52	16	90	"		78
617	GⅢa, II層	"	72	34	16	46	不明		
618	DⅢa b, I層	"	51	56	23	120	燧石		
619	EⅢc, II層	"	88	53	35	295	燧石		

第112図 礫石器(4)



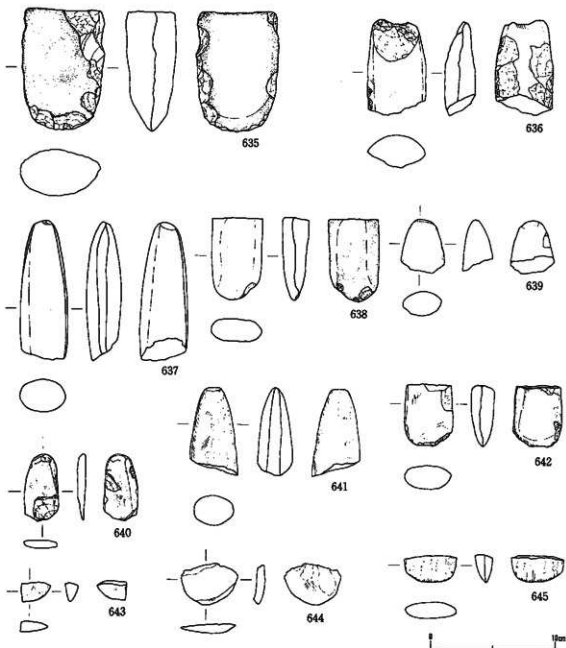
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
620	EⅡR, I層下部	打製石斧	90	82	23	280	硬砂岩		79
621	HⅡd, II層	〃	107	51	20	290	チャート質凝灰岩		〃
622	GⅡR, II層	〃	93	68	44	500	硬砂岩		〃
623	GⅡR, II層	〃	75	40	18	90	〃		〃
624	CⅡE, I層	〃	24	46	21	30	〃		〃
625	DⅡR, I層	〃	67	33	18	70	輝石角閃岩		〃
626	FⅡC, I層	〃	76	45	29	175	チャート質凝灰岩		〃
627	HⅡ-1位 埋土上部	〃	99	79	26	100	安山岩		〃

第113図 礫石器(5)



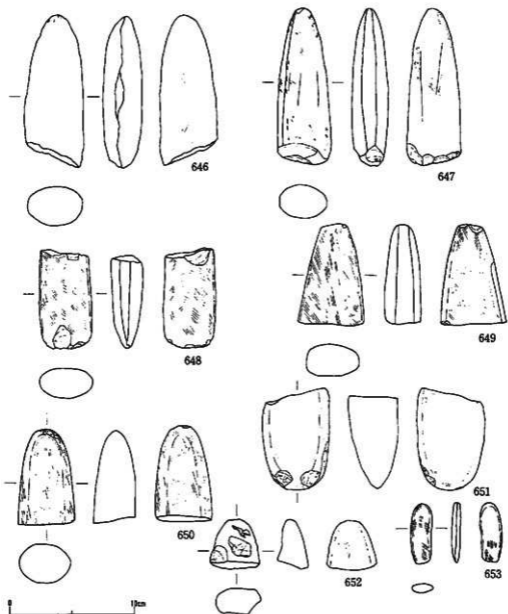
No.	地点・層位	器種	計測値(mm)			重量(g)	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
628	EⅡd, 1層	打製石斧	64	40	20	80	硬砂岩		
629	CⅡb, 1層	※	69	57	23	142	均岩		
630	DⅡa, 1層	※	82	43	14	60	硬砂岩		
631	EⅡa, 1層	※	74	60	15	85	※	79	
632	EⅡf, 1層	※	41	41	12	40	※		
633	CⅡc, 1層	※	35	33	16	95	ホルンフェルス		
634	CⅡe, 1層	※	42	36	15	50	硬砂岩		

第114図 礫石器(6)



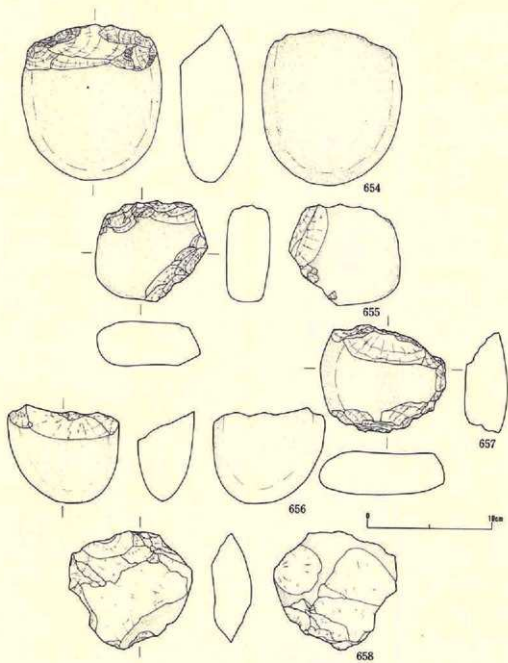
No	地点・層位	器種	計測値: cm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
635	CⅢh, I層	打製石片	95	66	40	400	硬砂岩		79
636	CⅢd, II層	磨製石片	76	47	25	125	硬砂岩		#
637	CⅢh, II層	#	112	36	27	170	輝石雲山岩		#
638	FⅢd, II層	#	65	40	13	110	硬砂岩		
639	HⅡb, I, 層	#	42	35	23	45	号岩		
640	EⅢa, I層	#	53	28	79	20	粘板岩		
641	CⅢh, I層	#	66	36	29	100	チャート質凝灰岩		
642	EⅢd, I層	#	68	49	18	65	硬砂岩		
643	EⅢd, II層	#	15	23	10	8	チャート質凝灰岩		
644	HⅡd, I, 層	#	33	45	7	20	硬砂岩		
645	CⅢe, II層	#	21	42	12	20			

第115図 礫石器(7)



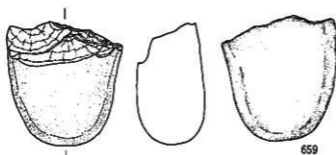
No.	地点・層位	種類	計測値: cm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
646	CⅡe, I層	磨製石斧	115	47	30	270	凝砂岩		80
647	EⅡd, I層	"	123	43	27	250	"		"
648	GⅡc, II層	"	79	42	26	150	チャート質凝灰岩		
649	EⅡe, II層	"	81	53	28	285	凝砂岩		
650	DⅡ-1位 埋土	"	76	41	31	180	"		
651	DⅡ-4位 埋土	"	76	53	36	260	"		
652	CⅡd, I層	"	30	48	25	52	チャート質凝灰岩		
653	CⅡc, II層	"	48	17	7	33	粘板岩		80

第116図 礫石器(8)

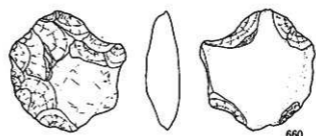


No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特殊・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
654	GⅢa, I層	钵器 I 型	124	112	49	920	硬砂岩	I-0	
655	GⅢ-1 層 埋土	"	81	88	35	385	灰石片岩	"	80
656	FⅢ1, Ⅱ層	"	73	89	44	370	燧石片岩	"	
657	FⅢ1, Ⅱ層	"	81	101	35	650	硬砂岩	"	80
658	FⅢa, I層	"	90	89	33	265	燧石★岩	"	"

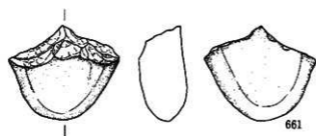
第117図 礫石器(9)



659



660



661

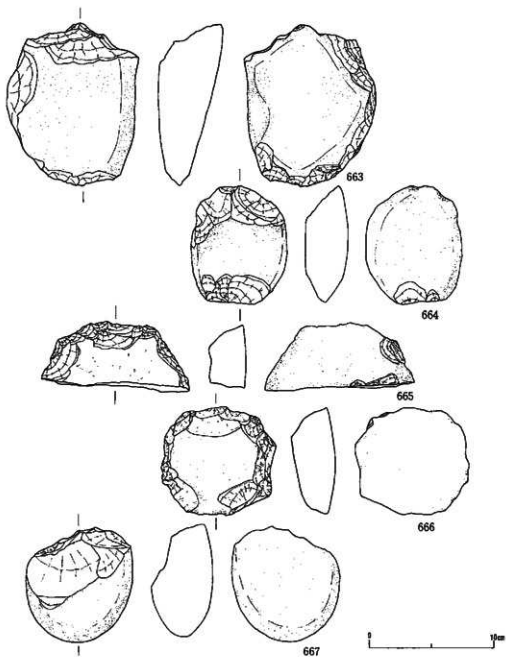


662



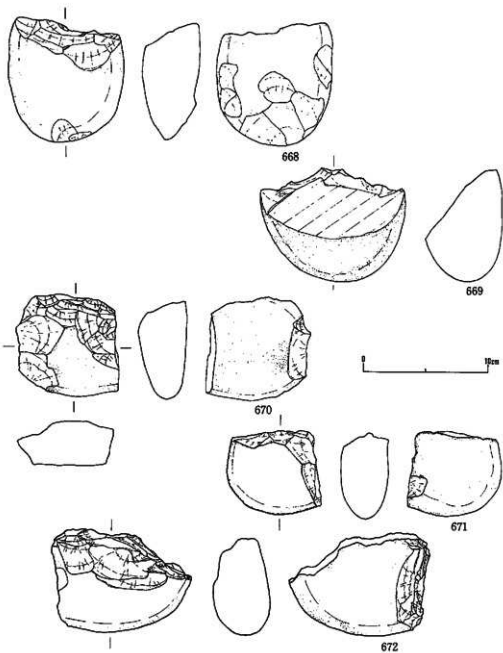
No.	地点・層位	器種	計測値: cm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
659	GⅡb, Ⅰ-Ⅱ層	碗形土器	99	93	34	659	ナール管製灰岩	1-0	81
660	GⅡa, Ⅰ-Ⅱ層	?	95	92	29	260	硬砂岩	?	80
661	GⅡj, Ⅰ層	?	76	69	36	263	凝灰岩	?	?
662	FⅡe, Ⅱ層	?	66	62	34	215	硬砂岩	?	?

第118図 礫石器(10)



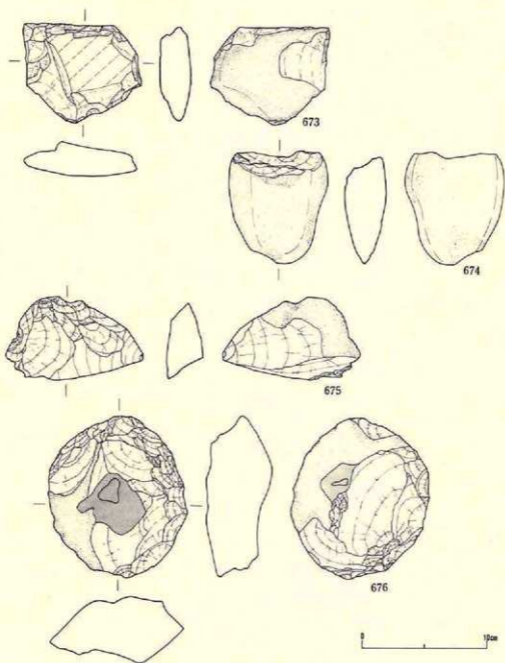
No.	地点・部位	数量	計測値: cm			重量: g	石 質 名	特徴・備考	図號
			長さ	幅	厚さ				
663	五田 f. II層	数量 3 個	130	102	46	890	砂砂岩	1-0	81
664	下田 a. II層	"	94	78	33	365	安山岩	"	80
665	G道 b. II層	"	51	118	28	240	凝灰岩	"	"
666	廣野	"	87	89	32	420	不明	"	81
667	F道-3住 灰層	"	90	85	49	469	硬砂岩	"	80

第119図 礫石器(11)



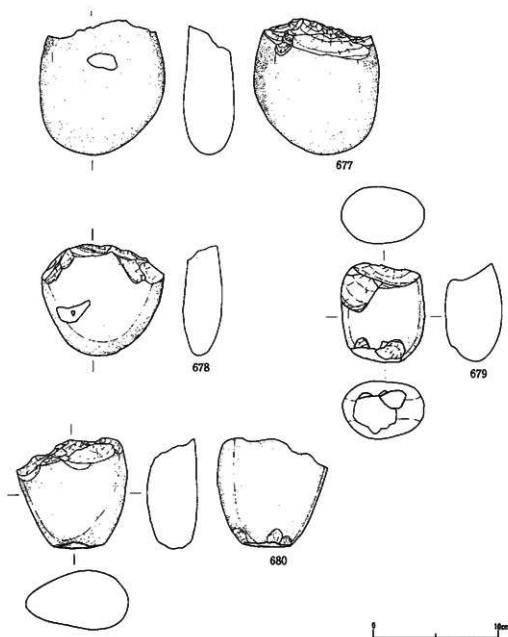
No	地点・层位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
668	G II-1住 床面直上	磨石 I 類	97	93	42	589	灰紋岩	I-0	81
669	D III h, II層	"	89	116	58	710	閃綠岩	"	"
670	C III d, II層	"	80	80	39	375	凝灰岩	"	"
671	F III b, I層	"	72	67	27	346	安山岩	"	"
672	瓦屋 f, I層	"	108	81	45	630	輝石角閃岩	"	82

第120図 礫石器(12)



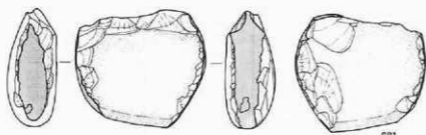
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図例
			長さ	幅	厚さ				
673	GⅡh, Ⅱ層	燧石 I 類	91	78	25	220	ホルンフェルス	1-0	
674	FⅡh, Ⅱ層	〃	85	79	33	319	硬砂岩	〃	81
675	GⅡc, Ⅰ層	〃	110	66	34	290	〃	〃	
676	EⅡB, Ⅱ層下部	〃	129	111	56	930	〃	〃	82

第121図 礫石器(13)



No.	地点・層位	種類	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
677	FⅡc, 1・目層	網鏝 1 個	108	70	40	590	チャート質凝灰岩	1-1	82
678	EⅡf, 目層下部	"	89	98	32	430	砂岩	"	"
679	CⅡc, 目層	"	77	67	45	335	安山岩	"	"
680	HⅡb, 付近 I.層	"	88	88	47	300	硬砂岩	1-2	"

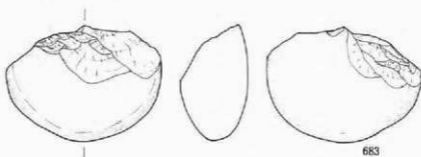
第122図 礫石器(14)



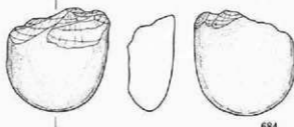
681



682



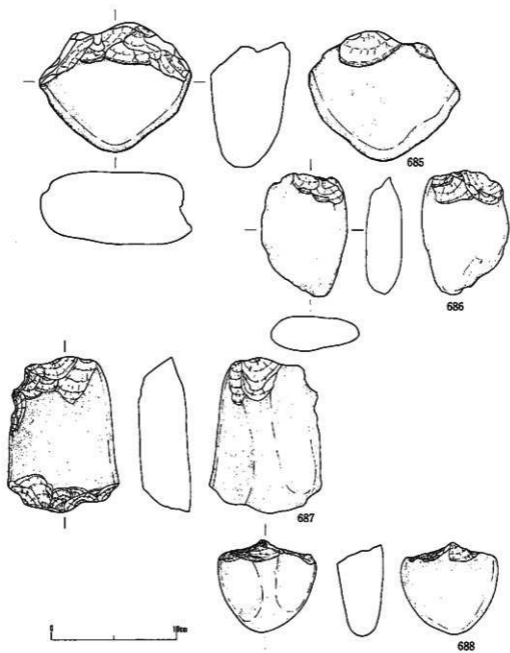
683



684

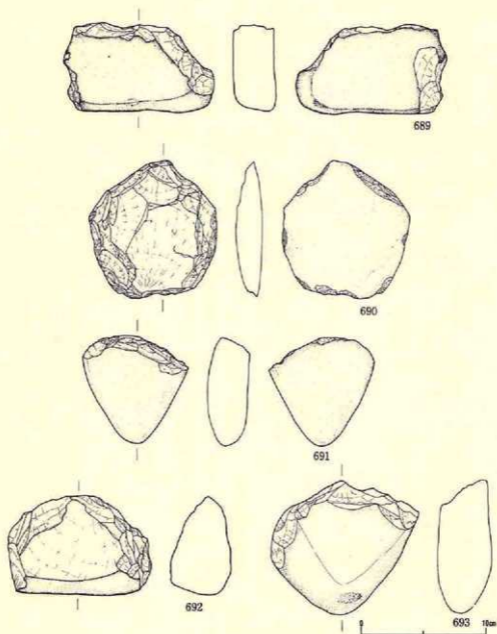
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
681	GⅡc, Ⅱ層	押器 I 類	104	94	40	660	チャート質淡緑色凝灰岩	1-3	82
682	EⅡa, Ⅱ層	"	82	107	16	180	凝灰岩	1-9	83
683	IⅡa, Ⅱ層	"	93	124	33	730	流紋岩	"	"
684	GⅡa, Ⅱ層	"	81	80	25	410	輝石輝岩	"	"

第123図 礫石器(15)



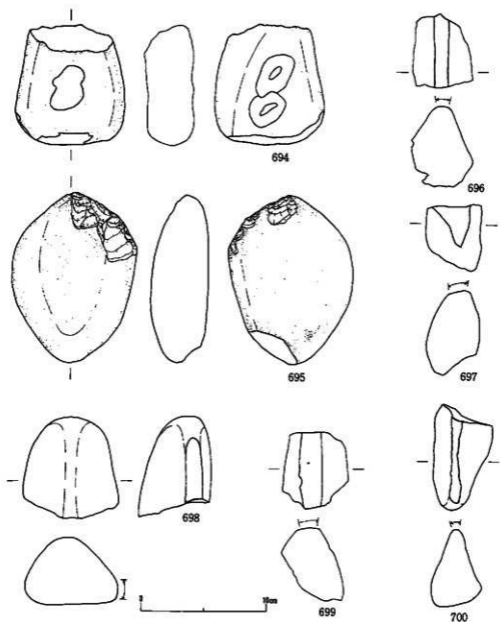
No	地点・層位	器種	計測値:cm			重量:g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
685	CⅡa, Ⅱ層	礫石片断	105	100	60	970	ホルンフェルス	Ⅱ-8	83
686	CⅡb.	〃	95	68	28	270	粘板岩	〃	〃
687	FⅡa, Ⅱ層	〃	124	89	39	700	輝石角闪岩	〃	〃
688	CⅡc, Ⅱ層	礫石片断	73	73	32	255	硬砂岩	Ⅱ-8	〃

第124図 礫石器(16)



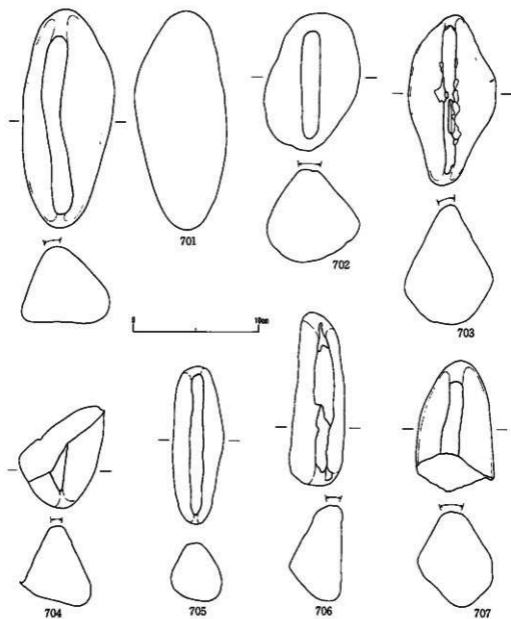
No	地点・層位	部類	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
689	FⅢa, I層	燧石片断	120	70	34	550	輝石砂岩	Ⅲ-0	84
690	FⅢf, I層	"	107	102	20	250	粘板岩	"	"
691	FⅢf, II層	"	86	84	33	310	輝石砂岩	"	"
692	FⅢi, II層	"	79	112	48	615	燧砂岩	"	"
693	EⅢa, II層下部	"	107	95	44	770	輝石砂岩	"	"

第125図 礫石器(17)



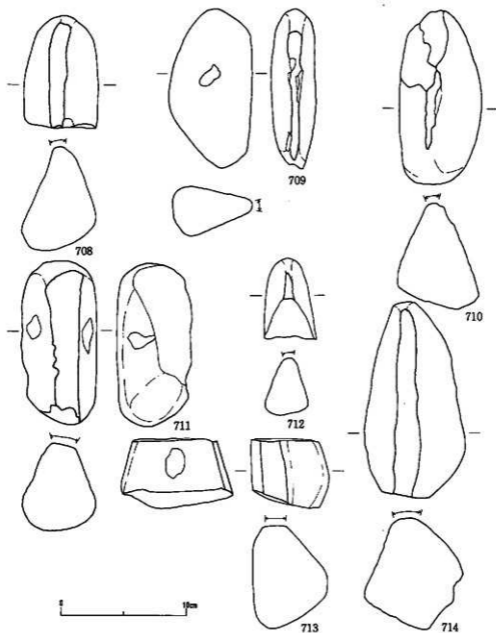
No	地点・層位	種類	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	圖版
			長さ	幅	厚さ				
694	FⅡb, 1層	磨石片類	96	88	38	560	輝石砂岩	Ⅱ-1	84
695	DⅡb, 紅砂	"	136	94	45	850	粘板岩	Ⅱ-2	"
696	HⅠf, 1a層	磨石	59	47	63	180	花崗閃綠岩	磨石1-0	"
697	DⅡa, 1層	"	53	43	80	220	閃綠岩	"	"
698	FⅡb, 1層	"	80	77	54	445	花崗閃綠岩	"	"
699	IⅡa, 紅砂	"	61	51	55	180	泥板岩	"	"
700	DⅡj, 1層	"	86	46	60	270	礫砂岩	"	"

第126図 礫石器(18)



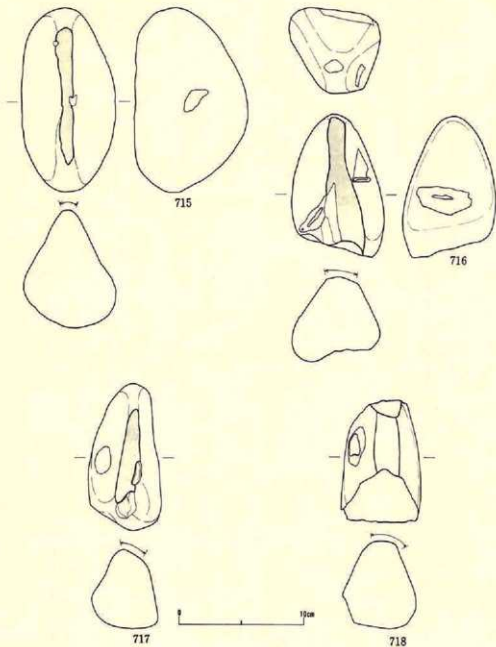
No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図紙
			長さ	幅	厚さ				
701	宮田c, II層	磨石	174	73	60	1,130	花崗閃綠岩	磨石I-0	84
702	F III a, I層	石	110	75	80	750	チャート	石	85
703	F III b, II層下部	石	135	70	96	910	花崗閃綠岩	石	86
704	D III b, II層下部	石	82	67	58	360	硬砂岩	石	87
705	G III c, II層	石	126	40	44	310	石	石	88
706	F III a, II層	石	138	42	76	565	石	石	89
707	H III b, II層	石	102	62	75	350	石	石	90

第127図 礫石器 (19)



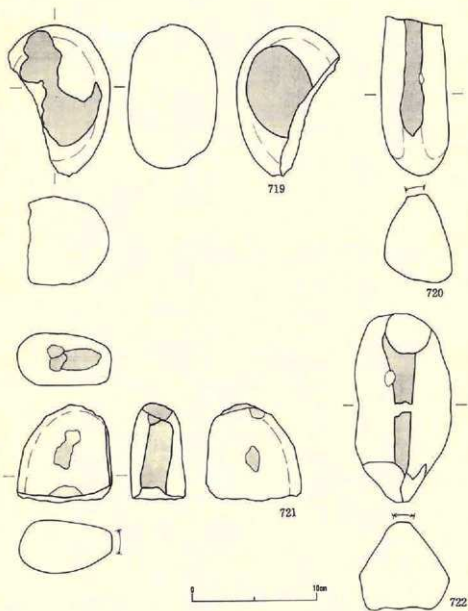
No	地点・階位	層位	種類	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
				長さ	幅	厚さ				
708	G II-3 住	層	石	89	39	30	640	花崗閃緑岩	層石 I-0	
709	F III e, 自然	#		127	66	39	405	硬砂岩	# I-1	85
710	G III c, 自然	#		139	65	63	935	花崗閃緑岩	# I-0	#
711	F III i, 自然下部	#		190	71	59	825	アルコウス砂岩	# I-1	#
712	F III-4 住	#		63	39	45	135	硬砂岩	# I-0	#
713	H II d e, I 層	#		52	60	82	420	#	# I-1	#
714	D III f, I 層	#		155	60	86	1,150	ホルンフェルス	# I-0	85

第128図 礫石器 20



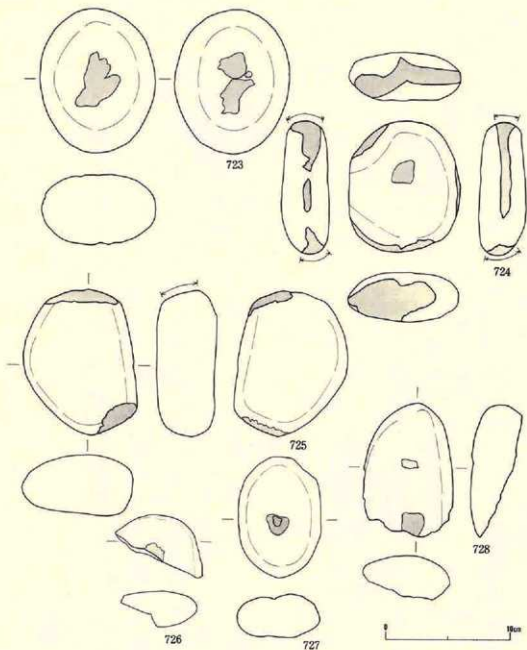
No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
715	FⅡh, 日層下部	磨石	147	75	73	1,320	花崗閃綠岩	磨石 1-1	85
716	DⅡ 1, I層	"	114	73	60	600	礫砂岩	"	86
717	FⅡc, I層	"	118	37	42	680	安山岩	"	"
718	HⅡ 1, I層	"	98	64	68	550	流紋岩	"	"

第129図 礫石器(2)



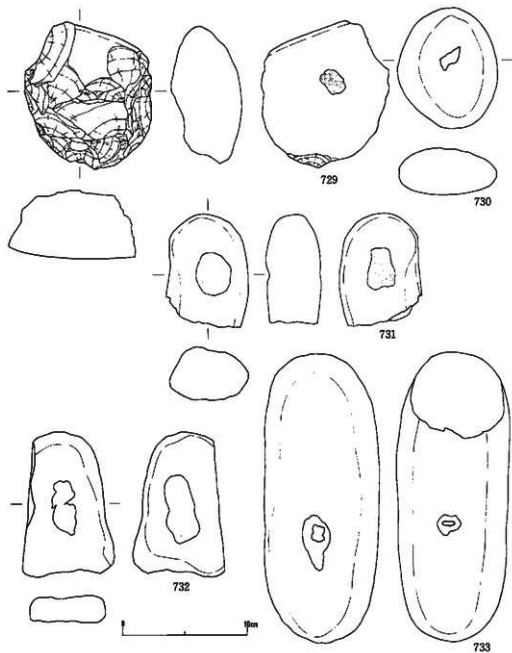
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
719	C III e, Ⅱ層	磨石	121	82	70	770	花崗閃綠岩	磨石目	
720	H I c, Ⅱ層	B	138	53	70	740	石英斑岩	# 1-2	86
721	F III a, Ⅱ層	B	76	75	41	335	硬砂岩	# 1-3	
722	G III c, Ⅱ層	B	150	75	72	1,000	花崗閃綠岩	# 1-2	86

第130図 礫石器 ②



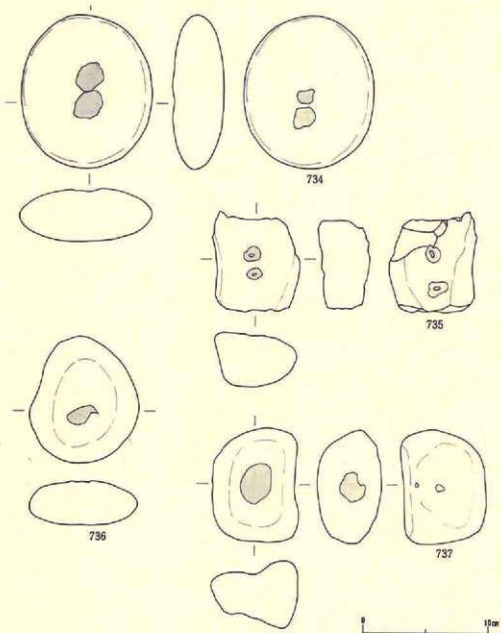
No.	地点・層位	器種	計測値:mm			重量:g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
723	F層h, 柱周下部	磨石	115	93	55	940	花崗閃綠岩	磨石II-1	86
724	D層h, 1層	"	104	88	36	600	礫砂岩	"	"
725	G層d, 1層	"	117	88	46	730	"	磨石II-2	"
726	C層e, 1層	燧石	40	61	29	85	火山岩	燧石-0	"
727	C層f, 1層	"	97	66	36	360	炭酸岩	"	86
728	G層-1位 埋土中部	"	107	70	32	320	礫砂岩	"	"

第131図 礫石器(2)



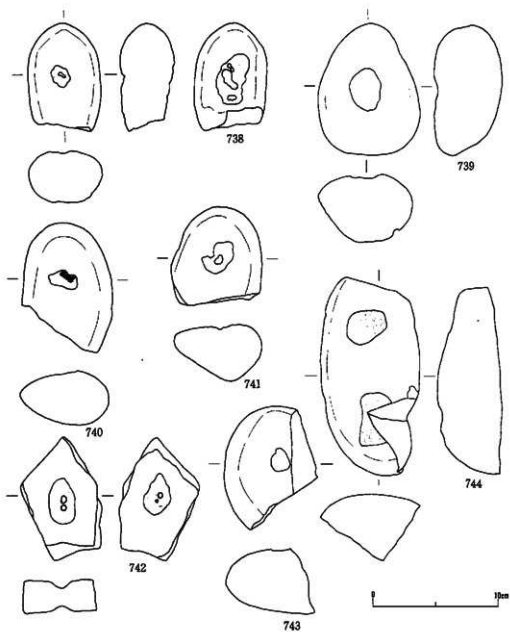
No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
729	CⅢc, Ⅰ層	円石	111	101	58	770	燧石	凹片-0	87
730	DⅢ13, Ⅰ層	#	96	80	38	410	#	#	86
731	EⅢd, Ⅰ層	#	87	66	42	360	燧石	#	#
732	EⅢc, Ⅰ層	#	113	73	22	435	ホルンフェルス	#	#
733	CⅢe, Ⅱ層	#	231	87	94	2,510	燧石	#	87

第132図 礫石器④



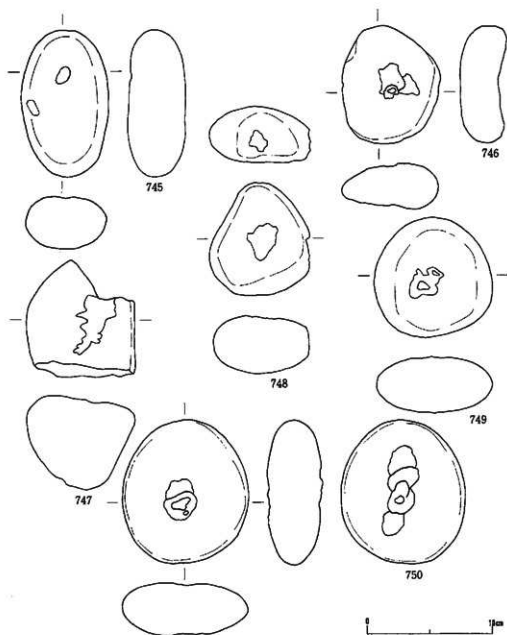
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
734	F層h, 1層	凹石	122	105	42	810	アルコーヌ砂岩	凹石-0	87
735	E層b, 1層	"	75	63	41	335	流紋岩	"	"
736	D層f, 1層	"	101	87	25	430	凝砂岩	"	"
737	C層j, 1層	"	91	68	53	390	"	"	"

第133図 礫石器 25



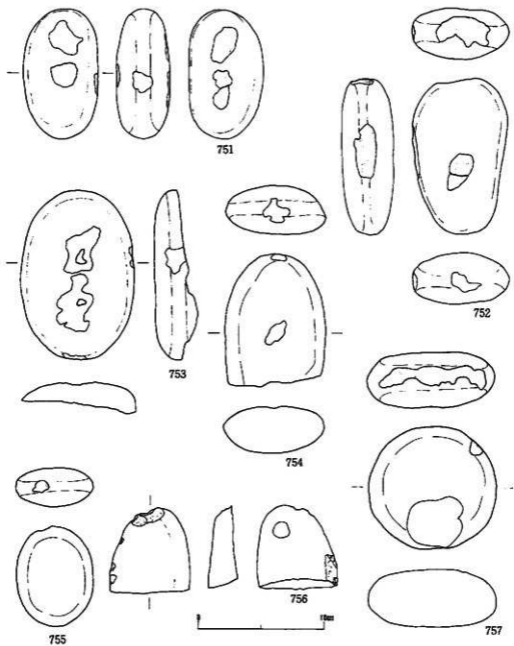
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
738	DⅡa f ₂₅ , 1層	凹石	82	57	41	305	凹縁射		
739	CⅡb, 凹縁	#	105	88	56	818	花崗閃緑岩	#	87
740	IⅡa, 凹縁	#	90	72	44	450	#	#	
741	FⅡ1, 1層	#	76	72	45	360	輝石母岩	#	
742	DⅡa, 凹縁	#	96	61	26	170	硬砂岩	#	
743	EⅡ1, 1層	#	83	75	50	435	安山岩	#	
744	FⅡa, 1層	#	150	81	51	770	英石母岩	#	

第134図 礫石器②



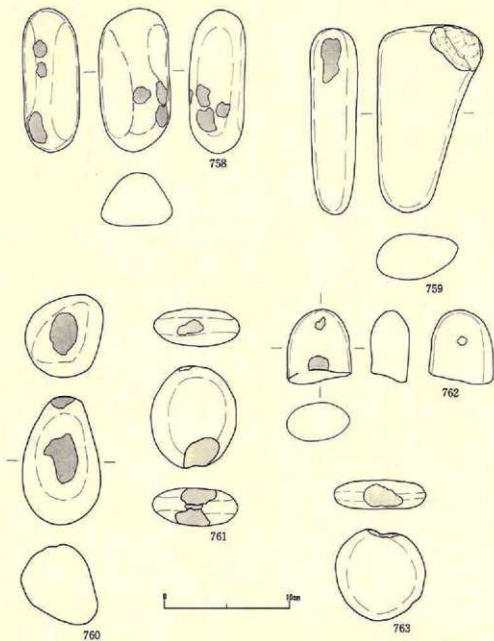
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
745	CⅢb, Ⅰ層	凹石	117	69	46	595	花崗閃緑岩	凹石-9	88
746	DⅢd, Ⅰ層	凹石	94	79	36	336	凝砂岩	凹石-10	88
747	GⅢb, Ⅱ層	凹石	94	87	72	780	灰緑岩	凹石-11	88
748	EⅢf, Ⅰ層	凹石	90	80	45	455	凝砂岩	凹石-12	88
749	EⅢe, Ⅱ層	凹石	96	95	34	580	凹石	凹石-13	88
750	FⅢf, Ⅱ層下部	凹石	115	100	42	720	アルゴース砂岩	凹石-14	88

第135図 礫石器(27)



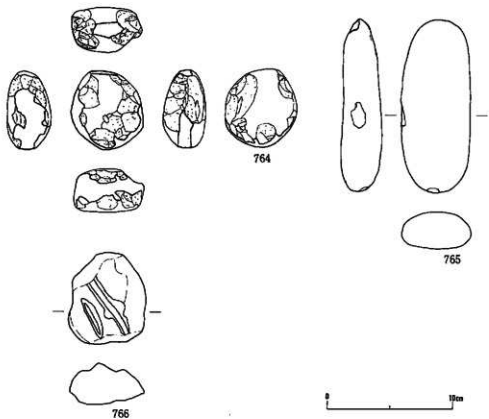
No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
751	C区f. Ⅱ層	凹石	104	66	42	425	花崗閃綠岩	西石-1	88
752	E区d. Ⅰ層	凹石	122	77	41	580	チャート質凝灰岩		
753	F区i. Ⅰ層	凹石	136	91	20	380	半花崗岩		
754	D区j. Ⅱ層	凹石	105	80	37	575	凝灰岩		
755	I区*. Ⅱ層	凹石	88	61	33	220		北石	
756	D区b. Ⅱ層	凹石	67	84	18	150	輝石安山岩		
757	G区c. Ⅱ層	凹石	98	102	47	670	半花崗岩		88

第136図 礫石器(28)



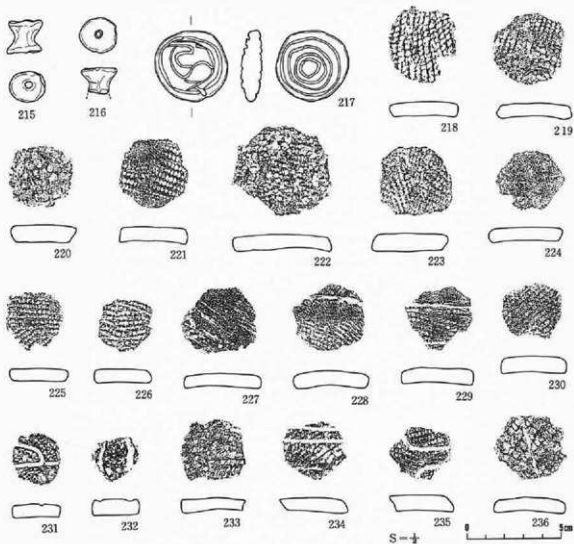
No.	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	石材名	特徴・備考	図版
			長さ	幅	厚さ				
758	C III f. Ⅱ層	刮石	114	37	43	445	燧石岩	たたき	
759	F III f. Ⅱ層	"	150	85	37	690	"	"	88
760	F III - 3 佐 林園	"	102	62	64	550	"	"	89
761	E III a. Ⅰ層	"	94	66	31	250	"	"	"
762	D III a. Ⅰ層	"	56	51	31	140	"	"	"
763	C III a. Ⅱ層	"	72	72	23	185	流紋岩	"	89

第137図 礫石器 29



No.	地点・部位	種類	計測値: cm			重量: g	石材名	特徴・備考	図取
			長さ	幅	厚さ				
764	芋田B。1層	磨石	62	36	35	180	細砂岩		附
765	芋田f。1層	"	129	55	29	410	細石砂岩		附
766	五田b。1層	砥石	73	62	32	180	硬砂岩		附

第138図 礫石器(30)



No	地点・層位	器種	計測値: mm			重量: g	特 徴・備 考
			長さ	幅	厚さ		
215	C田1, 目層	耳	16	18	—	2.8	
216	D田-2 埋土	〃	14	19	—	2.9	斗形部
217	D田1, 目層	〃	37	39	10	13.6	両面に沈線文
218	E田c, 〃	円盤状土製品	43	37	7	12.4	目野土器素材, 周縁を打欠いた後, 一部研削
219	E田区1, 目層	〃	40	37	8	14.5	目野土器素材, 周縁を打欠く
220	C田d, 1層	〃	33	36	10	16.0	目野土器素材, 周縁を打欠く
221	D田-4 埋土層埋土	〃	40	37	8	15.0	目野土器口縁部素材, 口野部を一部残して周縁を打欠く
222	D田b, 1, 埋	〃	50	53	7	24.9	目野土器素材, 周縁を打欠く
223	C田d, 〃	〃	38	39	10	20.2	目野土器素材, 周縁を打欠く
224	C田e, 目層	〃	33	36	8	10.2	目野土器素材, 周縁を打欠く
225	C田1, 〃	〃	32	31	6	7.8	目野土器素材, 周縁を打欠く
226	C田e, 〃	〃	31	29	8	9.4	目野土器素材, 周縁を打欠く
227	C田c, 1層	〃	36	41	7	12.2	目野土器素材, 周縁を打欠く
228	C田d, 目層下部	〃	39	42	8	14.6	目野土器素材, 周縁を打欠く
229	〃	〃	36	39	8	12.0	目野土器素材, 周縁を打欠く
230	D田e f, 付添 1, 埋	〃	31	35	9	12.0	目野土器素材, 周縁を打欠く
231	D田-1 埋土	〃	30	36	7	6.8	目野土器素材, 周縁を打欠く
232	〃 掘り方埋土	〃	24	27	7	6.0	目野土器素材, 周縁を打欠く
233	E田e, 目層	〃	34	35	7	10.2	目野土器素材, 周縁を打欠く。方形気味
234	F田1, 1層	〃	35	36	7	10.2	目野土器素材, 周縁を打欠く。方形気味
235	D田1, 目層	〃	31	35	8	10.4	目野土器素材, 周縁を打欠いた後一部研削
236	E田b, 目層下部	〃	38	38	7	10.9	1層上部口縁部素材, 口野部を一部残して周縁を打欠く

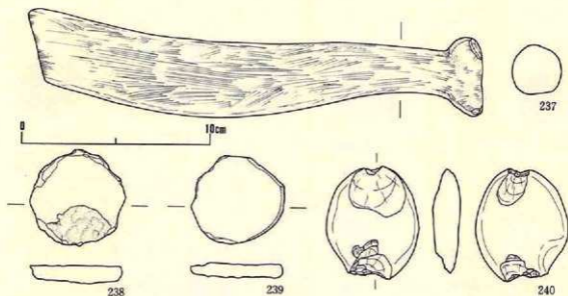
第139図 土製品

片がある。また、小破片のため土製支脚なのかフイゴの羽口なのか識別できない製品がD III-4・G II-3の2棟の住居跡（ともに平安時代）とG II i 9から1点ずつ出土している。

6. 石製品

縄文時代の石製品が遺構内外から出土しているが、器種・点数とも少ない（第140図）。なお琥珀についてはVII-2に記載する。

出土した器種と点数は、石刀1点（237）・円盤状石製品4点（238・239）・石錘1点（240）である。石刀は完形品である。頭部は扁平で、基部へ向って次第に薄くなる。また身部は内反りし、断面形は凸辺ながら楔形になる（刃部は図の上の部分）。円盤状石製品は図示例のほかに2点が出土しているが、すべて周縁を打ち欠くだけの調整である。239は一部に自然面を残す。石錘は遺構外I層から出土している。



No	地点・層位	器種	計測値(mm)			重量(g)	石材名	特徴・備考	B00C
			長さ	幅	厚さ				
237	C館d、照山直上	刀	241	40	26	450.0	輝石岩	完形。全体に磨蝕。国土地産	54
238	D館-4 埋土	円盤状石製品	51	51	9	25.0	凝灰質砂岩	周縁を打ち欠く	※
239	※	※	46	40	7	20.0	※	周縁を打ち欠くが、一部自然面を残す	※
240	F館1、I層	石錘	59	49	13	56.2	アルゴース砂岩	両端に鉄入部	60

第140図 出土石製品

VI まとめ(2)―遺構―

1. 住居跡

(1) 縄文時代

8棟の住居跡が検出されている(表4)。時期別の内訳は、前期6棟・後期2棟である。

a. 前期

分布 6棟は調査2区のほぼ中央にある開折谷付近に集中する。EⅢ-1住居跡1棟がその北側にあるほかは南側にある。周辺には同時期と推定できるピット類も多い。

平面形 隅丸凸辺長方形2棟、隅丸長方形1棟、不整形1棟、重複して一部を失っているためにはっきりしないが、円形基調と推定されるもの2棟である。

規模・床面積 推定の床面積になるGⅢ-1住居跡を含め、4棟の床面積が計測できる(図3)。7㎡台2棟、8㎡1棟、29㎡台1棟である。最小と最大の比は1:4.1となる。最大は29.4㎡のGⅢ-2住居跡である。床面積を計測できない2棟は残存部から推定して、10㎡以下のものであろう。

柱穴 GⅢ-2住居跡は数多くの柱穴状ピットをもつが、規則的な在り方を示さず、配置等は不明である。GⅢ-4住居跡も一部が柱穴になるものと推定できるが、全体については不明である。他は柱穴を伴わない。

炉 全形を把握できる3棟は炉を伴わない。

付属施設 GⅢ-4住居跡は「出入口」と推定されるゆるやかな傾斜面を西壁中央に伴う。

重複 当該時期の住居跡同士の切り合いがあり、GⅢ-2住居跡がGⅢ-1・GⅢ-3の2棟の住居跡を切っている。

No.	住居跡名	平面形	規模m	床面積㎡	長さm	壁溝	柱穴	ピット		時期	備考
								数	形状		
1	CⅡ-1	円形基調	不明	不明	(2)	(なし)	(なし)	(なし)	1	後期前期	部分調査。規模CⅡ-5ピットに貼り床
2	CⅡ-2	不明	#	#	(不明)	(#)	(3)	狭くくぼむ	#	#	部分調査
3	EⅢ-1	不整形	2.4~2.8×3.1~3.4	7.4	7~8	なし	なし	なし	なし	前期前期	II層を切る。
4	GⅢ-2	円形#	(4.1)×不明	不明	(7~11)	(なし)	(なし)	(なし)	#	#	GⅡ-1壁に1/2以上切られている。
5	GⅢ-1	(隅丸凸辺長方形)	(2.8)×4.4	(8.7)	(8~10)	(#)	(#)	(#)	#	#	GⅢ-2壁に切られている。
6	GⅢ-2	隅丸長方形	4.9×7.2	29.4	24~29	なし	(あり)	なし	#	#	GⅢ-1・3壁を切る。
7	GⅢ-3	円形基調#	(2.3)×不明	不明	(13)	(なし)	(なし)	(なし)	#	#	GⅢ-2壁に切られている。
8	GⅢ-4	隅丸凸辺長方形	2.5×3.6	7.1	7~8	なし	(あり)	なし	#	#	「出入口」施設

(#)は調査範囲での確認および推定

表4 縄文時代住居跡一覧表

出土遺物 出土遺物量はGⅢ-2住居跡をのぞいては少ない。縄文土器Ⅰ群と剥片類は全住居跡から出土している。剥片石器はGⅢ-2・GⅢ-4の2棟の住居跡、打製石斧や礫石器はEⅢ-1・GⅢ-1・GⅢ-2・GⅢ-4の住居跡から出土している。

所属時期 上述の出土土器や本遺跡での縄文土器の在り方から推定し、縄文土器Ⅰ群期=前期前葉に位置づけできる。

b. 後期

分布 2棟は調査2区の北端、CⅢ区に検出された。

検出状況 2棟は西側が調査区域外へでているため、規模ほかに不明な点が多い。

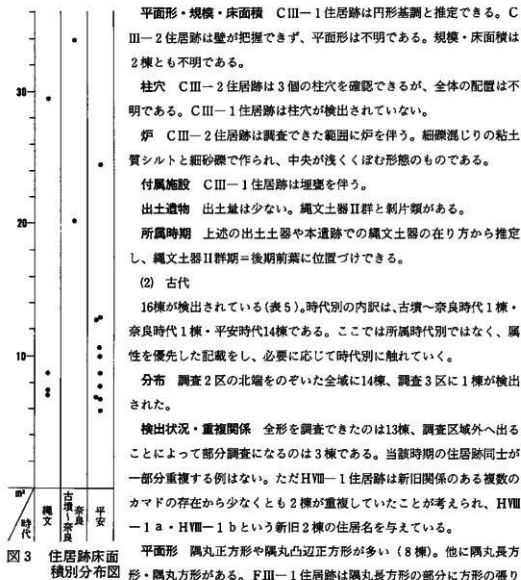


図3 住居跡床面積別分布図

No.	古墳名称	平面形状	縦横m	面積㎡	北緯方向	築造時期	築造m	経緯	柱石	蓋り方向	数	位置	F	遺蹟	P・T	水山区	時代	備考	
																			遺蹟
1	DⅠ-1	隅丸凸型正方 4.2×4.4	12.9	N-47°E	27-31	部分列	なし	〇	1	北西寄り中央	〇	〇	2	〇			平安		
2	DⅠ-2	隅丸凸型 4.7	不明	N-73°W	50-60	(〇)	(なし)	(〇)	(1)	西寄り中央	〇	〇	(なし)	〇			(不明)	西/近畿圏外	
3	DⅠ-3	隅丸凸型正方 5.3×5.4	20.9	N-41°W	60-66	一部欠	4	〇	1	北西寄り中央	〇	〇	なし	〇			3	奈良	
4	DⅠ-4	隅丸凸型正方 3.1×3.7 3.8×4.3	10.6	N-41°W	35-52	部分的	なし	〇	1	北西寄り中央からわずかに北寄り (蓋り)	〇	〇	〃	〇			2	平安	
5	DⅠ-5	隅丸凸型 3.0×不明	不明	N-57°E	120-140	(〇)	(なし)	(〇)	(1)	北西寄り中央	〇	〇	(1)	〇			(不明)	部分調査	
6	DⅠ-6	隅丸凸型正方 3.2×6.3	34.4	N-40°W	40-57	大部分	なし	〇	1	西寄り中央からわずかに南寄り	〇	〇	2	〇			〃		
7	FⅡ-1	隅丸凸型 2.1×3.1 裏り出し幅 0.8×1.2	5.9	---	6~10	部分的	〃	×	なし	---	---	---	なし	〇			〃		
8	FⅡ-2	隅丸凸型正方 3.1 X 2.0×3.2	6.7	N-18°E	65-53	1段 一隅	〃	×	1	北西寄り中央	〇	〇	1	〇			〃		
9	FⅡ-3	〃	2.2×3.3	8.7	N-50°W	30-50	〃	×	1	北西寄り中央	〇	〇	〇	〇			〃		
10	FⅡ-4	〃	3.7×4.0	(12.8)	N-37°W (46-48)	(〇)	(不明)	(〇)	(1)	北西寄り中央から北西寄り	〇	〇	(不明)	〇		(3)	〃	部分調査	
11	GⅡ-1	〃	6.4×6.4	33.8	N-16°W	35-53	一隅	4	〇	1	北西寄り中央	〇	〇	1	〇		3	古墳 奈良	
12	GⅡ-3	隅丸凸型 6.0×不明	20.4 以上	S-31°E	44-49	(なし)	2+	(〇)	(1)	南寄り中央と南西寄りの中間	〇	〇	(2)	〇		2	平安	西/近畿圏外	
13	HⅡ-1	隅丸凸型正方 3.1×3.6	7.7	N-40°W	32-46	なし	なし	〇	1	北西寄り中央から北西寄り	〇	〇	2	〇		〃			
14	HⅡ-1	隅丸凸型正方 2.5×3.5	6.8	N-31°W	12-29	〃	〃	〇	1	北西寄り中央	〇	〇	なし	〇			〃		
15	HⅡ-1a	中台・中溝・女 隅丸凸型正方 3.8×4.0	10.0	1段: N-42°E 2段: N-31°W	40-60	〃	〃	〇	2	1段: 南寄り中央から南西寄り 2段: 北西寄り中央から南西寄り	〇	〇	2	〇		〃	〃	新 11世紀-1b位	
16	HⅡ-1b	不明	不明	3号: S-17°E	不明	不明	不明	不明	1	3号: 南寄り中央から西寄り	〇	不明	不明	不明		不明	不明	〃	旧 11世紀-1a位
備考	HⅡ-2 HⅡ-3 HⅡ-4	隅丸凸型正方 1.8~2.3 2.4	3.6	-	14~24	なし	なし	〇	なし	---	---	---	なし	〇			〃		

() は調査範囲での調査および推定

表5 古代住居跡一覧表

出し部が付属する。

規模・床面積 床面積は、住居跡壁面の下端をプラン・メーターで3回計測し、その平均値を採用した。この場合、壁溝やカマド本体は無視しているため、ほぼ掘り方の面積に近い。床面積が計測できたのは12棟である。図3は2㎡を最小単位とした分布図である。最小は5.9㎡のFⅢ-1住居跡、最大は33.8㎡のGⅡ-1住居跡である。FⅢ-1住居跡はカマドを伴わないことや張り出し部があるなど通有の形式のものとはちがっている。通有の形式のもの最小は6.8㎡のHⅡ-1住居跡である。最小と最大の比は、それぞれ1:5.7、1:5.0となっている。12棟の合計面積は161.2㎡で、1棟平均は13.4㎡となる。図4は床面積を正方形に置き換えた概念図である。2つの図からは、33.8㎡の1棟、24.4㎡と20.9㎡の2棟、12.9~5.9㎡の間に分布する9棟をグルーピングできるであろう。ここではそれぞれを大型・中型・小型とする。大型の1棟は古墳~奈良時代に分類できるGⅡ-1住居跡、中型は奈良時代のDⅢ-3住居跡と平安時代のDⅢ-6住居跡である。小型はすべて平安時代に分類できる。なお平安時代のGⅡ-3住居跡は20.4㎡を調査しているが、調査区域外の分もいれると30㎡前後の面積をもつものであろう。

主軸方向 主軸方向は、カマドが設置された壁に直交する線が真北と作る角度として計測している。したがってほぼカマド~煙道部方向に近似する。またHⅧ-1b住居跡の3号カマドのように壁と煙道部の方向のズレが大きい場合、カマドの方向を主軸方向としている。HⅧ-1a住居跡は2基のカマドをもち、それぞれに主軸方向をもとめた。その結果、16の主軸方向

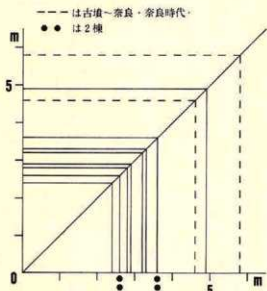


図4 古代住居跡床面積別分布の概念図

があることになる(図5)。図をみると、N-90°-EまたはWの範囲に14、S-90°-Eの範囲に2が分布する。前者では、N-90°-Wに10、N-90°-Eに4が分布する。S-90°-Wの間に主軸をもつ例はない。時代別では、古墳~奈良時代のGⅡ-1住居跡がN-16°-Wともっとも真北に近い主軸になり、奈良時代のDⅢ-3住居跡がN-41°-Wである。それ以外は平安時代に属するが、主軸方向のちがいがどのようなことに起因し、あるいは結果するかについては明らかでない。

埋土 埋土は個別の住居跡の重要な属性の一つであり、詳細な検討が必要であろう。しかし、埋土の層相から自然堆積なのか人間が介在することによって形成された堆積物なのか、あるいはそれらが複合したものなのかを判断することは埋没のメカニズムと過程を個別に復元できないかぎり困難なことといわざるをえない。ここでは古代の住居跡の埋土に一般的に観察される十和田a火山灰(略してT_{0-a})と白頭山-苫小牧火山灰(略してB-T_m)のあり方をみていくことにする。

T_{0-a}を単独で伴う(①)は、古墳~奈良時代のGII-1、奈良時代のDIII-3、平安時代のDIII-1の3棟の住居跡である。DIII-3住居跡では埋土中部で最大層厚40mmの層として観察できるが、断続的である。GII-1住居跡は10~40mmの塊を多く含み、一部では集合して層状になる。DIII-1住居跡は小塊を少量含む。T_{0-a}とB-T_mの2種類を観察できる(②)のは、DIII-2・DIII-4・DIII-6・FIII-2・FIII-3・HII-1の6棟の平安時代に属する住居跡である。T_{0-a}が一部層状に観察できるDIII-4住居跡以外は大小の塊として含まれ、層位的にはB-T_mがT_{0-a}の上位を占める。B-T_mは一般に量が少ない。B-T_mが単独で存在する(③)のは、DIII-5・FIII-1・FIII-4・GII-3・HII-1・HIII-1aの6棟の平安時代に属する住居跡である。一部が薄層になるHII-1住居跡のほかは大小の塊としてみられ、HIII-1a住居跡をのぞいては量は少ない。

以上、住居跡における2種類の火山灰の在り方をみてきた。T_{0-a}あるいはB-T_mがプライマリィであるか再堆積であるかを識別することは重要である。しかし、上述のように個別の住居跡が埋没する過程に作用する環境や営力を復元できないことや久慈地方における他遺跡の例との比較ができず、それには触れないことにする。したがって、T_{0-a}やB-T_mを鍵層にした住居跡の編年はおこなわず、古墳~奈良時代・奈良時代に属する2棟が①に含まれることと最新期のものと推定されるFIII-1住居跡が③に含まれることを指標するにとどめる。

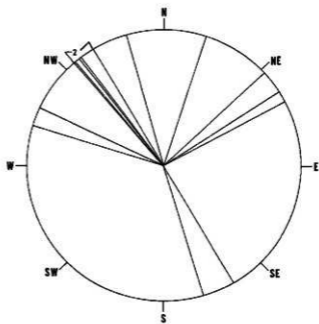


図5 古代住居跡主軸方向分布図

壁高 壁高は四方の壁で計測している。15棟の最大値をとると、最小29cm(HⅡ-1住居跡)から最大69cm(DⅢ-2住居跡)までの幅がある。平均の深さは54cmであり、規模の大小や上屋構造の違いが壁高に反映されていることは考え難い。

壁溝 壁際の床面を細く掘り込んだ溝は「壁溝」あるいは「周溝」とよばれている。15棟のうち、なんらかの形で伴うものは11棟、伴わないものは4棟である。伴うものうち、全形を精査できた8棟のなかで、一周あるいは大部分に伴うもの4棟、部分的なもの4棟である。

床面・掘り方 床面の状態はField Cardの記載をもとにしている。硬い、あるいは軟かいは硬度計をもちいたものではなく、あくまでも主観的で相対的なものである。

掘り方を伴う例は15棟のうち12棟である。全体を調査できた8棟のうち、全体規模の掘り方を伴うのは4棟、1/2程度あるいは中央部をのぞいた壁寄りに伴うのは4棟である。一部が調査区域外へ出るGⅡ-3住居跡も精査部分では全体に掘り方を伴う。

柱穴 ごく一部しか精査できなかったDⅢ-5とFⅢ-4の2棟の住居跡をのぞいた13棟のうち、配置的に適切と考えられる柱穴を伴うのはDⅢ-3・GⅡ-1・GⅡ-3の3棟の住居跡である。DⅢ-3とGⅡ-1は4個の柱穴が四隅から内側に入った位置にある。GⅡ-3住居跡は北側が調査区域外へ出るために不明であるが、南側の2個はやはり二つの隅から内側に入った位置にある。掘り方の平面形は楕円形や長方形である。柱痕跡はGⅡ-3住居跡の1個に認められる。

柱穴を伴うGⅡ-1は古墳～奈良時代に属し、大型に分類できる住居跡、DⅢ-3は奈良時代に属する中型の住居跡である。また平安時代のGⅡ-3住居跡は30㎡前後の面積が推定できる。それらのことから、床面積の大小と柱穴の有無は密接に関連することが考えられる。ただ平安時代のDⅢ-6住居跡は中型に分類できるが、柱穴を伴わない。

カマド 部分調査の住居跡も含め、16棟のうち明らかにカマドを伴わないのはFⅢ-1住居跡1棟である。同住居は住居形式の点でも他と違いをみせている。全形を調査できた13棟(平面形が確認できるFⅢ-4住居跡を含む)のうち、2基のカマドを伴うHⅧ-1a住居跡以外はすべて1基のカマドをもつ。ただ、HⅧ-1a住居跡は残存状況や貯蔵穴のあり方から推定すると2基の同時存在とは考えられず、1時期1基と考えた方がよいであろう。

〈本体〉 検出されたカマドの数の合計は15棟16基である。ただFⅢ-4住居跡は調査できた範囲に本体は検出されず、HⅧ-1b住居跡3号カマドは本体が削剝を受けて残存していない。本体が原形をよく保っている例は少数で、多くは側壁下部と火床部、あるいはそれらを覆う崩壊構築材から推定することになる。推定も含めると側壁や天井部にシルト・シルト質粘土とともに礫を用いる例は12棟12基と多い。燃焼部に支脚を伴うのはFⅢ-3住居跡1棟で、土製支脚を埋設していた。

〈煙道部〉すべてのカマドが煙道部（煙出し部まで含めての総称）をもつ。形態別では、①掘り込み式9基、②くりぬき式4基である。DⅢ-2・FⅢ-3・HⅧ-16住居跡3号カマドの3基は煙道部と煙出し部の境がくりぬき式であり、①と②の中間形といえる。

〈住居跡内におけるカマドの設置位置〉図6は、カマドが住居跡内のどこに設置されているのかを示した概念図である。カマドとひとつの壁は、①壁のほぼ中央、②中央からどちらか一方の壁へ寄った位置（その多くはほぼ中間の位置）、と3カ所が設置場所になる関係がある。一辺が北北西による場合にのみ、カマドが南壁に設置される（ただしHⅧ-1b住居跡3号カマドについては不詳部分がある）。古墳～奈良時代のGⅡ-1住居跡はほぼ南北方向を向き、カマドは北壁中央に設置される。奈良時代のDⅢ-3住居跡は一辺が北西へ向き、カマドはその中央に設置される。

〈カマド位置の動き〉HⅧ-1a住居跡はカマドの作り替えがあると推定した。一辺が北北西を向き、古期の2号カマドは北壁中央と北隅との中間に設置されているが、新期の1号カマドは東壁中央と東隅との中間に設置される（図6の矢印）。

焼失住居跡 多量の炭化した材や草本類・焼土が住居跡内に分布する例がある。DⅢ-3・FⅢ-3・GⅡ-1の3棟の住居跡に認められ、焼失住居跡として間違いないであろう。分布や堆積の特徴は、焼土や炭化材が壁寄りの部分では下位に堆積土を伴って高い位置にあり、床面中央部へ向って傾斜して下がっていること、それ以外ではほぼ床面～床面直上の層準に分布することである。焼土は、床面が焼けて赤色に変化している例はほとんどなく、堆積物として検出される。シルト質で、炭化材の上下に認められるが、3棟とも量は少なく、分布も限定される。その起源は「本来竪穴住居の屋上にあった

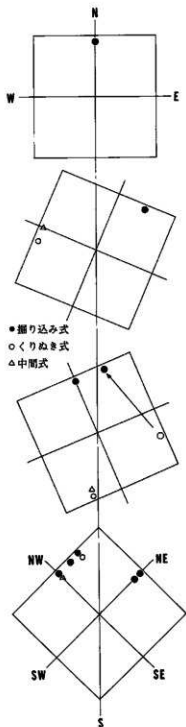


図6 カマド位置概念図

土」が火災に伴う倒壊によって堆積したものとす大川 清の指摘がある(大川, 1952)。大川はさらに、「竪穴住居跡の発掘によって、次の3つの場合に遭遇する」と、次のような例をあげている。

1. 床面の上に焼土を認めない場合。

2. 部分的に焼土のみのある場合又は、極く少量の炭化物と共に、部分的に焼土を認める場合。(この場合、焼土の量に多少の差があることは当然であり、多くは部分的に存在するものである。)

3. 床面の上に投して相当多量の炭化物があり、更にその上や周囲に多量の焼土を認める場合。

先に述べた3棟の例はこの3に相当する。問題になるのは2の場合である。大川は、「2に対しては、火災に遭遇したものであろうと考えられる場合が多いが、時には、如何なる理由によつたものであるのか、全然判断を下せない事もある」としている。本遺跡ではDⅢ-4・GⅡ-3の2棟が相当する。炭化した材や焼土の量が3に相当する3棟に比較すると少量で、火災以外の要因も推定でき、焼失住居跡とは簡単に判断は下せないかもしれない。またFⅢ-4住居跡は部分調査のため確実な点は不明であるが、3に分類できる例かもしれない。なお表5の「焼失」の欄にはその状態によって2あるいは3と記載している。

〈焼失住居跡の例〉DⅢ-3・GⅡ-1の2棟の住居跡は垂木と考えられる材が住居中央から放射状に分布し、GⅡ-1住居跡は幅の広い板材を一部に伴う。FⅢ-3住居跡は放射状の分布にはならず、ややランダムである。GⅡ-1とFⅢ-3の2棟の住居跡は壁面のほぼ全体が焼け、赤色に変化していたが、それほど著しいものではない。以上述べた3棟のうち、GⅡ-1住居跡は大型、DⅢ-3住居跡は中型、FⅢ-3住居跡は小型に分類でき、FⅢ-3住居跡をのぞいては4本柱(四柱柱式)である。

〈材の樹種〉6棟から採取した炭化材のサンプル89点の樹種別の内訳は、ナラが68点、クリが21点である。

付属施設 貯蔵穴あるいはそれに類する機能をもつピット・性格不明のピットを住居内施設として伴う例がある。大型で、深度の大きな貯蔵穴としてよいピットを伴うのはDⅢ-6・HⅧ-1aの2棟である。DⅢ-6住居跡の例は平面形が楕円形あるいは凸辺隅丸方形、HⅧ-1a住居跡では隅丸長方形である。カマドの脇に円形あるいは不整形で深度の小さな小型のピットを伴う例はDⅢ-1・DⅢ-5・DⅢ-6・FⅢ-2・GⅡ-1・GⅡ-3・HⅠ-1・HⅧ-1の8棟にある。GⅡ-3住居跡は床面中央からわずかに東壁に寄った位置に、深度は小さいがロート状になる円形の小さいピットを伴うが、壁面は良く焼け、下底部は還元状態を示す青黒色に変化している。なんらかの工作用施設の可能性がある。

2. 住居状遺構

平安時代に属するHⅡ-2住居状遺構1棟を分類した。平面形は隅丸凸辺台形、床面積は3.6㎡である。全体規模の掘り方を伴うが、カマドは設置されない。他の遺構と比較すると、例えば平面形が隅丸正方形である同時代のFⅢ-55ピットは床面積が2.6㎡であり、わずかに1㎡それを上回るにすぎない。厳密な定義を与えている訳ではなく、あるいは大型のピットとして分類する方が適切かもしれない。

3. ピット

40基をピットとして分類した。しかし、備考の補足説明に記載したように、CⅢ-53・CⅢ-58・DⅢ-53・DⅢ-54・FⅢ-52の5基のピットは人工のものとしてよいか疑問が残るまま、ピットに含めている。以下時代別に記載し、遺構名は番号だけで表わすことにする。

(1) 縄文時代

推定も含め25基を分類した。時期別の内訳は、前期13基・後期10基・不明2基である。

a. 前期

13基は前期前葉の住居跡が分布する調査2区中央の開析谷付近に集中する。しかもその北地区にはDⅢ-51とEⅢ-51があるだけで、残る12基はGⅡ区とGⅢ区に集中する。平面形は円形が10基と多く、長方形は2基、不整形は1基である。開口部径は82×106cm～208×208cmとややバラツキがあるが、100×100cm以上が11基である。深度は17～123cmと幅がある。それらのなかで、GⅡ-54はフラスコ形ピットである。DⅢ-51は円筒形の落とし穴の可能性もあるが、確実ではない。遺物は9基から出土しているが少量である。土器片はすべて縄文土器I群の破片

である。剥片

縄文時代 (25基)			古 代 (10基)			不明 (5基)
前 期	後 期	不 明	奈良時代	平安時代	不 明	
DⅢ-51	CⅢ-51	HⅧ-53	GⅡ-56	縄土ピット	GⅡ-55	(DⅢ-53)
EⅢ-51	-52	IⅨ-51		GⅢ-53		(-54)
GⅡ-51	(-53)			HⅠ-51		FⅢ-51
-52	-54			その他		(-52)
-53	-55			FⅢ-54		-53
-54	-56			-55		
GⅢ-52	-57			HⅡ-51		
-54	(-58)			GⅧ-51		
-55	DⅢ-52			HⅧ-51		
-56	GⅢ-51			-52		
-57						
-58						
-59						

表6 所属時期別ピット一覧表

石器は石鏃・ピエス・エスキュー・不定形石器などがある。出土土器や本遺跡での縄文土器の在り方から、以上のピットは前期前葉に

位置づけられる。

b. 後期

10基（CⅢ-53・CⅢ-58を含む）は調査2区に分布し、GⅢ-51を除いては北地区、しかもCⅢ区にほとんどが集中する。平面形は、円形が4基、楕円形が3基、不整形が2基、隅丸台形が1基である。開口部径は51×94cm～195×154～204cm、深度は19～207cmとバラツキがある。深度の大きいCⅢ-54は壁の半ばがやや膨らむもののピーカー形、CⅢ-55はフラスコ形のピットである。すべてから遺物が出土している。土器片は縄文土器Ⅱ群が主体を占め、ピエス・エスキュー・不定形石器などの剥片石器、磨石Ⅱ類・礫器Ⅰ類の礫石器、磨製石斧、打製石斧がある。そのほかには円盤状土製品があり、CⅢ-51・CⅢ-55からは琥珀が1点ずつ出土している。以上のピットは本遺跡での縄文土器の在り方から、後期前葉に位置づけられる。

c. 不明

調査3区に検出されたHⅣ-53・IⅨ-51は出土遺物を欠くが、埋土から縄文時代に属するものと推定した。平面形が隅丸方形と円形で、開口部径・深度とも小さなピットである。

(2) 古代

10基を分類した。時代別の内訳は、奈良時代1基、平安時代8基、不明1基である。

a. 奈良時代

GⅡ-56である。平面形が楕円形、開口部径が140×232cm、深さが36cmである。出土土器や十和田a火山灰を含むことから奈良時代に分類した。

b. 平安時代

8基は、調査2区の南地区に5基、調査3区に3基が分布する。大きくは焼土ピットとその他のピットに大別できる。

〈焼土ピット〉現地性焼土がピットの底面に形成されている例がGⅢ-53とHⅠ-51の2基に認められる。平面形は洋梨形や楕円形、開口部径は110×174cm・105×(106)cm、深度は16cm・5cmとなっている。

〈その他のピット〉FⅢ区に隣接して存在するFⅢ-54・FⅢ-55の2基は大型で、深度も他のピットに比べると大きい。平面形は円形と隅丸正方形、開口部径は232×250cm・200×206cm、深度は70cm・40cmである。その他の4基は開口部径がひとまわりは小さく、深度も小さい。平面形は長方形・円形・不整形である。

以上のピットの埋土に含まれる火山灰についてみると、十和田a火山灰を含むのはGⅢ-53・HⅡ-51、十和田a火山灰と白頭山一苦小牧火山灰を含むのはFⅢ-54、白頭山一苦小牧火山灰を含むのはFⅢ-55である。出土遺物は少ないが、6基から土師器甕が出土し、HⅠ-51とHⅡ-51の2基は琥珀を1点ずつ出土している。所属時期は、出土遺物や埋土から推定し

た。調査3区の3基は、HⅦ-52が土師器甕を出土しており、遺物のないGⅦ-51・HⅦ-51は埋土の類似性から同時代と推定した。

c. その他

GⅡ-55は、平面形が隅丸凸辺正方形、開口部径が152×168cm、深度が33cmである。出土遺物はなく、埋土に含まれる十和田a火山灰から古代に属することが明らかであるが、それ以上の細分はできない。

(3) 時期不明

5基を分類した。調査2区のDⅢ区に2基、FⅢ区に3基が分布する。ただ、人工のものかどうか判断のつかない3基(DⅢ-53・DⅢ-54・FⅢ-52)をこのなかを含めている。

4. 落とし穴

38基を検出している。形態はすべて溝状のものである。

(1) 事実記載中の形状

事実記載のなかの形状の項は記号としてあらわしている。図7に示しているように、平面形はI型とII型に分類している。縦断面形はA～D、横断面形は1～3と模式化し、その組み合わせによって「IA1」のように記載した。縦断面形・横断面形はあくまでも概念的なものであり、数多くの変異形を個々には含んでいる。以下、遺構名は番号だけで表わすことにする。

(2) 分類

平面形でI型としたものが単に溝状であるのに対し、II型は溝状の両端が円形に膨らむバーベル形になる。I型が35基、II型が3基である。

図8は底部の長軸長の分布を示したものである。I型は32基が計測可能であり、最小が198cm、最大が412cm、平均が336cmである。II型は3基全部が計測でき、最小が374cm、最大が422cm、平均が403cmである。I型はS・M・Lに大別する。最小と最大の差214cmを3等分した71cmを目安にし、分布領域のある程度のまとまりを区切った便宜的な分類にすぎない。

S：長さが198～262cmの3基(9%)である。さらに、S1：198cm(1基)とS2：255・262cmとに細分する。

M：長さが280～342cmの15基(47%)である。

L：長さが355～412cmの14基(44%)である。

II型は、上述のI型の分類でいえば3基ともLに含まれる。

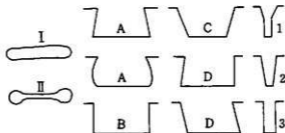


図7 落とし穴概念図

深度は、H I-101をのぞいた34基のI型で計測すると、最小が54cm、最大が164cm、平均が114cmである。10cm単位の深度では131~140cmに7基(21%)と分布密度が濃く、20cm単位のそれは131~150cmに12基(35%)が分布する。

(3) 分布

I型は調査2区・3区に分布する。調査2区では北地区が7基(20%)に対し南地区が19基(54%)と密集度が高い。その南地区でもF III・G II・G IIIの3区に計15基が密集する。調査3区は9基(26%)である。H VIII・H IXの2区に8基が集中する。II型は調査2区の北地区と南地区、調査3区に1基ずつが分散する。

(4) 副穴

底面に小ピット(副穴)を伴う例はない。

(5) 主軸方向

落とし穴のほぼ真中を通る長軸線と真北とが作る角度を主軸方向とし、真北から東西へ何度ズレているかをみる。N-90°-Wの間は23基(62%)が分布する。N-1°30'-W~N-81°-Wの間に分散する。N-90°-Eの間は14基(38%)で、N-3°-E~N-33°-Eの間に13基が分散し、1基がN-70°30'-Eと離れた分布を示す。主軸方向のちがいがいによる特定の分布の仕方、あるいは群の構成といったことは認められない。

(6) 配列状況

2基以上が集まり、有意の配列を示していることが考えられる例はない。

(7) 出土遺物

23基が遺物を出土しているが、すべて調査2区に分布する落とし穴であり、調査3区の10基は遺物を出土していない。出土量は一般に少量である。土器片は18基から出土している。調査2区北地区の落とし穴はI群とII群をともに出土するが、南地区ではI群が卓越する。石器は数が少ない。剥片石器は石鎌・ピエス・エスキュー、礫石器は磨石I類や礫器I類など、土製品は円蓋状土製品が出土している。

(8) 重複と遺構の時期

落とし穴同士の重複はH II-102(I型)とH II-103(II型)とにあり、前者が後者を切っている。縄文時代前期の住居跡との重複は、G III-1住居跡とG III-102、G III-2住居跡とG III-102・同104・同106、G III-4住居跡とG III-105との間にみられる。いずれの場合も落とし穴が埋土から切っており、新しい。縄文時代のピットとの重複は前期のG III-52とG III-103との間にあり、落とし穴が

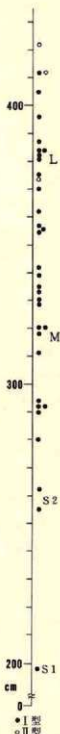


図8 落とし穴
長軸長分布図

新しい。古代の住居跡やピットと重複する例は4基にあるが、すべてそれらよりは古い。

落とし穴の所属時期を決定する資料を欠くが、県内各遺跡での例や本遺跡でみられる重複関係・出土遺物等から縄文時代に属すると考えてよいであろう。

VII まとめ(3)—遺物—

1. 古代の土器

土師器と須恵器があり、数量的には前者がほとんどを占める。器種は、土師器が甕・坏・壺・甔・須恵器は甕がある。もっとも多いのが土師器甕、次いで土師器坏であり、他は少数である。土師器甕と坏について分類をおこない、他は個別に記載するにとどめる。なお、遺物番号は土師器集成図(図10・11・13)に対応する。

(1) 土師器甕

成形に際し、すべてロクロを使っていない。法量と器形・調整を識別形質として分類する。古墳～奈良時代・奈良時代・平安時代の甕があるが、ここでは一括して分類している。

復元(図上復元も含む)できたのは14個体と少ないが、それらを用いている。口径と器高の関係を表わしたのが図9である。相関指数が0.9と強い相関関係がある。器高を優先し、小型：S、中型：M、大型：Lに大別する。器高は、最小6.7cm、最大37.3cmで、その比は1：5.6になる。口径は、Sは分布のまとまりが強い。MとLは重なる領域が一部にあるが、器高とともにみていくと、それぞれは独自の分布を示している。

小型：S

3個体は、器高が6.7～11.6cm、口径が9.3～11.2cmである。器高÷口径の値は0.72～1.03で、1.03以外の2点は口径が器高を上回る「ずんぐり」した器形になる。二つに細分する。

1. 1と2は口縁部と胴部が明瞭に区別され、2は段状になる。短い口縁部は外傾する。2点は最大径が胴部にあるが、2は口縁部とほぼ同じ値である。調整は、内外面とも口縁部がヨコナデ、胴部がヘラナデである。GII-1住居跡の第40図52もこの仲間の可能性があるが、残存状態が悪いために不明の部分があり、除外した。

2. 口縁部と胴部の区別のない円筒形の3を分類した。調整は内外面ともナデである。

中型：M

3個体は、器高が16.1～19.1cm、口径が16.5～17.9cmである。器高÷口径の値は0.98～1.21で、1.0以下は1点である。二つに細分する。

1. 胴部上半がいくぶん膨らむ3と4を分類した。最大径は、3が口縁部、4が胴部にある。3がやや長目の口縁部が外反気味になるのに対し、4は非常に短かい口縁部が真直ぐに立ち上

がり、外方へ折れる。調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部外面はヘラナデが主であるが、下部の一部がケズリようになる。内面はともにヘラナデである。

2. 6を分類した。口縁部と胴部の境が不明瞭で、わずかにへこむだけである。底部はいくぶん張り出し、膨らみをもって立ち上がった胴部はほぼ直線的に外傾しながら口縁部に達する。調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部外面はヘラミガキと一部が刷毛目、内面は刷毛目である。

大型：L

8個体は、器高が27.9~37.3cm、口径が17.6~20.7cmである。器高÷口径の値は1.32~1.94である。いわゆる長胴形のものと同張りのもと2種類があり、それぞれは変異形を含んでいる。

1. 長胴形のもの。最大径がある口縁部の形態から二つに細分する。

a. 口縁部から胴部へは漸時移行し、沈線や段を頸部に伴わない(7~11)。すべて古墳へ奈良

時代のGII-1住居跡からの出土である。器形は、口縁部が外傾し、胴部はやや直線的であるが下部から急激にすばまって底部に収斂する。7~9は口縁部に比べた底部が非常に小さく、強く張り出す特徴をもつ。7~9は、器高が33.0~37.3cm、器高÷口径の指数が1.68~1.94と大きい。調整は、口縁部は内外面ともヨコナデあるいはヘラミガキ、胴部外面がヘラミガキや刷毛目+ヘラミガキ、内面は刷毛目とヘラミガキに近いヘラナデ00である。胎土・焼成とも良好である。

b. 頸部に段を伴うが、段はそれほど明瞭ではない(12~16)。器形の全体を知ることができる例は16だけである。器形は、やや長目の口縁部が外傾し、胴部は上部あるいは半ばがいくぶん膨らむ。底部が残る16は胴部半ばからやや急激にすばまり、張り出した底部へ移行する。調整は、口縁部は内外面がヨコナデ・ヘラミガキ、胴部は外面がヘラミガキ・刷毛目、内面がヘラナデ・ヘラミガキに近いヘラナデ・刷毛目である。

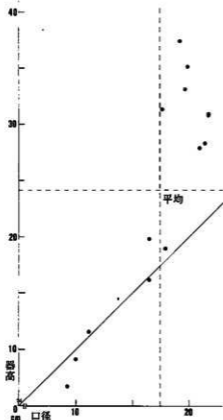
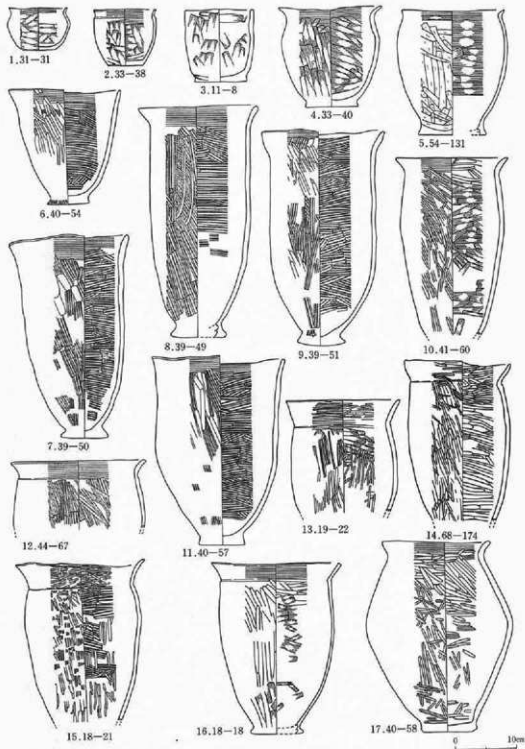


図9 土師器壺口径・器高分布図

2. 胴張りするもの。最大径は胴部上部へ半ば



※土器番号、挿図番号—遺物番号の順

図10 土師器集成図(1)

最小が12.0cm、最大が18.4cmである。G II-1 住居跡出土の3点は18.2~18.4cm、平均18.3cm、D III-3 住居跡の6点は12.0~17.0cm、平均14.6cmで、分布領域の重なりはない。

4. 器高

器高は計測できたのは6点である。最小が3.9cm、最大が7.4cmである。G II-1 住居跡の3点は5.9~7.4cmと最小と最大の幅が小さいのに対し、D III-3 住居跡の3点は3.9~7.3cmとその幅が大きい。

5. 調整

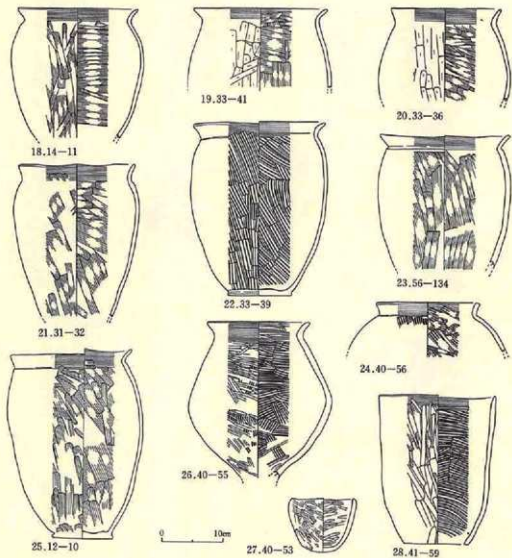


図11 土師器集成図(2)

にある。二つに細分する。

a. 頸部に段を伴わないもの(17~21)。器形の全体を知ることができるのは17だけである。口縁部はやや長く、外傾あるいは外反気味になる。胴部の膨らみは一般に丸味をおびるが、17は菱形のような膨らみを示す。21は膨らみが弱い、いちおうここに含めておく。底部が残る17の例はわずかに張り出している。調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部は外面がヘラケズリ・ヘラミガキ・ヘラナデ、内面がヘラナデ・ヘラミガキである。なお、同じ住居跡から出土し、17に器形がよく似た26があるが、下半が急激にすばまって小さいことから壺に分類した。

b. 頸部に段を伴うもの(22~25)。器形の全体を知ることができるのは22と25である。段は明瞭で、25は一部が沈線状になる。22・24以外は、やや長い口縁部が外傾し、胴部は丸味を帯びて膨らむ。最大径は胴部上部~半ばにある。底部が残る22・25の例はやや弱い張り出しになっている。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、胴部が内外面ともヘラナデと刷毛目である。以上のことをまとめると、次のようになる。



(2) 土師器坏

ロクロ使用の有無によって大別し、ロクロ不 사용을I群、ロクロ使用をII群とする。

I群

復元(図上復元を含む)できたのは9点である。内訳はGII-1住居跡が3点、DIII-3住居跡が6点を出土している。識別形質のいくつかについて記載する。

a. 器形

器形全体を知ることができる資料は6点である。明瞭な稜が形成され、体部と底部が区別される8以外は丸底であり、8もまた丸底の範疇でとらえることができる。底部を欠く例もすべて丸底と推定できる。器形は、胴部が直線的である8以外は内湾気味に立ち上がって口縁部に達する。

2. 段あるいは沈線

胴部外面に段が形成されるのは3だけである。1は外面半ばがへこむが、段を意図したものではない。上述のように、8は外面に稜を伴い、胴部と底部の区別が明瞭である。

3. 口径

ていねいなヘラミガキが内外面に施されている。ヘラケズリが外面の下部から底部に施される例は5にあり、底部が一部しか残っていない3も同様のものと推定できる。

6. 黒色処理

内面を黒色処理していないのは1と7・8の3点である。

以上、識別形質について記載してきたが、分類は出土遺構を単位として行うことができる。したがって、GII-1住居跡から出土した7~9(A類)とDIII-3住居跡から出土した1~6(B類)は時期的に異なる一群を形成し、それぞれのなかでの器形や技法のちがいは用途や機能に応じた変異形と考えることができる。

II群

復元(図上復元も含む)できたのはFIII-1・FIII-3・GII-3の3棟の住居跡から出土した4点にすぎない。法量以外はすべて共通の形質をもつ。すなわち、回転糸切り無調整、外面はロクロ痕、内面はヘラミガキのあとと黒色処理を施す点である。器高÷口径×100の指数は、38.6(10)・42.0(11)・43.1(12)・43.8(13)で、それほど大きな隔りはない。

(3) その他の土師器

a. 壺

GII-1住居跡から出土した26を分類した。胴部半ばに最大径があり、いくぶん丸味をおびた菱形の胴部下半は急激にすぼまる。底部を欠くが、残存部や共伴する甕の例から推定すると、小さく、強く張り出す底部になるであろう。調整は、外面は口縁部がヨコナデ、胴部が一部に刷毛目を残したヘラミガキ、内面は口縁部がヘラミガキ、胴部が刷毛目である。

b. 甕

GII-1住居跡から出土した28がある。無底式である。口唇部は幅6mm±の幅で浅くくぼんでいる。調整は、外面がヘラナデとヘラミガキ、内面が刷毛目である。

c. 鉢

GII-1住居跡から出土した27がある。小型で、内外面はていねいなヘラミガキが施されている。底部は丸底扁平底である。

(4) 須恵器

GII-1住居跡の埋土から、甕の小破片数点が出土しているだけである。

(5) 分類群の帰属と時期

(1)~(4)まで記載してきた土師器と須恵器の特徴と出土遺構から、時間的な序列をもつ三つの土器群が設定できる。

I群：GII-1住居跡の出土土器が指標になる。出土層位と共伴

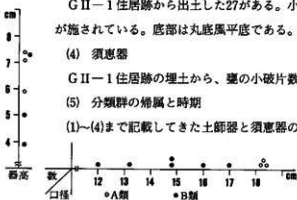


図12 土師器環I群口径・器高分布図

関係を考慮に入れると、土師器は甕がM2・L1a・L2a、坏がI群A類、壺・無底式の甕、小型の鉢の組成になる。甕Sも共伴するが、一部不詳な点があり、除外しておく。須恵器甕も共伴するが、小破片のため詳細は不明である。土師器は胎土・焼成とも非常に良好で、次のII群やIII群とは大きく異なる。

II群：DIII-3住居跡の出土土器が指標になる。出土層位と共伴関係を考慮に入れると、土師器甕L1bと坏I群B類の組成になる。GII-56ピットから出土した14もこの群に入る。

III群：FIII-3住居跡の出土土器が指標になる。土師器甕S1・M1・L2a・L2b、坏II群の組成である。FIII-1・GII-3の各住居跡の坏II群、DIII-1・DIII-2・FIII-2・HII-1・HII-1の各住居跡からの甕S1・S2・M1・L2a・L2bもこの群に含まれる。

以上のI群～III群の時期は、高橋（1982）の岩手県の土師器の編年に対比させるとおおよそ次のようになる。

I群は高橋のII-1群に近いものと考えられる。高橋は東北地方南部の栗田式に相当し、7世紀後半～8世紀はじめに位置づけられるとしている。II群はII-2群に近いものである。高橋は東北部の国分寺下層式に相当し、8世紀中～後半に位置づけられるとしている。III群は

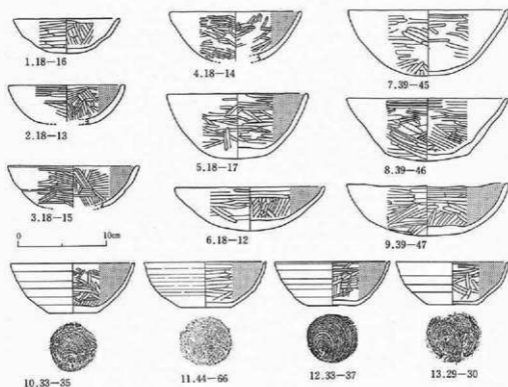


図13 土師器集成図(3)

Ⅲ-2群に相当する。高橋はおおよそ9世紀末から10世紀に位置づけられるとしている。ただHⅠ-1住居跡出土の短かい口縁部を特徴とする土師器壺5(M1)のように新しい時期の様相をもつものはⅢ-2群でも新しい方に含まれるであろうし、あるいはⅣ群に含めることもできるかもしれない。しかし、Ⅲ群を細分できるほどの資料の裏づけはなく、ここでは一括しておきたい。

2. 琥珀

琥珀は遺構内外から出土し、数量も多い。出土する遺構は主体である住居跡のほか、ピット・落とし穴がある(表7)。住居跡の時期別出土棟数は、古墳～奈良時代と奈良時代が1棟ずつ、平安時代が10棟で、古代の住居跡16棟の75%からの出土になる。出土地点と層位は、住居跡埋土を中心に、床面・床面直上・カマド・煙道部、付属ピットである。出土点数は1～62点、重量は0.05～38.98gとバラツキがあり、10点を越える例は3棟しかない(DⅢ-6・GⅡ-1・HⅠ-1の3棟)。合計は118点99.36gである。最大の62点38.98gが出土しているHⅠ-1住居跡は最小0.01gから最大3.48gと幅があり、その73%は1g以下である。次いで多いGⅡ-1住居跡は18点24.48gで、最小0.02gから最大13.5gである。最大の塊は直径約32mmである。出土の形の形状は、穿孔や粗削りが認められる8点(7%)をのぞいた110点は破片と塊であり、取り上げ時あるいはその後に破砕することが多い。したがって点数はすべて取り上げ時の1点としている。加工痕が認められるもののうち、4点は粗削りがほどこされている。両面に観察できる1点は20×20×8mm、2.1g、現状の形状は多角形に近い。穿孔されているのは4点である。1点は両面から穿孔されているが、貫通はしていない。粗削りの有無は不明で、22×12×12mm、孔の直径は2mm±である。残る3点は片面から穿孔されているが、貫通はしていない。うち1点は2個の孔をもつ。

ピットは4基から1点ずつ、合計4点、1.36gが出土している。2基は縄文時代後期、2基は平安時代に属する。

落とし穴は埋土最上部から1点0.3gが出土したCⅢ-101があるだけである。

遺構外ではCⅡ区・DⅢ区・HⅡ区から合計4点0.39gの破片があるにすぎない。

3. 金属製品

鉄製品と鉄滓が古代の住居跡と住居状遺構・遺構外から出土しているが、器種・量とも少ない。

(1) 鉄製品

鉄製品は8棟の住居跡から11点が出土している。器種別の内訳は刀子1点、鍔形鉄製品3点、

刺突具1点、釘1点、器種不明5点である。奈良時代のDⅢ-3住居跡をのぞいては平安時代に属する。刀子はDⅢ-4住居跡から1点出土している。焼けた柄を残していたが、残存状態が悪く、図示していない。鐵形鉄製品とした器種はDⅢ-6・FⅢ-2・HⅠ-1住居跡から出土している(第27図27・第31図34・第54図131)。鉄鏃に似るが、大型であることや131のように中央部に目釘を伴うことの原因から銚に類するものと推定した。有茎と無茎があるが、27は

種類	No	遺構名	時代	出土地点・層位	点数	重量g	備考
住居跡	1	GⅡ-1	古墳～奈良	埋土・床面直上	18	24.48	穿孔1点。22×12×12mm 0.02g～13.5g
	2	DⅢ-3	奈良	埋土	4	1.71	穿孔1点。14×7×9mm
	3	DⅢ-1	平安	床面・煙道部	3	2.22	粗削り1点
	4	DⅢ-2	〃	床面	1	0.05	
	5	DⅢ-4	〃	埋土	3	2.85	
	6	DⅢ-5	〃	床面・床面直上 埋土・ピット	8	17.76	粗削り2点 穿孔1点。12×10×8mm
	7	DⅢ-6	〃	床面・埋土・カマド 煙道部ほか	10	5.92	
	8	FⅢ-2	〃	埋土	1	0.29	
	9	FⅢ-3	〃	〃	1	0.1	
	10	FⅢ-4	〃	床面	1	0.12	
	11	HⅠ-1	〃	埋土中・下部中心 埋土上部・ピット・床面	62	38.98	両面粗削り1点。20×20×8mm 0.01～3.48g
	12	HⅡ-1	〃	埋土	6	4.88	穿孔1点。16×8×8mm
	小計			118	99.36		
ピット	13	CⅢ-51	縄文	埋土	1	0.6	
	14	CⅢ-55	〃	〃	1	0.21	
	15	HⅠ-51	平安	〃	1	0.5	
	16	HⅡ-51	〃	〃	1	0.05	
		小計			4	1.36	
落穴とし	17	CⅢ-101	縄文	埋土最上部	1	0.3	
		小計			1	0.3	
遺構外	18	CⅡa4	—	Ⅱ層	1	0.07	
	19	CⅡc1	—	〃	1	0.02	
	20	DⅢe4	—	不明	1	0.05	
	21	HⅡc1	—	Ⅱ層	1	0.25	
		小計			4	0.39	
	合計			127	101.41		

表7 琥珀出土遺構一覧表

基部を失い、不明である。一側縁あるいは両側縁が錆のためにいちじるしく肥厚する点も共通する。刺突具と推定した製品はFⅢ-4住居跡にある(第31図35)断面が正方形の棒状の5本がたがいにくっつき合った状態で出土し、1本の太さは3×3mm、長さは61~80mmである。一端が細くなるように見受けられる。一端を失なうが釘と推定した製品はHⅠ-1住居跡にある(第54図132)。そのほか小破片あるいは錆・破損等の理由で器種が不明のものがDⅢ-3・DⅢ-6・FⅢ-3・FⅢ-4・HⅡ-1の5棟から1点ずつ出土している。FⅢ-4住居跡の第35区44は両刃で半ばから折れ曲っている。鈍の可能性もあるが、はっきりしない。

(2) 鉄滓

遺構からの出土例は5棟の住居跡・1棟の住居状遺構・1基のピットにある。

住居跡からの出土は、FⅢ-2住居跡が10点235.52g、FⅢ-3住居跡が1点360g、GⅡ-1住居跡が6点99.55g、GⅡ-3住居跡が11点133.24g、HⅧ-1住居跡が1点740g、合計29点1,568.31gである。古墳~奈良時代のGⅡ-1住居跡を除いては平安時代に属する。出土層位は埋土を中心に床面がある。個々の大きさや重量にはバラツキが著しい。HⅧ-1住居跡の1点は95×125×35mmの椀形滓である。

HⅡ-2住居状遺構からは76点3,547gが埋土上部から一括して出土した。個別には1.15~420gと重量にバラツキがある。一括廃棄されたものであることが出土層位や状況から推測できる。この遺構は平安時代に属する。

ピットでは、奈良時代に属するGⅡ-56ピットの埋土から1点1.95gが出土している。

遺構外ではI層を中心に、一部がII層から出土している。GⅡ区3点108.05g、GⅢ区6点99.8g、HⅠ区1点170g、HⅡ区19点263.03g、合計29点640.88gである。調査2区の南地区に集中する分布上の特徴がある。HⅡ区に多いのはHⅡ-2住居跡状遺構があるHⅡa3から18点230.38gが出土しているためであり、本来は同遺構のものと考えられることができる。

以上、遺構内外の鉄滓を合計すると、遺構内が106点5,117.26g、遺構外が29点640.88g、あわせて135点5,758.14gである。なお籾の羽口はGⅡ-1住居跡とGⅢe0から小破片が1点ずつ出土しているにすぎない。

4. 自然遺物

(1) 貝類

平安時代に属するDⅢ-5・DⅢ-6の2棟の住居跡から貝類が出土している。DⅢ-5住居跡は最大層厚10cm土の貝層が後半の埋土下部~床面直上の層準に形成されており、種類・数量とも多い。また、部分調査のため、種類・数量とも実際はさらに多いものになる。DⅢ-6住居跡は埋土下部とP1埋土の2カ所から出土しているがブロックの状態での出土であり、

種類・数量とも多いものではない。

以上の貝類の種名・数量・計測値等は付篇に掲載している。

(2) 植物遺体

クルミが3点出土しているだけである。縄文時代前期のGⅢ-53ピット、古墳～奈良時代のGⅡ-1住居跡、平安時代のDⅢ-6住居跡の埋土から1点ずつである。

VIII まとめ(4)―遺跡―

1. 周辺の遺跡

周辺の遺跡を概観し、本遺跡との若干の比較を行いたい。発掘調査された遺跡に限定し、第1図に位置を示すとともにおおよの内容を一覧表にした(表8)。番号は図と表が照合する。1～13は久慈市、14～17は南側で隣接する九戸郡野田村に所在する。もとにした資料には報告書以外のものもあり、一部に遺漏があるだろうことをお断りしておく。また上野山と上野山II遺跡は本来は同一遺跡であるが、調査主体と報告が別々であることから、便宜的に2遺跡としてあつかうことにする。

(1) 縄文時代

早期 貝殻文土系土器片2点が源道遺跡から出土している。本遺跡では早稲田4類と推定される破片1点を表採している。

前期 土器は7遺跡から出土している。繊維を含むと報告されている^{こがやま}上野山II遺跡の破片はいちおうここに含めた。包含層を調査した大尻遺跡に土器が多く、円筒下層b式～同d式がある。同遺跡ではそれらに伴う琥珀が出土している。円筒下層d式は広内・上明内の各遺跡にもある。上明内遺跡からは円筒下層a式が出土している。

本遺跡では前葉の住居跡6棟とピット13基が検出されている。

中期 土器を出土するのは2遺跡だけであり、分布が希薄である。大尻遺跡は円筒上層a式と同b式、三崎1遺跡は円筒上層b式～同e式、大木7式・同8式を出土している。

本遺跡では遺構・遺物ともみつからない。

後期 土器は7遺跡から出土している。初頭～前葉の土器は中長内・小屋畑・上野山・上野山II・三崎IIIの各遺跡、中葉の土器は中長内・三崎IIIの各遺跡、末葉の土器は大芦遺跡から出土している。上野山遺跡で検出された3棟の住居跡は前葉に分類されている。

本遺跡では前葉の住居跡2棟とピット10基が検出されている。

晩期 土器は6遺跡から出土している。量のやや多い大芦遺跡は大洞B-C式と同C₁式が主体を占める。小屋畑遺跡は大洞C₁式、上野山II遺跡は大洞C式と同A式、源道遺跡は大洞

No	遺跡名	縄文時代						弥生	古墳	奈良	平安	中・近世	周隣	備考
		法別跡												
		早期	前期	後期	晩期	不明	その他							
1	大戸	遺構											三崎段丘?	
	遺物			○	○								標高160m	
2	田中Ⅱ	遺構						14					山麓地及び池の痕跡	
	遺物					○				土師器 燧石片 6点			標高35~90m	
3	前道	遺構						17		22 ○ 21 ○		1	権市段丘	
	遺物	○				○				琥珀・鉄製品			標高21~40m	
4	中長内	遺構				8 29 32		23		奈良・平安 22 33		2	権市段丘	
	遺物		○		○		○			琥珀・鉄製品			標高31~42m	
5	平沢Ⅱ	遺構					30期						平沢1に隣接	
	遺物													
6	小原Ⅱ	遺構					○		2	6 博打			権市段丘	
	遺物		○		○	○	○		○	鉄製品			標高20~28m	
7	上野山	遺構			3	1 5		4					権市段丘	
	遺物				○	○		琥珀				○	標高21~28m	
7	上野山 (Ⅱ)	遺構				1		2					尾根	
	遺物		○?		○	○	○			鉄製品			同一道路 標高15~40m	
8	東田島地	遺構				7 31				8 33			権市(二子)段丘及び権市段丘	
	遺物				○	○	○			琥珀・鉄製品			標高50~90 m前後か	
9	大沢	遺構											有家段丘及び栗生段丘	
	遺物		○	○									標高60~110m	
10	小畑Ⅱ	遺構				6 6							三崎段丘	
	遺物		○							土師器片 1点			標高175~183m	
11	三崎Ⅱ	遺構				4 7							三崎段丘	
	遺物			○	○		○						標高175~182m	
12	山原Ⅱ	遺構						1					河岸段丘	
	遺物								○				標高42m	
13	上新山	遺構					1		2				河岸段丘	
	遺物					○			鉄製品	○			標高42m	
14	広内	遺構												
	遺物		○											
15	上新内	遺構												
	遺物		○											
16	中平	遺構							1?	14			海岸段丘	
	遺物						○	○		琥珀・鉄製品			標高40~70m	
17	吉原山	遺構							8				権市段丘	
	遺物						○	○					標高25~30m	
遺構計				3	1	9	52	133	古代の住居跡として一帯153棟				3	
遺物計		6		2			25	38	近世一奈良 3			1	14	8
平沢Ⅰ	遺構	○	○				○		○	○			栗生段丘	
	遺物			○					○	○			標高90~100m	

1・2・6・7・9~17:報告書ほか 3:略称 8:取壊資料 4・5:表示 16:「?」の遺跡。

表8 周辺の遺跡一覧表

A式、上野山遺跡は大洞A'式が出土している。住居跡は中葉～後葉に位置づけられる1棟が上野山II遺跡に検出されている。

本遺跡では遺構・遺物ともみつかっていない。

その他 中長内遺跡では前期あるいは後期と推定される住居跡8棟、上野山遺跡では時期不明の住居跡1棟が検出されている。

以上のほかに縄文時代に属することが考えられる遺構に落とし穴がある。7遺跡から133基+α(平沢II遺跡の10数基)が検出されている。形態は、本遺跡と同様の溝状のものが112基と優占するが、円筒形のものが兼田農場遺跡に16基、中長内遺跡に4基、田中IV遺跡に1基がある。

(2) 弥生時代

土器は7遺跡から出土している。不明な兼田農場遺跡を除いては末葉の天王山式(系土器)や赤穴式とされている。中長内遺跡からは前半期の土器が少量出土している。また北海道系の土器である後北式土器が2遺跡から出土している。中長内遺跡の例は後北C式、古館山遺跡では後北C2式と同D式である。

本遺跡では赤穴式に近似する土器片が少量出土している。

(3) 古代

遺構が所属する時代に不明な点が一部の遺跡にあるため、ここでは古墳時代～平安時代を一括して古代とし、必要に応じて時代別に取り上げる。

古代の遺物や遺構が発見されているのは13遺跡である。田中IV・小袖IIの2遺跡は土師器の破片若干が出土しているだけである。住居跡は11遺跡から153棟が検出されている。そのうち、奈良時代に属するのは、源道遺跡が22棟、古館山遺跡が8棟、小屋畑・上野山II・上新山の3遺跡が2棟ずつ、山屋敷・中平・上明内の3遺跡が1棟ずつであり、合計8遺跡49棟である。7世紀末から8世紀前半にかけての時期に位置づけられるとしている上野山遺跡の4棟のうちの何棟かと中長内遺跡のうちの比較的多い棟数がさらに加わる。平安時代に属するのは、源道遺跡が21棟、中平遺跡が14棟、小屋畑遺跡が推定も含めた9棟、兼田農場遺跡が8棟、上明内遺跡が1棟、合計5遺跡53棟である。中長内遺跡の57棟のうちの比較的多くの棟数がこれに加わる。

本遺跡では古墳～奈良時代1棟、奈良時代1棟、平安時代14棟の住居跡が検出されている。

本遺跡も含め、住居跡が検出された12遺跡は所属時期のちがいがから三つに分類できる。①平安時代以前の住居跡しか検出されない遺跡である。上野山・上野山II・山屋敷・上新山・古館山の5遺跡が含まれる。②平安時代にも引き続き集落として利用される遺跡である。源道・中長内・平沢I・小屋畑・中平・上明内の6遺跡が含まれる。③平安時代に新たに集落が営まれる遺跡である。兼田農場遺跡が含まれる。

しかし、上述の傾向は発掘調査の限られた結果にもとづくもので、確実な点は今後明らかに

なるであろう。例えば、表土から住居跡の存在を確認できる遺跡があり、山屋敷遺跡は24棟、上新山遺跡は「100基を超えるであろう」とされているし、一部が県の指定史跡である中平遺跡は7haの範囲に200棟弱の住居跡の存在が予想されている。また、本遺跡の場合も試掘調査で確認された80棟近い古代の住居跡の一部を発掘したにすぎない。

この時代の特徴的な遺物に琥珀がある。住居跡からの出土例に限れば、中長内遺跡は57棟のうち29棟、兼田農場遺跡は8棟すべて、上野山・中平の各遺跡は1棟ずつから出土している。そのうち、中長内・兼田農場・上野山の3遺跡では未製品（半加工品・半製品）が出土し、中長内遺跡では住居跡内で加工作業がおこなわれたものと推定されている。

2. 遺跡のまとめ

平沢Ⅰ遺跡はおおよそ30万㎡の面積を有する台地上にあり、今回は7,472㎡を調査した。

この調査に先立つ昭和57年、久慈市教育委員会は遺跡全域に及ぶ試掘調査を実施し、80棟近い数の古代の住居跡をはじめ、縄文時代の住居跡やピット・落とし穴など多くの遺構の存在を確認している。したがって今回の調査区域が遺構分布密度の濃い部分に相当することを予め想定して調査に入ったわけである。最後に、今回の調査範囲で知りえた時代別の遺跡の様相を簡単に描いてみたい。

縄文時代は居住域と狩猟の場として主に機能していた。活動の痕跡は前期前葉に認められる。住居跡6棟とピット13基の遺構があり、伴う縄文土器はⅠ群に分類した。住居跡は調査2区の中央部にある浅い開析谷を挟んだ南北に分布するが、北地区に1棟、南地区に5棟と密度が異なる。南地区の住居跡の周辺には同時期のピットの大部分が集中する。住居跡同士の重複があり、同時期のなかでも反復して遺跡が利用されていることを知ることができる。また6棟のなかでは29.4㎡の相対的に大型の1棟があることが注目される。共存するⅠ群土器は大木Ⅰ式以前ではあるものの相当する型式名は与えることができず、単に前葉の土器群として位置づけた。この時期の住居跡の調査例は岩手県では数が非常に少なく、良好な資料を提供することになろう。その後、長い空白期がある。次に活動の痕跡が認められるのは後期前葉に入ってからである。

後期前葉の遺構は住居跡2棟が調査2区北地区北端に作られ、その周辺に同時代のピット10基の内のほとんどが分布する。住居跡2棟は部分的な調査であり、住居形式や規模ほかに不明の点が多い。共存する土器はⅡ群土器として分類した。大部分が前葉の十腰内Ⅰ式に相当する。このあと、弥生時代末葉まで再び長い空白期を挟む。

縄文時代の前期あるいは後期のどちらの時期に所属するかが明らかではないが、38基が検出された落とし穴は狩猟の場としても活発に利用されていたことを示している。粗密はあるもの

の調査区のほぼ全域に分布し、調査2区は分散、調査3区は北半の一部に集中して存在する。形態は、大きくは溝状のものといえ、単に溝状であるもの35基と溝状の両端が円形に膨らむ「パーベル状」のもの3基とに細分でき、前者をI型、後者をII型として分類するとともに、底部の長軸長に応じて便宜的にS、M、Lとした。しかし、落とし穴相互あるいは前期・後期あわせて8棟の住居跡との有意な関係は、調査区域の狭いこととあいまって、読み取ることができなかった。

この時代の遺物の特徴の一つに、礫石器の多いことがあげられる。特に打製石斧とともに礫器I類～III類としたチョッパーあるいはチョッピングツールに類似した資料が多い。GIII-1住居跡や同一2住居跡の出土例から、前期前葉の遠構・土器に共伴するものと推定した。時期的に合致し、さらに出土量のうえでも比較できる岩手県内の遺跡は調べた範囲では知ることができなかった。もうひとつ特徴的なことは、石器の剥片あるいは破片が縄文時代の各種遺構に限らず、II層や古代の遺構から数多く出土していることである。特に今回の調査区だけでなく、試掘調査のトレンチでも多く採集することができる。また剥片石器だけではなく礫石器のそれらも多い。沿岸部という原材料の入手しやすい条件を考慮に入れると、石器の製作がかなり高密度の作業として行われていたことも推測できる。

後期前葉のあと、数は少ないが、弥生時代末葉の赤穴式に類似した資料が出土している。共伴する遺構はない。この時期の遺物は久慈地方の他の遺跡にも数量は少ないが、よく発見されるもので、出現度は高いものといえる。

次いで、GII-1住居跡の時代に入る。出土遺物の特徴と高橋編年（高橋、1982）から、古墳～奈良時代という過渡的な所屬時期を推定したが、より前者に近いものと考えておく。調査2区南地区にあり、床面積は古代住居跡16棟のうち最大で（33.8㎡）、四本柱である。長胴形で、極端に張り出す小さな底部をもつ大型土器壺を共伴する。他に土器の坏・壺・甔・鉢が構成器種になる。土器は胎土・焼成が良好で、調整とともに次の時代以降の土器とは大きく異なる。

奈良時代の住居跡も1棟である。調査2区北地区にある。床面積では中型に分類でき、四本柱である。土器はGII-1住居跡に比べると小型の丸底の坏が特徴的である。

平安時代に入ると、棟数が増え、14棟が検出された。調査2区全域に分布するほか、離れた調査3区に2棟が存在する。床面積が計測できた10棟は、中型に分類した1棟を除いては小型であり、柱穴を伴わない。ただ、調査区域外にでるGII-3住居跡は30㎡前後とこの時代の住居跡では最大の床面積が推定でき、柱穴2個が確認されている。共伴する土器はロクロ使用の坏とロクロを使わない甕とがあるが、数は多くない。甕の中にはより新しい時期に位置づけられる形態をもつものがHII-1住居跡にあり、平安時代として一括したものの、当然時間差

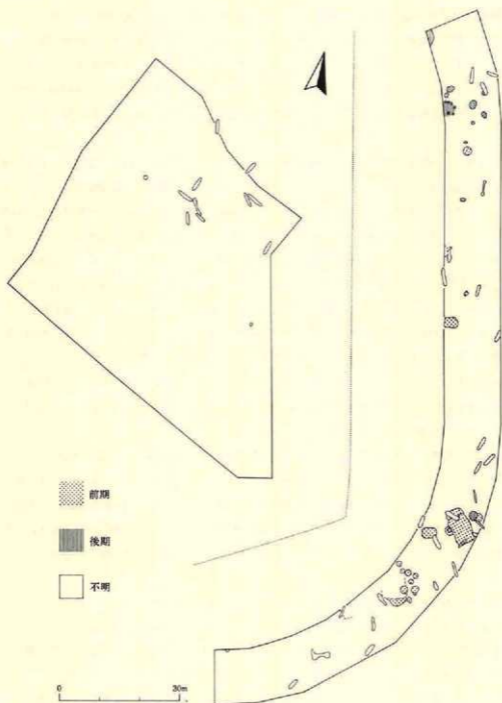


图14 縄文時代遺構分布図

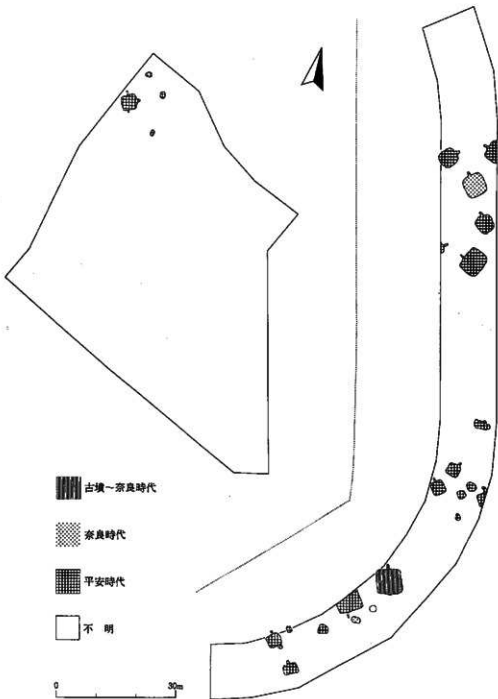


图15 古代遺構分布図

を考慮しなければならないであろうが、細分はできなかった。またカマドがなく、張り出し部をもつFⅢ-1住居跡は住居形式からもっとも新しい時期に属することが推定できる。

平安時代になると集落が山間地へ拡大して行く現象は岩手県北部でも顕著であり、とくに安比川流域によく見られる。久慈市付近では、平安時代以前と以降を比較した場合、以前の集落跡が数のうえでは多く、先の山間地への拡大の現象とはやや異なった原理が働いていたことが考えられる。しかし、1でも述べたように、限られた数の発掘調査の結果であり、確実な点は今後明らかになっていくであろう。久慈市付近は海岸段丘の発達がよく、9段の段丘面が認められる(照井,1982)。集落が成立するための要件の一つである生業形態の違いといったことは、当然古代の遺跡の立地に現われてきているはずである。本遺跡はこれまで調査された遺跡よりはやや高い面に立地していることが特徴であるが(表8)、本報告では他遺跡との比較・検討を行うことはできなかった。

久慈地方は日本最大の琥珀産地であり、久慈市夏井町から野田村玉川付近まで続く上部白亜系の久慈層群中の主に玉川層から産出する。本遺跡では縄文時代後期のピット2基と古代の住居跡12棟(16棟に対して75%)などから出土し、一部に加工痕を残すものがある。近い位置にある中長内遺跡では、古代において通常の住居跡で琥珀の加工作業を行ったことが想定されている。本遺跡の場合、遺構に痕跡を認めることはできないが、なんらかの作業が行われていたことは当然予想され、複合していたであろう生業形態の一部であったことも推測できるかもしれない。

引用文献

- 岩手県埋蔵文化財センター(1985):中平遺跡、『岩手の遺跡』,338-339.
- 石田琢二・大池正二・小野寺信吾・竹内貞子・中川久夫・七崎 修・松山 力(1969):東北地方における第四紀海水準変化。『日本の第四系』,37-82.
- 大池正二(1964):八戸浮石の絶対年代-日本の第四紀層の¹⁴C年代Ⅲ,地球科学No.70,38-39.
- 大川 清(1962):住居地に於ける焼土について,古代,第7・8合併号,52-58.
- 岡村道雄(1983):ピエス・エスキュー,『縄文文化の研究7』,106-116,雄山閣.
- 貝塚真平(1985):平野と海岸の生いたら,『日本の平野と海岸』,105-109,岩波書店.
- 高橋信雄(1982):古代,『岩手の土器』,27-34,岩手県立博物館.
- 照井一明(1982):陸中海岸北部地域の海岸段丘と古流系,岩手県高等学校教育研究会地理部会誌,1-34.
- 成田彦彦(1981):青森県の土器,『縄文文化の研究4』,123-132,雄山閣.
- 町田 洋・新井朋夫・森脇 広・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984):チフラと日本考古学,『古文化財の自然科学的研究』,865-928,同朋舎出版.

報告書

<岩手県>

岩手県埋蔵文化財調査報告書(第7集～第80集)と岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書(第117集～第126集)は「岩埋文報告書」と略している。

岩手県埋蔵文化財センター(1979):『二戸市沢内B遺跡』,岩埋文報告書第7集。

〃(1983):『上野山遺跡発掘調査報告書』,岩埋文報告書第67集。

〃(1984):『小屋畑遺跡発掘調査報告書』,岩埋文報告書第80集。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(1987):『田中IV遺跡発掘調査報告書』,岩埋文報告書第117集。

〃(1988):『飛鳥台地I遺跡発掘調査報告書』,岩埋文報告書第120集。

〃(1988):『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(昭和62年度分)』,岩埋文報告書第126集。

草間俊一(1967):『野田村中平遺跡』,Artes Liberales(岩手大学教養部報告)No.2,36-48。

〃(1970):『中平・上明内調査概報』,野田村教育委員会。

〃(1971):『岩手県野田村広内遺跡』,日本考古学年報19,85-86。

〃(1972):『岩手県野田村中平遺跡第二次調査概要』,岩手史学研究No.58,30-38。

久慈市教育委員会(1976):『山屋敷遺跡発掘調査報告書』,久慈市文化財調査報告書第1集。

〃(1978):『三崎(III)遺跡発掘調査報告書』,久慈市文化財調査報告書第2集。

〃(1979):『上新山遺跡発掘調査報告書』,久慈市文化財調査報告書第3集。

〃(1984):『上野山(II)遺跡発掘調査報告書』,久慈市文化財調査報告書第4集。

〃(1985):『大戸遺跡発掘調査報告書』,久慈市文化財調査報告書第5集。

* (1985):『兼田農場遺跡』,現地説明会資料

〃(1987):『小袖II遺跡発掘調査報告書』,久慈市文化財調査報告書第6集。

〃(1987):『大矢遺跡発掘調査報告書』,久慈市文化財調査報告書第7集。

野田村教育委員会(1987):『古館山』,野田村文化財調査報告書。

平沢 I 遺跡出土の動物遺存体

陸前高田市立博物館 佐藤 正彦
東北学院大学学生 熊谷 賢

出土した動物遺存体と遺構との関係は一覧表に掲載した(表1)。ここでは個別の住居跡からの遺存体の特徴を記載したあと、まとめをおこなう。

1. DIII-5 住居跡

I. 軟体動物

i. 腹足綱

エゾアワビ：4点出土している。破砕が著しく、その形状からエゾアワビと同定するのは困難である。エゾアワビはクロアワビ *Haliotis (Nordotis) discus discus* Reeve の北方種である。現在の分布域は福島県以南がクロアワビで、以北がエゾアワビとされている。ここでは一応エゾアワビとして扱っておく。

マツバガイ：3点出土している。最大殻は、殻高2.7mm、長径6.2mm、短径4.4mmと小型である。岩礫性の二枚貝を採集した際に付着してきたものであろうか。

ユキノカサガイ科の一種：3点出土している。幼貝である。

ユキノカサガイ：1点出土している。殻高2.1mm、長径5.4mm、短径4.6mmと小型である。岩礫性二枚貝に付着してきたものであろうか。

シボリガイ：1点出土している。殻高3.9mm、長径7.5mm、短径5.8mm。岩礫性二枚貝に付着してきたものであろうか。

カモガイ：2点出土している。最大殻は、殻高3.5mm、長径6.9mm、短径5.5mmと小型である。岩礫性二枚貝に付着してきたものであろうか。

アオガイ：4点出土している。最大殻は殻高2.4mm。岩礫性二枚貝に付着してきたものであろうか。

コウダカアオガイ：17点出土している。最大殻は殻高2.5mm。岩礫性二枚貝に付着してきたものであろうか。

シロガイ：31点出土している。最大殻は、殻高3.1mm、長径7.7mm、短径6.0mmである。岩礫性二枚貝に付着してきたものであろうか。

クボガイ：6点出土している。3点は破砕が著しい。最大殻は、殻高18.0mm、殻径20.4mmである。

表1. 出土地別種名一覧表

種名	DⅡ-5位	DⅡ-6位 P, 埋土	DⅡ-6位 Q, 埋土下部
I 軟体動物 MOLLUSCA			
i. 腹足綱 GASTROPODA			
1. エゾアツビ <i>Halotis (Nordotis) discus hanaui Ino</i>	○	○	
2. マツバガイ <i>Cellana nigrolineata (REEVE)</i>	○		
3. コキノカサガイ科の一種 <i>Acmaeidae gen. et sp. indet.</i>	○		
4. ユキノカサガイ <i>Acmaea (Niveotectura) pallida (GOULD)</i>	○		
5. シボリガイ <i>Patelloida (Collisella) pygmaea signata (PILSBRY)</i>	○		
6. カモガイ <i>Collisella dorsuosa (GOULD)</i>	○		
7. アオガイ <i>Notoacmea schrenckii (LISCHKE)</i>	○	○	
8. コウゾクアオガイ <i>Notoacmea concinna (LISCHKE)</i>	○		
9. シロガイ <i>Collisella pelta shirogai Habe et Ito</i>	○	○	
10. ニシキウズガイの一種 <i>Trochidae gen. et sp. indet.</i>		○	
11. イシダタミガイ <i>Monodonta labio (LINNÉ)</i>			○
12. クボガイ <i>Chlorostoma argyrostoma lischkei (TAPPARONE-CANEFF)</i>	○		○
13. サンショウウスガイ? <i>Neocolonia pilula (DUNKER)</i>		○	
14. チャイロタマキビ <i>Tamanella turrita (A. ADAMS)</i>	○		
15. タマキビガイ <i>Littorina brevicula (PHILIPPI)</i>	○		
16. タマキビガイ? <i>Littorina brevicula (PHILIPPI)</i>		○	
17. ナヅミボラ <i>Nucella beyseana (DUNKER)</i>	○	○	
18. レインガイ <i>Thais bronni (DUNKER)</i>		○	
19. イボニシ <i>Thais clavigera (KÜSTER)</i>		○	
20. クロスジムシロガイ <i>Reticunassa fratercula (DUNKER)</i>	○		
21. ハツラマイマイ <i>Discus pauper (GOULD)</i>	○		
22. オオコハクガイ <i>Zonitoides nitidella (MÜLLER)</i>	○		
23. コハクガイの一種 <i>Zonitidae gen. et sp. indet.</i>		○	
24. ベッコウマイマイの一種 <i>Helicartoniidae gen. et sp. indet.</i>	○		
ii. 二枚貝綱 BIVALVIA			
1. フネガイ科の一種 <i>Arcidae gen. et sp. indet.</i>	○		
2. ムラサキインコガイ <i>Septifer (Mytilisepta) virgatus (WIEGMAN)</i>	○	○	○
3. イガイ <i>Mytilus edulis LINNÉ</i>	○		
4. エゾイガイ <i>Crenomytilus grayanus (DUNKER)</i>	○		
5. マガキ <i>Crassostrea gigas (THUNBERG)</i>	○		
6. ナリハギガイ <i>Lasaea undulata (GOULD)</i>	○		
7. マンジエ <i>Corbiculina leana (PRIME)</i>		○	○
iii. ひざらがいの綱 POLYPLACOPHORA			
1. ウスヒザラガイ科の一種 <i>Ichnochitonidae get. et sp. indet.</i>	○		
II. 節足動物 ARTHROPODA			
1. 蟹脚綱 CIRRIPIEDIA			
1. イワフジツボ <i>Chthamalus challengeri HOEK</i>	○		
2. アカフジツボ <i>Balanus tintinnabulum rosa PILSBRY</i>	○		
3. チシマフジツボ <i>Balanus cariosus (PALLAS)</i>	○	○	
ii. 甲殻綱 CRUSTACEA			
1. 十脚目の一種 <i>Decapoda fam. indet.</i>			
III. 棘皮動物 ECHINODERMATA			
i. 海胆綱 ECHINOIDEA			
1. ムラサキウニ <i>Anthodiaris crassispina (A. AGASSIZ)</i>	○	○	

チャイロタマキビガイ：6点出土している。最大殻は、殻高5.4mm、殻径3.9mmである。海藻上に生息する貝で、海藻採集時に付着してきたものと思われる。

タマキビガイ：26点出土している。最大殻は、殻高11.6mm、殻径10.7mmである。ほとんどが完存貝である。

チヂミボラ：15点出土している。最大殻は、殻高27.0mm、殻径17.4mmである。殻高6.85～27.0mm、殻径4.6～17.4mmの範囲でばらつきがみられ、均一性はない。

クロスジムシロガイ：2点出土している。最大殻は、殻高4.9mm、殻径3.0mmと小型である。

バツラマイマイ：3点出土している。最大殻は殻高2.8mmである。

オオコハクガイ：11点出土している。

ベッコウマイマイ科の一種：4点出土している。

ii. 二枚貝綱

フネガイ科の一種：右殻1点が出土している。幼貝である。

ムラサキインコガイ：右殻2,171点（うち完存貝387点、完存率17.83%）、左殻2,102点（うち完存貝403点、完存率19.17%）が出土している。本遺構で最も多く出土している貝で、全体の86.56%を占め、近似種のイガイ・エゾイガイを含めると全体の92.92%に達する（左右それぞれの個体数で多いものを最少個体数として扱っている）。ムラサキインコガイ・イガイ・エゾイガイは岩礁に生息する二枚貝である。同じような環境に生息する食用種のクボガイ・レイシガイ等の巻貝がほとんど出土していない点などからみて、積極的に上記の岩礁性の二枚貝を採集し、特にムラサキインコガイに高い依存を示していたものと思われる。計測値は大小ばらつきがみられ、均一性はない（表参照のこと）。

イガイ：右殻86点、左殻94点が出土している。破砕が著しく、完存貝は左殻4点（完存率4.25%）である。最大殻は、殻高61.0mm、殻長35.2mm。出土量は全体の3.75%を占める。

エゾイガイ：右殻62点、左殻67点が出土している。破砕が著しく、完存貝はない。出土量は全体の2.61%を占める。

マガキ：左殻の殻頂部1点が出土している。破砕が著しい。

チリハギガイ：右殻22点、左殻20点が出土している。成貝が殻高2mm、殻長3mm程度の小型の貝である。ムラサキインコガイの足糸の間に足糸で付着している貝で、ムラサキインコガイに付着して搬入されたものである。

iii. ひざらがい綱

ウスヒザラガイ科の一種：頭板1点、中間板3点が出土している。中間板の形状からウスヒザラガイ科のものと思われるが、種不明である。

II. 節足動物

i. 蔓脚虫綱

イワフジツボ：30点出土している。岩礫性の二枚貝等に附着してきたものと思われる。

アカフジツボ：完存のもの4点、殻板4点が出土しており、最少個体数は5点である。小型のものが多く、食用とは思われない。

チシマフジツボ：殻板1,067点が出土している。最少個体数178個。チシマフジツボの殻板は、1個の個体が峰板1、峰側板2、側板2、嘴側板1の計6個に分離するが、それらを分けることは困難をきわめる。ここでは、単純に殻板1,067点を6で割り、最少個体数178個を示した。出土したものは小型のものが多く、食用とは思われない。岩礫性二枚貝に附着してきたものであろうか。

ii. 甲殻綱

十脚目の一種：カニ類の不動指2点が出土している。種不明。

III. 棘皮動物

i. 海胆綱

ムラサキウニ：少量の棘及び殻片、齒1点、上生骨2点、顎骨2点が出土している。最少個体数は1～2個程度と思われる。

2. DIII-6 住居跡

(1) P1 埋土

I. 軟体動物

i. 腹足綱

エゾアワビ：1個体分の破片が出土している。破砕が著しい。

アオガイ：1点出土している。長径が4mm以下の幼貝である。岩礫性の二枚貝に附着してきたものであろう。

シロガイ：9点出土している。すべて長径が5mm以下の幼貝である。岩礫性の二枚貝に附着してきたものであろう。

ニシキウズガイ科の一種：殻頂部1点が出土している。クボガイのように思われるが、殻口の形状が不明であるので、ニシキウズガイ科の一種とした。

サンショウスガイ？：1点出土している。磨滅が著しい。

タマキビガイ？：1点出土している。幼貝である。

チヂミボラ：1点出土している。殻高7.9mm、殻径5.5mmと小型である。

レイシガイ：殻頂部が1点出土している。破砕が著しい。

イボニシ：殻口部の破片1点が出土している。破砕が著しい。

コハクガイ科の一種：2点出土している。微小陸産貝である。

ii. 二枚貝網

ムラサキインコガイ：右殻314点（うち完存貝125点、完存率39.81%）、左殻299点（うち完存貝126点、完存率42.14%）が出土している。本遺構において最も多く出土している貝で、全体の90.23%を占める（左右それぞれの個体数で多いものを最少個体数として扱っている）。最大殻は殻高42.1mm、殻長15.7mm。完存貝右殻125点のうち、116点が殻高20～42.1mm、殻長10～15.7mmの範囲に分布し、幼貝の出土はほとんどない（表参照のこと）。出土した貝の大きさは均一性がみられ、DⅢ-5住居跡のものとは性格を異にしている。

マジミ：右殻11点、左殻10点、左右不明殻2点が出土している。破砕が著しく、完存貝はない。出土量は全体の3.45%である。

II. 節足動物

i. 蔓脚亜綱

チシマフジツボ：殻板1点が出土している。

III. 棘皮動物

i. 海胆類

ムラサキウニ：少量の棘・殻片・中間骨11点等が出土している。最少個体数は3～4個と思われる。

(2)Q₂埋土下部

I. 軟体動物

i. 腹足綱

イシダタミガイ：破片1点が出土している。

クボガイ：6点が出土している。破砕が著しく完存貝は無い。

レイシガイ：破片1点が出土している。

ii. 二枚貝網

ムラサキインコガイ：右殻13点、左殻10点が出土している。破砕が著しく、完存貝はない。

マジミ：右殻7点、左殻11点、左右不明殻9点が出土している。完存貝は無い。

3. まとめ

(1)DⅢ-5住居跡埋土、DⅢ-6住居跡P1埋土・Q₂埋土下部より出土している。

(2)軟体動物腹足綱が23種166点、二枚貝綱が7種2,709点、ひざらがい綱が1種1点、節足動物蔓脚亜綱が3種、甲殻綱が1種、棘皮動物海胆綱が1種出土している。

(3)魚類・哺乳類等の脊椎動物は皆無であった。本遺跡の特色であろう。

(4)出土した動物遺存体のほとんどが岩礫性のものであり、若干ではあるが、淡水種・陸産種が混入する。

(5)出土した貝類で主体となるものはムラサキインコガイであり、DⅢ-5住居跡・DⅢ-6住居跡P1より多く出土している。DⅢ-5住居跡のものは大きさに均一性が認められず、採集及び調理の段階であまり大きさには配慮されなかったものと思われる。また、チリハギガイが多く出土する点などからみて、ムラサキインコガイをブロックで採集あるいは調理していたものと思われる。DⅢ-6住居跡P1のものは、大きさに均一性が認められ、チリハギガイが全く出土していない点から、採集・調理の段階で足糸を取り外し、大きさを揃える作業を行っていたものと思われる。

(岡氏からは、ムラサキインコ・クボガイ・チヂミボラ・タマキビ・イガイ・エゾイガイ・コウダカアオガイ・シロガイ・マツバガイ・ユキノカサガイ・カモガイ・アオガイ・コウダカアオガイ・チャイロタマキビ・クロスジムシロガイの最高と最長の計測表をいただいたが、ページ数の都合から割愛せざるをえなかった。記してお詫びいたします。一編集者)

表2. 貝集計表

DIII-5 住居跡

種 名	個 数	貝構成率
廣 足 網		
エゾアワビ	4	0.16
マツバガイ	3	0.12
シボリガイ	1	0.04
ユキノカサガイ	1	0.04
ユキノカサガイ料の一種	3	0.12
カモガイ	2	0.08
アオガイ	4	0.16
コウダカアオガイ	17	0.68
シロガイ	31	1.24
クボガイ	6	0.24
チャイロタマキビ	6	0.24
タマキビガイ	26	1.04
チヂミボラ	15	0.60
クロスジムシロガイ	2	0.08
(陸産貝)		
バツラマイマイ	3	0.12
オオコハクガイ	11	0.44
ベッコウマイマイ料の一種	4	0.16
不明巻貝	12	0.49
二枚貝類		
フネガイ料の一種 右	1	0.04
ムラサキインコ 右	2,171	86.56
〃 左	2,102	
イガイ 右	86	
〃 左	94	3.75
エゾイガイ 右	62	
〃 左	67	2.61
マガキ 左	1	0.04
チリハギガイ 右	22	0.88
〃 左	20	
多板綱ウスヒザラガイ料の一種	1	0.04
計	2,508	100%

DIII-6 住居跡P1埋土

種 名	個 数	貝構成率
ムラサキインコ		
計 測 可 右	193	90.23
〃 左	200	
殻 頂 右	121	
〃 左	99	
レイシガイ	1	0.29
イボニシ	1	0.29
コハクガイ料の一種	2	0.57
タマキビ? (幼貝)	1	0.29
チヂミボラ	1	0.29
不明巻貝	3	0.86
ニシキウズガイ料の一種	1	0.29
サンショウスガイ(?)	1	0.29
エゾアワビ	1	0.29
シロガイ	9	2.59
マシジミ 右	11	3.45
〃 左	10	
マシジミ 左右不明	2	
アオガイ	1	0.29
チシマクジツボ		
ムラサキウニ	最少個体 3	
計	348	100.02%

表3. ムラサキインコ右殻 殻高・殻長相関表

DIII-5 住居跡

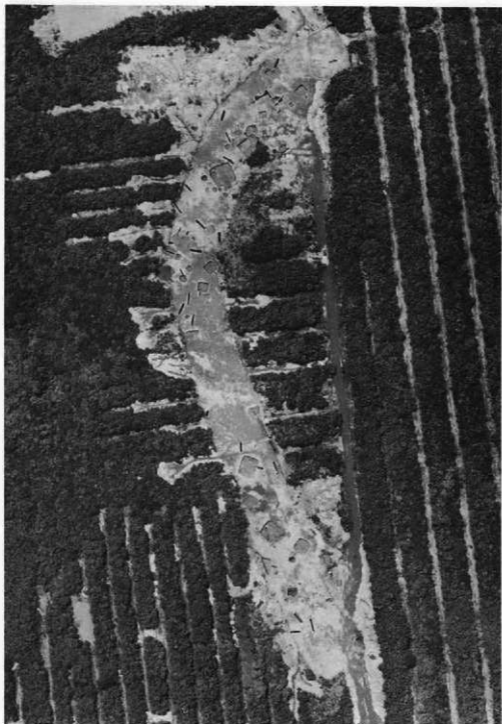
殻長(x) 殻高(y)	5mm未満	5mm以上 10mm未満	10mm以上 15mm未満	15mm以上 20mm未満	20mm以上 25mm未満	計
50mm以上					1 (0.26%)	1 (0.26%)
45mm以上 50mm未満				1 (0.26%)		1 (0.26%)
40mm以上 45mm未満			2 (0.52%)	13 (3.36%)	1 (0.26%)	16 (4.14%)
35mm以上 40mm未満			21 (5.43%)	24 (6.20%)		45 (11.63%)
30mm以上 35mm未満			42 (10.85%)	7 (1.81%)		49 (12.66%)
25mm以上 30mm未満			47 (12.14%)	1 (0.26%)		48 (12.4%)
20mm以上 25mm未満		6 (1.55%)	36 (9.30%)			42 (10.85%)
15mm以上 20mm未満		33 (8.53%)	5 (1.29%)			38 (9.82%)
10mm以上 15mm未満		47 (12.14%)				47 (12.14%)
5mm以上 10mm未満	65 (16.8%)	25 (6.46%)				90 (23.26%)
5mm未満	10 (2.58%)					10 (2.58%)
計	75 (19.38%)	111 (28.68%)	153 (39.53%)	46 (11.89%)	2 (0.52%)	387 (100%)

上, 点数 下, %

DIII-6 住居跡

殻長(x) 殻高(y)	5mm未満	5mm以上 10mm未満	10mm以上 15mm未満	15mm以上 20mm未満	20mm以上 25mm未満	計
50mm以上						
45mm以上 50mm未満						
40mm以上 45mm未満			1 (0.8%)	1 (0.8%)		2 (1.6%)
35mm以上 40mm未満			17 (13.6%)	7 (5.6%)		24 (19.2%)
30mm以上 35mm未満			60 (48%)			60 (48%)
25mm以上 30mm未満			26 (20.8%)			26 (20.8%)
20mm以上 25mm未満		2 (1.6%)	4 (3.2%)			6 (4.8%)
15mm以上 20mm未満		1 (0.8%)				1 (0.8%)
10mm以上 15mm未満		3 (2.4%)				3 (2.4%)
5mm以上 10mm未満	1 (0.8%)	1 (0.8%)				2 (1.6%)
5mm未満	1 (0.8%)					1 (0.8%)
計	2 (1.6%)	7 (5.6%)	108 (86.4%)	8 (6.4%)		125 (100%)

上, 点数 下, %



真上から (下が北)

図版 1 空中写真(1)



a. 東から



b. 南東から

図版 2 空中写真(2)

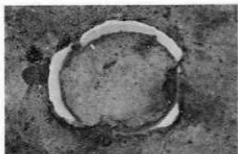


a. C III-1 住居跡 全景

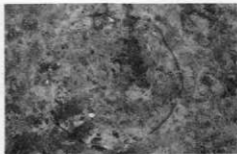


b. C III-2 住居跡 全景

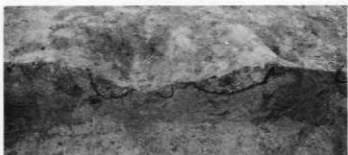
図版3 C III-1・C III-2 住居跡



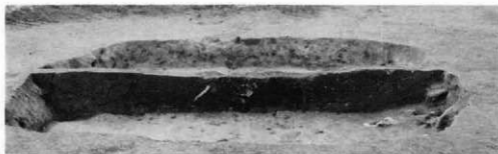
a. CⅢ-1住居跡 埴裏



b. CⅢ-2住居跡 炉



c. CⅢ-2住居跡 伊断面



d. DⅢ-1住居跡 土層断面

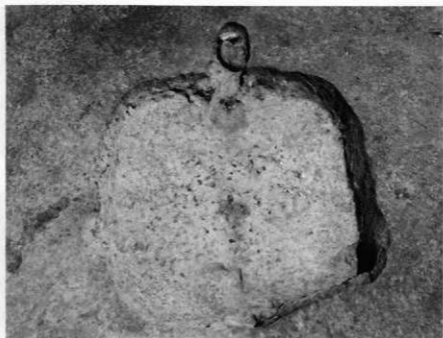


e. DⅢ-1住居跡 カマド



f. DⅢ-1住居跡 煙道部土層断面

図版4 CⅢ-1・CⅢ-2・DⅢ-1住居跡



a. D III-1 住居跡 全景



b. D III-2 住居跡 全景

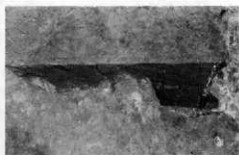
図版 5 D III-1・D III-2 住居跡



a. DⅢ-2住居跡 土層断面



b. DⅢ-2住居跡 カマド



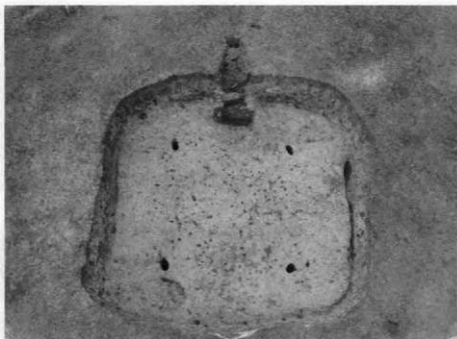
c. DⅢ-2住居跡 煙道部土層断面



d. DⅢ-3住居跡 炭化材検出状況



a. 土層断面



b. 全景



c. 十和田 a 火山灰堆積状況



d. 炭化材抽出状況



a. D III-3 住居跡 炭化材検出状況



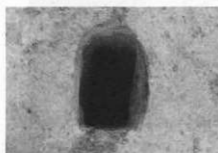
b. D III-3 住居跡 煙道部土層断面



c. D III-3 住居跡 カマド



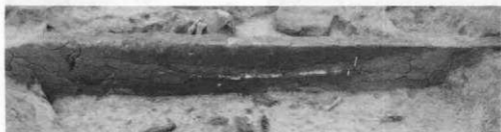
d. D III-3 住居跡 掘り方全景



e. D III-3 住居跡 柱穴



f. D III-4 住居跡 十和田 a 火山灰地状況



g. D III-4 住居跡 土層断面



a. 全景



b. カマド



c. 炭化材検出状況



d. 煙道部土層断面



e. 刀子出土状況



a. 全景



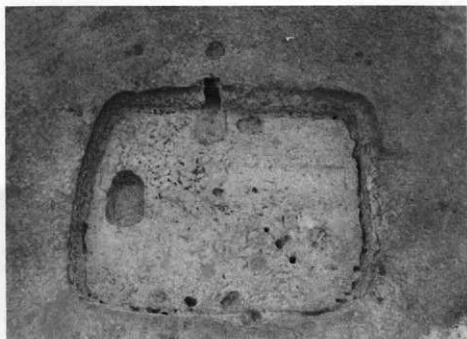
b. 土層断面



c. 貝層



d. カマド



a. 全景



b. 土層剖面



c. P1 土層剖面



d. P1



a. D III-6 住居跡 煙道部土層断面



b. D III-6 住居跡 カマド



c. E III-1 住居跡 全景



d. F III-1 住居跡 土層断面

図版12 D III-6・E III-1・F III-1 住居跡

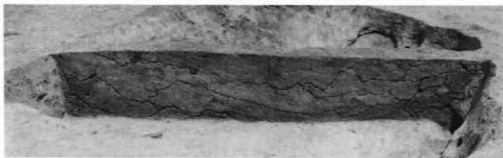


a. F III-1 住居跡 全景

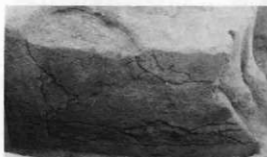


b. F III-2 住居跡 全景

図版13 F III-1・F III-2 住居跡



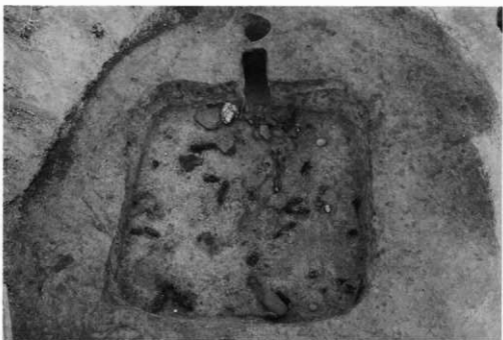
a. FⅢ-2住居跡 土層断面



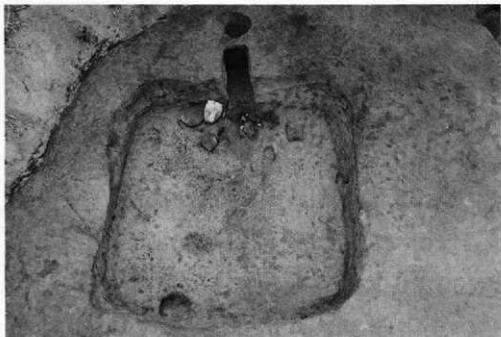
b. FⅢ-2住居跡 煙道部土層断面



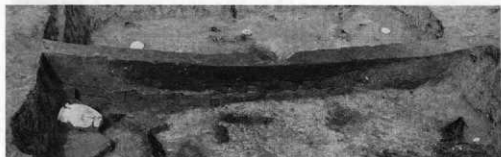
c. FⅢ-2住居跡 カマド



d. FⅢ-3住居跡 炭化材検出状況



a. 全景



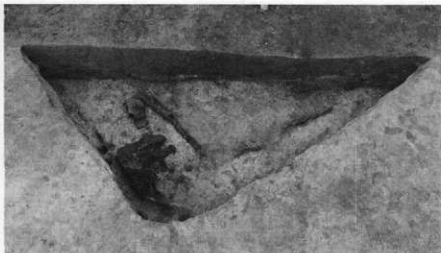
b. 土層断面



c. カマド



d. カマド 断ち割り



a. F III-4 住居跡 炭化材・焼土検出状況



b. F III-4 住居跡 全景

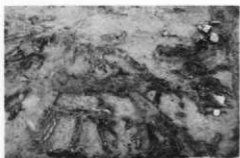


c. G II-1 住居跡 土層断面

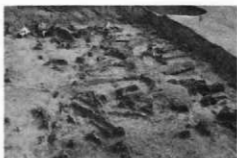
図版16 F III-4・G II-1 住居跡



a. 炭化材検出状況



b. 炭化材検出状況



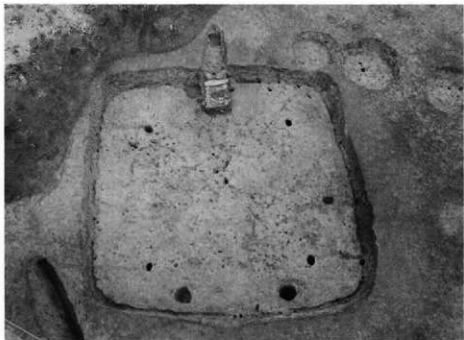
c. 炭化材検出状況



d. 炭化材検出状況



e. 炭化材検出状況



a. 全景



b. 土器出土状況



c. 煙道部土層断面



d. 土器出土状況



e. カマド



a. G II-2 住居跡 全景



b. G II-3 住居跡 土層断面



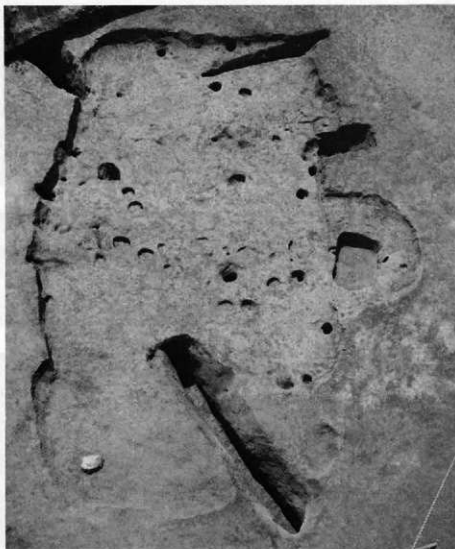
c. G II-3 住居跡 炭化材検出状況



d. G II-3 住居跡 カマド



a. G II-3 住居跡 煙道部土層断面



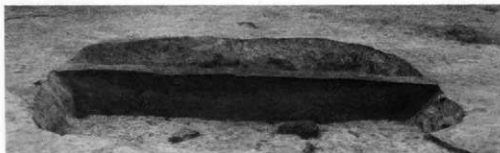
b. G III-1・G III-2・G III-3 住居跡 全景



a. G III-4 住居跡 土層断面



b. G III-4 住居跡 全景



c. H I-1 住居跡 土層断面

図版21 G III-4・H I-1 住居跡



a. H I-1 住居跡 全景



b. H I-1 住居跡 カマド



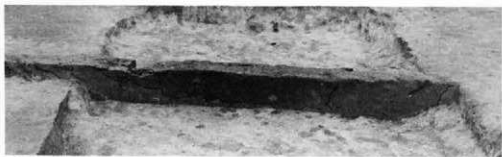
c. H I-1 住居跡 煙道部土層断面



d. H I-1 住居跡 カマド断ち割り



e. H II-1 住居跡 煙道部土層断面



a.土層断面



b.全景



c.カマド 面ち割り①



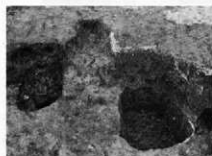
d.カマド 面ち割り②



a. 土層断面



b. 全景



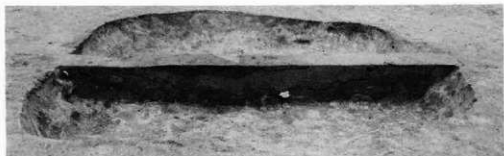
c. 1号カマド



d. 2号カマド



e. 3号カマド



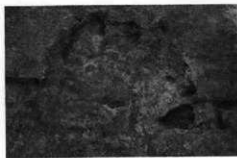
a. H II-2 住居状遺構 土層断面



b. H II-2 住居状遺構 全景



c. C III-51ピット 土層断面

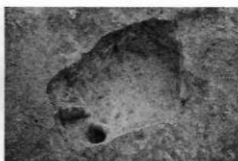


d. C III-51ピット 全景

図版25 住居状遺構・ピット(1)



a. C III-52ビット 土層断面



b. C III-52ビット 全景



c. C III-54ビット 土層断面



d. C III-54ビット 全景



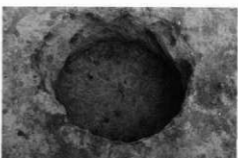
e. C III-55ビット 土層断面



f. C III-55ビット 全景



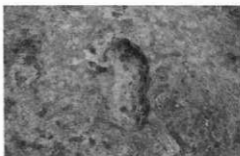
g. C III-56ビット 土層断面



h. C III-56ビット 全景



a. C III-57ピット 土層断面



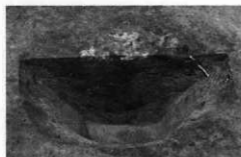
b. C III-57ピット 全景



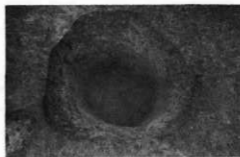
c. C III-58ピット 土層断面



d. C III-58ピット 全景



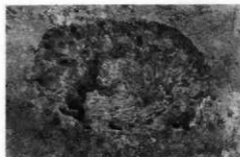
e. D III-51ピット 土層断面



f. D III-51ピット 全景



g. D III-52ピット 土層断面



h. D III-52ピット 全景

図版27 ピット(3)



a. D III-53ピット 全景



b. E III-51ピット 全景



c. F III-51ピット 土層断面



d. F III-51ピット 全景



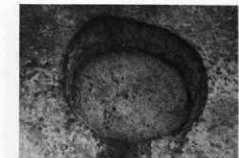
e. F III-52ピット 全景



f. F III-53ピット 全景



g. F III-54ピット 土層断面

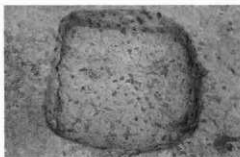


h. F III-54ピット 全景

図版28 ピット(4)



a. F III-55ピット 土層断面



b. F III-55ピット 全景



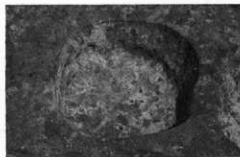
c. G II-51ピット 土層断面



d. G II-51ピット 全景



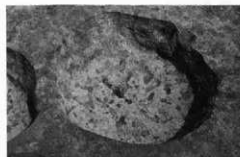
e. G II-52ピット 土層断面



f. G II-52ピット 全景



g. G II-53ピット 土層断面

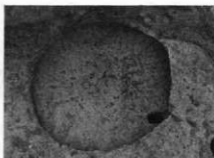


h. G II-53ピット 全景

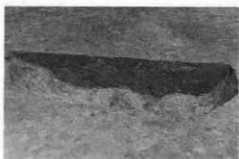
図版29 ピット(5)



a. G II-54ピット 土層断面



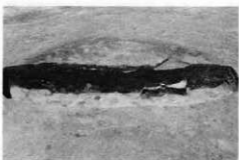
b. G II-54ピット 全景



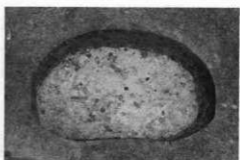
c. G II-55ピット 土層断面



d. G II-55ピット 全景



e. G II-56ピット 土層断面



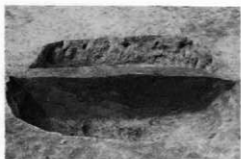
f. G II-56ピット 全景



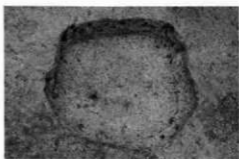
g. G II-56ピット 土器出土状況



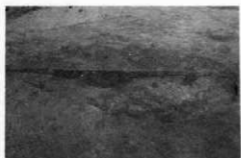
h. G III-52ピット 全景



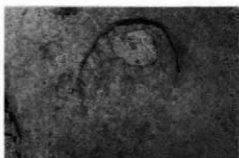
a. G III-51ピット 土層断面



b. G III-51ピット 全景



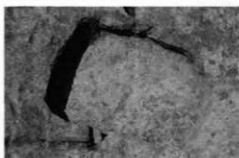
c. G III-53ピット 土層断面



d. G III-53ピット 全景



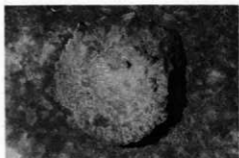
e. G III-54ピット 土層断面



f. G III-54ピット 全景

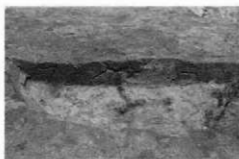


g. G III-55ピット 土層断面

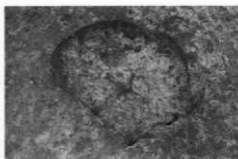


h. G III-55ピット 全景

図版31 ピット(7)



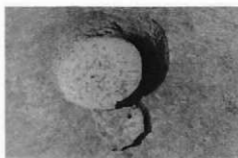
a. G III-56ピット 土層断面



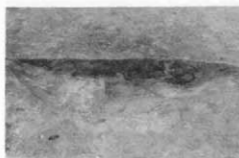
b. G III-56ピット 全景



b. G III-57-58ピット 土層断面



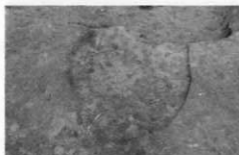
c. G III-57-58ピット 全景



d. G III-59ピット 土層断面



e. G III-59ピット 全景



f. H I-51ピット 全景



g. H I-51ピット 断ち割り

図版32 ピット(8)



a. H II-51ピット 土層断面



b. H II-51ピット 全景



c. H VII-51ピット 土層断面



d. H VII-51ピット 全景



e. H VII-52ピット 土層断面



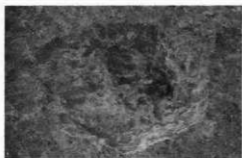
f. H VII-52ピット 全景



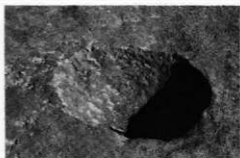
g. H VII-53ピット 土層断面



h. H VII-53ピット全景



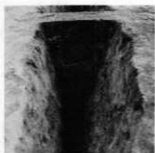
a. GⅢ-51ピット 全景



b. IⅨ-51ピット 全景



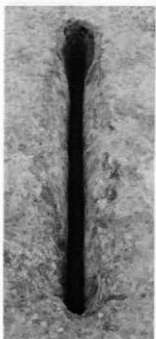
c. CⅢ-101 土層断面



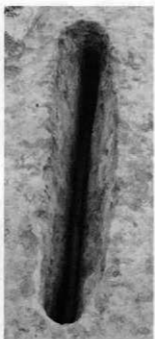
d. CⅢ-102 土層断面



e. CⅢ-103 土層断面



f. CⅢ-101 全景



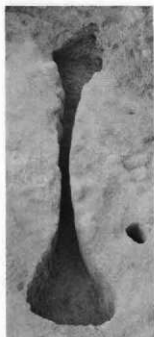
g. CⅢ-102 全景



h. CⅢ-103 全景

※落とし穴は番号だけで表示

図版34 ピット(Ⅱ・落とし穴(1))



a. DⅢ-101 全景



b. DⅢ-102 全景



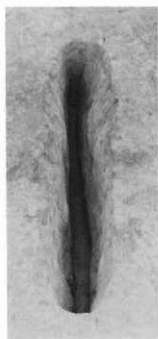
c. DⅢ-102 土層断面



d. EⅢ-101 土層断面



e. EⅢ-101 全景



f. EⅢ-102 全景



g. EⅢ-102 土層断面



h. EⅢ-103 土層断面

図版35 落とし穴(2)



a. E III-103 全景



b. F III-101 全景



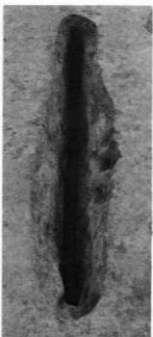
c. F III-101 土层断面



d. F III-102 土层断面



e. F III-102 全景



f. F III-103 全景

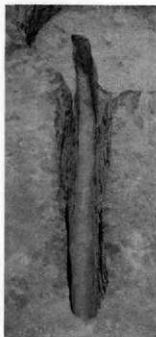


g. F III-103 土层断面



h. F III-104 土层断面

図版36 落とし穴(3)



a. FⅢ-104 全景



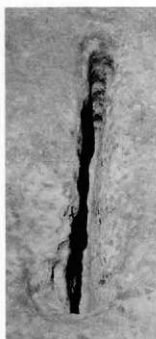
b. GⅡ-101 全景



c. GⅡ-102 土层断面



d. GⅢ-101 土层断面



e. GⅡ-102 全景



f. GⅡ-103 全景



g. GⅢ-101 全景

図版37 落とし穴(4)



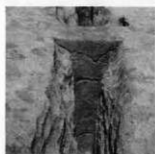
a. G III-102 全景



b. G III-103 全景



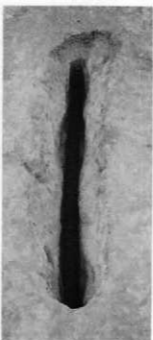
c. G III-102 土层断面



d. G III-103 土层断面



e. G III-104 全景



f. G III-105 全景

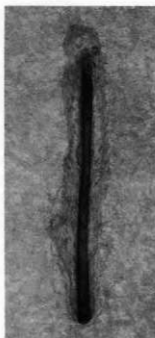


g. G III-104 土层断面

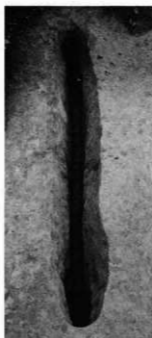


h. G III-105 土层断面

図版38 落とし穴(5)



a. G III-106 全景



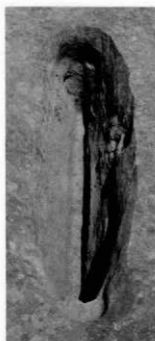
b. G III-107 全景



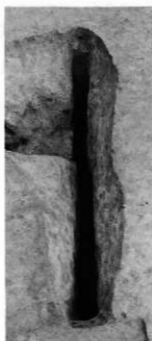
c. G III-106 土层断面



d. G III-107 土层断面



e. H II-101 全景



f. H II-102 全景



g. H I-101 土层断面・全景



h. H II-101 土层断面

図版39 落とし穴(6)



a. H II-103 全景



b. H II-104 全景



d. H II-102 土層断面



e. H II-103 土層断面



c. H II-102・103 重複全景



f. H II-104 土層断面



g. H II-101 土層断面

図版40 落とし穴(7)



a. HⅧ-101 全景



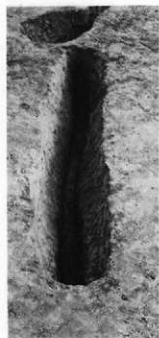
b. HⅧ-102 全景



c. HⅧ-102 土層断面



d. HⅧ-103 土層断面



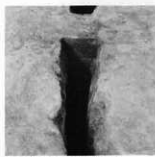
e. HⅧ-103 全景



f. HⅧ-104 全景



g. HⅧ-104 土層断面(1)



h. HⅧ-104 土層断面(2)

図版41 落とし穴(8)



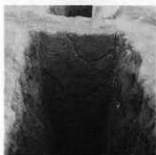
a. HⅧ-105 全景



b. HⅧ-106 全景



c. HⅧ-105 土層断面



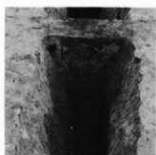
d. HⅧ-106 土層断面



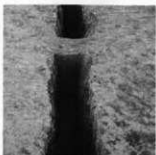
e. HⅨ-101 全景



f. HⅨ-102 全景

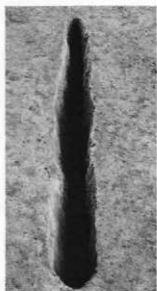


g. HⅨ-101 土層断面



h. HⅨ-102 土層断面

図版42 落とし穴(9)



a. H IX-103 全景



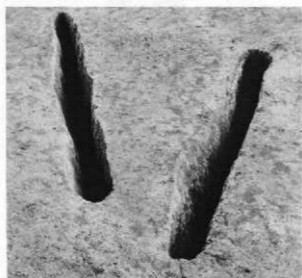
b. I IX-101 全景



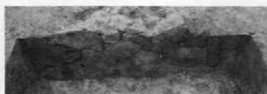
d. H IX-103 土層断面



e. I IX-101 土層断面



c. H IX-102, 103 全景



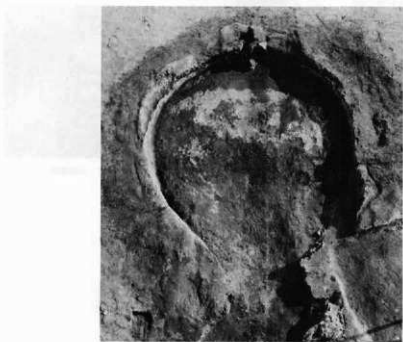
f. D III-203 焼土遺構 断面割り



g. D III-203 焼土遺構 全景



a. 土層断面



b. 全景



c. 煙道部土層断面

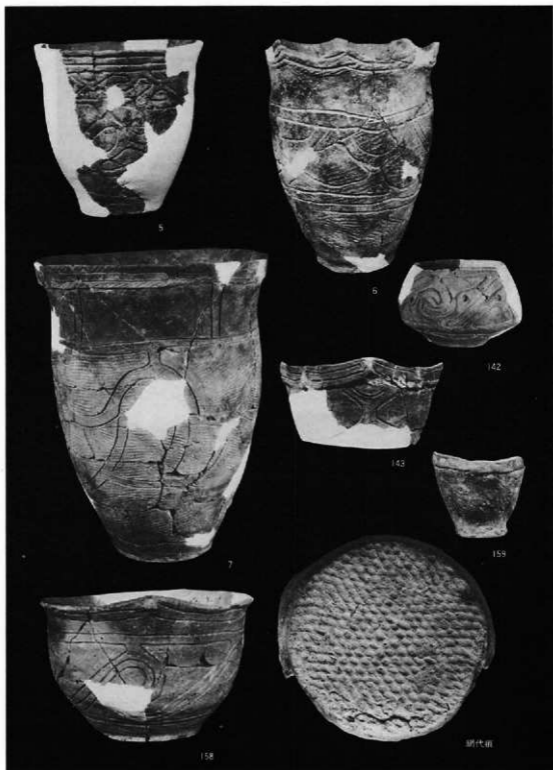


a. FⅢ区・GⅢ区



b. GⅡ区・HⅡ区・HⅠ区

図版45 遺構分布状況



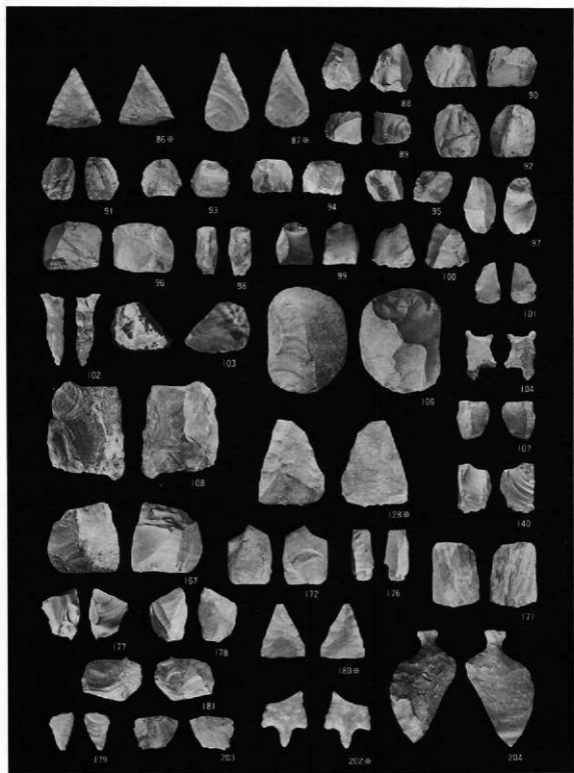
図版46 遺構内出土縄文土器(1)

S: 1/2



図版47 遺構内出土縄文土器(2)

8:1



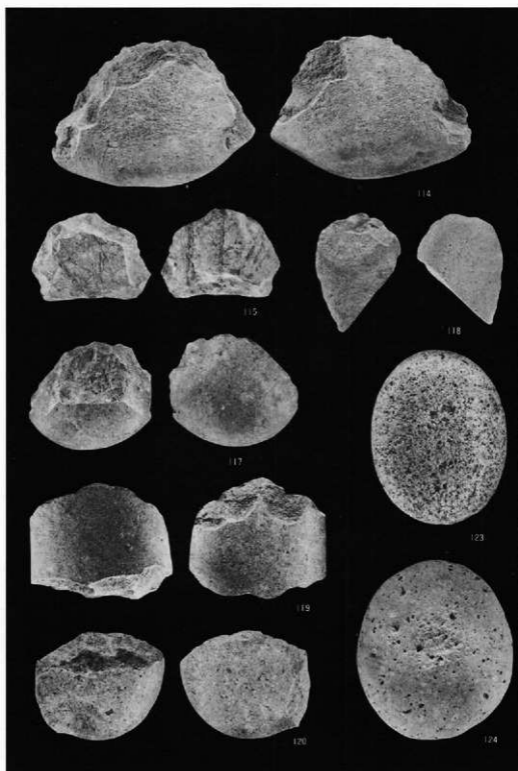
図版48 遺構内出土剥片石器(1)

S:十(●)・十



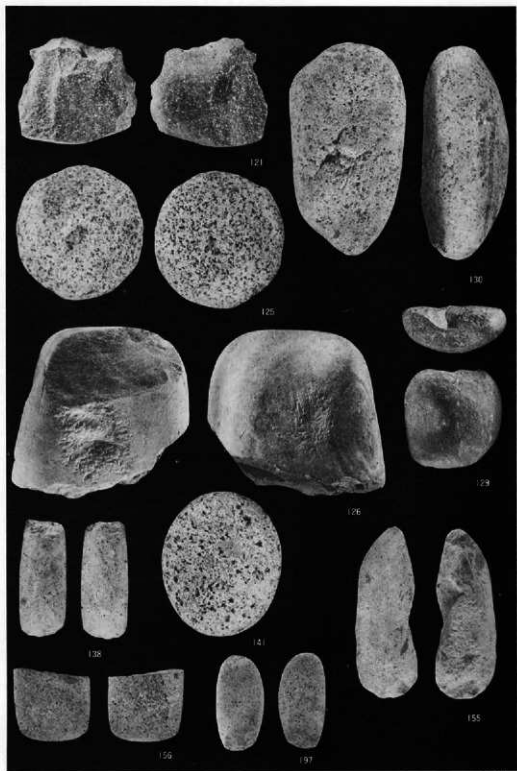
図版49 遺構内出土剥片石器(2)・礫石器(1)

S: 十(※)・十



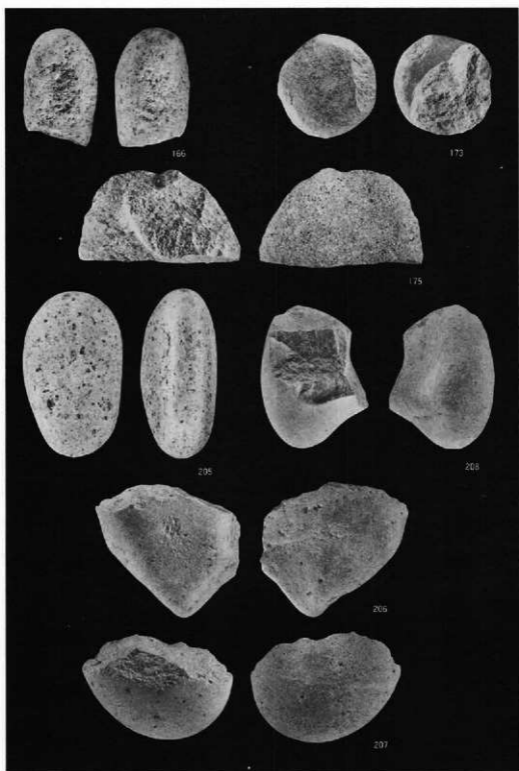
図版50 遺構内出土礫石器(2)遺構内出

S: 子



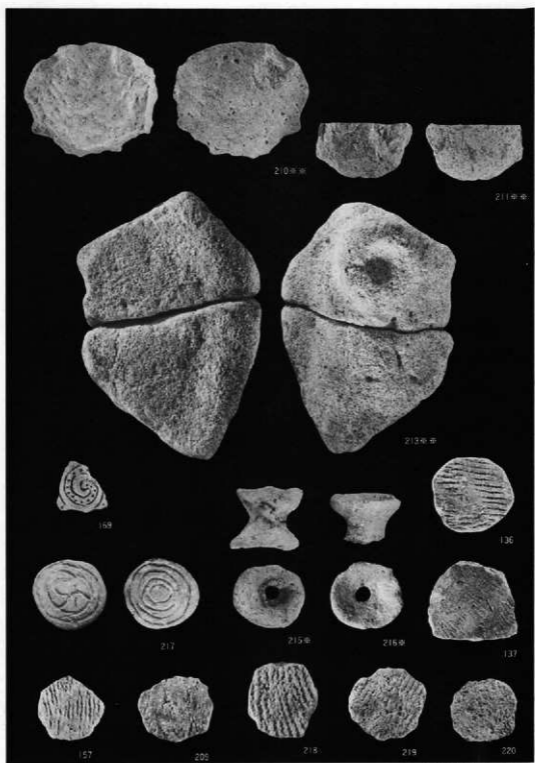
図版51 遺構内出土礫石器(3)

S : 1/1



図版52 遺構内出土礫石器(4)

S : 1/4



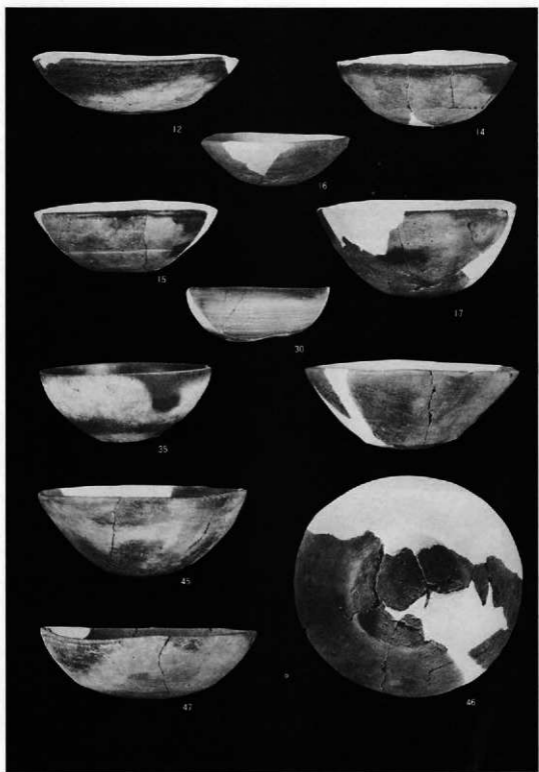
S : 1(●)・1・1(●●)

図版53 遺構内出土礫石器(5)・遺構内外出土土製品(1)



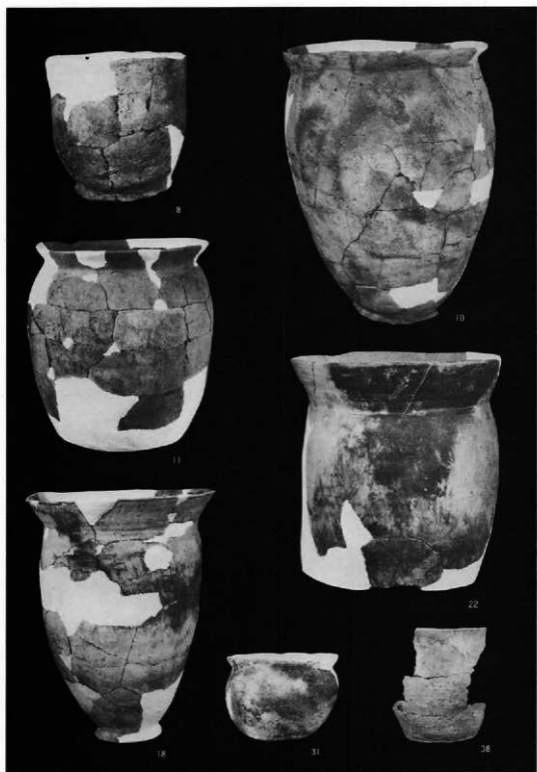
S : 1/2

図版54 遺構内外出土土製品(2)・石製品



図版55 遺構内出土土師器(1)

S:子



図版56 遺構内出土土師器(2)

S: 1/2



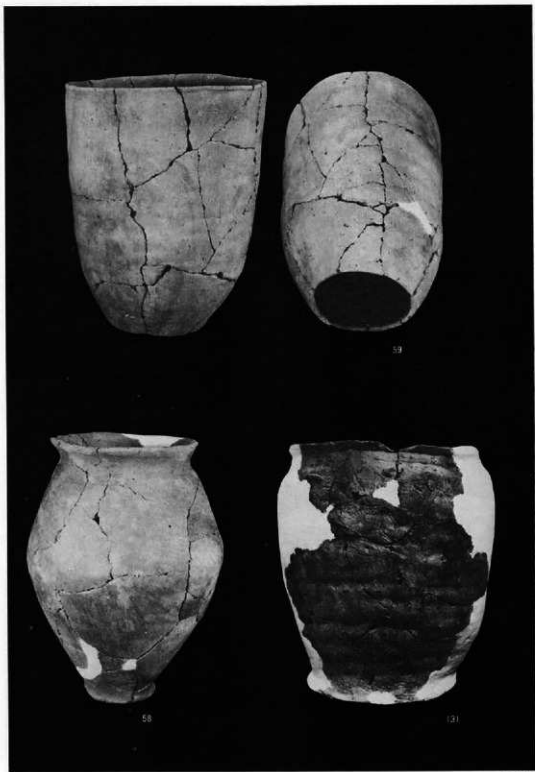
図版57 遺構内出土土師器(3)

S: 1/2 - 1/4 (※)



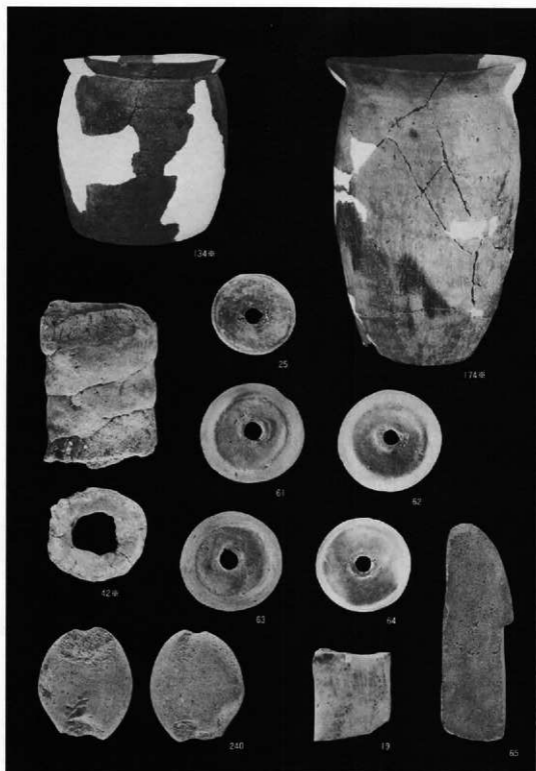
図版58 遺構内出土土師器(4)

S : 3・2(●)



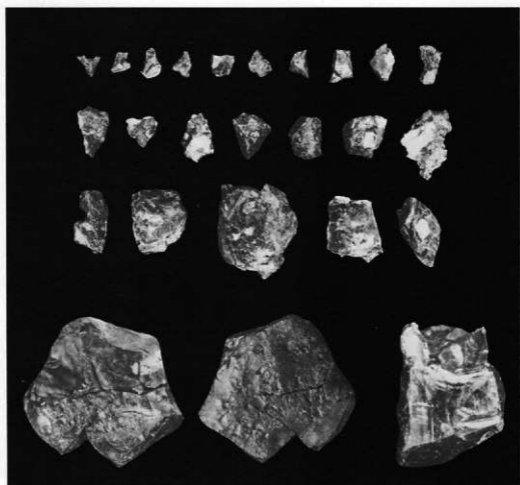
図版59 遺構内出土土師器(5)

S : 4



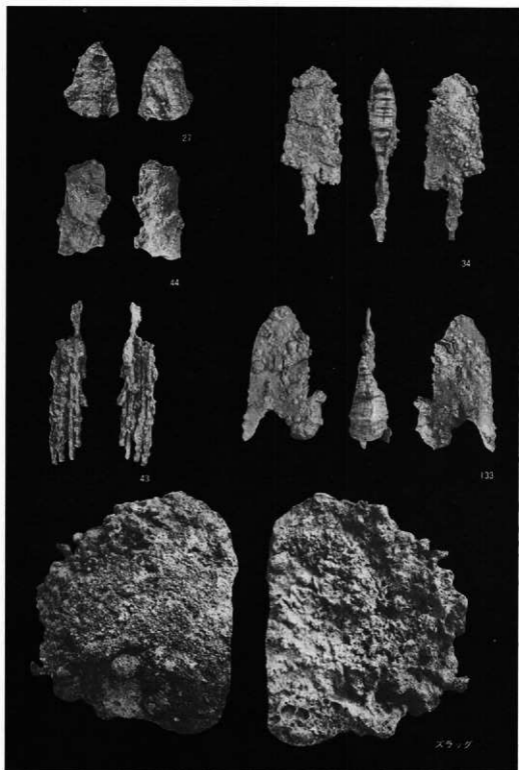
S : $\frac{1}{2}$ · $\frac{1}{3}$ (※)

図版60 遺構内出土土師器(6)・遺構内外出土土製品(3)・石製品(2)



図版61 遺構内出土琥珀

S: 十・千

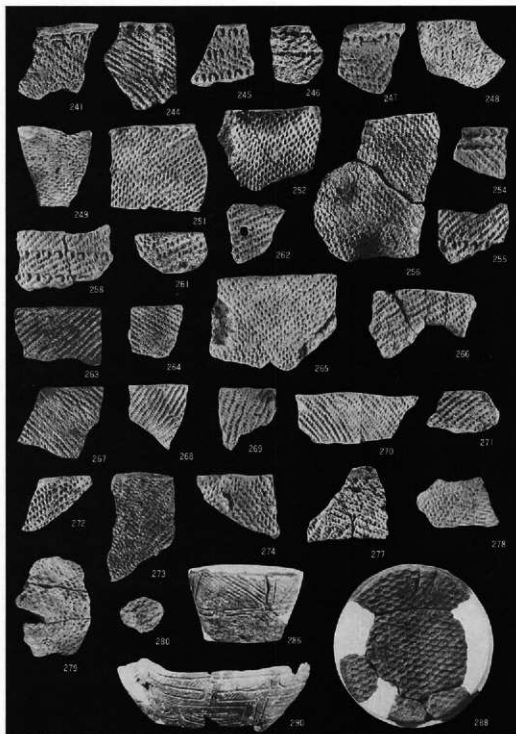


図版62 遺構内出土鉄製品

5 : 4

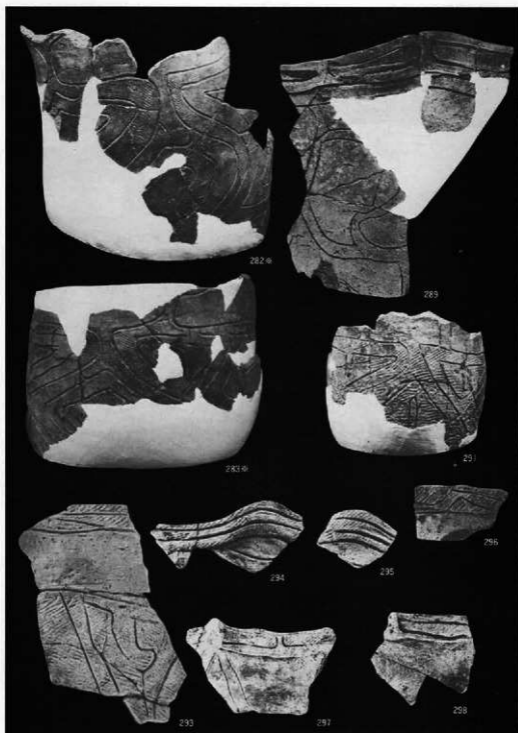


図版63 遺構内出土貝類



S : 1/3

図版64 遺構外出土縄文土器(1)



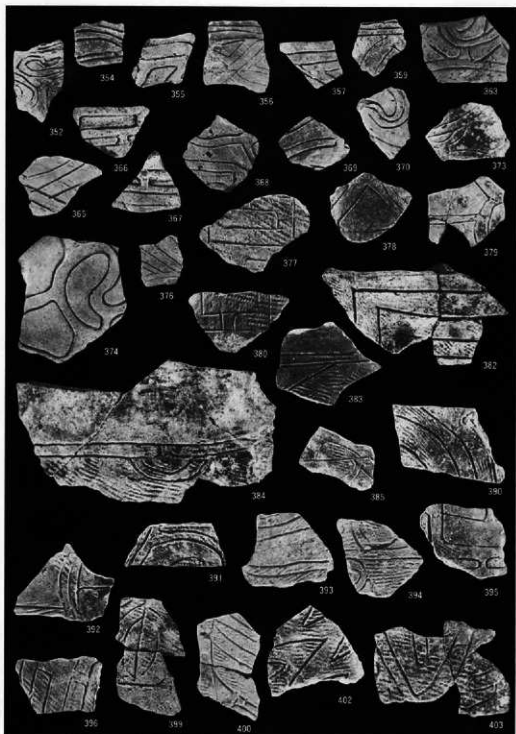
S : $\frac{1}{2}$ · $\frac{1}{2}$ (■)

図版65 遺構外出土縄文土器(2)



8 : 1

圖版66 遺構外出土繩文土器(3)



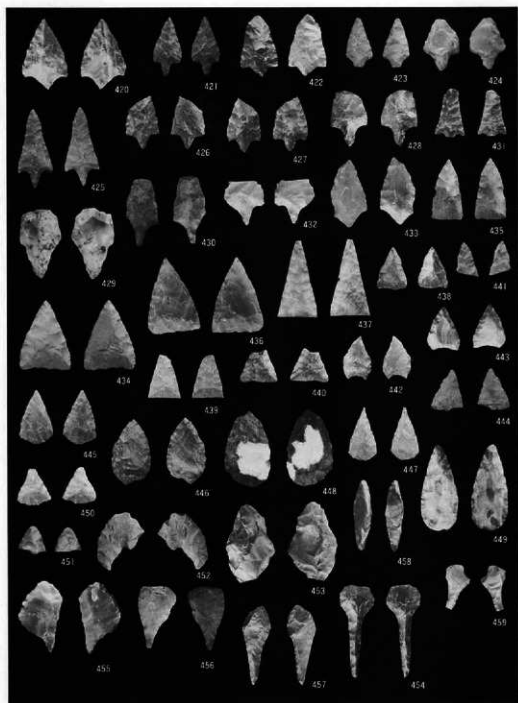
5 : 1/2

図版67 遺構外出土縄文土器(4)



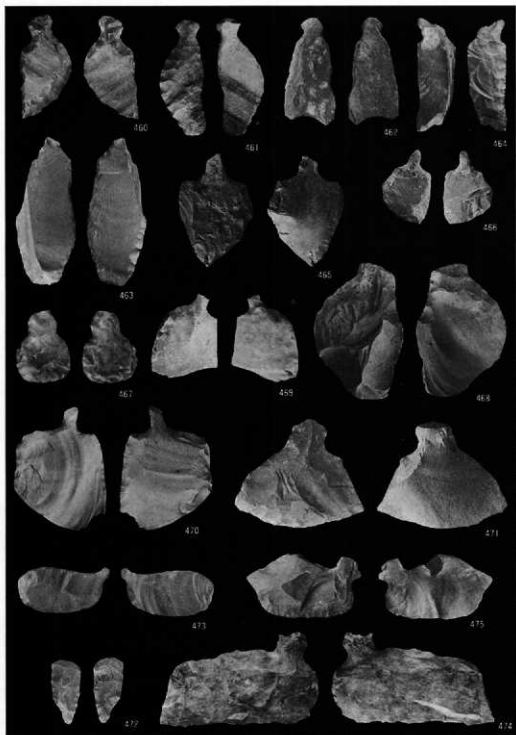
図版68 遺構外出土縄文土器(5)・弥生土器

S : 寸



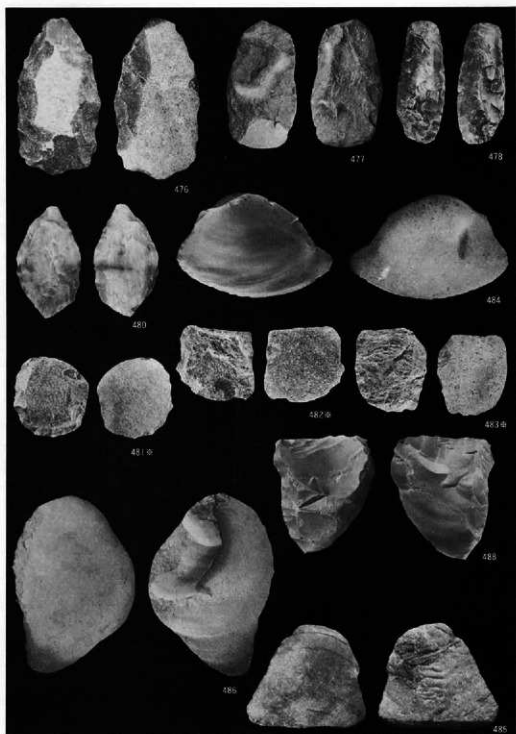
S:号

图版69 遺構外出土剥片石器(1)



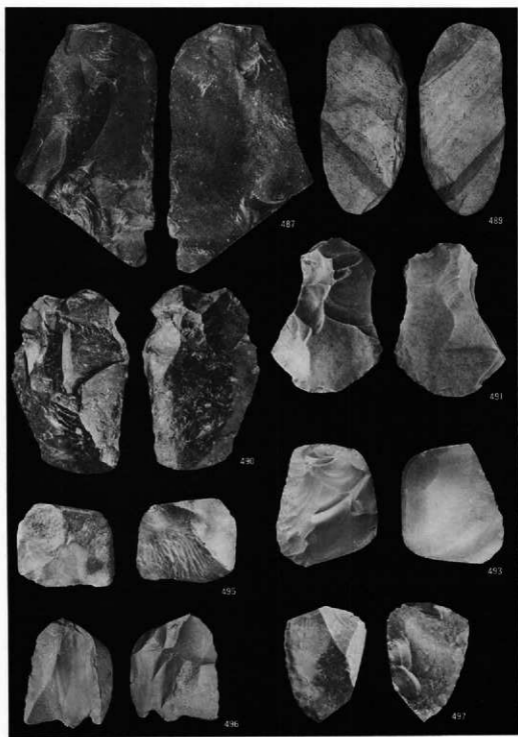
S : 全

図版70 遺構外出土剥片石器(2)



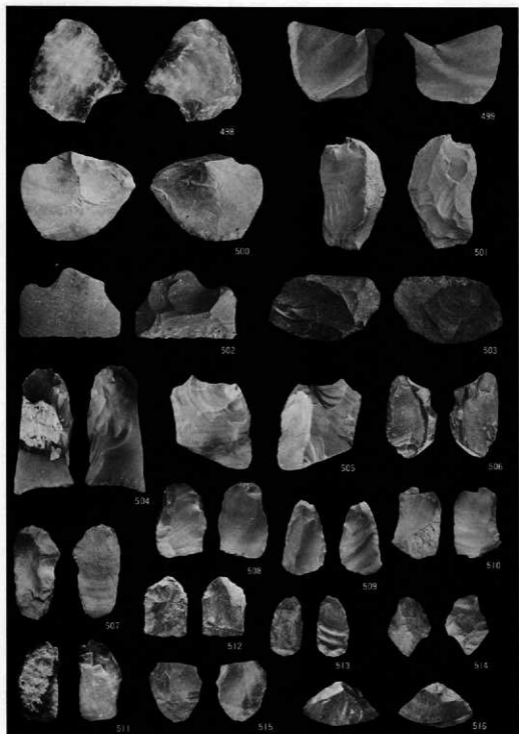
— S : 号・不定(※)

图版71 遺構外出土剥片石器(3)・礫石器(1)



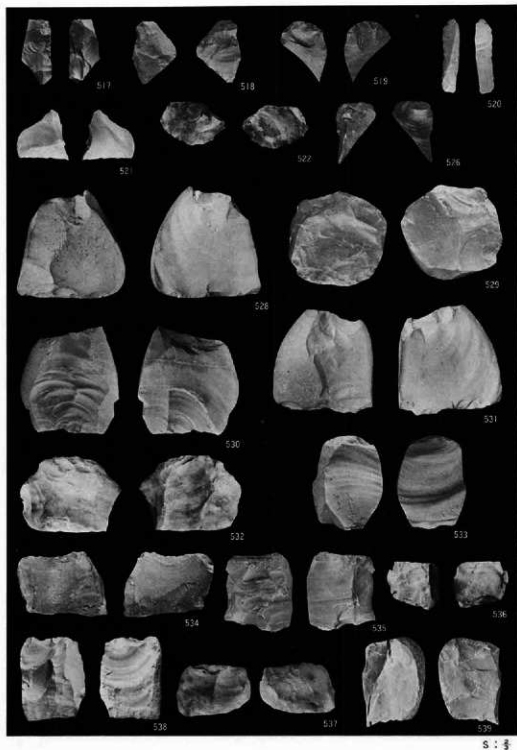
5 : 3

图版72 遺構外出土剝片石器(4)

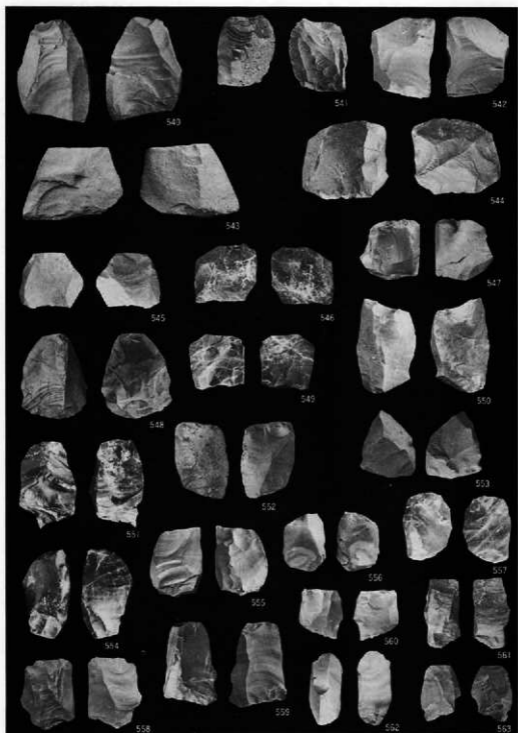


5 : 4

图版73 遺構外出土剝片石器(5)

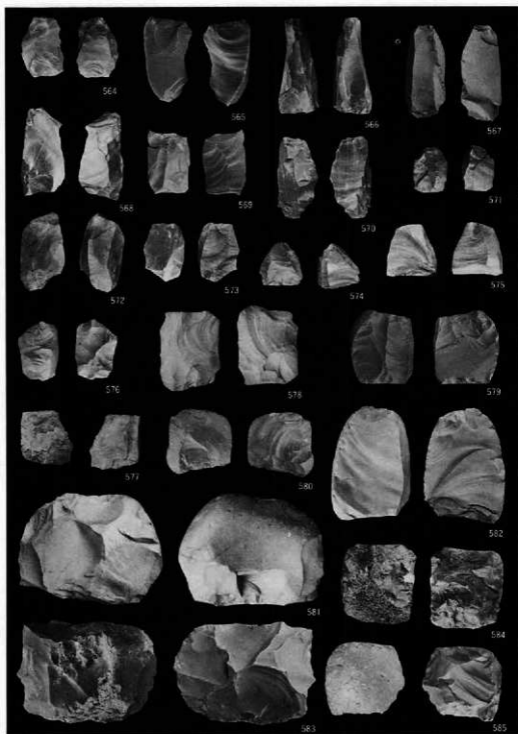


図版74 遺構外出土剥片石器(6)



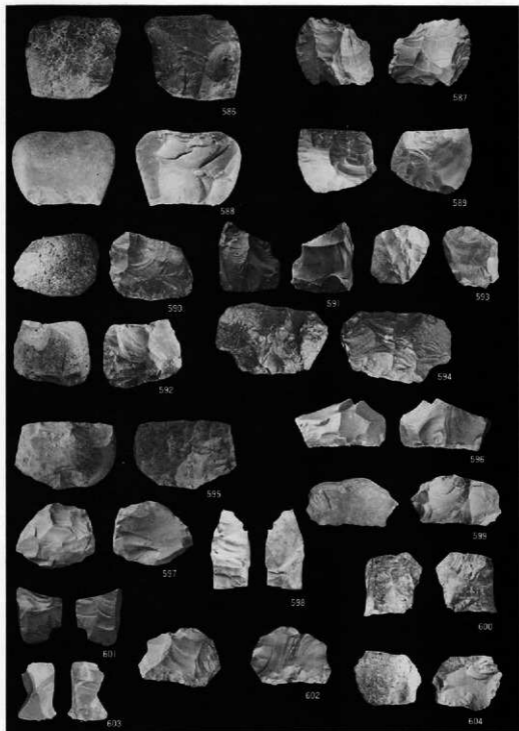
5 : 5

图版75 遺構外出土剥片石器(7)



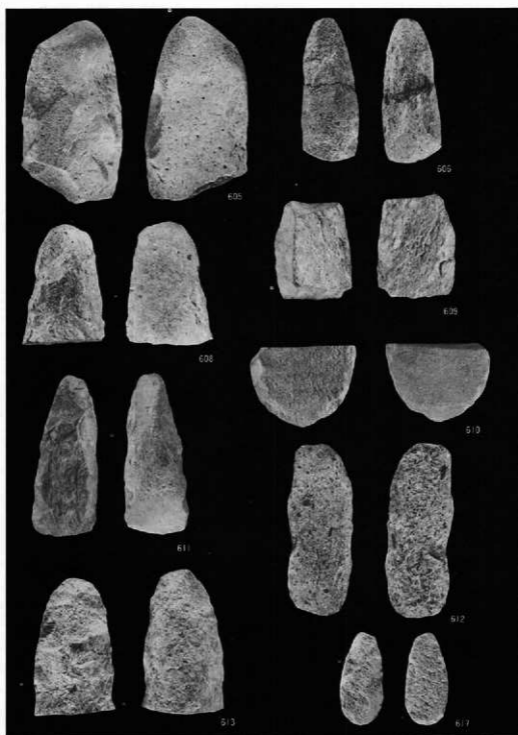
S : 臺

圖版76 · 遺構外出土剝片石器(8)



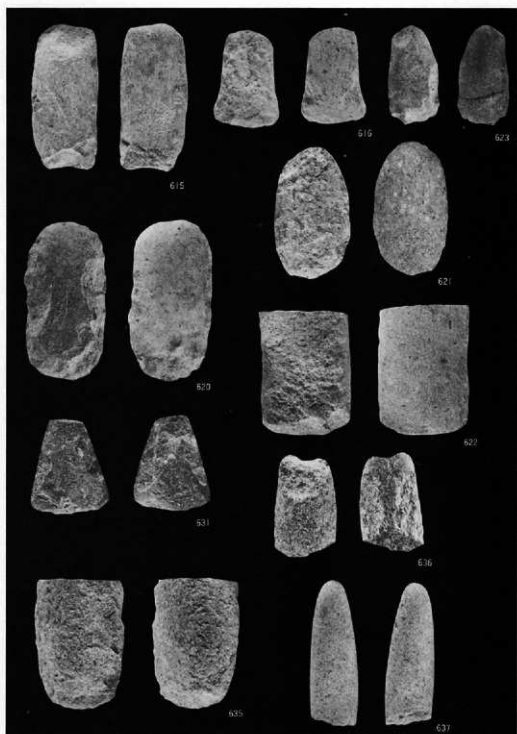
S: 4

圖版77 遺構外出土剝片石器(9)



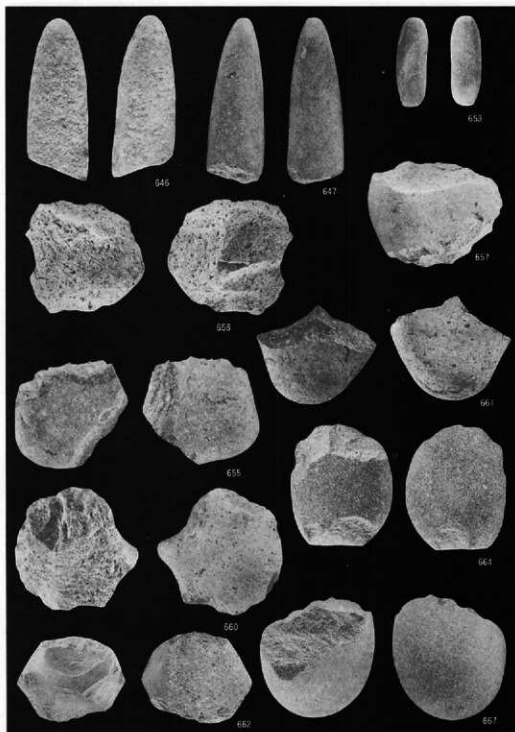
6 : 4

图版78 遺構外出土礫石器(2)



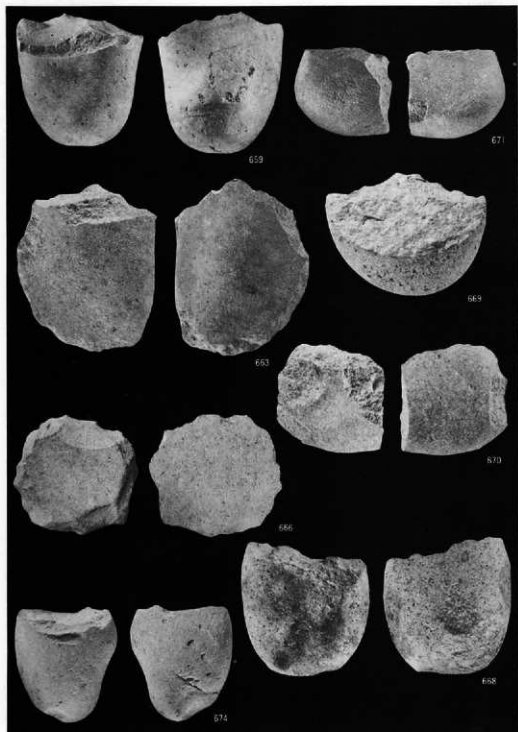
S : 1/4

図版79 遺構外出土礫石器(3)



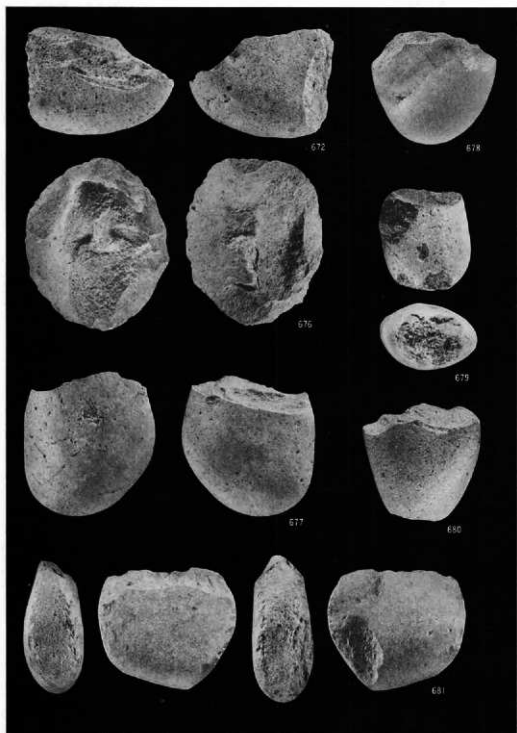
5 : 3

図版80 遺構外出土礫石器(4)



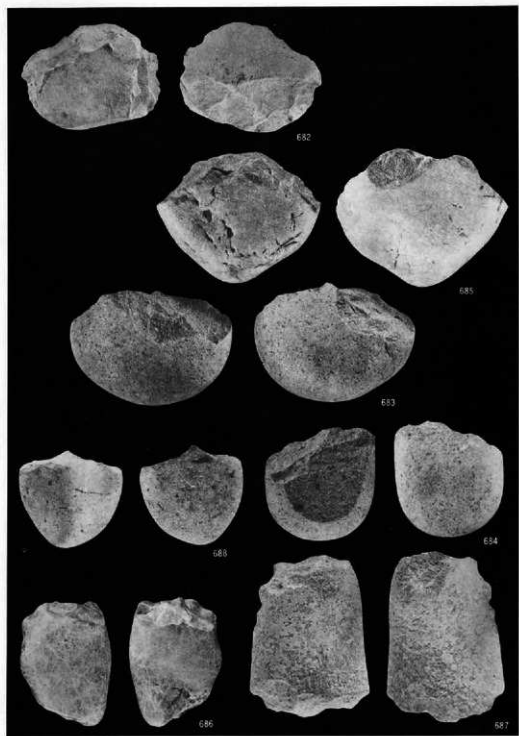
S : 1/4

図版81 遺構外出土礫石器(5)

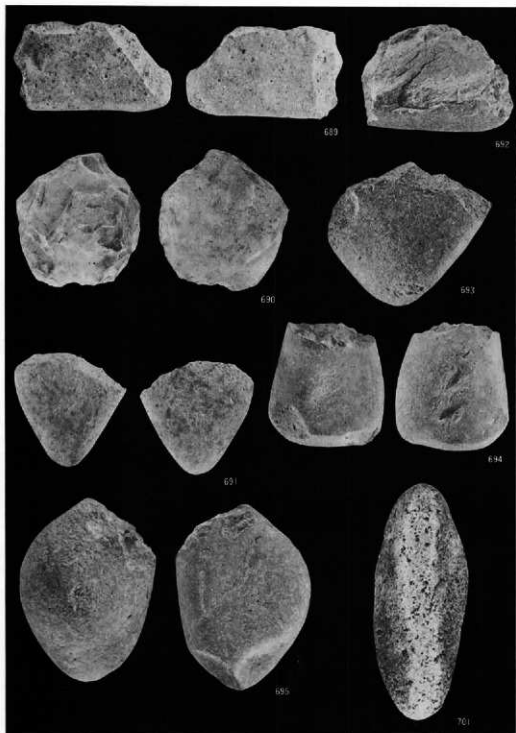


S : 1/4

図版82 遺構外出土礫石器(6)



図版83 遺構外出土礫石器(7)

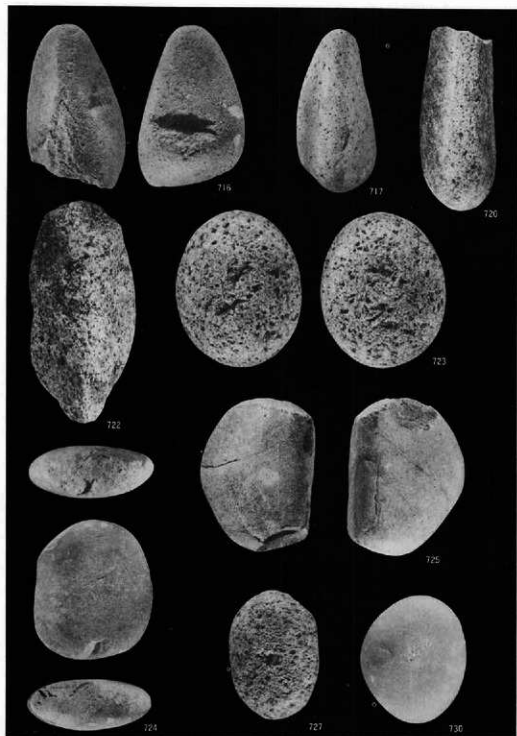


S : 1/3

図版84 遺構外出土礫石器(8)

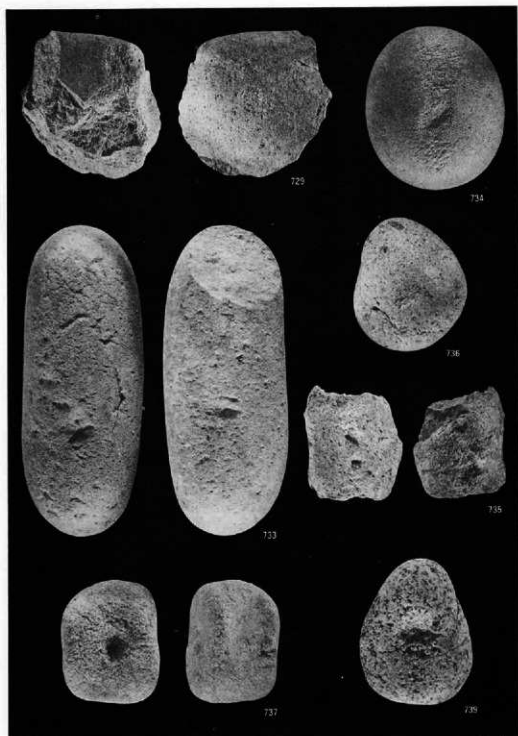


図版85 遺構外出土礫石器(9)



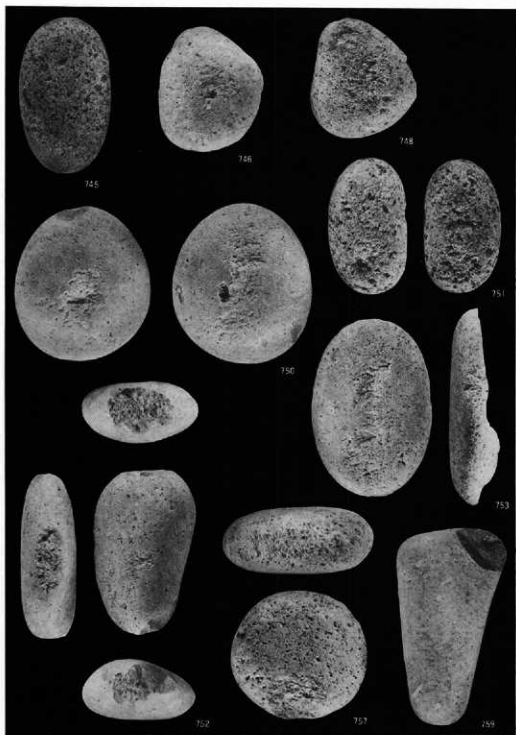
S : 1/3

图版86 遺構外出土礫石器(10)



S: 1/4

図版87 遺構外出土礫石器(1)



S : 1/2

圖版88 遺構外出土礫石器(2)



図版89 遺構外出土礫石器(3)

5 : 1

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	及 川 昌 二
副 所 長	宮 英 一

〔管 理 課〕

課 長(兼)	宮 英 一
課 長 補 佐	伊 藤 吉 郎
主 事	立 花 多 加 志
嘱 託	似 内 喜 兵
運転技士兼技能員	佐 藤 春 男

〔調 査 課〕

課 長	昆 野 靖
主任文化財専門調査員	小 田 野 哲 憲
〃	三 浦 謙 一
〃	工 藤 利 幸
文化財専門調査員	佐々木 嘉 直
〃	平 井 進
〃	中 村 良 一
〃	田 村 壮 一
〃	光 井 文 行
〃	玉 川 英 喜
〃	佐 藤 嘉 広
〃	中 川 重 紀
〃	高 橋 義 介
〃	酒 井 宗 孝

〔資 料 課〕

課 長	新 田 和 雄
主任文化財専門調査員	高 橋 与 右 工 門
文化財専門調査員	田 鎖 寿 夫

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第125集

平 沢 I 遺 跡 発 掘 調 査 報 告 書

勤労者屋外体育施設関連遺跡発掘調査

昭和63年 3月20日 印刷

昭和63年 3月26日 発行

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 紫波郡都南村大字下飯岡11字高屋敷185

電話 (0196) 38-9001~2

印刷 株式会社陵印刷

〒020 盛岡市崩川四丁目2番6号

電話 (0196) 41-8000代
